

されど私に学園モノは  
似合わない。

不可思議可思議

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

腐り目、ボッチ、コミュ障、女嫌いで純粹すぎる、属性過多な主人公なんていなくつて。

この世界に主人公なんていなくつて。

いるのは七十億の物語と一人の語り手。

詩的に素敵で不敵に無敵で、やることは何時でも妥協と諦め。

それでもきつと、締めの一文は『めでたし、めでたし。』

# 目次

しかし雪ノ下雪乃が変態なのは間違っている。	1
もっぱら由比ヶ浜結衣が雌豚なのは間違っている。	14
こんな材木座義輝が中二病なのは間違っている。	27
だけど戸塚彩加が美少年なのは間違っている。	41
きつと葉山隼人がイケメンなのは間違っている。	56
さしもの川崎沙希が姉なのは間違っている。	70

どうも鶴見留美が孤独なのは間違っている。『前編』	83
どうも鶴見留美が孤独なのは間違っている。『後編』	98
やっぱ文化祭が祭りなのは間違っている。『起』	113
やっぱ文化祭が祭りなのは間違っている。『承』	129
やっぱ文化祭が祭りなのは間違っている。『転』	146
やっぱ文化祭が祭りなのは間違っている。『結』	159
いつも私の青春ラブコメは間違っている。	

る。 ————— 170  
たぶん海老名姫菜が美少女なのは間違っ  
ている。『羊』 ————— 182  
たぶん海老名姫菜が美少女なのは間違っ  
ている。『頭』 ————— 196  
たぶん海老名姫菜が美少女なのは間違っ  
ている。『狗』 ————— 210  
たぶん海老名姫菜が美少女なのは間違っ  
ている。『肉』 ————— 223  
もちろん一色いろはが生徒会長なのは間  
違っている。『首』 ————— 234  
もちろん一色いろはが生徒会長なのは間  
違っている。『尾』 ————— 250

まさかクリスマスが地獄なのは間違っ  
ている。『自』 ————— 262  
まさかクリスマスが地獄なのは間違っ  
ている。『意』 ————— 277  
まさかクリスマスが地獄なのは間違っ  
ている。『識』 ————— 292  
まさかクリスマスが地獄なのは間違っ  
ている。『過』 ————— 306  
まさかクリスマスが地獄なのは間違っ  
ている。『剩』 ————— 323  
そろそろ雪ノ下陽乃がラスボスなのは間  
違っている。 ————— 336  
そんな三浦優美子が女王様なのは間

違っている。『文』—— 356

そんなに三浦由美子が女王様なのは間違っている。『理』—— 371

たまにはバレンタインデーが甘味なのは間違っている。『松』—— 385

たまにはバレンタインデーが甘味なのは間違っている。『竹』—— 398

たまにはバレンタインデーが甘味なのは間違っている。『梅』—— 411

やはり雪ノ下雪乃が美術的なのは間違っている。『花』—— 425

やはり雪ノ下雪乃が美術的なのは間違っている。『鳥』—— 439

やはり雪ノ下雪乃が美術的なのは間違っている。『風』—— 451

やはり雪ノ下雪乃が美術的なのは間違っている。『月』—— 462

ほんと比企谷八幡が七五三七子なのは間違っている。—— 478

されど私の学園ラブコメは間違っている。『壺』—— 492

されど私の学園ラブコメは間違っている。『式』—— 509

されど私の学園ラブコメは間違っている。『参』—— 522

されど私の学園ラブコメは間違っている。—— 439

- る。『肆』  
—————  
されど私の学園ラブコメは間違っている。『伍』  
—————  
されど私の学園ラブコメは間違っている。『陸』  
—————  
されど私の学園ラブコメは間違っている。『漆』  
—————  
されど私の学園ラブコメは間違っている。『捌』  
—————  
されど私の学園ラブコメは間違っている。『玖』  
—————  
されど私の学園ラブコメは間違っている。『拾』  
—————
- 622  
608  
594  
580  
565  
551  
535

- されど私の学園ラブコメは間違っている。『拾壹』  
—————  
されど私の学園ラブコメは間違っている。『拾貳』  
—————  
されど私の学園ラブコメは間違っている。『拾参』  
—————  
されど私の学園ラブコメは間違っている。『拾肆』  
—————
- 678  
664  
651  
635

しかし雪ノ下雪乃が変態なのは間違っている。

『高校生活を振り返って』2年F組 不可思議ふかしぎ 可思議かしぎ

高校生活といえ、友達とバカやったり恋人とバカやったりバカとバカやったり、みたいなバカみたいな生活のことなのだろうけれど。そんなキラキラ、ピカピカした、蛍光ペンやラメ入りのペンで書かれた読み難い作文を期待していたのでしようけれど。あるいは読むに堪えない作文を期待していたのでしようけれど。

残念ながら、私にはそんな期待に答えられるほどの実績もペンも持ち合わせてはいない。

私は高校生である以前に小説家であり、誰かの友達である以前に、誰かの恋人である以前に、人間である以前に小説家なのだから——私は語り手であり、高校生活どころか人生すらも歩んではない。

だからまあ、こんな読む価値のない駄文を読むくらいなら、私の小説を読むことをお勧めします。

「なあ、■■■■。私が授業で出した課題が何だったか、理解しているか？」

とある日の放課後。私は国語教師の平塚静先生に呼び出され、職員室でこの学校に入学したことを全力で後悔していた。

そもそも私は高校に通う気すらなかったのだから。義務教育の期間中くらいは親の言うことを聞いてやろうと、高校受験で移動距離が最も短い総武高校を選んだ。受験は親にバレない程度に手を抜いて落ちるつもりだったのに、中学生にして小説家と言うのは内申点でかなりの評価を得てしまったらしく、なんの間違いか私は渋々と高校生をしている。

「もちろん理解しているわ。そして正直に答えるのなら振り返ったところで覚えてなんかいない。時系列順に箇条書きにするなら、『昨日読んだ小説はつまらなかった』の一文で終わりよ」

「……君は小賢しいというか、いつそ高校生らしくないな。とりあえず記名欄にペンネームを書くな。本名を何だと思ってるんだ」

「大事なモノだと思ってるわ。冥王星くらいに」

「君の理科の成績は知らないが、多分君、冥王星について大して知らないだろう。太陽系に含まれないことすら知らないだろう」

「愚問ね。海王星についても知らないわ」

「そこまでは聞いていない」

平塚先生は、うんざりしたようにため息を吐く。

「君、部活には入っていないかったな？」

「小説家同好会を作ろうと、去年から企んでいるわ」

「目論見もするなそんなもの。……もういい。時に聞くが、友達はいるのか？」

「私の前に立つ人類は、読者さんかその他で分類されるわ」

「……………恋人は」

「我が家の湯船に張られた水が私の恋人よ。每晚私の冷めやらぬ熱を包み込んで冷やしてくれるし、どれだけ傷つけても決して離れない。何より、捨てても罪悪感なんて欠片も湧かないし、代わりが幾らでもいる。理論上、理想の恋人よ」

「聞いているうちに、私までその気になってきたぞ……」

額に手を当てながら、もう何度目か数えてはいないけれど片手じゃ足りないくらいのため息を吐きながら、平塚先生は席を立った。

「よし、こうしよう。嘘、でっち上げでいいから作文は書き直せ」

「吐血するほどの青春ラブコメに仕上げてみせるわ」

「よし。……いや、よしではないが、もういい。それとは別に、奉仕活動を命じる。君は

私を多大に疲弊させた。罪には罰を与えなければならぬのでな」

「……私の体は誰彼構わず抱きたがるほどに良く出来てはいないのだけど」

「教師である私がそんなことを命じるわけがないだろう。ついてきたまえ」

……なんでもいいけれど、早く帰りたいわね。

「途中、自販機に寄せなさい。喉が乾いたわ」

「反省する気が皆無だな、君は」

「反省の省の字は少な目と書くのよ。だから皆無程度が十分なの」

「言い直そう。君に反省する気は絶無だ」

半ば引きずられるように向かった先は、特別棟。週何度かの移動教室で訪れる以外には、図書室に一度行っただけでしかない。

「ここだ」

と、先導した平塚先生が立ち止まり声をかけてきたのはただの教室。扉の上にかけるれているプレートには何もかけられていなくて、所謂『やり部屋』だと言われたら納得のいく人気の無さ。……まさか本当に、私に奉仕なんてさせる気ではない、……はず。

流石に。

平塚先生が「入るぞ」と言いながら教室に入っていたのでついて行く。

室内はなんというか、殺戮的に殺風景な部屋だった。毛皮に綿を詰め込んで剥製にするかのように、使われていない椅子や机を積み重ねるようにして放置している。

他にいたのは、黒髪の美少女が一人。この何も無い部屋で読書をしている。

「……確かに男を相手にするくらいなら女の方が幾らかマシだけれど、知らない女に抱かれて喜ぶ趣味が彼女にあるのかしらね」

「知らない女の何を知っているというんだ、君は……」

美少女は私たちに迷惑そうな表情をしながら本に葉を挟み、顔をあげた。

「平塚先生。入る時にはノックを、とお願いしたはずですが」

「ノックをして君が返事をした試しがないじゃないか」

「返事をする間もなく、先生が入ってくるんですよ。それで、その『髪は女の命』という言葉のアンチテーゼの擬人化みたいな人は？」

彼女の言うとおり、私は髪にさほど興味は無い。金やら茶やらで小汚く縞模様染まっているけれど、それも受験失敗のための策の残りでしかない。

「彼女は■■■■、入部希望者だ」

平塚先生の目が、私に自己紹介しろと語ってくる。まあ、いいわ。

「私は不可思議可思議。小説家よ」

言い終えた直後、嫌な予感がしたために頭を右に傾げると、左耳に拳が掠めた。……平塚先生がストレートパンチを放っていた。

「初対面を相手にペンネームを名乗るな」

「名前を二つも名乗ったらそれこそ混乱を招くだけよ。私はファミレスで待つ時にもペンネームを使うわ。……で、あなたはどこの誰なのかしら」

「二年J組、雪ノ下雪乃よ」

「……同業者？」

「本名を名乗ったつもりなのだけけれど」

……いやいや。

そこまで適当な名前をつけられてると返って愛情というか、愛着を感じられるけれど。

それでも、私のペンネーム、不可思議可思議に似たセンスを感じた。無いセンスを感じた。

「で、新入部員だったわね。歓迎するわ」

「それはよかった。彼女は淀んだ髪と同様、精神やら脳やらも害獣の如く淀んでいる。そのせいでいつも孤独で哀れな奴だ。この部で彼女のありとあらゆるを構成し直し更

生する。これが私の依頼だ。頼んだぞー」

私たちの返事も聞かず、文句も意見も反論も一切聞かず、平塚先生は出ていった。あの攻撃力は高いけど防御力が低くて大事な時に即死しそうな教師に、人の文句を聞く筋合いはないのだろうか、疑わしい。

とりあえず疲れたから、適当に椅子を引きずり出して私も腰掛けた。

腰掛けてから三十分。いつもなら家で寛ぎながら小説を書くか読むかしている時間帯。私は欲求不満を解消するようにスマホで小説を書いていたら、離れた位置で読書をしていた彼女が声をかけてきた。

「……ここが何部なのか、とか。何か聞く気はないのかしら？」

「私は見えての通り忙しいのだけど。あなたは部活中かもしれないけれど、私は仕事なの。文句があるのならお金を払ってから言いなさい」

「拝金主義者なのね」

「小説家よ。私がお金を払ってくれた読者さん以外からは一切の文句を受け付けていないの。そして金銭の支払いも受け付けてはいないし、投げ銭は投げ返すわ」

「私が言っているのは文句ではなく質問のつもりなのだけれど」

「正論至上主義者は行間を読むという行為をしないから嫌いなもの。暗に話しかけると言ったのが聞こえなかったのかしら」

「言っていないのに聞こえるはずないでしょう」

そういうところが嫌いだったのに。……集中力が切れてきた。会話を会話でぶつた斬られたような不快感。

「……あーあ。ほんと、あーあ。仕方ないから時間を割いてあげるわ。で、何の話かしら」

「……ここが何部なのか、貴女は分かっているのか聞いているのよ」

「部活の名称は知らないけれど、内容は聞いているわ。奉仕活動——つまり貴女の性的欲求を発散させる。部活という名のハーレム、ハーレムという名の部員なのでしょう？」

見たところ、恋人なんていなさそうだし。そんなこと私に向いているとは思えないし嫌だからこうして時間稼ぎをしているのだけど、伝わっていなかったみたいね」

「……貴女と平塚先生は普段一体どんな話をしているの」

「国語の話をしているわ。文系の人間は常にいろは歌で会話するのよ。鳴き声は『走れ、メロス!!』」

「理系の人間の偏見ね」

「偏見のない人間なんていないし、偏見の目を向けられない人間もないのよ。……で、じゃあどんな部活なのかしら？」

「ここは奉仕部。活動内容は一重にボランティアよ。ホームレスには炊き出しを。モテない男子には女子との会話を。困っている人に手を差し伸べるのがこの部の活動よ」

彼女、雪ノ下雪乃は席を立ち、私を見下すように見下す。

「ようこそ奉仕部へ。■■■さん、歓迎するわ」

その目は確かに、持つ者の目だった。優等生が劣等生を見る、哀れみの目。しかし、それを向けられるほどに、私は私をしていない。

「生憎と、私は小説を書く以外には能の少ない、か弱くひ弱で貧弱な人間ではあるけれど、他人に救われる謂れは無いわ。そして私のことは不可思議可思議と呼びなさい」

「貴女が持ち込まれた悩みそのものなのよ。平塚先生に」

「つまり職務放棄ね」

「否定はしないわ」

ひどい話である。

「けれど。されど。だけど。私は変わる気なんてないわよ。私の座右の銘は『生涯不変』にして『障害普遍』、私は決して変わらないし、私のおかげで社会が障害まみれバグまみれになったところで、望むところなのよ」

私の言葉に、雪ノ下は一步引き下がりがりながらも何かを言おうとしたタイミングで、「邪魔するぞ、雪ノ下」と、平塚先生が教室に戻ってきた。

「どうやら、更生に手古摺っているようだな」

「本人に反省の気が無いせいです」

「だろうな」

意思が伝心しているようで何より。神や悪魔に命じられようと、脅されようと、私は私を辞める気はない。

「私が変わらないことでの社会への影響だけでなく、私が変わったことでの社会への損害も考えなさいな」

「……貴女の性格や存在は、変わらなきやそれこそ損害を生み出しそうなものだけれど。……変わりたいくないというのは、ただの逃げよ」

「変わるここそ逃げなのよ。変わるなんて、自殺と同じじゃない。立ち止まるか、飛び降りるか。羽根を生やして飛べるほどに変わる人間は、羽根を生やして飛べる人間と同じくらい皆無よ」

たとえば、未来では小説家が世界を破壊する害悪因子だったとしても、私は小説家をやめない。白紙に文字で世界を生み出すことこそ、私の人生なのだから。

「……それじゃあ、悩みは解決しないし、誰も救われないじゃない」

「人に人は救えないわ。救われた人間というのはみんな自分で自分を救っているの。人生の主人公は自分であり、他人に救世主ヒールを任せることこそ、最大の逃げであり最低の自殺よ」

「貴女ねえ……!」

雪ノ下が肩を怒らせながら詰め寄ろうとして、平塚先生に止められる。

「二人とも落ち着きたまえ。古来より、正義と正義がぶつかり合ったときは拳を交え、決着をつけ、雌雄を決めるのが少年漫画の習わしだ」

「正義と正義のぶつかり合いを詩的に素敵に仕上げ提供するのが私の仕事であって、拳を振るうのは私の仕事じゃないわ」

「口答えをするな。黙らされたいのか」

「私の手は口よりもモノを言うのよ。穴を一つ塞いだくらいで、私の心までも好きにできるとは思わないコング……」

黙らされた。

「つまりこの部で、どちらがより人に奉仕できるか、勝負だ!!」

言い切られてから、口を抑える手は離される。

「勝った方は相手になんでも命令できるといえるのはどうだ?」

「嫌よ。私は全人類の命よりも、規格された歯車で構成された社会よりも、私の利き手と

目が大事なのだ」

「君はいつまで雪ノ下を変態だと思っているんだ。しかもどれだけ鬼畜な変態だと思っているんだ」

「たとえ口頭でも、文脈である以上は詩的に素敵に。正しさよりも面白さを優先しているのよ」

「そう言うところが社会に害悪だと言っているのよ」

「社会不適合にして、社会不適合な自覚はあるわ。むしろ不規格。私と社会は、メートルねじとインチねじの関係よ。矯正よりも転生を待った方が効果的っていうか一般的ね」

あるいは、転用か。

「なんにしても、お断りします。この女に体目当ての変態だとは思われたくありません」  
「別に受けてくれても構わないけれどね。日本語をおもちゃにしている私に救えない人間は、言葉の通じない非国民だけよ」

部屋の掃除を誰かにしてもらいたかったし、負ける気はないわ。

「なら、決まりだな」

「平塚先生!?! 私のお前はどくなるんですか!」

「どっち道、君は彼女の更生を引き受けたじゃないか。部活動の一環だと思って諦めたまえ」

こうして、私こと不可思議可思議と、変態こと雪ノ下雪乃の、フワツフワした戦いというか、言い争いは始まった。せめて、良い争いに終わればいいのだけけど。

それでもきつと、締めの一文は『めでたし、めでたし。』

もつぱら由比ヶ浜結衣が雌豚なのは間違っている。

「おい、■■■■」

「……」

「聞いているのか、■■■■」

「……」

「なあ、……不可思議」

「何かしら、平塚先生」

「私にはやつと君がどんな人間なのか分かってきたぞ」

「不可思議可思議を知りたいのなら不可思議可思議の小説を読めばいいわ。私の全てがそこに書かれているの。……で、これから甲斐甲斐しくも嫌々、泔々と部活に向かおうとしている私様に何か用かしら」

「私様つて、何様だよ……。やる気を阻害したようならすまなかつたな。しかしまあ、話をしてみたかったんだよ」

・学校の廊下で平塚先生に呼び止められ、職員室前に設置されている、用途不明で座ると怒られる上等そうなベンチに座らされる。

「君は、雪ノ下雪乃をどう思う」

「私の利き手と目を陵辱する計画と手段を手に入れた変態」

「冗談なのは分かっているんだ。真面目に答えろ」

面白くすることこそ、私なりの真面目なだけけれど。ならば心を逆さまに。言葉を天邪鬼に。

「美麗に華麗に端麗な芸術品」

「ほう？」

心にもないことを言うと、平塚先生は眉をびくりと動かす。

「周りの全てが美しくなければ気が済まず、どんな荒地にもレッドカーペットが敷かれていないと気が済まず、万物が芸術品の材料になると思い込んで屑鉄を見下す大理石」

あるいは、本心。あの飾りつ気のない、彫像にしたらつまらなそうな彼女のことを、私は案外高く評価しているらしい。

「そうか……。まあ、君みたいな奴にはそう見えるのだろうか」

どんな奴よ。私は別に自分を屑鉄だとは欠片も思っていない。むしろオリハルコンだとすら思っている。私は私を自意識過剰に過剰評価している。

「非常に優秀な生徒ではあるんだが、……。まあ、君と似て持つ者の苦労があるんだよ」

「失礼ね。私は持つ者であっても苦労はしていないわ」

「失礼は君の方だ。敬語はどうした、敬語は」

「私が平塚先生に使う要素が見当たらないわね。歳と立場程度で上下関係を構成できると思っているのなら勘違いよ」

「貴様は今、全国の先生を敵に回したぞ」

「貴様って敬称だけどね」

「え、マジで……?」

「目上の人間に対して尊敬の意を込めて用いる呼び方よ」

石像のように固まった平塚先生を放置して、私は部室に向かった。昨日と同じ道を歩き、自販機で昨日は買えなかったコーラを買ってから部室に入る。

「……こんにちは。遅かったわね」

「『こんにちわ、じゃなくてこんにちはだよ』っていちいち正す心の狭い人類を滅ぼしていたのよ。日本語にはもう少し遊びが必要だわ」

「言葉に対して無頓着すぎるのも問題だわ」

「シミュレーションとシミュレーション程度の問題、問題視して指摘する人間の人格の方が問題だと、私は思うわ」

「些細な問題を駆逐してこそ、正しさは正しくいられるのよ」

「その結果生まれたのが『出る杭は打たれる』じゃあ、救われない話ね。救えないのかしら」

他愛も無い、無価値で大して面白くも無い会話をしていると、教室の扉にノックする音が教室中に響いた。

「どうぞ」

と、まるで面接官のように雪ノ下が言うと、ノックの主は扉を開けて入ってくる。

「し、失礼しまーす」

恐る恐る、といった風に入ってきたのは、スカートが短く、ボタンを三つほど開けたりと、校則に反逆しているような、不真面目そうな印象を受けないでも無い、『今時』と言う言葉の似合いそうな美少女だった。

「平塚先生に言われてきたんですけど……、な、なんでナーちゃんがここにいるの!？」  
「クラスメイト? というかそんな呼び方されていたの?」

さて。そんな、本名由来っぽいあだ名で呼ばれた記憶は、全くもって無いのだけれど。

「知らないわ。そして私は不可思議可思議よ。呼ぶならそう呼びなさい」  
「ごめんちよつと何言ってるかわかんない」

「言葉の通じない人間に言うことはないわ。死んで結構よ」

他人同士が険悪な雰囲気になってきているのは苦手なのか、雪ノ下は椅子を取り出しながら、「2年F組の由比ヶ浜さんよね」と、確認するように尋ねた。

「あ、あたしのこと知ってるんだ」

あからさまに、表情が明るくなった。

まあ、見知らぬ人間に名前を知られているのが嬉しいというか、誇らしいという感覚はわからないでも無い。私の場合はペンネームだけだ。

「人類に興味のない私と違って、人類補完計画を目論むくらいだから、全人類とまでは行かずとも全校生徒くらいは把握してるんじゃないかしら」

「そんなことないわ。そしてそんな計画を目論んでもいないし、貴女のことなんて会うまで知らなかったもの。でも別に落ち込むことはないわ、貴女の小説家としての知名度にまだまだ広がる余地があったということだもの。むしろ喜びなさい」

「そうね、日本は広いもの。貴女が私の全てを知る日も近いわ」

犬も食わなさそうな会話を、しかし端から見ている由比ヶ浜は「なんか、楽しそうな部活だね」なんて、キラキラ笑いながらしなげに言い出した。

「それにしても、ナーちゃんよく喋るね！ 教室じゃぜんぜん喋らないのにー！」

「語らなくていいことは語らないのが省エネへの第一歩なのよ。分かったら声のトーン

を落としなさい」

「え、何言ってるかよくわかんないんだけど」

「うるさいから声を小さくしなさいこの雌豚が、くらいに言わないと伝わらないのかしら。……失礼、豚なら日本語が通じなくても仕方ないわね。期待しすぎた私のミスよ、ごめんなさい。盛った雌豚のように騒いでも私は貴女に文句を言わないと誓うわ」

「誰が豚だし!!」

「貴女、流石に少し失礼よ……」

「少しって! 雪ノ下さんも失礼だよ!」

なるほど。嫌に今時なJKと呼称される新人類かとも思ってたけれど、存外詩的で面白い。ツツコミキヤラというのは、何時の時代、どんな場所でも求められているのだから。「で、ここに来てしまった以上、自分では自分を救えないと諦め、一度は超えたいと思つた壁から逃げてきたのでしょうか? ならつべこべ鳴かずに依頼の内容を言いなさいな。詩的に素敵に、めでたし、めでたしと吐かせてあげるわ」

「ナーちゃん、何言ってるの?」

「不可思議可思議と呼びなさい」

彼女、由比ヶ浜の依頼の内容というのは、迷惑をかけた人に手作りクツキーを渡したいけどうまくできないから手伝ってほしい、とのことだった。私たちは材料を各々でかき集め、エプロンと共に家庭科室へと集合した。

「言っておくけれど、私は味覚には自信がない。具体的にはおいしいのハードルが途方もなく低い上に、料理なんてろくにすることがないから、技術やら味見やらでは役に立たないわよ」

「なら私の独壇場ということね。由比ヶ浜さん、私にまかせて頂戴」

「う、うん。……二人って、仲悪いの?」

「嫌いなだけよ、この小説家が」

「怖いだけよ、この変態が」

かくあれども。

とりあえず、レシピ通りに作らせてみようという流れになり、私は暇になった。その間は邪魔にならないところで小説を読んでいると、数十分後に、呼び戻され、目の前には黒いクツキーがあった。

「……ココアパウダーなんて買っていたかしら」

「どう見ても失敗じゃない。貴女の目は節穴なの？」

「料理は食べられなくなつて初めて失敗というのよ」

一つ貰つて食べてみる。

「……硬すぎる気はするけれど、十分においしいじゃない。渡す相手が年寄りでもない限りは平気だと思ふけれど」

「え、ほんと！」

「そんなわけないでしょう。下手に下手な夢を見させないで。そして舌を医者に診てもらいなさい」

母親かよ。

「夢を語るのが小説家よ。食べないならもらつていいかしら」

「ど、どうぞ……」

由比ヶ浜は落ち込みながら、クッキーを皿ごと私に渡してきた。

「さて、どうすれば良くなるのか考えましょう」

雪ノ下は私がクッキーを食べるのを見ながら、考え始めた。

「別に、考えるまでもないでしょう。物事の上達の近道は反省と挑戦の繰り返しよ」

「まあ、そうなのよね」

才能があろうとなかろうと、上達するにはやるしかない。やつて失敗することはあつ

ても、やらずに成功することはないのでから。

「やっぱりあたし、料理に向いてないのかな……。才能っていうの？　そういうの、ないし」

「まずはその考えを改めなさい」

雪ノ下は手本として作りながら語る。

「自分に才能がないと言ったけれど、最低限の努力もしない人間に才能のある人間を羨む資格はないわ。成功できない人間は成功者の積み重ねた努力を想像できないから成功できないのよ」

彼女の言っていることは、間違いではない。でも間違っていないだけで、正答ではない。

「それは天才の理屈よ。理想と言うべきかしらね。才能のある人間ほど努力をせずに成功するから、努力が無駄になることを知らずに成功するから、努力というものを過大評価する。努力のできる人間を過大評価する。そして努力しても失敗する人間にはこう言うのよ。——なんで努力しないのだろう——今、現に彼女が失敗する理由に努力不足以外出せていないじゃない」

「なら、貴女には努力以外の解決策があるとどうの？　それこそ怠惰な愚か者の理想よ」  
「答えを他人に求めることこそ怠惰だと、私は思うのだけだね。——ねえ。渡す相手つ

て男子かしら？」

「え？ えつと、まあそうだけど」

「そう。なら私のできるアドバイスは、——苦惱と工夫は成功への遠回り。妥協と諦めこそ解決の近道、よ」

その男子がどんなやつかなんて知らないけど、作るべきは『おいしいクッキー』であるべきなのだけれど、でもそれが出来ないのなら『手作りクッキー』あたりに妥協すればいい。どうせ既製品には敵わないのだから。

私は席を立ち、家庭科室の扉に手を掛ける。

「どこに行くのかしら？」

「これ以上は居ても居なくても同じだから、帰るのよ。私の生活は常に時は金なり——時間の浪費はお金の浪費と同義なの。これ以上文句があるならお金を払いなさい。一文字一円で耳を傾けてあげるわ」

後日談。というよりも、依頼の顛末。

雪ノ下から聞いたところ、由比ヶ浜はあれから何度か繰り返し、なんとか食べられる程度のものが作れるようになってからは家でやるといい、その日は帰ったらしい。

今日はその翌日。

「昨日貴女が語ったこと、間違いだとは思えなかったけれど、納得は全く出来ていない。私は、自分を高められるなら限界まで挑戦するべきだと思うの。それが最終的には由比ヶ浜さんのためになるから」

「時は金なり、よ。彼女の作るクッキーが及第点のクッキーであろうと、合格点のクッキーであろうと、頂点のクッキーであろうと、贈られた側からすればそれはクッキーではない。同じ結果が得られるのなら、努力は最小限の方が良いに決まっているのよ」

「それじゃあ自分を高められないし、由比ヶ浜さんのためにもならないわ」

「極論、宝くじで百億円稼ごうと、汗水垂らして働いて百億円稼ごうと同じことよ。宝くじだって頑張れば当たるのだから。時間の浪費を減らした分、他のことの努力に時間を当てれば良いのよ」

「理想論ね」

「だから、極論よ。人生なんて生きてるだけで努力の集合体みたいなものなんだから、説的に努力なんて存在しない。人間のステータスは全て才能と環境と運で構成されているのよ」

話しつつも、数日分の遅れを取り戻すためにノートパソコンを部屋に持ち込んで小説を書いていると、今日も由比ヶ浜が出没した。

「やっほー！」

「……何か」

「あれ、……もしかして私、あんまり歓迎されてない?」

由比ヶ浜は確かに騒がしい存在ではあるけれど、会話の偏差値が20くらい下がるから、私的には招き猫と同じくらいにはありがたい存在なのだけれど。でも雪ノ下はそうでもないらしい。

「もしかして雪ノ下さんって、私のこと嫌い?」

「別に嫌いじゃないわ。……ちよつと苦手かしら」

「それ女子言葉じゃ同じことだからね!」

「……ねえ。歓迎はするけれど、うるさいから声を小さくしなさいこの雌豚が。BGMに鳴き声はただの騒音よ」

「誰が豚だし!!」

「だから、うるさい」

これならイヤホンでも持ってくるんだった。

「それで、一体なんの用かしら」

雪ノ下が尋ねると、私たち二人に、由比ヶ浜はクッキーを手渡す。袋越しでも、昨日見たものより遥かに上達しているように見える。

「昨日のお礼ってゆーの? いやー、やってみると楽しいよねー。今度お弁当とか作っ

「ちやおつかない。あ、でき、ゆきのん。部室でお昼一緒に食べようよ。ナーちゃんも！」  
「不可思議可思議よ。覚えやすい名前なんだから、いい加減覚えなさい」

「えー？ でもナーちゃんはナーちゃんじゃない？」

「そんなに親しい仲でもないでしょう。親しくない仲にこそ礼儀は大事なよ。それこそ、お金よりもね」

まあ何はともあれ、依頼は解決ということで良いのでしょうか。雪ノ下はともかく、由比ヶ浜は十分に満足のいく結果が得られたようだし。

だからまあ、これ以上無粋な蛇足は入れずに締めましょう。めでたし、めでたし。

こんな材木座義輝が中二病なのは間違っている。

テーマ『野生動物の生態』2年F組 不可思議 可思議

野生動物とは、野生動物であり、だから野生動物なのである。野生動物は野生動物の野生動物が野生動物として野生動物と共に野生を生きる動物で、つまり、だからこそ野生動物であり、しかし動物なのである。

結論、小説を読む能のない野生動物に論じる価値なし。

「……なんだ、この怪文書は」

「平塚先生は現国の教師でしょう。幾ら私とお喋りしたいからといって、他の教師から仕事を奪い取ったのなら軽蔑するわ」

放課後。部室に向かう前に、私は平塚先生に呼び出されて、職員室で提出したはずの生物のレポートを突き出されていた。

「仕事を奪ったのではなく、面倒を押しつけられたんだ。現国教師としてではなく、生活

指導として。……で、これのどこが野生動物の生態だ？」

「何もかもが野生動物の生態でしょう。体育会系の間なんて野生動物と大体一緒よ」

「理屈とは言わんからせめて屁理屈を捏ねてくれ。時々私と君は別の言語で話しているんじゃないかと錯覚したくなる」

「したくなるだけならなら是非ともやめて欲しいわね。私の小説が読めなくなるわよ」

「君の小説に関しては私も高く評価している。他校の学生のものであれば授業の教材に使いたいと思うくらいにはな」

「へえ、読んでくれたのなら、お礼は言っておくわ。ありがとう」

「現国の提出物のありとあらゆるで宣伝されれば、流石に気にもなるさ。それに、意外かもしれないが私は君を気に入っている。社会的に破滅的な問題児ではあるが、しかし話していて面白い」

別に意外でもなく、知っている。そういう体質に生まれてきた私には、平塚先生の私に対する感情なんて自分の感情以上に分かりやすい。

「話は以上だ。今日も部活に励みたまえ」

私は追い出されるように職員室を出て、真っ直ぐに部室へと向かった。

悪しき風習の一つに、覗きというイベントが存在する。基本的には男子が女子風呂を覗こうとして、桃源郷ではなく痛い目を見るまでがセットの、ライトノベルではよく登場するシチュエーションであり、稀に男女が入れ替わることもあるが、その場合は成功する確率も共に反転する。

そんな光景を、まさか執筆以外で目撃することになるとは思いもしなかった。

雪ノ下雪乃と由比ヶ浜結衣が、部室をこっそりと覗いていた。

「……何をしているのかしら」

「っ!?」

こちらも黙って見ていては、それこそ怪しく見られる気がして声をかけたら、大層驚かれた。

「いきなり声を掛けないでもらえるかしら」

「無視して帰るといふ選択肢もあったのよ。声をかけてあげたのだからむしろ感謝しなさい。……で、だから何をしていたのよ」

何かよからぬ企みをしていたわけではなく、部室に何かがあるらしい。無防備に入るには行かない、警戒心を抱かせる何かがある。

「部室に、不審人物がいるの」

「だったら警察か平塚先生を呼びなさいよ」

「貴女、平塚先生をなんだと思っているの」

「少年漫画オタク」

二人を退けて、私は部室に入る。

そこには暑苦しい黒縁のメガネをかけ、コートを羽織った、中年サラリーマンのような後ろ姿の男がいた。

「クククツ、まさかこんなところで出会うとはな。不可思議可思議！」

「誰かと思つたら、材木座じゃない。外見は怪しいし気色悪いけど悪人じゃないわよ」

まあ、つまりは知り合いである。別に親しいつもりはないけれど、同じ穴の貉というか、同じ畑の住人というか。

「……貴女の知り合いなの？」

「一年生の時同じクラスだったのよ。材木座義輝、将来の夢はラノベ作家。名前はかっこいいしキャラも濃い、そして何より私の小説の愛読者。覚えがない理由がないわ」

「つまり貴女の希少な友人というわけね。彼の相手は貴女に任せるわ」

まあ、別に構わないけれど。

「で、なんの用かしら。一言でも無駄口を叩けば、一文字につき一本、何かを引き抜くわ。歯でも舌でも体毛でも内臓でも、容赦躊躇い一切無し」

愛すべき読者ではあるけれど、こいつの中二病はオープン過ぎてウザい。密かに自己

賛歌しているだけならつまらないけれど、剣豪將軍を自称して騒ぎ歩かれてもだ。

「では単刀直入に言おう。自作のライトノベルをとある新人賞に応募しようと思うのだが、友達がいなくて感想が聞けぬ。読んでくれ」

材木座はそう言いながら、人数分の小説の原稿を手渡す。紙の厚さもあるのだろうか、それにしても随分な分量を書き込んだものね。私なら十話か二十話くらいに分けて連日更新していると思う。

「ネットに投稿すれば良いじゃない。私は広告料のためにホームページから作っているけど、感想が聞きたいだけなら投稿サイトになればそれなりの感想はもらえるとと思うわよ。書籍化の可能性も少なからずあるし」

「それは無理だ、あやつらは容赦がないからな。酷評されたら多分死ぬぞ、我」

「そんなことはないわよ。サイトにもよるけど、読者だってそう暇じゃないし、つまらなかったら何も言わず離れていくのよ。——それよりも、酷評されかねないものを、人様に見せられないようなものを、この私に読ませるといふの？ そっちの方が腹立つわね」

長らく小説を投稿しては人から評価を受けている私だけけれど、酷評された経験はあまりない。されたところで私に言えるのは、『文句があるのなら金を払え』の一文だけなのだけど。

材木座は顔色を悪くさせながら、しかし宣言する。

「すまん！　だが我の夢のためなのだ！　お主らの感想が聞きたい！」

「夢ではなく現実を見なさい。どうせ小説家になるのなら、書籍化するのなら、代金を受け取るのなら、……どうしようもなくアンチは湧くものよ。ネットに晒そうが本屋に並ぼうが同じことなのだから、夢を追うのなら怪我をする覚悟はしなさい」

とりあえずその場は解散となり、翌日に感想を聞かせることとなった。

私には小説を書くかと思っただけ、なんてものはない。ただなんとなく、書ける気がした。今に思えばただの中二病なのだろうけど、偶然にも才能と妄想が噛み合ってしまった。

最初の作品こそ、有名どころの投稿サイトの連載していたけど、その小説が完結してからは投稿サイトに投稿していない。

今でも投稿サイトの小説を読むことはある。どころか、出版されている小説よりもずっとハイペースに、際限なく読みまくっている。それには手軽に読めるという点以外

にも、素人が書きたいことだけを書きまくった荒削りすぎる小説や、語彙力が幼く頭の使わない小説が、存外好きなのである。

褒められる点が無いというのは、悪いことでは無い。貶される点が無いことこそ、最悪だと私は思う。

だからこそ私は、材木座義輝の小説が嫌いになれないらしい。

翌日。

徹夜には慣れているつもりだったけれど、流石に学校へ直行するというのはかなりの重労働だった。徒歩十分程度の道のりが、今だけは登山道のように険しく見える。

「ナーちゃん元気ないね。どしたー?」

「私のことは不可思議可思議と、……もういいわ」

背後から声を掛けてきたのは、言うまでもなく雪ノ下ではなく由比ヶ浜。相変わらず陽キヤなようで何より。

「なんかお疲れだね? まだ朝だよー?」

「熱中して読んでたら朝だったのよ。脳的には朝どころか深夜ね」

「……あ、だ、だよね〜」

私の隣に立って歩いている彼女の目は、あからさまに泳いでいた。それはもう、ク

ロールかっつてくらしいに泳ぎまくっていた。

「私もマジ眠いから〜」

「読んでないのね」

由比ヶ浜は早足どころか駆け足で、この場を去っていった。

放課後。授業時間のほとんどを寝過ごしたおかげで、ようやくと本調子を取り戻した脳の具合を確かめながら、私は今日も部屋にやってきた。

部屋には雪ノ下が船を漕いでいてけれど、扉の開く音と共に目を覚ました。

「……驚いたわ。貴女の顔を見ると一発で眠気が飛ぶわね」

「外見に関して自覚はしているけれど、それもゾンビ扱いされると嘔みつく気も失せるわね」

「さて、感想を聞かせてもらおうとするか!」

材木座と由比ヶ浜が来てから、今日の部活動は始まった。

初手は、「こういうのはよくわからないのだけど」と前置きをした雪ノ下。

「つまらなかつた。読むのが苦痛ですらあつたわ。想像を絶するつまらなさ」

その感想を決して否定はしないけれど、感想がつまらないんじゃないやお互い様だという気もする。

「さ、参考までに、どの辺がつまらなかつたのかご教授願えるかな……」

「まず、文法が滅茶苦茶ね。なぜいつも倒置法なの？ 『てにをは』の使い方知ってる？  
小学校で習わなかつた？」

……材木座がどうかは知らないけれど、私は習う習わない以前に、初めて聞く言葉ね。  
てにをは？ 何よそれ、暗号？

「ぬああ……、それは、平易な文体でより読者に親しみを……」

「それは最低限の日本語が書けるようになってからではないの？」

……まあ、売り物にするのならそれはその通りなのよね。読めなくちゃ面白さも伝わらないのだし。

「それにルビだけど、誤用が多すぎるわ。能力に『ちから』なんて読み方はないのだけ  
ど。あと、ブラッディナイトメアスラッシュャー 幻 紅 刃 閃のナイトメアはどこから来たの？」

「ぎやつふう……。ううつ、違うのだ……。最近のバトルではルビの振り方に特徴を  
……」

「ここでヒロインが服を脱いだのはなぜ？ 必要性が皆無よね。白けるわ」

「ひぎやあ!! しつ、しかし、そういう要素がないと……」

「完結していない物語を人に読ませないでもらえるかしら。文才の前に常識を身につけた方がいいわね」

「ピャアアア?!?!」

口撃に次ぐ口撃によって椅子から転げ落ち、材木座は地に膝をつけた。

「とりあえずこんなところかしらね。次は本職の方の感想を聞きたいのだけど」

と、雪ノ下の鋭い目が私に向けられる。口では言っていないものの、目が「面倒な仕事をさせやがって」と語っている。

「お、お主ならわかつてくれるよな……、不可思議可思議い……」

「ええ、まあ。彼女の感想が一般的に優秀な一般人の感想なら、私は格上の存在として感想を述べさせてもらおうわ」

「……か、覚悟はできている。……お手柔らかにお願いします」

別にそこまで酷評する気はないわよ、私。

「安心して頂戴。時間を忘れて朝まで読みふけるくらいには好きよ、あなたの小説。理解を深めながら読めば、やりたいことと伝えたいことは大体分かった」

「グフツ、高評価もそれはそれでくるものが……」

「とはいえ、読者に理解力を求めるといふのはナンセンス。ストレスフリーにスラスラ読めるのが理想よ。ライトノベル以外の小説も読み込んで、親しみやすさよりも格好良さをまずは求めなさい。小説家は文章で格好つけるのが仕事なのよ」

「あー、えっと、はい」

「ルビについて、彼女は気に食わなかったというか、シンプルに理解できなかつたみたいだけど、そこは大した問題じゃないわ。むしろもつと誤用を恐れず、イカれ狂いなさい。私の小説から例を挙げるなら、そうね。ブレイク・クラフツ・デストロイ 書物の国のルイスとか黄金の国とかね」

「おおっー！」

「ちよつと、間違いを直さないのは問題だと思っただけ」

材木座は感心、というか感動したような声をあげたけど、雪ノ下の方は気に入らないようで。……やっぱりライトノベルと純文学は相容れないものね。違いなんて知らないけど。

「ルビと読み仮名は似て非なるもの。程度にもよるけど、意味が通っていればそれでいいのよ。読者は格好良ければ多少の誤用なんて気にしないわ」

「……不思議な世界なのね」

「フィクションを日本語で語っている以上、不思議に決まっているわ。……そして、ああ、ヒロインが脱ぐシーンね。確かにお色気は大事だけど、脱ぐ理由はちゃんと与えな

さい。——実は露出狂で脱ぐと集中力が増し、潜在能力がフルに発揮されるのだ。——とか。ただ脱ぐのと同じや、受ける印象が全く違うわ」

「いやもうほんと、勉強になります」

「強いて一つ褒めるとしたら、ここまでの文量をよく溜め込んだものね。私なら一話書けたら即投稿しているもの。それと、完結していなくても書籍化しているライトノベルは多いし、その辺は気にしなくていいわ。……彼女に合わせてこの程度にしておくけれど、何か質問は？」

「いえ、ありがとうございます、としか……」

「見事に飼いやめたわね」

「人間きが悪過ぎるわ。この世に面白い小説が一冊でも増えるなら、それは歓迎するベキよ」

「そうなればいいのだけれどね。じゃあ、最後は由比ヶ浜さんかしら」

「え？ えーつと……」

完全に上の空になっていた由比ヶ浜は、急いで原稿を開いて、ぺらぺらとめくり、言った。

「む、難しい漢字いっぱい知ってるね！」

「グフアツ……」

勝者、由比ヶ浜結衣。……じゃなくて。最後の最後にとどめを刺されてしまった材木座は勢いよく倒れた。

しばらく時間が経つと、材木座は立ち上がった。もう日が暮れ、文化部はどこも帰り始めている時間帯。

「……また、読んでくれるか？」

あれほどダメージを負っておきながら立ち上がるその姿勢は、既に小説家だった。

「構わないわ。でも、紙の原稿は読むのも持ち帰るのも面倒だから、次はデータで寄越しなさい」

なんなら、紙の原稿が一番不愉快だったまである。

「私が言うのもあれだけど、まだやるのね……」

「無論。一人でも応援してくれる者がいるのだからな。確かに酷評はされたし、死にたくもなったが、その反面、たった一人からの応援の心強さを知った。知ってしまったのだ。これは、やめろと言われてもやめられん!!」

そう。小説家とはそういう生き物なのだ。多分。

百万人から酷評されようとも、一人でも応援してくれているのならその一人の期待に応えたくなくなってしまう。数の問題ではなく、心の問題なのだから。

「では、さらばだ！ また新作が書けたら持つてくる!!」

「ええ、期待しているわ」

一人の小説家が、大き過ぎるほどに大股な一歩を踏み出した。めでたし、めでたし。

だけど戸塚彩加が美少年なのは間違っている。

今日の体育は、男女別で、さらにサッカーかテニスで分けるといいう、クラスをどれだけ分断させるのか問い詰めたくなる内容だった。

私が選んだのは、当然ながらテニス。チームプレイなんてできないし、ほとんど消去法である。

まあ、サッカーにしてもテニスにしても、一人でサボっていればいいや、くらいに思っていたのに……。

「あつ、ナーちゃん！ あたしとペア組んでくんない？」

そういえばクラスメイトだったらしい由比ヶ浜が、私を誘ってきた。なんでも、普段仲良くしているグループのテニス派が奇数だったとか、まあそんな感じ、らしい。

「……まあ、別に構わないけれど」

「うわつ、なにその、ホラー苦手なのに付き合ってた彼氏が実はホラー映画好きで誘ってきたけど断りたいでも断れない彼女みたいな顔!!」

「ツツコミが長い。やり直しを要求するわ」

「何その不満そうな顔!!」

「やればできるじゃない」

「やらせんなし!!」

外見から私は運動が苦手そうに見えるけれど、別に私はそこまで運動音痴というわけでもない。

中学生の頃には、人間関係とか小説の都合で一年生の頃しか参加していなかったけれど、卓球部に所属していたりしていた。

実感したのは割と最近だけど、卓球ができると、大概の玉を打つ球技がそれなりに出来るようになる。

「危なっ!!」

「ちよっ!!」

「掠った! 今掠ったあ!!」

ただまあ、出来るからといって、スポーツが得意かと言われたら、そんなことはない。

「ナーちゃん絶対狙ってやってるよね!!」

「私にとって、運動と喧嘩は同義なのよ」

球技をしていると、無意識のうちに相手の肉体を狙ってしまっている私がいる。

「ていうか、ナーちゃんって腕とか足とかめっちゃ細いの、意外と動けるんだね」

「私は確かにインドア派だけど、別に引きこもりではないのよ」

休憩を挟みつつ何度かラリーをしながら、体育の時間を過ごした。

昼休み。だんだんと気温が上がり、飲み物を飲む量が増えて来たために、私は校内中の自販機を巡るツアーのようなことをしていた。というのも、全員考えることは同じらしく、冷たい飲み物がどこもかしこも売り切れているから、暑い外の自販機まで買いに来ていた。

「コーラにするか、サイダーにするか。悩みどころね……」

私は家ではコーヒーや紅茶を飲むけれど、外じゃ清涼飲料水を飲むようにしている。別にこだわりとかじゃないけど、習慣というか、習性みたいなもの。

「あれ、ナーちゃんじゃん。なんでこんなところにいるの？」

「……今日は良く絡んでくるわね」

夏並みに暑い外で話しかけてきたのは、体育の時にも一緒だった由比ヶ浜。

「なんで暑いのにこんなところにいんの？」

「サイダーがどこの自販機にも売っていなかったからよ」

幸いこの自販機にはまだ残っていたため、無事にサイダーを買うことができた。

「あれ？ 由比ヶ浜さんと、えつと、不可思議さんでいいんだっけ？」

「あ、さいちゃんだー！」

教室に戻ろうと思った時に、私たち二人に声がかけられた。

中性的を超えて女性的な顔立ちで、小柄で手足が細く、肌も白いう、私よりもよっぽど女子らしい美少女のような、しかし男子生徒。クラスメイトの中でも頭ひとつ抜けて綺麗だったから、名前はともかく顔くらいは覚えてる。

「さいちゃんは、テニスの練習？」

「うん」

総武高校のテニス部はお世辞にも強いとはいえない。……いや、別にスポーツ漫画の住人じゃないから、どこが強豪校だとかは知らないけれど、少なくとも私が入学してからはテニス部が何か目立った活躍をしたという話は全く聞いていない。

「そういえば不可思議さんって、テニス上手いんだって？ 部員たちで噂になってたよ」

「ぶつけるのが得意なだけよ。中学でやってたのだから、テニスもテニスでもテーブルテニス、卓球だし」

彼は話しながら、自販機でスポーツドリンクを購入した。

「ナーちゃんつてば酷いんだよ！ 今日あたしとラリーしてただけど、すぐぶつけてくるの！」

「あつはは、……えつと、コントロールが上手いんだね」

「運動部で男子ならここは、『スポーツマンシップはどうした』と激昂するべきよ。そんなだから、賞められる、というか可愛がられるんじゃないかしら？」

「え……、え、何？ 何か怒らせること言っちゃったかな……」

別にそんなつもりはなかったのだけど。ただなんとなく、ちゃん付けで、半ば女子のように扱われていることが不服そうに感じたから言ってみただけなのだけど。

「別に、なんでもないわ。私は教室に戻る」

教室でも私のことが噂になっていて、なんでかサイコパス扱いされていた。

放課後。

いつものように部室に行くと、いつものように雪ノ下は先に居た。

「いつも先にいるわね」

「そう言う貴女はいつも私より遅いわね」

軽口を叩きつつ、今日が暇で終わることを願いながら執筆を開始する。今日はなんとなく、学園日常モノの気分。

……だっというのに。

「やつはろー！ 今日には依頼人を連れてきたよー！」

と、ただでは黙ってくれない由比ヶ浜が、わざわざ暇を潰すものを連れてきた。

「あ、不可思議さん！」

連れてこられたのは、昼休みにも出会った、テニス部でクラスメイトの美少年。クラスの名簿を見て、彼の名が戸塚彩加という、またも女子らしい名前であることはわかっている。

「いやー、ほら、あたしも奉仕部の一員じゃん？ だからちよつと働こうと思ってさ。そしたら、さいちゃん困ってる風だったから連れてきたの！」

……余計な真似を、としか思えない。ただでさえ今日は体育があつて疲れ気味だっというのに。

「……由比ヶ浜さん」

「ゆきのん、お礼とかさそういうの全然いいからー。部員として当たり前のことしただけだしー！」

「由比ヶ浜さん、別に貴女は部員ではないのだけど」

「あら、そうなの？　ならどうぞ、帰ったら？」

「そうなの!?　そしてナーちゃんまでどうしてそんな寂しいこと平気で言えるの!？」

そりゃ、嫌いだし。巻き込まれ体質ならぬ、巻き込み体質なんて現実で関わり合いにもなりたくない。

「入部届をもらっていないし、顧問の承諾も得ていないから部員ではないわね」

「書くよお！　入部届くらい何枚だつて書くよお!!」

「……それで、戸塚彩加君だつたわね」

由比ヶ浜が何かを書いているうちに、雪ノ下は美少年、戸塚に声を掛ける。

依頼の内容というのは、戸塚彩加のテニスの技術向上。曰く、『ボクが上手くなれば、みんな一緒に頑張ってくれる』という、どうしても私には現実を甘く見過ぎじゃないかと思えてしまう理由だつたけれど、雪ノ下は快く引き受けてしまった。

「……それで、一体何をするつもりなのかしら？」

尋ねると、彼女は皮肉気に笑いながら答える。

「いつか貴女が言ったことじゃない。物事の上達の近道は反省と挑戦の繰り返しって」

「一万時間とまではいかずとも、一千時間くらいはあつて実証出来る話よ」

かくあれども。

ひとまず、何もしないよりさっさと実行した方が早いという話になり、全員着替えてテニスコートに集合した。

集まってやることというのは、もっぱら筋トレだった。腕力やら脚力やら、何が必要なのかなんて知らないけれど、あつて損のなさそうな部位はとことん鍛える。経験者である雪ノ下には何か考えがあるのかもしれないけれど、私にはがむしやりに体を鍛えているようにしか見えなかった。

雪ノ下が満足いくだけの筋トレを終えたら、次は実戦。私や由比ヶ浜が相手になって、ひたすらに撃ち合い、反省点を見つけて反省する。

そんなことをしばらく続けて、多少の効果が見え始めてきた頃。

「あつ………！」

「さいちゃんー！」

私と打ち合っていた時に、足が球に追いつかず、盛大に転んでしまった。すぐに立ち上がったけれど、両膝を擦り剥き、血を流している。

「………まだ、やるつもりなの？」

そろそろ心が折れると思ったのか、雪ノ下が尋ねる。

「うん。みんな付き合ってくれるから、もう少し頑張りたい」

「そ。なら由比ヶ浜さん、あとは頼むわね」

そう言い残し、雪ノ下はテニスコートから去って行く。

「……なんか、あんまり上手くならないし、呆れられちゃったかな」

「そんなことはありえないわ。彼女は努力を神よりも崇拜している生粋の天才肌。貴方が諦めたのならともかく、そうでないのなら死ぬまで見捨てたりしないわよ」

「そう、なんだ……」

怪我の処置をして再開しよう、という時に。最悪なタイミングで、最悪の敵がやってきた。

「あー、テニスじゃーん。ねえ、あーしらもここで遊んでいい?」

「三浦さん、僕達は別に遊んでるわけじゃなくて……」

名前も知らないけど、クラスの頂点に君臨しているグループの面々がやってきた。

「えー、なに? 聞こえないんだけどー!」

「だから……、練習を……」

『練習の邪魔だクソ野郎ども。うっかり殺す前に僕の視界から消えてくれ』って、ウチのボスが言っているのよ。怪我しないうちに帰りなさい」

「僕そこまで言っていないよ!? ボスって何!?!」

「あー? 何意味わかんないこと言ってるの? キモいんだけど」

……ここ、何年前の日本？ 『意味わかんない』と『キモい』の組み合わせ技を実際に言う女子高生なんてリアルじゃ初めて見た……！

「まあまあ、喧嘩腰になるなって。みんなでやった方が楽しいしさ」

私と古風な口調のギャルの間に立ったのは、見ただけでも正義と優しさの塊のような優男。顔も整っているし、金髪だし、さぞ女受けのいいことでしょうね。

「邪魔だから帰れと言ったのが聞こえなかったのかしら？ あなたたちがテニスができなくて退屈だろうと、どうでもいいのよ」

「えーと……」

「ねー、隼人ー。あーしいい加減テニスしたいんだけど」

「うーん……、あ、じゃあこうしないか？ 部外者同士、君と優美子で勝負する。勝った方が、今後休みはここを使えるってことで。もちろん、練習にも付き合う。強いやつと練習した方が、戸塚のためにもなるし」

これ、本気で言っているのなら、子煩悩ならぬ彼女煩悩がすぎるでしょう。

「ねえ、漫画と現実の区別を付けろって親に言われなかったのかしら？ 勝負を仕掛ければ受けて——「何それチョー楽しそー！ じゃあいつそ、混合ダブルスにすればいいじゃん！」——。」

セリフの途中で割り込むって、礼儀はないのか。

「じゃあえつと、そういうことで」

なんで勝負することは決まって、もうラケットを持つている。

「……というか、こつちの男子、怪我人となぜかいるデブしかいないわね」

なんだったか、材木座が練習中にいつの間にか混ざっていた。誰も気にしていなかったけれど、……まあいい。

「え、ヤバイじゃん!? どうするの!? あたしが男装しよつか!」

「……落ち着きなさい。誰か、頼れる男子はいないのかしら?」

「ナーちゃん、本気で言ってるの? 普段ならいるけど今は全員あっち!」  
それもそうね。ほんと、学生が徒党を組むとろくなことにならないわ。

「あーあ。ほんと、あーあ、よ。ついてきなさい」

「ナーちゃん?」

男子は諦め、由比ヶ浜を連れて私はコートに入った。

「ねー、混合ダブルスつつつたの聞こえなかったー?」

「聞いていなかったわね。じゃあ私が男つてことでもいいわ」

ギヤルの目の色が、敵意から殺意へと切り替わる。

「なに、あんた、あーしらのこと嘗めてんの?」

「答えを他人に求めるのは愚か者のすることよ。——喧嘩は泣いた方が負けつてことを

教えてあげるわ」

試合の前に怪我人の治療をしたり、試合の準備をしているうちに、大勢のギャラリ―がテニスコートを囲んでいた。

『HA・YA・TO! フウ! HA・YA・TO! フウ!』

まあ、あれはともかく。

三浦って言ったつけ。あの古風なギャルのサーブから、試合は始まった。彼女はなんでも、中学生の時に女子テニスで県選抜に選ばれるほどの実力者らしい。

私目掛けて弾丸の如く飛来してくる球に、私はラケットをぶん投げた。

「ナーちゃん!？」

持ち手に当たった球は何処かに飛んで行き、ラケットは三浦の足元に突き刺さった。

「なっ……、なっ……」

「どういうつもりだ!!」

決して柔らかくない地面に持ち手の突き刺さったラケットを見て、三浦は硬直し、優

男——葉山は私に向かって叫ぶ。

「手汗で手が滑ったのよ。別に、試合じゃ勝ち目がないから相手を再起不能にして不戦

勝にしようなんて考えてないわ」

ネットの向こうへ回り込み、私はラケットを引き抜く。どうせ土の地面だし、穴も大したものじゃないわね。

「このっ！」

頬に鋭い痛みが響く。

自分のコートに戻ろうとした私に、三浦はビンタをかました。

「クククッ。そっちの方が私は得意よ」

私がしたのは、いわゆるヤクザキック。女子がするようなポーズじゃないけれど、だからこそ、不意を打てる。

「えっ、ギャツ!？」

大した筋肉の付いていない足は人類の足の駆動域限界近くまで開き、三浦の肩に右足を乗せ、地面へと蹴り倒した。

「試合で勝負をつけるんじゃないのか!!」

「はや……と……」

すぐに葉山が駆け寄るが、頭を強く打ったからか気を失う。……まあ、私には大した力もないしすぐに目を覚ますでしょう。葉山は三浦の身を起こさせて私から遠ざける。

「そんなこと、一度の了承も約束もしていないわ。私たちはあなたたちをこの場から排

除できればそれでいいの。——それに言ったでしょう。喧嘩は泣いた方が負けなのよ」  
「スポーツマンシップはどうした!!」

「私は小説家よ」

後日談。

あの後、葉山と三浦は盛大に私を悪者にしてテニスコートを去り、奉仕部は無事テニスコートを死守することに成功した。

「ありがとうね、不可思議さん」

「あんなのを見せられてお礼が言えるって、存外男らしいところもあるのね」

「いや、三浦さんを蹴った時は普通に引いたけどさ。……でも、僕のためにしてくれたんでしょ？ 僕は何にもできなかったから、せめてお礼は言わないと」

今は部活の後の帰り道。方向の一致から、私と戸塚は共に帰っていた。

「いい人、というかいっそ変なやつね。女子の喧嘩なんて男子から見たら不気味なだけでしょ」

「え、でもカッコよかったよ？ あの時不可思議さん、ダークヒーローって感じで」

「……まあ、そう言われて悪い気はしないわね。——じゃあ私、家ここだから」  
「え、もう!? こんな近くに住んでたの!？」

私の家と学校の距離は徒歩十分。この距離じゃなきや受験すらしなかつたかもしれない。

「近くの学校を選んだのよ。じゃ」

「へ、へ〜……。あ、また明日! 不可思議さん!」

……また明日、なんて初めて言われた気がする。いや絶対そんなことはないのだけれど。いつかどっかでは言われてるんだらうけど、戸塚の『また明日』には、何か違うものを感じた。

「ええ、また明日」

めでたし、めでたし。

きつと葉山隼人がイケメンなのは間違っている。

早朝、ホームルーム前。

起きて早々、私は平塚先生に電話で呼び出されて朝早くの慌ただしい職員室に来ていた。

「葉山たちから聞いたぞ、不可思議。我が校で暴力沙汰なんて、いい度胸をしているな」  
そして毎度毎度の如く、平塚先生は不機嫌極まりない。指の骨をパキパキと鳴らしている。

「なんのことかと思つたら……。別に子供の喧嘩よ。そして先にちよつかいをかけてきたのはあつち」

「あつちが先こつちが先つて、子供か君たちは……」

「だから、子供の喧嘩なのよ。先にちよつかいをかけてきたのも先に手を出したのもあつちが先。私は防衛に徹しただけよ」

「過剰防衛だ」

「あちらに正当性があるとでも？ ——正直に言いなさいな。喧嘩できてうらやましいと」

平塚先生はそんな、学園モノの堅物教師みたいな人間では全くない。むしろ、不良教師の方が属性的にはずっと近いくらい。

「そうは言わん。だが話を聞いたとき、なぜ私を呼ばなかったのかと言いたくて仕方なかった」

「呼んだら呼んだで寧ろ焚きつけるでしょう。総力戦になる前に一騎討ちで事を終わらせたかったのよ」

「一騎討ちは決闘という意味であって一人を打ち倒すという意味ではないぞ」

「一人が倒れるのだから似たようなものよ」

「いや、そこは二人、ほぼ同時に倒れてだな……、いや、この話は長くなるから今度にしよう」

「二度としなくて結構よ。世代が違うから多分噛み合わないし」

「さっ！ もう直ホームルームの時間だ。教室に行くぞ」

あ、逃げた。年齢の話から、ついでに現実からも逃げた。

放課後。

「またもや私は職員室で、平塚先生の前に、——座っていた。職員室の常連すぎて私の分の椅子がついに用意されてしまった。」

「どんだけ私を呼び出せば気が済むのかしら？」

「どれだけ君は問題を起こせば気が済むんだ？」

「おかげで最近、私と平塚先生の百合カップル疑惑が密かに流れている。私は寧ろなるべく会いたくない相手なのだけでも。」

「——既に私は小説で職業と言える程度の金額を稼いでおり、卒業後も執筆活動が続けるつもりで、ならば私の将来の職業は小説家で、その職場は自宅である。よって今回の職場見学には自宅を希望する。……私がなにを言いたいか、分かるな？」

「皆目見当もつかないわね。何か問題があるのかしら？」

「問題しかないし、君の人格にもやはり問題しかない。奉仕部で過ごす日々は君に影響を与えなかったのかね」

「私の座右の銘は『生涯不変』よ」

「そうだったな……。そういえば伝え忘れていたが、今回の職場見学は三人一組で行くことになる。好きなものたちと組んでもらうことになるから、そのつもりでいたまえ」

「つまり、私の家にクラスメイトを招けと？」

「どれだけ出不精なんだ君は……」

それはもう、入学志望動機が『近いから』ってくらいには、よ。

職員室を出て、私は部室へと向かった。

いつもより遅れてきたのだからもう由比ヶ浜が、あるいはまさか依頼人すらも来ているかと思っていたけれど、そのどちらもないなかった。ただ、雪ノ下の他に、由比ヶ浜の荷物だけが置かれている。

「会わなかったのかしら?」

「誰とよ?」

誰か私に用事でもあったのかと、この学校での面識あるものたちをリストアップしてみたけれど、心当たりがなさ過ぎる。

ちようどその時。部室の扉が勢いよく開かれた。

「あーついたー!」

「……嗚呼、そういうこと」

要するに、私が出来ないから学校中を探し回ったらしい。

「わざわざ聞いて歩いたんだからねー! そしたらみんな、『ふか、しぎ? それ人?』つ

て言うんだもん！ 超大変だったんだからね!?!」

「まあ、『不可思議』単体だと数字のことになるわね。10の64乗、那由他と無量大数の間よ」

「へく……、って、そうじゃなくって！ その、ケータイ教えて！ ほら、わざわざ探すの大変だし！」

「別に構わないわ」

私はスマホを、由比ヶ浜に手渡す。

「迷わず人に渡せるって、すごいね……」

「別に、見られて困るものもないし、そもそも電話らしい操作方法すら知らないわ」

「ナーちゃん、実はお婆ちゃんだったりしない？」

私にとってスマホというのは外で手軽に小説を書くための道具で、電話やメールなんておまけでしかない。誰かから掛かって来れば出ることもできるけど、私からかけたリ、メールを送ったりなんかは出来ない。

「うわっ、家族と平塚先生しか登録されてない……。って、えええ?!?!」

「由比ヶ浜さん、どうかしたの？ 何か如何わしいものでも見つけたのかしら？」

そんなものは入っていない……。はず。

「ナーちゃん、妹いたの!?!」

「なんですって!？」

由比ヶ浜の叫びを聞き、雪ノ下までもが声を荒げた。

「私に妹がいることのなかが問題なのよ」

「……ナーちゃんは一人っ子か末っ子だと思ってた」

「奇遇ね。私もこんな人に下がいるなんて信じられないわ。その子の苦悩が偲ばれるわね」

「言いたい放題ね。妹は私と違って、そんなに破綻していないわよ」

寧ろ、私の生活必需品ならぬ、生活必需人と言っていていくくらいにいい子ですらある。自分で言うのもあれだけど、私のような姉を全力でフォローしてくれる妹とか、いつそ天からの使いとでも思わないと一緒にいられない。

「はい、ナーちゃん」  
「ん」

返されたスマホは放り込むようにポケットに収める。今日はノートパソコンを持ってきているから、わざわざスマホを使う必要もない。

それから暫く、特に依頼人がくるでもなく時間が過ぎて行く中、私は執筆、雪ノ下は読書、由比ヶ浜は携帯で何かをしていたのだけれど。ふと、由比ヶ浜は深いため息をついた。

「どうかしたの?」

以外でもなく面倒見のいい雪ノ下は、訝し気に尋ねる。

「え、あ、うん……、何でもないんだけど、ちょっと変なメールが来たから、うわつて思っただけ」

「そう。……不可思議さん、裁判沙汰になりたくなければ、今後そういう卑猥なメールを送るのはやめなさい」

「私は今忙しいから話しかけないでくれると助かるわ。いいところなの」

今はミステリーの解決編を書いているところで、犯人と容疑者を全員殺した殺人鬼を探偵が捕らえたところなのだから。筆の載っているうちに書き上げてしまいたい。

「どんなお話なの?」

「殺人犯と容疑者を殺人鬼が殺して、その殺人鬼を探偵が殺すお話よ。お願いだから話しかけないで」

「引き算のように人を殺すのね。軽蔑するわ」

「ここ最近、部活に時間と体力を取られすぎて更新ペースが落ちてきている。多少の低下は問題ないけれど、読者の方が減り過ぎると金銭的に困る。」

「ま、まあまあ、ゆきのん、落ち着いて。それと、メールの方はナーちゃん、関係ないと

思うよ」

「そうなの？」

「なんていうか、内容がうちのクラスのことなんだよね。だからナーちゃん、まるつきり無関係っていうか、不可能っていうか」

「そう。なら不可思議さんは犯人ではないわね」

ちようどミステリーを書き終え、これから誤字脱字の確認に入ろうとしたところで、部室のドアがノックされ、即座に開かれた。

「あー、その、ちよつとお願いがあつてさ」

と言いながら入ってきたのは、先日私をダークヒーローに仕立て上げてくれた、葉山だった。

「奉仕部つてここでいいんだよね。平塚先生に、悩み相談するならここだつて言われてきたんだけど……、なかなか部活を抜けさせてもらえなくつて」

「能書きはいいわ。何か用件があつてきたのでしよう、葉山隼人君？」

基本的に冷静というか、冷徹なキャラの雪ノ下だけれど、葉山と不仲なのかいつそ冷

血と言っていていくらいに冷たい態度で訊いた。

「ああ、それなんだけどさ……」

葉山は、雪ノ下に、携帯電話の画面を見せる。

「あ、変なメール……。ほら、ナーちゃんも見て」

「私は別にいいのだけれど」

同じものが届いているのか、由比ヶ浜が私にも画面を見せてきた。

——戸部は稲毛のヤンキー、ゲーセンで西高狩り。

——大和は三股、最低のクズ野郎。

——大岡はラフプレーで相手校のエース潰し。

色々書かれているけれど、要するにそんな内容が、あちこちで飛び交っているらしい。私のスマホにはさつきまでクラスメイトのメールアドレスなんて一つもなかったし、届かないわけね。

「これが出回ってから、なんだかクラスの雰囲気が悪くてさ。それに、友達のことを悪く書かれれば腹も立つし」

そりやそうでしょうけれども。これで喜ぶやつなんて、ばらまいた奴以外いない。

「あーでも、犯人探しがしたいんじゃないんだ。丸く収める方法を知りたい。……頼めるかな?」

「……つまり、事態の收拾を測ればいいのね？」

「うん、まあそういうことだね」

「では、犯人を探すしかないわね」

雪ノ下の言葉に、葉山は「え？」と、酷く困惑した。

「チエーンメール。……あれは人の尊厳を踏みにじる、最低な行為よ。止めるなら、その

大元を特定して根絶やしにするしかないわ。ソースは私」

「実体験なのね」

「根絶やしにしたんだ……」

「とにかく、そんな人間は確実に滅ぼすべきだわ。それが私の流儀。私は犯人を探すわ。

一言言えばばつたりと止むと思う。……それからの裁量はあなたに任せる。それで構

わないかしら？」

……まさか、現実世界で犯人の特定をすると？

「やめておきなさい。無理よ、そんなこと。学校という閉鎖空間じゃ、証拠なんてものは

言いがかりにもならないわ」

「そんなことないわ。……それとも、何か解決策があるのかしら？」

雪ノ下と葉山の鋭い目、由比ヶ浜の心配する目が私に集中する。

「いつか言ったでしょう。解決への近道は妥協と諦め。一部の人間だけが貶されてるか

ら雰囲気が悪くなるのよ。全員分悪く書いたチェインメールを新たに流せば、全員平等。収まるかは知らないけれど、丸くはあるわね」

一部の人間が苦しむから事件になるわけで、全員が苦しめばそれはただの試練になる。あるいは、災害。諦める以外の解決策は、ない。

「却下よ。それこそ、誰も救われないじゃない」

「なら、件の三人のうち、一人でも救いを求めたかしら？」

「それは……」

三人とも被害者なら、三人仲良く揃って助けを求めればいい。

「ならそれがこの事件の答えなのよ。犯人はその中にいる」

「ちよ、ちよっと待ってくれ！ 俺はあいつらの誰かが犯人だなんて思いたくない！

それに三人を悪く言うメールなんだぜ。あいつらは違うんじゃないか」

「そういえば、職場見学は三人一組だそうね。そしてあなたのお友達はあなたを入れて四人。一人溢れることになるわ」

「ぐ、偶然だろ？」

「正確性に欠けるけど仮説から逆説的に考えるなら、あなたを除いた三人は不仲まで行かずとも、決して友人関係ではない。互いが互いに葉山隼人の友人の一人としか認識していない。蹴落とせる対象として見てしまえている。……これは推測に推測を重ねた

想像だけれど、どうなのかしら？」

「君はなにを言ってるんだ？ 今日だって俺は三人と……、いや、でもそんな……」

「これ以上の特定は、……やっぱり面倒ね。メールの内容を見るとヤンキーの西高狩りだけは『喧嘩が強い』っていうプラス評価にも繋がるけれど、ヤンキーというマイナスが巨大過ぎる」

葉山がなんとか否定しようと悩んでいると、由比ヶ浜が小さく挙手しながら言う。

「なんとなくだけど、わかる気がする。中心にいつも居る人がいなくなると、途端気まづくなるって、女子でもよくあるんだよ。それでつい携帯いじっちゃったり……」

「……そういうものなの？」

「当事者にしか分からないことよ。人間関係は中心が壊れると全て瓦解する。ソースは私」

「ナーちゃん、そんなことしたの？」

「意外なことに、私は壊された側よ。と言っても、末端も末端で、大したダメージにはならなかったけど」

後日談。

あのあと結局、葉山も三人の誰か、あるいは三人とも犯人だという仮定を、仮定としてだけ認め、次の段階へと進めた。それは、三人のうちの一人が抜けるのではなく、葉山が抜けるという状況。職場見学のグループの一つはその三人が組んだ。

本当に三人とも犯人じゃなかったとしても、これを機に三人で仲良くなって欲しい、なんて言うんだから、葉山の性善さは筋金入り、どころか、鉄筋入りだ。

「ねえ、不可思議さん」

「なにかしら」

教室でなんとなく、件の三人がぎこちなく戯れているのを眺めていたら、戸塚に話しかけられた。

「不可思議さんはもうグループ分け、決めちゃったかな？」

「いいえ。寧ろ私は平塚先生を説得して、一人で職場見学に臨むつもりだったわ」

「なんでそんな寂しい方向に積極的なの?! ……その、僕も一緒に行っちゃ、ダメ？」

「別に構わないけれど、うちに来ても見るものなんてなにもないわよ」

「……え？ えっと、職場見学の話をしてるんだよね？」

「私は小説家で、職場は自宅よ」

「えー……。……ダメかな、やっぱり」

「別に構わないと、言ったはずよ。説得の手間が省けるし」

「じゃあ、もう一人は？」

「妹の名前でも入れておくわ」

「せめてクラスメイトの人にしようよ……。え、妹さんいるの？」

……私に妹がいるのって、そんなに意外なのかしら。

結局、もう一人は川崎沙希という、この場に居合わせていなかった、余った一人が、唯一空いた一枠のある私と戸塚のグループに入ることになった。顔すら知らないのだけど……。

まあ、めでたし、めでたしでいいでしょう。

さしもの川崎沙希が姉なのは間違っている。

唐突だけど本当に唐突なことで、中間試験が近いからと奉仕部に駆け込み寺の如く戸塚が駆け込んで、勉強会をすることになった。

それからとんとん拍子に、由比ヶ浜が言い出した「じゃあファミレスでやろうよ」という提案がすんなりと通り、私たちはファミレスで勉強会をしていた。

「ねえ不可思議さん、この『作者の考えを答えなさい』って問題なんだけど、小説家の人って書いてる時なに考えてるの?」

国語の問題集を開いていた戸塚が、そんなことを訊いてきた。

「そうね……。私の場合、喉乾いたとか、椅子の座り心地が悪いとか、大体そんなことを考えているわ」

「模範解答もあてにならないわね」

「問題文が悪いのよ。この場合、『作者の考えを文中から読み取れる程度に答えなさい』と、詳細に問うべきね」

なんて風に、勉強会というより問題を会話の種に雑談していたところで。

「……あ、お姉ちゃん」

「三子<sup>みこ</sup>? どうしたのよ」

連絡を取っていたとか、そういうことでは断じてなく。偶然にも、私の妹である三子が、見知らぬ、おそらく同級生か何かの男子を連れて私たちの前に姿を表した。

「えー、なになに、ナーちゃんの妹の子? って、デツカ!」

「失礼よ、由比ヶ浜さん。……本当に大きいわね」

由比ヶ浜が叫ぶだけのこともあり、私の妹は私と比べて遥かに背が高い。私の身長が確か、百五十とちよつとくらいなのに対して、三子の身長は百七十を超えている。およそ頭ひとつ分、私よりも背が高い。

髪も私と違って、丁重に扱われていて綺麗で、肉付きがほどよく胸も大きい。私とは色々と対極的な妹だった。

「七五三<sup>しちごさん</sup> 三子<sup>みこ</sup>です。お姉ちゃんが、お世話になってます」

二人は由比ヶ浜に同じテーブルにつくように促され、三子は私を膝の上に乗せるようにして座った。主張の激しい胸が肩に当たって若干しんどいのも、もう慣れたもの。身体は大きいのに小心者で、ついでに甘えたなのだ。

「あの、川崎大志つす。七五三<sup>しちごさん</sup>さんとは塾が同じで、姉ちゃんが皆さんと同じ、総武高の二年つす。名前、川崎沙希っていうんすけど……」

全員、軽い自己紹介をしてから、彼の相談の話を聞くことになった。

「……川崎沙希、ね。どこかで聞いた名前ね」

「不可思議さん、本気で言ってるの？」

そう、確か、平塚先生あたりに聞かされたような……、覚えてないわね。

「職場見学のグループで一緒になった人だよ」

「ああ、それでか」

空いているなら入れてやってくれ、みたいなことを言われた気がする。

「それでね、お姉ちゃん。大志のお姉さんが不良化したっていうか、帰ってくるのが遅くなって、どうしたら元に戻ってくれるかって、そういう相談を受けてたの」

三子は私の頭上からメニューを眺めながら、説明した。

「そうだったのはいつ頃からかしら？」

雪ノ下が、彼に尋ねる。

「最近です。総武高行くくらいですから、中学の時はすげえ真面目だったし、優しかったっす」

「……つまり、不可思議さんと同じクラスになってから変わったということね」

「……？ お姉ちゃん？」

「接点なんてほとんどないわよ。思い出してみれば確かに皆無じゃないけど、授業でペアを組まされる程度」

友達居ない仲間というか、端点と端点を強引に縛り付けられた結束バンドというか。

「でもさ、帰りが遅いつて言つても何時くらい？ あたしも結構遅いし」

次は由比ヶ浜が、飲み物を片手に尋ねる。

「それが五時過ぎとかなんすよ」

「むしろ朝早いね……、ご両親は何も言わないの、かな？」

戸塚が心配そうに尋ねる。

「うちの両親つて共働きなんすよ。それに下に弟と妹いるから、あんま姉ちゃんには口うるさく言わないんす」

その辺はまあ、うちも似たようなものね。私は言うことを聞かないから諦められてるし、三子は言われるまでもなくやってしまうから、親が何かを言うタイミングがない。

「……家庭の事情、ね。どこの家にもあるものね」

雪ノ下が、うんざりしたような表情で言った。

「わかったわ」

まさか。

「まさか、奉仕部の依頼として受けるというの？」

「川崎沙希さんは本校の生徒。奉仕部の活動の範疇よ」

……勉強会のはずが、随分と面倒なことになったものね。

「お姉ちゃん、ごめんなさい」

「三子は別に悪く無いわ。もう遅いし、帰りましょ」

「うん……」

翌日、放課後。

奉仕部三人と戸塚の四人で部室に集まった。

「それで、あれだけ堂々と受けたのだから、何か具体策はあるのかしら？」

妙に自信満々な雪ノ下にとりあえず尋ねる。

「アニマルセラピーって、ご存知かしら」

「彼女は猫アレギーよ。却下」

「まだ何も言っていないでしょう」

「見ていればわかるわ」

雪ノ下が提案しようとしたのは、猫を利用して精神を揺さぶろうという作戦。

「ていうか不可思議さん、そんなことなんで知ってるの？」

戸塚が不思議そうに聞いてきた。

「それこそ、見ていれば人のアレルギーや好き嫌い程度わかるでしょう。全人類カレーライス大好きだというのはカレー好きの妄想でしかないのよ」

「そんなのはあなただけよ。どれだけの人間を視姦してきたの」  
「ていうかナーちゃん、カレー嫌いなんだ……」

あんなもの、人間の食べるものではないわ。

「そもそも、猫だろうが犬だろうがアニマルセラピーなんて無意味でしょう。根本的に、何か原因があるから帰りが遅くなっているに決まっているじゃない。親子喧嘩とか、深夜バイトとか、すぐ思い浮かぶのはその辺だけど」

「……もしそうだとしたら、ならどうするっていうのよ」

「さあね。明日話してみても、それから決めるわ」

推測するより、本人に直接聞いた方が手っ取り早いに決まっている。

「そう簡単に話すかしら。家庭内の問題だったら、そう易々と他人に話したりはしないはずよ」

「話すだけよ。別に喧嘩するわけでも脅迫するわけでもないわ」

翌日、昼休み。

平塚先生を經由して、川崎沙希と話す場を設けたのだけれど、そこはなぜか屋上だった。なんでも、「語り合うのなら屋上か校舎裏と相場が決まっている!」、らしい。総武高のどこが校舎裏かなんて知らないけれど。

「それでなんか用。七五三さん?」

「私のことは不可思議可思議と呼びなさい」

「じゃあ不可思議さんね。……で、なんの用? 職場見学のことなら平塚先生から聞いてるし、邪魔したなら悪いと思ってるけど」

「別にそんなことはどうでもいいのよ。それより——川崎大志」

「っ! ……私の弟が、何」

表情が急転した。気怠げな表情から、困惑の色に塗り変わる。

「帰りが遅くて心配だと、相談されたのよ」

「はあ? なんであんたに」

「正確には、偶然同じ塾だったらしい私の妹に、よ。そこに偶然が重なって私にまで飛び火して、今こうして私とあなたは話している」

「平塚先生のあの態度はそういうことか……」

きつと、漫画的展開に興奮したような態度で呼び出したんでしょね。

「で、どこまで知ってるの？」

「大したことは知らないわ。だからこうして話を聞いて、私に迷惑が掛からないうちに解決しようとしてるのよ」

「あんたに話すことなんてない。妹さんのことなら大志に言っておくから、それでいいでしょ」

「いいわけないわ。それで解決する段階はもう超えてしまっているのよ」

奉仕部が依頼として引き受けてしまった以上、あの変態はただ失敗という形では諦めてくれない。

「楽をしたければさっさと話しなさい」

「……別に、お金が必要なだけだけど」

「つまり家族間の問題ではないと。それはよかったわ」

終わらせなくてすんだ。

「……だったら何、私が必要な分のお金を、あんたが代わりに用意してくれるっていうの？」

皮肉気に笑いながら、彼女は言った。

「お金で解決できるなら安いものね。……まあ私がこの場で一億円渡したところで、多

分あなたは受け取らないでしょうけど」

「……悪かったよ。今のは私の言い方が悪かった」

気まずそうに、目を逸らした。

「物事の解決への近道はいつだって妥協と諦め。金銭の施しは受けてくれないでしょうけれど、多少の施しは妥協して受けてもらおうわ」

「はあ。」

「まず、今やっているアルバイトは全てやめなさい。そして気兼ねなく話せる程度には心配かけた人に説明し謝りなさい」

「ちよ、ちよつと待つてっ！ あんた今なんの話をしてるの？」

「楽をしたければ諦めなさい。——日給一万円で、私の家で働いて欲しい。働き次第で金額は上乘せするし、用事があれば自由に休んでくれて構わない。悪い話じゃないはずよ」

「……私、小説とか全然わかんないんだけど？」

私が小説家でそれなりに稼げているというのは、ここ最近でそれなりに周知されている。クラスメイトにも読者ができるくらいには。

「小説について誰かに頼ることなんて何もないわ。仕事は、そうね……。私の部屋の片付けとか、水風呂で寝落ちした私を助けたりとか、暇な時の話し相手とか、妹の勉強を

見てもらったりとか、大体そんな感じよ」

「……あなた、どうやって生活してるの？」

「妹に色々してもらっているけれど、今年を受験生だから。あまり頼りつきりではないのよ。だから、これは割と切実なお願ひでもあるわ」

「……考えとく」

後日談。

沙希は私の言った通りにアルバイトを全て辞め、心配していた弟には全て話したらしい。その辺は三子から大雑把に聞いた。

そして私は沙希を雇い、数日が経ってから、平塚先生に呼び出された。今度こそ、心当たりはないのだけれど。

「川崎とは上手くやれているのか」

「まあそうですね。正直、善人すぎて逆らえないところはあるわ」

「待て、つまり私に対する態度がずっと変わらないのはそういうことなのか？」

「親しみやすいキャラなのだと、どうして好意的に受け取れないのかしらね」

「君は私に親しみを持ってしているわけではないだろう。馴れ馴れしいというか、嘗めてい  
るだけだ」

「ご名答。さすがは現国教師、行間を読むのが上手ね」

「やっぱりそうなのか……。時に不可思議、奉仕部はどんな感じだ？」

行間は読めても、話をそらすのは下手らしい。まだまだ育てがいがああるわね。

「波乱そのものよ。宇宙人が麻雀しに来たけど誰もルールを知らなかったから拗ねて  
帰ったり、チェスとオセロの異種盤上戯戦にテトリスとぶよぶよが乱入してきたり、私  
の小説のコミカライズが決定したり」

「嘘だろう、なんだその楽しそうな部活は。少なくとも奉仕部ではないはずだ」

「ええ、最後のは嘘よ」

「他二つは本当なのか!？」

「もちろん、嘘よ」

沙希には平日の放課後だけで構わないと言ったのだけれど、仕事が溜まってむしろ大  
変だと、土日まで朝早くから家にきて、諸々の世話を焼いてくれている。

「朝から水風呂で寝るな！ 凍死するよ!？」

「死なないための貴女なのよ」

「……お姉ちゃんがごめんなさい」

私は朝と夕方の二回、水風呂に入るようにしている。シャワーは熱いお湯の方が好きだけれど、お湯のお風呂は嫌いで、冷たい水風呂が好き。心地良さのあまり、たまに寝落ちしたりして、三子に迷惑をよくかけていた。

「あんた……。髪さえちゃんとならば滅茶苦茶可愛いんだから、ほつたらかす癖、直せ」  
「いやよ。モテたりしたら大変じゃない」

「調子のんな」

「お姉ちゃんがごめんなさい」

「いいから、あんたは気にしないで」

沙希が来るようになってから、幾らか三子の口数が増えた。まあ、私と二人だと「お姉ちゃん」「はいはい」だけで会話が成立してしまっていたのだから、当然といえば当然なのだけれど。

「……裸で出てくるなよ。あんたに恥じらいはないの？」

「欲情されるような身体じゃないでしょう。あと着替えを持つてくるのを忘れたのよ」

「ごめんなさい……。お姉ちゃん、女磨きならぬ女穢しに余念がないから……」

「三子、女穢しじゃなくて面汚しよ」

「どっちでもいいけどやめろ」

まあ、沙希の問題はとりあえず解決したと言っている。  
めでたし、めでたし。

## どうも鶴見留美が孤独なのは間違っている。『前編』

職場見学が恙無く平穩に終われば、次に来るのは夏休みだった。

別に一日にノルマを設けているわけではないけれど、奉仕部の活動で遅れた分ハイペースに小説を書き上げては更新を繰り返して、筆が止まり頭が茹ってきたら水風呂で頭を冷やす。そんな日々を、繰り返そうと思っていたのに……。

『不可思議、今から千葉に行くぞ。迎えに行くから荷物を用意して待つていたまえ』

休日にも関わらず、平塚先生から電話がかかって来た。

「……今日は北海道に蟹を食べに行く予定があるのだけれど」

『何を言っている。君の夏休みに特に予定がないことは、君の妹から裏が取れているぞ。彼女も楽しみにしていた』

「人の妹から勝手に裏を取らないでほしいわね。社会不適合者」

『グツハア!? ……い、一応奉仕部の活動なんだ。伝えたぞ……』

切れた。

……いやいや。いやいやいやいや。

あの平塚先生の計画した何かなのだから、何もなく終わるわけがないのは分かり切っ

ている。

数々のミステリーを書いた私に言わせるなら、事件で生き残るコツは事件現場に近寄らないこと。今だけ千葉は危険地帯よ。

「……お姉ちゃん、二人の分の泊まり掛けの荷物、用意できたよ」

どのようにしてやり過ごそうか考えているうちに、二人分の大荷物を軽々持った三子三子が、私の部屋の扉から覗く。同時に、家のインターホンが鳴った。

「……問答無用ってわけね」

引きずり込まれるように、ホイホイと平塚先生の運転する車に乗せられてしまった。三子三子は後部座席で、なぜか私が助手席。他には雪ノ下と由比ヶ浜、戸塚が乗っていた。

「やあ不可思議、おはよう」

「私が大好きなのは一向に構わないけど、せめて前日に連絡して欲しかったわね」

「そうしたら君は逃げると、三子ちゃんから聞いたのだよ」

「……三子？」

後ろを覗くと、三子三子は気まずそうにしていた。

「……だって、そうしないとお姉ちゃん一人でどっか行っちゃうし」

「そう妹をイジメてやるな。別に地獄への片道切符というわけではないのだから」

「往復でも嫌よ。……こうなるのなら沙希も連れてくるべきだったわね」

あの面倒見のいい姉御肌なら、なんだかんだと文句を言いながらも良い相棒役になってくれたらうに。……用事があるとかで何日か休みにしてくれって言われてたけど。

到着したのは、千葉は千葉でも、山中、キャンプリゾートの千葉村だった。

「……………」

「お姉ちゃん、……怒ってる？」

「……別に、酔っただけよ。久しぶりの車で気持ち悪い……………」

そもそも、最初から怒ってなんかいない。

気遣ってか、三子是我的分の荷物も持ってくれていた。

平塚先生にタバコを吸うのを辞めさせて外の空気を吸うことに専念していると、すぐ近くにもう一台車が止まった。そっちからは、葉山と三浦、あと名前知らない男女一人づつが降りて来た。

「……………」

「やあ、不可思議さん。……乗り物酔い？ 酔い止めいる？」

「……………悪いけど、もうわ。三子」

「はい、水」

ぶっちゃけあんまり印象にも残っていなかったけれど、酔い止めに免じて少し評価を上げてやらんでもない。

「全員揃ったようだな。君たちにはこれからしばらく、ボランティア活動をしてもらう」「体調不良で早退していいかしら……」

「構わんが、車か徒歩以外に帰る手段はないぞ」

既に地獄だった。

平塚先生に先導されて来た広い場所には、どう見ても百人以上の小学生の集団が居座っていた。小学校の教師が長々と話していて、子供たちには既に疲れの色が見える。

「では最後に、みなさんのお手伝いをしてくれるお兄さんお姉さんたちを紹介します。まずは挨拶をしましょう。よろしくお願いします」

「「よろしくおねがいします」」

そこらの騒音兵器よりも威力のありそうな挨拶の後、葉山が手慣れたような動きで前に出る。

「何かあったら、いつでも僕達に言ってください。この林間学校で素敵な思い出を、沢山作っていただくさいね。よろしくお願いします」

葉山の女受けの良さは年齢を問わないようで、主に女子からの黄色い声援がそこから中

に飛び交っている。

「……あの、何故葉山君達までいるんでしょうか」

話が終わると、雪ノ下は平塚先生に尋ねた。

「ん？ 人手が足りないから、内申点を餌に募集をかけていたのだよ。これも良い機会だ、君たちも別のコミュニティと上手くやる術を身につけた方がいい」

「……でもナーちゃん、優美子と一回マジな喧嘩してるじゃん。大丈夫？」

「「あ……」」

由比ヶ浜の言葉に、平塚先生と雪ノ下、戸塚の声がびったりと重なった。

「……お姉ちゃん、喧嘩したの？」

「大したことじゃないわ。それに、三子が守ってくれば平気よ」

「うん、わかった」

やっと酔い止めが効いて来たのか、大分酔いが治まってきた。

「さて、最初の君たちの仕事は、オリエンテーリングのサポートだ。一緒に行動して、ト  
ラブルの無いよう、見守ってくれ」

見渡すと既に、小学生たちは五人、六人程度のグループになって、地図を片手に行動を開始していた。

「お姉ちゃん」

「はいはい」

私ははぐれないように、三子の手をとった。

「……そうしていると、ちゃんと姉妹に見えるわね。上下が逆だけど」

「ナーちゃんの方が妹っぽいね」

私達も、本来のコースに沿って行動を始めた。後方を歩いていると、雪ノ下と由比ヶ浜が揶揄うように言ってくる。

「お姉ちゃん、方向音痴なので……」

「本当によくできた妹さんね。姉が反面教師になったのかしら」

「否定はしないわ。私は三子がいなくて一週間ともたずに野垂れ死ぬ自信があるもの」

「うわあ、ナーちゃん情けない」

「あなた達だつて親がいなくて生きていけないのが殆どでしょう。似たようなものよ」

「そうっぽいけどなんか納得いかないし！」

しばらく話しながら、ゴールを目指して歩いていると、雪ノ下が何かを見つけた。……見つけてしまった。

「……ねえ、あの子なんだけど」

女子五人、というか、四人と一人のグループが、指差す方にいた。

気になってるのは、当然だけど四人じゃなくて一人の方。見るからに背中が寂しく、退屈そうにデジカメを触りながら、ただついて行っている。……あとなんか、見た目や雰囲気がなんとなく、雪ノ下に似ている。髪型とか、子供らしい大人っぽさとか。

四人の方も何か困っているらしく、コミユカの高い葉山が手助けに入って行った。

「……あの人、すごいね」

「三子、ああいうのが好みなの？」

「んーん、全然。……間違えても辞めないってすごいなって思っただけ」

三子の視線の先では、孤立している一人と四人を半ば強引に合流させて、「みんなで一緒に」なんて、言っていた。

「確かに、あまりいいやり方とは言えないわね」

雪ノ下も言う通りで、強引に距離だけ五人組にされたところで、一人が一人であることに変わりはなく、ただ居心地が悪そうにしていた。

小学生達が全員ゴールにたどり着き、都度都度点呼を取りながら行事が進行していく。

次は、夕食のカレー作り。私たちも一緒に作り、そして食べるらしい。

「そういえば不可思議さんって、カレー嫌いなよね」

「ええ」

別に作ることは構わないけれど、その技術も私には致命的に欠けている。逆に料理の得意な三子は小学生達に教えながら、野菜を切ったりしている。

「売店くらいはあると思うしそこで済ませるわ。最悪、三子が荷物に入れてくれたカロリーメイトがあるし、心配はいらないわ」

集団行動が極めて不得意な雪ノ下と、料理が極めて不得意な私は手持ち無沙汰になり、少し離れた位置から作業風景を眺めていた。

「カレー、好き？」

「……別に。カレーに興味ないし」

葉山が話しかけたのは、例の孤立している——言ってしまう。いじめられている少女。一人黙々と作業しているとところに話しかけられて、少女はその場を立ち去る。

少女のそれは、いい答えて正解の行動だった。下手に会話したりすると、調子乗って、とかなんとか難癖つけられるし、あれでは戦略的撤退しかない。

「……本当、馬鹿ばっか」

私か雪ノ下を同類と見たのか、少女は私たちの元へと来た。

「そうね、世の中の大概は馬鹿よ。世界を回しているのも馬鹿で、世界を止めているのも馬鹿。この世は馬鹿によつて成り立っているのよ。大人になる前に知ってしまった残念ね」

「あなたもその大概でしょ？」

「私は小説家よ。世界を回すのではなく、世界を作るのが仕事。大概ではなく例外よ」

「そんなことを顔色一つ変えずに言えるのはきつと貴女だけよ」

「さてね」

「……名前」

「うん？」

私と雪ノ下の会話に段落がついたところで、少女は口を開いた。

「何か言つたかしら？」

「名前を聞いたの」

「人に名前を尋ねるときは、まず自分から名乗るものよ」

雪ノ下の言葉に、少女はピクリと肩を震わせた。

「なら私はこう言うわ。——変な理由をつけて名乗らない方がうざったいし、マナーや

礼儀をいちいち指摘する方がマナー違反よ」

「……悪かったわね。私は雪ノ下雪乃よ」

「私は不可思議可思議。小説家で、あつちのでかい女の子。七五三しちごさん三子みこの姉ね」

「……鶴見留美」

少女は名乗ると、遠い目をしながら語る。

「なんか、二人は違う感じがする。あの辺の人たちと。……私も違うの。あの辺と」  
「随分と素敵ね」

「……不可思議さん、急に何を言い出すの？」

「間違えた。詩的ね、と言いたかったのよ。疲れて本調子が出ないわ」

「……詩的って、どういう意味？」

「纏まっついていて美しい。そんな意味で言ったわ」

「不可思議さん、いくら同性でも、ロリコンはちよつと……」

「奉仕を命ずる変態にだけは言われたくないわね」

「その誤解もいつそ久しぶりね……」

カレーが完成して皆が食べている間に、私は施設の売店でおにぎりを購入した。具はツナマヨ。

「お姉ちゃん、食べるものあつてよかつたね」

「いつの間にかお昼を食べ逃してたし、コーラも買えたし、助かつたわ」

一緒に来た三子は、平塚先生から渡されたお金で人数分の飲み物を買っている。

テーブルへと戻つて来た頃には、全員カレーを食べ終えて、何やらシリアスな話をしていた。

「……大丈夫かな」

「何か心配事かね？」

由比ヶ浜が呟いたことを、平塚先生は耳ざとく捉える。

「ちよつと、孤立しちやつてる子がいたので」

多分、今日一番働きかけて一番上手くいつてなかつた葉山が暗い表情でぼやく。

「孤立というより、孤立に聞こえたけどね」

「皆さんの分のジュース、買って来ました」

私が口を挟みながら三子の膝の上に座りおにぎりを開けると、三浦から鋭い視線が飛んできた。

「それで、君たちは一体どうしたいんだ」

葉山が言う。

「俺は、可能な範囲でなんとかしてあげたいです」

「無理よ」

「図つたわけでは全くないけれど、雪ノ下と被った。

「そういえば、君たちはその子とよく話していたな」

「……平塚先生。これは奉仕部の合宿も兼ねているとおっしゃっていましたが、彼女の案件についても活動内容に含まれますか？」

「……いつもなら嫌だけど。面倒ごとなんて面倒くさいから嫌だけど。しかし彼女のことならば、詩的に素敵な彼女に限るのならば、存外乗り気な私だ。」

「林間学校のサポートボランティアを部活動の一環としたわけだ。原理原則から言えば、その範疇に入れてもよからう」

「だけど、私がしようとしていることは奉仕活動なんかじゃない。」

「そうですか。なら、彼女が助けを求めるなら、あらゆる手段をもって解決に努めます」

「あの……、彼女は助けを求めないと思います。一切、全く、一言たりとも助けを求めないし、それに、心を痛めてすらいませんよね」

「「……………」」

「この場の最年少にして、最背長、三子が小さく拳手をしながら言うと、何人かの声が

重なつた。

「ねえ三子ちゃん、あの子は言いたくても言えないんじゃないのかな」

「違いますよ。……だから、お姉ちゃんが言った通り、孤立してるんじゃないやなくて、孤立してるんです。あの子がかわいそうに見えるのは、子供のまま独立しちゃつて、一人で生きていける精神になつちやつて、それでも集団にいなきやいけなくて、だから苦しんでいる。全人類が子供で、でも自分だけは大人、みたいな重圧で。心を周囲に刻まれるのが孤立なら、心を環境に押しつぶされてるのがあの子。……だという風に、私には見えませんでした」

およそ一分ほど、中学生の言葉を反芻しながら全員が口を閉ざした。

「……何か根拠があつて言っているのかしら。あなたは他の小学生とばかり一緒にいて、彼女と関わっている場面なんて殆どなかったと思うのだけど」

最初に口を開いたのは、雪ノ下。

「見ればわかるんです。私は背が高いから、離れたところにいる人も見えるし、その人からも私は見える。いろんな人を人よりも多く見て来たし、見られて来た」

「それはただの経験則でしょう。根拠というには情報量が希薄よ」

「元被害者の経験は貴重よ。三子は鶴見留美と同じように、同じ以上の独立状態に遭つて、正義感の強すぎて正しすぎた教師によって独立から孤立へと叩き落とされた。大人

になりかけた子供を、子供は子供であるという正解へと落とし込んだ。——そんな経験を、あなた達はしていないでしょう。三子以上の経験則は、この場においてあり得ないわ」

「……お姉ちゃん？」

三子が私の顔を覗き込んできているうちに、次は葉山が口を開いた。

「なんにしても、みんなで仲良くなれる方法を考えないと解決にならないか」

「……それ、本気で言ってるんですか。……えっと、葉山さん」

「え？」

三子の言葉に葉山が顔を引きつらせていると、次は三浦が口を開く。

「あんさあ、さつきつから思ってたんだけど、あんた何様のつもりなわけ？ 年上のあー」

さらに、偉つそうにご高説垂れてるけどさあ。要するにあの子を助けたくないって言い

たいわけでしょ？」

相変わらず高圧的な話し方に怯み、三子は私のお腹に回していた手の締め付けを強め

る。

「っ、そんなことは、言ってません」

「じゃあ何よ」

「だから、……だから、助けちゃいけないんです。助けるなんて言葉を、あの子に使わな

いってください。……あの子が求めているのは、みんなと仲良くする手助けじゃなくて、みんなから離れていられる度胸なんです」

鶴見留美に必要なのは仲間ではなく、敵である。

## どうも鶴見留美が孤独なのは間違っている。『後編』

三子は昔から背が高かった。背の順で並べばいつだって最後尾だったし、大勢が集まるときはいつだって後方にいる。

そこにひ弱な性格も相まって、イジメの標的になるのにそう障害は無かった。

それに、姉がこれである。暴力と開き直りに躊躇しない、民衆のハズレ者が身内にいるのだから、どうしても精神年齢が高くなってしまふ。故に、三子は孤立よりも先に独立しかけた。

そこを担任の教師は、それこそ葉山のように、三子を集団に埋め込み、集団は手の届く距離まで来た三子を陰ながらに袋叩きにした。

その上で、外出すらも恐れた三子を訪ねて家に来た担任は、「みんな待つてるよ」と、追い討ちをかけた。

あの日、人が独立するときは若干大人びる程度だけど、独立から孤立に叩き落とされたときは小動物よりも小さくなることを私は知ったのだ。

あんな光景を、私は可能性すら見たくない。

結局、三子の言葉から先にまともな意見は出てこず、明日へと持ち越しになり、就寝することになった。

男女それぞれ大部屋で、布団を並べての雑魚寝。

「……んう、ねえね……」

話し合いで精神的にかなり疲弊した三子は、私をぬいぐるみか何かのように強く抱きしめながら早々に眠ってしまった。

「はいはい……」

そこらの大人よりも体は大きいのに、精神は子供よりもひ弱で、そして何者よりも優しいのだ。

「……なんか、コイバナとか出来る雰囲気じゃないね。あはは……」

由比ヶ浜が、布団の上に座って枕を抱きながらそんなことを言い出した。

「電気は点けてて構わないけど、あまり騒がないで頂戴。私も疲れたから寝る、……:とい  
うか身動きが取れないわ」

翌朝。

あの後、段々と体から力が抜けて、力尽きるように私は眠った。

「……お姉ちゃん、起きて」

「……身体中が痺れて、立てそうにないわ。……これが噂に聞く、土曜日の夜症候群つてやつね」

「何それ？」

「別名、ハネムーン症候群。腕枕をして寝たら翌朝腕が痺れて動かなくなる症状よ。私が出したのは腕枕じゃなくて抱き枕だったけど」

「ごめんなさい。えっと、とりあえず着替えさせるね」

荷物から私の着替えを取り出しながら、三子は言った。

「……もう全部任せるわ。なんか頭まで回らなくなつて来た」

「うん、任せて」

かろうじて動かせる首を捻って周りを見ると、既に私以外の分の布団は片付けられている。

明らかに私が買った覚えのないワンピースを着せられて、化粧水以外にもよくわからないものを色々塗られ、髪までしつかりとセットされてしまった。

「わー！ ナーちゃんが滅茶苦茶可愛い!」

「これは、流石に驚いたわ」

朝食の席に三子に抱き抱えられたまま来ると、奉仕部二人が私を見て悲鳴に近い声をあげた。

「さて、今日の予定だ」

昨日の夕食に続き、私も私以外全員既に朝食を食べ終えていた。朝食は基本食べない派の私はリンゴジュースだけでもらい、感覚の戻って来た手足を三子に揉み解されながら、平塚先生の話を聞く。

「夜は肝試しとキャンプファイヤーをやる予定だ。昼間小学生たちは自由行動なので、その間に準備をしてくれ」

「肝試しって、現実にやることあるのね」

「脅かす用の仮装を用意してあるそうだ。各自手分けしてやってくれ」

つまり、実質上のコスプレ大会ね。

キャンプファイヤーの準備なんてできるほど私に力は無く、肝試しで仮装するほどの気力も私には無かった。

三子は私を水辺近くの木陰に寄りかからせて、力仕事をしに向かって行ったしまっ

た。……暇ね。

「……可思議?」

「あら、留美じゃない」

しばらく暇を持って余していると、留美が一人でやって来て、私の隣に座った。

「なんで一人なの?」

「一晩中妹の抱き枕になつてたおかげで、手足が痺れて動けないのよ。話し相手になつてくれると助かるわ」

そう言うと、留美は話を始める。

「今日は自由行動なんだって。……朝ごはん終わつて部屋に戻ったら、誰もいなかった」

「奇遇ね。私も朝起きた時には妹以外いなかったわ」

「仲、いいんだね。あのでっかいお姉さんと」

「離れられないだけよ。難しく言うなら共存」

「どういう意味?」

「お互いにいなきやいけない存在ってこと。あの子がいないと私は死んでしまふし、私がいないとあの子は死んでしまふ」

「やっぱり仲良いんじゃない」

「どうだかね」

私と三子の間にある感情は、好意というより厚意といった面の方が強い。関係性的には他人スタートで、友達や家族や恋人を全部すつ飛ばして、夫婦に近い仲になっている。過程のない家庭だからこそ、距離感を掴めずに衝突することも多い。

「……ねえ、可思議」

「何かしら」

「可思議ってさ、小学校の時の友達っている？」

「いないし、顔も名前も覚えていないわね」

「というか、今のクラスメイトの顔ですら危うい。」

「……なんて言えば良いのかわかんないけど、なんか、こう……、強いよね。可思議って」  
「弱さも強さの内なのよ。みんなと仲良く暮らすのが強さなら、一人孤高に生きていくのもまた強さ」

一匹狼なんて、かつこいい言葉があるけれど、それだつて本質的には群れから逸れた狼のことで、私よりも留美の方がよっぽどそれに近い。

「……でも、お母さんは納得しない。いつも、友達と仲良くしてるかかって聞いてくるし、林間学校も、沢山写真撮つて来なさいって、デジカメ……」

留美を苦しめていたのは同級生だけじゃ無かった。——母親もまた、娘を子供扱いするという至極一般的な行動で、無意識のうちに押し潰すパワーの一つになっている。

「それに、シカトされると自分が一番下なんだなあって感じる。ちょっと嫌。惨めっばい」  
「物事の解決への近道は、いつだって妥協と諦めよ」

「……嘘でも慰めてよ」

「私なりに勇気づけようと思ってるのよ。勇気っていうか、むしろ度胸かしらね。度胸をつけてあげようと思ったのよ」

「……ふうん」

そっけないような返事だけれども、留美の目はしっかりと私を捉えていた。

私は小説家。文脈と行間で世界を作り、会話と描写で社会を作る。そこに、自分以外の手が加わることは決してない。

地球が一つであるように、大抵のことは単独の方が都合がいい。

「下に見られるのが嫌、でもみんなと肩を並べられるほど信用もできない。見限ってしまつた。……それはもう、今はどうしようもないわ。諦めなさい」

「諦める……、しか、ないの?」

「誰かを信じるとは、互いに互いの怒りや敵意、裏切りをも許容するということなのよ。でもそれを知る子供はいないし、大人でもむしろ少数派。留美がまだ友達が欲しいというのなら、そういう人間を探すしかないわ」

「……でも、いないんでしょ?」

「目の前にいるじゃない。泣き過ぎて目に節穴が空いたのかしら?」  
「え?」

「私が留美の友達になると言っているのよ」

キョトンと、留美は目を丸くする。

「同級生に友達は無理だから、今は私で妥協しておきなさいと、だから言っているのよ」  
何かを求めるなら、ある程度の喪失は覚悟しなくちゃいけない。

「学校が好き人間がいるとするなら、その人は学校を知らないか、学校しか知らないかのどちらか。学校が嫌なら、学校の外を知れば良いのよ」

「……でも、これからも会えるかはわかんないし、それに、可思議は高校生で私は小学生だよ」

「学校の外って言ったでしょう。私は今十六歳で、留美は今十二歳。小学六年生と二年生の四年という差は、学校じゃ大きいかもしれない。でも外じゃ誤差の範囲内よ。むしろ四なんて四捨五入すれば差にもならない」

距離なんて、もつと差にならない。

「携帯電話……、は、まだ流石にまだ持つてないわよね。そもそも私も使えないし。留美の家にパソコンはあるかしら?」

「パソコン? まあ、お母さんに言えば、使えるけど」

「それならよかった。メールアドレスを教えるから、メールでやりとりしましょ。親への説明に口実がいるなら、こう言いなさい。——不可思議可思議の小説が読みたい」

「可思議の？」

「学校なんて目に止まらないくらい、面白い世界を見せてあげるわ」

いつの間に準備が終わったのか、私の同級生たちは水着に着替え、水辺で遊んでいた。三子も来ていたようで、こちらへとやって来る。

「お姉ちゃん。身体、まだダメ？」

「感覚がまだ鈍いけど、歩くくらいは問題ないわ」

「そっか。……えっと、初めましてだよ。私はお姉ちゃんの妹の、七五三<sup>しごめ</sup>三子<sup>みこ</sup>。よろしく、留美ちゃん」

三子が自己紹介すると、留美は首を傾げた。

「苗字が違う……」

「え？ ああ。……お姉ちゃん」

三子の責めるような視線が私に突き刺さる。

「はいはい。私の本名が七五三<sup>ななご</sup>七子<sup>ななこ</sup>つてだけよ。複雑な家庭環境とかじゃなくって、可思議はペンネーム。ニックネームみたいなものよ」

「お姉ちゃん、お願いだから初対面相手にペンネームを名乗らないで」

「数字が子供っぽくて嫌なのよ」

「七五三は確かに子供っぽいけど、でも不可思議って、……長寿過ぎ」

あと一時間もしないうちに夕方になるって頃に平塚先生に呼び出され、この場はお開きになった。

「それで、また随分と話していたみたいだけど、何か解決策は思いついたのかしら？」

今はみんなが肝試しの仮装をしているところで、着替え終えた雪ノ下に尋ねられた。

「何を言っているのよ。もう解決したわ」

「……すごく不安なのだけれど、何をしたの」

「四捨五入。どうしようもないものは切り捨てて、必要なものと必要なものの手に入れ方を教えた。いつも通り、妥協と諦めよ」

肝試しのMVPは、自前のワンピースと帽子を使い、八尺様のコスプレをした三子だった。怖い話や都市伝説に敏感な小学生が本気で逃げて行つたくらいには、怖かった。

後日談。というか、事後承諾とか諸々。

肝試しが無事に終わり、林間学校最後の予定であるキャンプファイヤーを離れたところから見ていたら、葉山が隣に座り話しかけて来た。

「なあ。やつぱりみんな仲良くとは、いかなかったのかな」

「それが出来れば、この世に一匹狼なんて言葉も弱肉強食なんて言葉もないのよ」

「逸れた狼も、別の群れを見つければそこに入っていくくんじやないのかい？」

「入れるかもしれないわね。袋の中に。袋の中の鼠になって、袋叩きにされるだけでしょうけど」

「……そうか」

葉山はますます表情を暗くさせ、この場を去っていった。

「やあ、不可思議。聞いたよ。流石の手腕だな」

入れ替わるように、煙草を吸いながら平塚先生がやって来る。

「私は唆しただけよ。まだ何も終わっていない。そしてこれから何を捨てて何を拾うのかは留美しだい」

「まあ、事実その通りなんだろうさ。だが、それだけのことで出来たのは君だけなん

だ。まさか、賞賛を言うなら金を払えなんて言わないだろう？」  
「賞賛を受けるべきは留美なのだけどね」

平塚先生は空の空き缶に灰を落として、ニヤリと笑った。

「ところで君は、彼女のことは名前で呼ぶのだな」

「親しき仲には礼儀あり。親しい者くらいは名前で呼ぶわよ」

「礼儀というか、概ね普通のことなんだけどな。……待て、となるとだ。雪ノ下や由比ヶ浜は君の中で、親しいの枠に入っていないのか？」

「当たり前じゃない」

「じゃあ、……葉山や三浦達は無理にしても、戸塚あたりはどうだ。仲良いだろう」

「男子を名前で呼ぶなんて恥ずかしいじゃない」

「……私は今、肝試し以上に肝を試されている気がするよ。え、何、奉仕部よりも戸塚の方が好感度高いのか？」

「ただの同級生と可愛い男の娘。小説家なら断然後者を選ぶわ」

「君も一応、女なんだな」

「小説家よ」

諦めたように、平塚先生は別のところを周りに行った。

「お姉ちゃん、ラムネとサイダー、どっちが良い？」

「……何が違うの？ どっちでも良いわよ」

隣に三子が座り、私を持ち上げて膝に乗せる。

「結構違うと思うけど。じゃあサイダーね」

三子は私にペットボトルのサイダーを渡し、ラムネのキャップを捻って開けた。ビー玉を落として開けないあたり、私の妹よね。

「……お姉ちゃん、なんか楽しそうだね」

「そう？ ……まあ、友達が出来たからかしらね」

「よかったじゃん。お祝いする？ 帰りにケーキ買う？」

「私が友達を作るのはそれほどのことなの？」

「だって、お姉ちゃんが私に友達の話をするのって初めてだもん」

「待ちなさい。沙希を忘れてるわよ」

「沙希さんは、……ほら、姉さんって感じじゃん」

「え、もう家族認定？」

「あんな優しい人、友達扱いなんてできないよ。だから姉さん」

「……名前は忘れたけれど、沙希の弟との交際は一切認めないわよ」

「別に認めなくて良いけど名前は忘れないであげて。仲良しな沙希さんの弟の名前は覚

えてあげて」

「機会があればね」

三子は由比ヶ浜に呼ばれ、私を降ろして線香花火を受け取りに行った。

「……可思議」

「何かしら」

「メール、絶対送るから。見てよ」

「ええ。楽しみにしている。あ、ちよつとこつちに來なさいな」

「なに？」

「……そこで見てる平塚先生」

「何故バレた!？」

「お願いするわ」

「う、うむ、任せたまえ！」

留美は一枚の友達との写真と無数の敵を手に入れ、詩的な一步を踏み出した。

「……二人とも、顔はいいんだから少しくらい笑ったらどうだ？ 証明写真みたいに

な  
つ  
て  
る  
ぞ  
」  
め  
で  
た  
し、  
め  
で  
た  
し。  
。

やっぱ文化祭が祭りなのは間違っている。『起』

奉仕部の合宿だったらしい千葉村から帰ってきて、何日か経ち。

受験勉強に本腰を入れ始めた三子に代わって、スーパ―に買い出しに行こうと向かっている道中。

「あー！ 不可思議ちゃーん！」

と、明らかに私とは親しくなれなさそうな女性に呼び止められた。

「……誰かしら。私はこれから忙しいのだけど」

「忘れられてる!？」

彼女はどこか冗談めかしながら驚き、開き直ったような笑みを浮かべている。

「もう。ほら、部活の合宿だっけ? 雪乃ちゃんたちがこつちに帰ってきたときに一度

会ったでしょ? 雪乃ちゃんの姉、はるの陽乃さんを忘れたとは言わせないわよ?」

なんかもう、まだ数えられる程度のセリフしか話していかないはずなのに、面倒臭そうなキヤラの人だった。毎朝アイフォンに「オーケー、グーグル」と言っただけの人だった。

「まさかあの不可思議可思議が雪乃ちゃんとお友達だったなんてねー。話を聞いてか

ら、一度話してみたと思うってたんだー」

「あの変態とは別に友達でもなんでもないわ」

「変態!? 雪乃ちゃんがなにをしたらそんな言われ方するの!？」

「私の利き手と目に性的な暴行を為そうと計画しているわ」

「……なんか、雪乃ちゃんがごめんね」

「欠片でもそう思ったのなら、是非とも妹が同級生の手に手を出す真の変態になる前に止めてくれると助かるわ」

切実に。

しかし、彼女は愉快そうに笑う。

「アツハハ。いや、聞いてた以上だわ、不可思議可思議ちゃん。可思議ちゃんって呼んでいい?。」

「……もういいかしら。自慢じゃないけれど、私は熱というものに滅法弱い。夏の外に長居はしたくないわ」

いい加減、汗で服が張り付いてきて鬱陶しくなってきた。さっさとスーパーの野菜売り場で涼みたい。

「……君はまるで人形を相手にするように話すんだね」

「私は人形師ではなく小説家よ。熱中症になりたくないから、もう行くわ」

「はいはい。またね、可思議ちゃん」

「ええ。次会うまでには私の小説を読んでおきなさいな」

「……バレてたか」

あれ以降、結局夏休み中には彼女が私の前に姿を現すことはなく、そして夏休みが終わった。

「……もう私、水風呂と結婚するわ」

「水風呂の方から願い下げだと思っけど。っーかさっさと出る。遅刻するよ」

九月は秋らしいけれど、気温は余裕で猛暑日を超える。ならそれはもう夏だし、なら今日も夏休みであるべきなのよ。

私は朝早くから来た沙希に湯船を引きずり出され、髪と身体を乾かされ、下着と制服を着せられた。

「髪。黒でも茶色でも金色でも、どれか一色に染めなよ」

「嫌よ。最近是一周回って気に入ってきたの」

「気に入ったの最近なのかよ……」

「…………お姉ちゃん、沙希さん。…………学校、あと十分で始まつちやうよ」

沙希に髪をポニーテールに結われていると、脱衣室の扉から三子が顔を覗かせた。マスクをつけたたり、おでこに冷却シートをつけたりと、なんか顔の八割が真っ白なのが不健康さを際立たせる。

「ああ、うん。わかったから、三子は大人しく寝てな」

三子は新学期早々、季節外れの夏風邪に掛かり、今日一日休むよう伝えた。

「あんた先に学校向かってな。私は三子を寝かせてから追いかける」

……………なんか、夏休み中に姉の座を完全に取られた気がする。そもそもその席に座っていたのかも怪しいものだけど。

「お姉ちゃん、……………行つてらっしやい」

「ええ。帰りに何か買って来るから、出来たら連絡よこしなさいな」

それにしても、ポニーテールというには存外にいいもので。今までずっと、伸ばしっぱなしでボサボサの髪を、さらにほつたらかしにしていたけれど。それと比べてはるかに首の後ろが涼しい。

一つ問題は、合宿の時以降、たまに三子が私の髪の手入れを力尽くでするようになって、沙希までもが私の髪に手を付けるようになり始めた。

おかげで、妹に似て美麗な私の顔がわかりやすく表に出てきて、男達の視線が鬱陶しいこと。

流石に初日から職員室に呼び出されるようなことはなく、教室に向かって階段を登っていると、踊り場で雪ノ下に声を掛けられた。

「あら、久しぶりね」

「……人違いじゃないかしら。私は七五三しちごさん 五子いすこというのだけど」

「嘘をついても無駄よ、不可思議さん。あなたの素顔はそう簡単に忘れられるものじゃないもの」

「それは残念ね。忘れられるようにと、毎晩寝る前に夢日記を書いていたのだけれど」

「意味がわからないし、夢日記じゃなくて夢の予言書になっているわよ。……そういえば、姉さんと話したそうね」

「……………」

「忘れられてたと言っていたけど、……姉さんこそそう簡単に忘れられるような人じゃないと思うのだけれど」

「嗚呼。あれ、貴女の姉を騙るストーカーじゃなかったのね」

「貴女、雪ノ下家に何か恨みでもあるの？」

「恨みがなくともイジメは起きるものよ。ああ、そうそう。三子が季節外れの夏風邪に

雇ったから、今日は部活に出ないで帰るわ」

「そう。お大事にと伝えておいて頂戴」

クラスが違うので当然別れ、私と追いかけてきた沙希は遅刻スレスレで教室に入った。

スーパーでスポーツドリンクとゼリーを買って帰ったら、沙希が全く同じものを買ってきていて、冷蔵庫の一角が爽やかになったりはしたけれど、大したことは起こらず、その日は終わった。

翌日。家の用事とかで今日は沙希が家に来ず、私は盛大に遅刻した。午前中を完全に寝過ごし、せっかくだからと水風呂に浸かってから自分のペースで支度をし、のんびりと登校した。

「……せめて風呂上がりなことを隠す努力をしてから来たまえ。髪が濡れているぞ」  
「ゲリラ豪雨だったのよ」

「君の家はすぐ近くだったはずだ。ゲリラすぎるだろう」

私が教室に入った時の授業はロングホームルームだったらしく、黒板を見るに、文化

祭実行委員を決めているらしい……。

二人必要なようで、そのうち一枠には『七五三』の三文字が

「……へえ。確かに千葉には『七五三』という名字は多いそうだけど、このクラスに私以外にもいるとは思わなかったわ」

「君以外にいるわけないだろう。何か説明は必要かね？」

「組織活動且つ肉体労働かつ奴隷労働に、私という非労働の極みを推薦した理由を聞かせてもらえるかしら。然もなくば、普通に蹴る」

「君は小説家だろう。小説家らしく言葉で戦いたまえよ。……いやな、もうすぐ次の授業が始まるというのに、まだ一人も決まっていないらしかったからな。だから不可思議にしておいた。ひとつ風呂浴びてから来た方が悪い」

へえ、そう。ならば私は悪逆の限りを尽くし、今年の文化祭を世界一失敗した文化祭に仕上げて見せるわ。

「いい加減に仕事したりしたら普通に殴るからな」

……仕方ない。どうせ大した仕事量でもないし、普通に働きましょう。

「さて席に着け。授業を始めるから、残りは放課後にでも決めたまえ」

半ば強引に、平塚先生の授業が始まった。

放課後。

平塚先生が言った通り、もう一人の実行委員を決める話し合いが行われる。

「えー、じゃあ、七五三さんともう一人実行委員をやりたい人……」

司会を務めている男が、投げやり気味に言った。そりゃ、私みたいなやつとは一緒になりたくないわよね。既にグダグダだわ。

「このまま決まらないなら、ジャンケンに……」

「ハア？」

「それって、大変なの？」

何もかも投げ出すようなこと司会が言うのと、三浦が威圧し、由比ヶ浜が尋ねる。曰く、普通にやっていたら、そう大変なことじゃないらしい。

「えっと、じゃああたしがやろつかなく、なんて」

「やめてください由比ヶ浜さん」

「ナーちゃんが断るの!?! しかも敬語で!! ナーちゃんなんで!?!」

「知り合いがいると、悪いことをし辛くなるじゃない」

「犯行予告!?!」

「冗談よ。普通に、仕事ができない人に来られても私の仕事が増えるだけだから、遠慮して頂戴」

「そつちの断り方の方があたしやだよ!？」

「つーか、結衣はあーしと一緒に客の呼び込みとかする係だから、普通に無理だし」

「え、あたし呼び込みやるの?」

……もしかして、私も実行委員じゃなかったらやらされてたのかしら。グツジョブ、平塚先生。

まあ、となると外見的に、戸塚と葉山あたりも無理そうだし、指名した方が手っ取り早いわね。

「ねえ、葉山っていったかしら」

「なんだい、不可思議さん。僕もいろいろ忙しいから、実行委員はちよつと難しいけれど……」

「そんなことを求めてはいないわ。それより、おそらくクラスで一番人望のある貴方から見て、真面目で有力な人材って誰かしら」

「え? まあ、そうだな……」

私が直接指名してもどうせ喧嘩になって終わりなのだから、こういうのはアンチの湧かない人気者に任せるに限る。

「それなら、相模さんなんか、ちゃんとやってくれそうだと思うよ」

「え〜？ ウチ〜？」

指名された彼女は、いつか会ったストーカーとは比べ物にならないほど下手くそな、ヘラヘラした作り笑いで「無理だつてえ」と拒否したけれど、葉山が手を合わせてお願いしたら、頬を赤らめながら了承した。……わかりやすいな。

翌日放課後から早くも、会議室で実行委員会の会議が開かれた。席は自由だったから適当にドアの近くに座っていたら、いつの間にか隣に雪ノ下が座っていた。

「予想外の人がいたものね」

「遅刻のペナルティで押し付けられたのよ、平塚先生に。私は小説書かなきやだから、あとは任せるわ」

「はい？」

やりたいわけでもない仕事を積極的にやるつもりはない。文化祭なんかよりも私は優先するべきことがある。

暫く話し合いが進み……。

「不可思議さん。会議は終わったわよ」

「……そう。部活はやるの?」

「由比ヶ浜さんが待っているそうよ」

「そ。わかつたわ」

二学期になろうと、奉仕部の日常に変化は訪れない。依頼人さえ来なければ、然してすることもなく、私は小説の続きを書く。

……依頼人さえ来なければ。

「しっつれいしませーす」

と、やって来た依頼人は、名前は忘れたけど私のクラスメイトで、実行委員になった女子とその取り巻き二人だった。

「平塚先生に聞いてきたんだけど、雪ノ下さん達の部活なんだよ」

「何、貴女の知り合い?」

「そんなわけないでしょう。何かご用かしら」

「ゆきのん、否定が強いよ……」

三人は一度向き合ってから、話し出す。

「うち、実行委員長になっちゃったんだけどさ、こう……、自信が無いっていうか、……、だから、助けて欲しいんだ」

「……いや、何を言っているの？ 自己責任という言葉が、この女の辞書には書かれていないのかしら。」

「自身の成長という、貴女が掲げた目的とは外れるように思うけれど」

「そうなんだけどお、やっぱりみんなに迷惑かけるのが一番不味いってゆーか、失敗したくないじゃない？ それにっ、誰かと協力して成し遂げることも成長の一つだと思うしー」

「私への迷惑は考えていないのね。葉山に任せれば問題ないと思っていたけど、大外れだったわ」

「は？ 七五三さん、何言ってるの？ 夏休み中に整形したとかって聞いたけど、何、顔だけ良くなって調子乗ってるの？」

「指名権を葉山に渡したのは私が悪かったと、反省どころか猛省しているけれども。でも委員長になったのは貴女の自己責任でしようと言っているのよ。責任を私たちに押し付けないで」

「……ごめん、何言ってるのかよく分かんないんだけど」

あーあ。ほんっと、あーあって感じよね。

「要するに、被害者ヅラが気に食わないって言ってるの。分からないと言っておけば許されるのは授業中だけよ」

三子を見習って、私ももう少し人を見る目を鍛えた方がいいかしら。どうやって鍛えるのかなんて知らないけど。

「……不思議さん、構わないわ」

「へえ？」

「依頼内容は要するに、委員長になってしまった貴女の補佐をすればいいのでしょうか？」

私も実行委員だから、その範囲から逸脱しない程度であれば手伝えるわ」

「本当に！ やったー！」

雪ノ下はどこか心あらずな様子で、依頼を請負った。

三人はすぐに部室を出ていく。

「……説明してもらえなのよね。この部の活動はあくまでも困っている人に手を差し伸べることだと、私が入部したときに貴女は言ったはずよ。楽をしたい人に楽をさせることも活動のうちなのかしら？」

雪ノ下は、躊躇いながらに言った。

「……私個人でやることだから。貴女や由比ヶ浜さんが気にすることではないわ」

「でもゆきのん、いつも通りなら……」

「いつも通りよ」

いつも通りではない。雪ノ下雪乃は多少愚かなところはあっても、根本的な間違い見つけたら決して正そうとしない人間ではなかったはずなのだから。

「……別に、私との勝負云々のことなら心配も焦る必要もないわよ。平塚先生がどう勝敗を分けるかなんて知ったことじゃないけど、私が勝つて要求することは私の小説を読むことなのだから」

材木座、戸塚、沙希、留美。平塚先生がどう見るかなんて知らないけれど、私からの主観で想像するに、私の方が圧倒的に優勢なはずなのだから、似た認識をしていけば焦りが生じても、それから、一人で解決するという発想が出てきても、おかしくはない。

「それとは関係ないわ。……本当に、私一人でできることだし、私一人でやった方が効率がいいのよ」

「効率って……。でもそれっておかしいと思うー！」

言うだけ言って、由比ヶ浜は部室から出て行ってしまった。

「……私も帰るわ。文化祭、留美と三子も来るそうだから、みつともないところを見せないでよね」

いい感じに夕暮れ時だし、沙希ももう家にいるでしょうし。

「なんかもう、なんかもうっ！」

「ほんと、あーあよね。あーあ」

「……ナーちゃん」

特別棟の出入り口あたりに、由比ヶ浜はいた。

「何が不満なのかしら」

「……なんか、いつものゆきのんと、なんか違うんだもん。それに、さがみんのやってることも嫌だなんて感じ」

「その辺は同感ね。嫌いだけどあの古風なギャルの方に人選を任せるべきだったわ」

「古風な……。ゆきのんがさがみんのお願ひ聞いちゃうのも、仲良くしようとするのも、……」

言っているうちに、由比ヶ浜の頬の赤みが増した。

「あ、あたし……、思ってたよりずっとゆきのんのこと好きなのかも」

「そんなゆるキャラみたいなの呼び方してて好きじゃなかったら、それこそ気持ち悪いわよ」

「うっ、うっさい！ あたしもう教室戻るから！ 委員会頑張つてね！」

「いや、私は面倒だから帰るわよ」

「……ナーちゃんって、基本マイペースって言うか、我が道を行くって感じだよな。」

「ちょっと羨ましいな」

「その道の先を見ないうちに羨ましがられても反応に困るわ。……また明日」  
「うんっ！ また明日！」

やっぱ文化祭が祭りなのは間違っている。『承』

放課後は私も雪ノ下も文化祭実行委員で忙しくなるし、由比ヶ浜もクラスの方で忙しいそうで、奉仕部は暫く活動を休止することになった。

「それでは、定例ミーティングを始めます。じゃあ宣伝広報、お願いします」

私は今は会議室で、ミーティングの席に座りつつ、小説を書いていた。

「掲示予定ポスター制作も、大体半分終わっています」

「そうですか。いい感じですね」

「いいえ、少し遅い」

雪ノ下が補佐をするようになってから、よくよく似たような場面を見かける。相模が上げて、雪ノ下が冷たく落とす。

「掲示箇所の交渉、ホームページへのアップは既に済んでいますか？」

「……まだです」

「急いでください。社会人はともかく、受験志望の中学生やその保護者は、ホームページを結構こまめにチェックしてますから」

「は、はい」

雰囲気重視している相模と、予定を優先する雪ノ下は、あからさまに、どこからどう見ても、噛み合っていない。

「相模さん、次」

「あ、う、うん……。じゃあ有志統制、お願いします」

「はい。有志参加団体は、現在10団体」

「増えたね〜！ 地域賞のおかげかな」

「それは校内のみですか？ 地域の方々への打診は？ 例年、地域との繋がりと言う姿勢を掲げている以上、参加団体減少は避けないと。それからステージの割り振り、開演のスタッフ内訳など、タイムテーブルを一覧にして提出してください」

「わ、わかりました」

どちらが正しいのかと言えば、雪ノ下の方なのでしようけれど。でもこの場での悪役は、雪ノ下ただ一人。優しさと正しさは必ずしも合致するとは限らないという現実の縮図が、そこにはあった。

それでもある程度、雪ノ下に称賛の声が挙げられているし、そこは雪ノ下の裁量なのでしようね。

会議は概ね恙無く終わったし、私は書きたかった小説が書きたかった通りに書けた。奉仕部の影響かは知らないけれど、執筆の腕は上がった気がする。

クラスの方でも出し物に進展があり、演劇をすることになったらしい。脚本をやろうとしている女子がBL趣味らしく、男子達はげんなりしている。

主役全員が全体的な見直しを要求し、脚本まで落ち込み始めた。

「あー、それじゃあナーちゃんや脚本やってよ！ 小説とか書けるんだし、できるんじゃないの？」

私は様子見に來ただけなのだけれど、由比ヶ浜につかまってしまった。

沙希と共に隅から見えていた私に、そこら中から注目が集まる。

「……そうね。百合でいいなら考えてもいいわ」

「「却下!!」」

女子のほとんどから却下を食らった。そもそもそれが狙いだったけど。書いたって一円の得にもならないし。

「百合……、って、何？」

由比ヶ浜は知らなかったようで、首を傾げている。

「女子同士の恋愛のことよ。男同士だと薔薇と呼称したりするわ」

「なんであんな、そんなこと知ってるの」

沙希から警戒の目が向けられた。

「小説家だからよ。あとバイセクシャルだから」

「……は？」

「女同士でもいける口なのよ」

「具体的に言うな」

「男よりは女の方がいいわね。むさ苦しいのは嫌だし」

「信憑性を足すな」

「このクラスでなら沙希が一番好みね」

「あんたバツカじゃないの!?! てかあんたそれなのに平然と裸見せてるの!?!」

沙希の叫びは教室中に広がり、何やらざわついている。

「あ……、いや、今のはちが……」

「おい不可思議。委員会の方でお前を呼んでいたぞ」

場の空気を入れ替えるように、見計ったかのようなタイミングで、平塚先生が入って

きた。

「有志参加を申し出るために来た者が、お前を指名して呼んでいるらしい」

「そう、来ちゃったのね。……沙希、ある程度であれば、私のことは好き勝手言っているわよ」

沙希は「無茶言うな……」と項垂れた。

「何かあったのか？」

「私がバイセクシャルで、クラスで一番の仲良しが沙希だと言う話をしていたのよ」

「……は？」

平塚先生が固まっているうちに、私は会議室へと向かった。

いつもミーティングなんかに使われている会議室は人が入り口から溢れていて、簡単には入れなさそうな様子。

けれど、あの人に限り、野次馬なんてものは馬ですらない。

「可思議ちゃん！ 予定を繰り上げて来ちゃったのだけ、あたし！」

いかにもピンクピンクしたワンピースで、絵本の妖精のような羽を生やした、白髪ツ

インテールの美少女。それが数々の人間を文字通り飛び越えて、私の前に着地……ではなく、目線の高さを合わせて浮遊した。

「お久しぶりです、蒼さん」

背の低い私よりもさらに小さい、言ってしまうば子供体型の彼女は、しかし私より遙かに年上。名を、有製ゆうせい 蒼あおい。人形劇のプロフェッショナルであり、私が唯一手放しで尊敬できる人。

「……不可思議さん。彼女について、色々聞きたいのだけれど」

「私も聞きたいな！ 可思議ちゃんという関係なのかな？」

どうも、人だかりの原因は蒼さんだけではなく、雪ノ下の姉の方も来ていたらしい。姉妹揃って、私たちの前に出て来た。

「すごいねー、どうやって飛んでるの？ ワイヤー？」

「うふふ。ワイヤーアクションは少女の嗜みなよ」

蒼さんは好奇心全開の雪ノ下姉に物怖じせずに微笑みかけた。

「可思議ちゃんから文化祭があるって聞いて、見てみたら有志で参加できるみたいじゃない？ だから来ちゃったのよ、あたし」

「私は普通に、暇だったら遊びに来てください、程度に伝えたつもりよ」

そもそも忙しい人だし、ほとんど社交辞令的にメールを送っただけだけだ。

「ねえ、ダメかしら？ あたし」

「……いえ、決定権は私にはないので」

「あら、そうなの？ でもここで一番偉そうなのは貴女だと思うわ、あたし」

雪ノ下の目線に合わせる程度まで浮き上がって、煽り文句のようなことを言っているけれど、あれは別に喧嘩を売っているわけではない。

「えーつと、あおいちゃんだっけ？ やっぱり君もそう思っちゃうよねー」

対抗してか、雪ノ下姉が蒼さんに視線を合わせるように軽く腰を曲げて言った。

「有製蒼って言うのよ、あたし。それと多分だけど、あたしの方が年上よ」

「え？ そうなの？」

「だって私、ママだもん。息子が可思議ちゃんと同い年ね」

雪ノ下姉妹が、というか、聞き入っていた面々が諸々固まった。

まあ気持ちにはよくわかる。合法すぎて逆に犯罪臭い口りと、自分の母親が同年代とか、不思議な世界にも程が有る。

「ねえ、それはそうと、有志で参加するには誰を領かせればいいのかしら、あたし」

「あつ、それなら委員長の私です！」

「そう。じゃあ、よろしくね？」

「はっ、はい！ 有志団体は足りないし、大丈夫です！」

蒼さんの微笑みに、委員長は顔を赤ながら了承した。

「ありがとう。それじゃあ可思議ちゃん、暇つぶしに学校を見て回ってくるわ、あたし」  
「学校が壊れると困るから、帰るかここで大人しくしててください」

「ならここにいるのだけ、あたし」

そう言ったから、私は蒼さんの分の椅子を用意してそこに座ってもらった。

相変わらずろくに仕事の回されない私は、席に座って、ノートパソコンで小説を書く。  
……もしかしたら、作業してると思われて仕事が終わってこないだけかもしれないけれど。

とりあえず連載小説の、今日投稿する分が大体書き終わった頃。

「みなさーん！ ちょっといいですか？」

委員長は作業している面々の手を止めさせ、注目を一点に集める。

「少し、考えたんですけど。実行委員はちゃんと文化祭を楽しんでこそかなーって。自分たちが楽しんでないと、人を楽しませられないっていうか。予定も順調にクリアしてるし、クラスの方も大事だと思うので、少し仕事のペースを落とすっていうのはどうですか？」

「ねえ可思議ちゃん、何を言っているのかしら、あの子」

「都合のいいサボリ文句だと思えますよ」

都合の良い耳をしているようで、私たちの会話は聞こえていないようだった。

「……相模さん、それは考え違いだわ。バツファを持たせるための前倒し進行で」

「私の時も、クラスの方皆頑張ってたな」

まるで、とういかまんな嫌がらせのように、姉が妹の言葉に被せるように言った。

「雪ノ下さん、お姉さんと何があつたのか知らないけど、先人の知恵に学ぶって言うかさ、私情を挟まないで、みんなのことも考えようよ」

「だったら、その雪ノ下って言う子の私情のことも考えてあげるべきだと思うわ、あたし」

蒼さんが、そこらに転がっていたボールペンをいじりながらそんなことを言った。

「みんなのことって言うのは、つまり私情の集合体でしょう？ クラスの方もやりたいとか、楽しんで遊びたいとか。だったら、仕事を効率的に片付けたっていうのも、十分に尊重するべき立派な事情だと思うわ、あたし」

「うっ、……で、でも、みんなクラスの方もやった方がきつと楽しいし……」

「世の中楽しんでもん勝ちだと言うのは否定しないわ。あたしの人形劇も似たようなものだし。……でもそれは、楽しめずに負けている人がいるから成り立っているのを理解した方がいいと思うわ、あたし」

「それは……」

話の途中で、下校時刻を告げるチャイムが鳴った。各々急いで片付け始め、済んだ者から帰っていく。

私もノートパソコンだけだからすぐに片付けが済むし、蒼さんをその辺まで送りながら帰ろうと思ったけれど。

その蒼さんを、雪ノ下が呼び止めた。

「有製さん。……その、ありがとうございます」

「うふふ。妖精さんは可愛い子とかわいそうな子の味方なのよ」

妖精のようにフワフワと、窓から飛び出して何処かへ行ってしまった。

「……あの人、一体何者？」

「見ての通りの人よ。人形師で、特技はワイヤーアクションと人心掌握と空間把握。常識にも重力にも縛られず、好きなものを好み、嫌いなものを嫌う。あらゆる方面で自由人だから、何かに縛られてる人ほど、蒼さんの言葉は心に響く」

「聞き忘れてただけだし、可思議ちゃんとか蒼ちゃんってどういう関係なの？」

雪ノ下姉に背後から抱き付かれて、背中に三子ほどじゃない感触が乗せられる。

「お互いにファンなだけよ。私は蒼さんの人形劇のファンで、蒼さんは私の小説のファン。感覚的には、『親戚のお姉さん』ってところね」

あれからというもの。

雪ノ下や蒼さんの意見は全く通らず、ほとんどの人間は作業のペースを落とす手段として、一部の人間に押し付けるといふ方法をとった。おかげで、クラスの出し物に消極的な少数派の前には、仕事という名の書類の山が積み重なっている。

「やっぱり相模さんの提案、ちゃんとダメって言えば良かったかな」

そう言った少数派の一人は、生徒会長の城廻めぐりしろめぐり。

「言っても聞かなかつたでしょうね。それより、無くても当日はなんとかなる仕事を仕分けてもらえるかしら」

「別にいいけど……、どうするの？ 七五三しゆめさん、じゃなくて不可思議さん」

「私達に仕事と責任を押し付けて、本人たちは楽しく遊んでいる。そんなの気分がいいわけではないでしょう。私は小説のペースも落ちて収益が下がったし。憂さ晴らしくらいはさせてもらわないと、いい加減モチベーションが持たないのよ」

「不可思議さん、余計な仕事を増やさないで頂戴」

「余計な仕事をかき集めて、クズ共に押し付けるのよ。その分私たちはペンを動かす量

が減るし、キーを叩く数も減る。消費する糖分やカロリーも減るから、ダイエットして人には悪いけれど、そこは諦めてもらおうわ」

「……不可思議さん、可愛い顔して言ってることは滅茶苦茶クズだ……」

私と生徒会長のやりとりに対する苦笑いが聞こえて来た。けれど、笑い事じゃないのよ。

「仕事だけがが増えて給料が減った。だから怒る。極めて一般的な思考よ。それとも、ここにいる私以外の面子は、ヘラヘラ笑ってるみんなのために無償で仕事をするのが好きで好きで仕方のない、天職が奴隷の人たちなのかしら。——そんなだからクズが調子に乗るのよ」

「……不可思議さん。余計なことを言っている暇があつたら、手を動かして頂戴」

「愚問ね。私は口と手を同時に動かせるのよ」

「それ、滅茶苦茶普通なことを言ってるだけだよね」

「モーターみたいな名前の貴女も、さっさと仕事をしなさいな。仕分けが大変ならその分私に押し付けてくれて構わないから」

「モーター!?! 城廻めぐりだつて。せめて、迷路つて言つて欲しいな……。じゃあ、これだけお願い。後輩いびりみたいで嫌だけど、憂さ晴らしには賛成よ」

どつさりど、辞書二冊分はある資料が私の仕事に積まれた。

翌々日。

前日は普通に仕事を片付けるだけで終わったけれど、今日はそうではなく。会議室には委員会の全員が集まった。

話の議題は、生徒会長から連絡されたらしい、文化祭のスローガンについて。事前に考えて来たものを出し合って並べて、多数決という形をとるらしい。

……多分、私にだけ連絡がこなかったのは生徒会長本人の仕業だ。

友情・努力・勝利

面白い！面白すぎる！

く潮風の音が聞こえます。

総武高校文化祭く

一意専心

ONE FOR ALL

「お、ああいうのちよつといいよね」

途中から、助っ人的に協力を申し出て参加している葉山が食いついた。

「二人がみんなのために、ね。そのまんまじゃない。百人の仕事を一人に押し付けて、十九人が楽しむ。そこまで考えてのそれなら、確かにセンスはあるわね。パツと見カッ  
コいいし」

「不可思議さん……、齒に衣着せようか」

「言わなきゃわからない奴には言わなきゃ伝わらないのよ」

☆絆

くともに助け合う文化祭

最後に出て来たのは、クズ共の筆頭というか、火付け役の委員長の案らしい。

「うわ……」

「何かな？ 何か、変だった？」

思わず声に出してしまった。

「別に。クズもここまで来ると輝かしいとか、そんなこと全然思っていないわ」

「……ふーん、そう。嫌なら他に案出してね」

「じゃあ、遠慮なく」

闇鍋

燃えた紙幣で沸いた文化祭

上から壊れた文化祭

学校

許されただけの文化祭

独り舞台

全てが美少女に駆逐される文化祭

さつと、思いついたものをホワイトボードに書き連ねてみたけれど、周囲の反応は乏しい。

「……不可思議。どういうことか説明しろ」

なんだか楽しそうな平塚先生が言うので、私は語る。

「とは言っても、別に書いてある通りでしかないわよ」

闇鍋

燃えた紙幣で沸いた文化祭

「誰も彼も、私を闇鍋みたいにして仕事を押し付けてくれたわよね。おかげで小説家業の収益が百万と五千円くらい落ちたわ。しかも一度落ちると元に戻すのに時間がかかる。合計はざっくり一千万くらいかしらね。——私はそれだけの損失が、文化祭のために、仕事を押し付けられたがために、出ているのだけど。誰が責任を取ってくれるのかしらね?」

上から壊れた文化祭

「偉そうな奴から役目を放棄して、下にいた人間に仕事の雨が降り注いだわよね」

学校

許されただけの文化祭

「損失やら状況やら、企業だったら大問題になっていたと思うわ。学校という閉鎖空間だから許された。だから文化祭ができるのよ」

独り舞台

全てが美少女に駆逐される文化祭

「極論でもなんでもなく、私たちが何をしたところで、蒼さんの人形劇の前では雑音にしかならない。文化祭そのものが茶番か踏み台に終わるのよ」

説明が終われば、聞こえてくるのは「どうせ自分が楽しただけだろ」だの、「空気読めねえのかよ」だのとやった文句ばかり。

「文句があるのならお金を払いなさい。何かを支払ったわけでもない人間に、文句を言われる筋合いはないわ」

結局、私の案も含めて全て却下されてしまった。無念。

やっぱ文化祭が祭りなのは間違っている。『転』

千葉の名物、踊りと祭り！

同じ阿呆なら踊らにや

Sing a Song

スローガンの件から何日か経ち。無事にスローガンは決定し、全員参加の作業の時にサボっていた面々へと仕事を押し付けたりしながら、文化祭当日を迎えた。

『雪ノ下です。オンタイムで進行します。問題があれば即時報告を』

これから体育館のステージで開演式。委員長はステージに立つ必要があるため、雪ノ下が中心となって最終点検なんかが行われている。

私は二階から見下ろし、客席で何かトラブルが起きていないかを確認する役割を与えられた。又の名を、厄介払い。

「開演一分前。客席側に大きな問題無し。……格好つきたいのはわかるけど、時計くらい自分で見なさいよ。通信にだってタイムラグがあるんだから」

『不可思議さん、無駄口を挟まなきや気が済まないのなら通信を切って一人で言いなき

い。耳障りよ』

『私らしくもなく正論を言ったつもりだけどね』

『……あの、お二人とも。みんなに聞こえています』

『……』

後輩に黙らされる、二人の先輩がいた。……というか、私たちだった。

式が始まれば、私の仕事は終了。留美の来る時間が近いため、通信用の機材を実行委員の一年生に預けて、私は体育館を出た。

あちこちに物が置かれていて、人がいないのに騒がしい雰囲気の下を通り。正門側の昇降口から出て、校門近くに行くと、受付用に張られた天幕の下に平塚先生が一人、タバコを吸いながら居座っていた。

「独身だけでなく、こんな時でも一人なのね」

まだ留美は着いていないみたいだし暇つぶしに話そうと声をかけると、平塚先生は「うん？ ああ、不可思議か」と、私の分のパイプ椅子を用意した。

「来賓がある以上、全員が開演式に出るわけにはいかないんだ。受付にも人員は必要だしな。……待て、まだ式は終わっていないはずだ。なぜ君がここにいる」

「似たようなものよ。待ち合わせというか、迎えというか。流石に高校を小学生一人に

歩かせるのは酷でしょう」

「絶妙に叱り難い言い方をしてくれるな。君には友人を免罪符に使うことへの罪悪感はないのか」

「免罪してるんだから罪悪なんて無いようなものよ」

互いに説教じみた話をしてしていると、ちょうど開演式が終わるくらいのタイミングで、彼女は私の前に姿を表した。

「その、久しぶり。可思議」

実行委員で作った、最寄駅からの簡易的な地図を片手に、留美は小さく手を振る。

「ええ、久しぶりね」

方向音痴な私が逸れないように手を繋いで、とりあえず教室に向かう。

「……可思議、ここ、さつきも来た気がする」

「奇遇ね。私もこのチョコバナナは食べた覚えがあるわ」

「なんで買ったの？」

私のクラスの方方向に向かいつつ、人混みの流れと客寄せに誘われながら見て回っているうちに、目的地的につくこと無く一周してしまっていた。

売りつけられたクツキーを留美に渡したり、お化け屋敷に呼び込まれたりしている  
と。

「不可思議さん、何を遊び呆けているのかしら？」

「あら」

委員会を引き連れた雪ノ下が、収集つかないほどに入り乱れた廊下を整理しながら私達の前に立った。

「鶴見さん、久しぶりね」

「あ、うん……」

顔見知りとの再会に、留美は軽く会釈した。

「で。貴女にも見回りの仕事を任せただけなのだけど」

「生憎と覚えていないし、何より絶賛迷子中よ。教室まで案内してくれると助かるわ」

「自慢げに言われるべき内容が一つもないわね……。貴女の教室ならちようど一つ真上  
よ」

毎度のことだけど、なんで迷子になったときほど目的地が近くになるのかしらね。

「……可思議つて、本当は馬鹿なの？」

「馬鹿と方向音痴は別物よ。よくいるでしょう？ 成績悪いのに校外学習の時だけは張

り切るやつ。私はアレの逆なのよ。……じゃ、見回りは適当にやっておくから、なんか

あつたら平塚先生に言っておいて頂戴」

「貴女が働く気は無いのね。……もういいわ」

留美は方向音痴じゃないみたいで、教室までむしろ私が案内されてしまった。

「今晚、君は来ちゃいけない!」

「そんなつ! どうして! 俺たちはずっと一緒だつて言つたら?」

私のクラスの出し物である演劇は、ほとんど満席状態。葉山と戸塚のシーンを客席の後ろから二人で見ているけれど、……。

「……ねえ、確かあの人つて、男の人なんだよね。林間学校の時にもいた」

客席の黄色い声援をあげる女子たちを理解できないような目で見ながら、留美はヒロインが戸塚であることに疑問を持った。

「僕を見ると、悲しむかもしれない」

「俺たちはずっと一緒だ!」

「仕方がないんだ! 僕のこととは諦めて!!」

「俺たちは、ずっと一緒なんだ!!」

星の王子様の原作を読んだことはないから、二人のやりとりが原作のものなのか知らないけれど、なんかもう薔薇園にしか見えなかった。

劇が終わって、教室から出ると、留美は私の袖を引っ張った。

「ん、何かしら？」

「……女子高生って、ああいうのが流行りなの？」

「いや、イケメン目当てが大半だと思うけど……、間違いなくああいうのが好きな人はいたでしょうね。……多少マニアックな趣味を持つっていうのは外部の友人を作るなら有効な手段ではあるけど、留美にはああなあって欲しくないわ」

「うん、大丈夫。よく分かんなかったから」

「わかった上で拒絶できないといけないけどね」

「じゃあ、可思議が教えて」

「私に薔薇の趣味があるみたいな言い方はやめなさいな」

「ああいう感じの小説は書かないの？」

「書いたことはあるけどウケが悪かったのよ」

「……あるんだ」

アレは、ただの気の迷いだった。

何かと間違えて買ったBLゲームをとりあえずプレイしたら、思いの外面白くって、そのまま勢いで小説も書いたけど、後々読んでみたらそもそも面白くなかった。

「来たよ、お姉ちゃん。留美ちゃんも久しぶり」

次はどこに行こうかと話していたら、三子が私たちを見つけて、人混みを通り抜けてきた。

「えつと、……確か、三子さん？」

「うん。お姉ちゃんが迷惑かけなかった？」

「すぐ迷子になったりしたけど、平気」

「じゃあいつものことだね」

幸い、三子なら知らない場所でも私を案内できる。どうせ行きたいところなんてなかったし、三子の行きたいところを巡りましょう。

適当に昼食を終え、二つ三つ出し物を巡った頃合いに。最近になってメール機能を使えるようになったスマホに、着信が入った。

「……三子、これどうやって出るんだっけ」

「お姉ちゃん、いつから機械音痴のキアラになったの……。ちよつと貸して」

電話が来るのがそもそも久しぶりだし、バージョンアップの影響か画面の配置も違つたしで、私には難易度が高かつた。三子に出てもらつてから、私は受け取る。

「もしもし。何かあつたら平塚先生に伝えるよと言わなかつたかしら」

『平塚先生にも伝えたわ。いいから急いで来て頂戴』

プツリと、雪ノ下からかかつてきた電話はすぐに切れた。

「可思議、どうかしたの？」

留美が心配そうに尋ねた。

「緊急事態、みたいね。流石にいかなきゃだし、……三子、留美をお願いするわ」

「うん、わかつた。……手伝えることはない？」

「平気よ。……留美、悪いわね。私の財布を渡しておくから、好きに使つていいわ」

「んーん、いいけど、大丈夫なの？」

「いつものことよ。諦めて、妥協して、下り坂を惰性で降りる」

廊下の人の数がかかり減っているけれど、そういえば蒼さんの人形劇がそろそろかしら。

「これからのおすすめは体育館のステージよ」

今、体育館では雪ノ下の姉の方が、複数人とで演奏をしていた。音楽はあまり知らないけれど、ジャズというのかしら。

予定では、この後に蒼さんの人形劇が待ち受けている。私も普通に見たかったのだけれど……。

私は舞台裏で何があつたのかを聞いた。

「さがみ……………、誰？」

「不可思議、お前なあ…………。君の嫌っていた、実行委員会の委員長だ」

そう。その委員長がいなくなつたらしい。このままだとエンディングセレモニーができないから、急いで見つけなければならぬのだとか。

「なら貴女が代役をしたらいいと思うわ、あたし」

「…………それは難しいです」

出番に備えて、自分と同じくらいの大きさの人形達を率いた蒼さんが提案するが、雪ノ下は首を横にふる。

「最後の挨拶や総評はなんとかなつたとしても、優秀賞と地域賞の投票結果を知っているのは相模さんだけですから」

「なら私が出るわよ？」 『委員長の相模さんは他人に仕事を押し付けるのが上手い人で、

最後の美味しいところも押しつけられちゃいましたー。地域賞と優秀賞は持ち逃げされたから、でつち上げです。落ちた人も気を落とさないでくださいねー』って、正直に言つてあげるわ」

「……色々言いたいことはあるが、君が普通の女子高生らしい口調で話している光景は、思いの外恐ろしい物があるな」

「当然却下よ。いくら恨みがあつたとしても、そんな公開処刑みたいな真似はさせられないわ」

「うふふ。その処刑、されるのは可思議ちゃんなのかしら、それとも委員長ちゃんなのかしら」

いい案だと思つただけけど……。これもダメで、アレもダメじゃ、探さなきゃいけないんじゃないの。……探さなきゃいけないのね。この場において一番役に立たないのは、音楽も劇もできない私なのだから。

「まあ、逃げた先で見つかるのがイケメンでは無く私にだったら、それはそれで嫌がらせくらいにはなるかしらね」

「相模さんの居場所に心当たりがあるの？」

「私は方向音痴なのよ。そんなものあつたところで、行方不明が一人増えるだけ。……平塚先生」

「なんだ」

どこか期待したような、楽しそうな笑みを浮かべている。……けどそんな、楽しそうな話ではない。

「学校で死ぬならどこで死にたい？」

「嫌に物騒だな……。サスペンスで定番なのは、夕暮れ時の無人の教室とか、トイレとか、あと屋上くらいじゃないのか？」

指を折り数えながら平塚先生は言い、雪ノ下と生徒会長は顔を顰めた。

「屋上ならなんとか私でもいけるわね。上に登るだけだし」

「流石に自殺は無いと思うけどな……」

「それが一番楽なのだけどね」

生徒会長の考え方も、まあ方向性的には間違っていない。方向というか、方角的というか。

詰まるところ、件の委員長は逃げたのだ。委員長であることを諦め、チャホヤされることを諦め、今後どうなるのかも考えずに未来を妥協した。

楽をしたツケが回ってきて、不相応な仕事という罰から逃げようとした。

この世に免罪符なんてものはない。過ちを打ち消すには、打ち消せるだけの何かを払わなければならないし、それも無いなら罰を受けるしかない。——その罰からも逃げ

た。

「どうせ推測だからイメージでいいのだけれど、どこの屋上が一番人が居なさそうかしら。人が居なくて、だけど探すなら選択肢に入る程度に入りやすい、使い道のない屋上」  
 委員長長の望みは、決して今日を隠れ潜んで乗り切ることじゃない。むしろ、見つかることを望んでいる。御伽噺の王子様のような、汚いところも受け入れてくれる聖人<sup>イケメン</sup>君子の手で、罪人を引き上げる蜘蛛の糸で、救われたがっている。——悲劇のヒロインを望んでいる。

「……特別棟。あそこなら人が寄り付かないし、出入りも簡単よ」

雪ノ下が、思いついたのか思い出したのか、そんな様子で言った。

「どこよそれ」

「私たち奉仕部の部室もある校舎よ。……そんなことも知らないの?」

「建物の名前なんてスカイツリーと金閣寺だけ覚えておけばいいのよ。……長話になるかもしれないから、蒼さんも時間稼ぎよろしく」

「可思議ちゃんの頼みなら任されてあげるのだわ、あたし」

蒼さんは微笑み、人形劇で使われる、蒼さんと同じくらいの大きさの人形達がピタリと敬礼する。

あーあ。本当に、本当に、……あーあ、よ。蒼さんの人形劇は楽しみにして

いたのに。  
あーあ。

## やっぱ文化祭が祭りなのは間違っている。『結』

現実には小説よりも奇なりとは言うけれど、しかし現実には小説ほどに入り組まない。殺人事件に真犯人なんていないし、親友と同じ人を好きになったりもしないし、曲がり角で偶然ぶつかったりもしない。名探偵なんていないし、学園のマドンナなんていないし、運命の赤い糸は繋がらない。

「いい加減、漫画と現実の区別はついたのかしら？」

「……私を笑いにきたの？」

特別棟を上へ上へと登って屋上に出たら、そこには案の定委員長がいた。

「笑える程に大した顔じゃないでしょう。ステージで笑い者にするために連れ戻しに……間違えた。エンディングセレモニーで晒し者に……これも違う。……嗚呼、そう、責任。責任を取らせに来たのよ」

「……意味わかんないんだけど」

「低脳である自覚があるのならそもそも委員長になんてなるんじゃないやなかったわね。自覚があったからこそ、私たちに、というか雪ノ下に依頼できたのでしょうか？」

「……だったら、雪ノ下さんがやればいいじゃない!!」

「文句はお金を払ってから言いなさい」

そういえばこの言葉を最初に言ったのは、批判から逃げるためだった。面白くないと言われるのが嫌で、つまらないと言われるのが嫌で、嫌われているのを知るのが嫌で、嫌で嫌で嫌で、現実の辛い部分から逃げるために言い始めた。

「他人に罪を押し付けるのも罪なのよ。諦めて責任を取って楽になりなさい」

でもそれがいつの間にか、ただ他人を黙らせる文句に成り上がっていた。

——妥協と諦めこそ解決の近道。

——苦悩と工夫は成功への遠回り。

——生涯不変で障害普遍。

と、その時。

屋上のドアが開く、錆び付いた音が響いた。

出てきたのは、葉山と、相模の取り巻きの女子二人。

「連絡とれなくて心配したよ。色々聞いて回って、不可思議さんが階段を登っていくのを見たって聞いてさ。もしかしてと思って」

……私への嫌がらせのつもりかしら。だったら正解ね。流石に運動部の男子相手じゃ喧嘩にもならないし。

「早く戻ろう。みんな待ってるから」

「そうだよ」

「心配してるんだから」

葉山の登場で、委員長の口元に余裕が見えた。念願の王子様の登場なんだから、そりゃそうね。

「でも……、今更ウチが戻っても、合わせる顔が……」

「大丈夫。相模さんのために、みんなも頑張ってるからさ」

このまま放っておけば解決するんでしょうけれど。それこそが私のできる最大の妥協点なんでしょうけれど。……我慢しなければいけないのなら、苦悩しなければいけないのなら、話は別。

妥協すれば解決するかもしれないけれど、それで苦悩していちや成功できない。

苦悩なく、妥協なく、工夫なく、諦めなく。

私の名前は不可思議可思議。

生涯不変の小説家で、障害普遍の焼舌家。

「……そういえばスローガン候補の一つにあつたわよね。ONE FOR ALL、一人はみんなのために。その対義語がALL FOR ONE、みんなは一人のために」  
「……何が言いたいんだい、不可思議さん」

葉山は訝しげな表情を浮かべている。

「よく言ったものだ、今ふと思ったのよ。一人はみんなの為に、これはまんま雪ノ下のことよね。そしてみんなは一人の為に、これは委員長のことまんまよ」

「……どういうことよ」

「みんなは一人のために。みんなが一人のために。つまり、逆説的に言えば、一人がみんなに迷惑をかけたつてことよね。……人の顔を覚えるのが苦手だからあまり出てこないけれど、生徒会長、雪ノ下、私、葉山。少なくとも四人は困らされた」

「いや、俺はそんな、迷惑だなんて思っていないつて」

葉山はそうフォローするが、私は葉山に向けて話してなんかいない。被害者ではなく、加害者の問題だ。

「……依頼に来たときにも言ったけど、被害者ヅラが気に食わないのよ。他人に散々迷惑かけておいて、自分は悲劇のヒロイン気取り？」

「……黙ってくれないか、不可思議さん」

いつかのチェーンメールのとき、三人を犯人扱いしても怒らなかつた葉山の、初めて聞く、怒気の滲み出る声。

「いいえ、黙らないわ。あなたが今怒っているように、私も怒っているのよ」

——シンデレラを愚弄するな。

——白雪姫を愚弄するな。

——赤ずきんを愚弄するな。

——茨姫を愚弄するな。

——グレーテルを愚弄するな。

悲劇のヒロインは決して心配されてはいけない。

悲劇のヒロインは決して同情されてはいけない。

悲劇のヒロインは孤独でなければならない。

「他人に迷惑をかけることしかできないのなら、そんな人間はヒロインでもなんでもない、ただ死ぬべき魔女なのよ。——自分が傷付くのが嫌だったら、何もせずに死になさっ——」

「二人とも何をっ!?!」

腹部に刺さる、鋭く鈍い衝撃と痛み。続いて右頬に破裂音と猛熱。遅れて痛み。

「イツグイ……、やって、くれるわね……」

私の鳩尾をぶん殴ってくれたのと顔面にビンタをくれたのは、取り巻き二人だった。私が立っていられず動けない間に、その二人は委員長を連れて何処かへ去って行く。

葉山は追いかけるでも叱責するでもなく、私を見下す。

「……最後のは、たしかエヴァンゲリオンのセリフだったね」

「ああ、……言つてて、どっかで聞き覚えのあるセリフだと思ったわ」

呼吸が上手くできないくらいに苦しいし、右頬は湯呑みでも当てられてるように熱い。涙が出てきて目元が痒いし、立ち上がる気力も沸かない。

「嫌いな君だから言うけど、俺は俺で、相模さんを指名した責任を取ろうと思つてここに来たんだ。……もちろん、心配したことも嘘ではないけど」

「私も貴方のことは嫌いだよ。他人のために怒れる人間は、何かあつたときに他人のせいに行ける人間だから」

「君だつて怒つていたじゃないか」

「私は私が気に食わなかつたから怒つていただけよ。他人なんて他人だよ」

半分くらい嘘だ。言葉にするのも面倒なくらい、何もかもに私はイラついていた。

「……あーあ」

後日談。

私ができ上がったのは、エンディングセレモニーまで何もかも終了した後のことだつた。

戻つてこない私を心配したらしい平塚先生が駆けつけてきて、動く気のない私を力尽

くで背負った。

「君のような人間でも泣くんだな」

「うっさい」

誰かに背負われるなんて、初めてのこともかもしれない。母親は絶対そんなことしないし、三子は私を抱きかかえるから。

「……むしろ私は泣き虫なのよ。感想で『つまらない』の一言でも書かれてたら、泣き疲れて眠って、妹に迷惑かけるし……」

不味い。予想以上に弱ってる、私。

「文句があるならお金を払いなさい、だったか。確かに言われたら腹が立つが、その言葉そのものは嫌いじゃないぞ」

「……その言葉には続きがあるのよ」

——文句があるならお金を払いなさい。窓口はないし投げ銭は投げ返すけどね。

詰まるところ、着信拒否だ。

「アツハツハ！ そういうところが気に入っているんだ。包み隠さずに秘め守ると言うのは、誰にでもできることじゃない」

「包み隠さず、秘め守る。……いい言葉ね。初めて平塚先生をちよつとだけ尊敬したわ」

「ちよつとって……。具体的にはどれくらいなんだ」

「蒼さんが最高位なら、働きアリの働かない方ぐらいね」

「ちよつとすぎないか!？」

「サイズ感の話よ」

「最高位でも小さいじゃないか……」

教室か職員室にでも下ろされるかと思つたら、平塚先生は背負つたまま校門を出た。

「このまま家まで送つて行こう。今の君は放つたらかしたら、家どころか野生に帰りそうだ」

「流石に通学路で迷子になつたりはしないわ」

「それに、私は泣かされた生徒を鼻屑でできる程度には教師に向いていないんだ」

「……私を落としたいところで、サービスカットまでに感動ストーリーなんて無いしエロさなんてもつとないわよ」

「人を同性愛者みたいに言つてくれるな」

「あら。これで結構、好感度は高い方よ」

「ああ、君の方がそうだったな」

諦めたような、呆れたような、粘度の高そうな溜息を吐いた。

「時に、君はハッピーエンドとバッドエンド、どっちを好む？」

「どっちも嫌いよ。私はデッドエンド以外の終わりを認めない。……強いて言うなら大

団円ならぬ大往生ね」

「……………やはりか」

なんだか、知った風な口ぶり。

「君は他人に興味がないようで、その実誰よりも人を見ているし、我が事のように苦しんでいる。……………見た目からはわからないが、なんとなくそんな気がするよ」

「鋭いわね。大体その通りよ。……………エンパステ質って知ってるかしら」

「詳しくは知らんが、共感力だか靈感だかが強いんだったか？」

「大雑把に言えばそうだけど、私の感覚的には、他人との境界が希薄ってイメージね。『我が事のように』じゃなくて、我が事なのよ。知らない人間でも目の前で人が刺されれば刺されたように痛いし、周りで百人苦しめば百倍苦しい。満員電車なんて地獄そのもの」

「……………」

「原爆云々の戦争映画を見れば核で焼かれたように辛いし、失恋シーンを見れば胸が張り裂ける。切開シーンのある医療系の映画やドラマなんか見た時には生きた心地がしない」

「……………」

「ポケモンで遊べば焼かれたり切り刻まれたりするし、スーパーマリオで遊べば足が痺

れるし疲れる。カービィで遊べば胃が破裂しそうになるし、ドラクエで遊べば死んでも死にきれなくなる」

「……そこまで、なのか？」

「悪いわね。愚痴っぽくなつたわ」

「そこまでなのか!?! ……いや、それで幾らか楽になるなら構わないよ」

「楽にもなれないのよ。私にとつて人との会話は自問自答みたいなものだから。……だから私は現実から逃げて小説で生きてる」

「……ままならないものだな。ついたから下ろすぞ」

別に足を痛めているわけでもないのに、私を丁寧の下ろした。

「まあ、礼を言うわ」

「君は軽いから、大した負担にもならんさ」

「そつちじゃなくて、よ。……まあ、気晴らしにはなつたわ」

「オイオイ、勝手に落ちてくれるなよ。同性で歳の差で教師と教え子とか、複雑超えて面倒くさい」

「平塚先生は面倒だけど、落とし甲斐のある人よ」

「私に惚れたら火傷するぞ」

「一度言ってみたかったセリフ10位、おめでとう。……また明日」

「待て！ なぜ知っているんだ!？」

……自問自答しているだけなのよ。

「おかえり、お姉ちゃん。……なんか、嫌なことと良いことが両方あったって顔してるね。お疲れさま」

「三子……。うん」

靴を脱いだ私を抱き上げ、そのまま抱き締めてリビングへと運んでいく。

「ああ、留美ちゃんは駅まで送っていったから。今度うちにも遊びに来たいって」  
「そう、ありがとう」

色々あったけど、まあ、めでたし、めでたし。

いつも私の青春ラブコメは間違っている。

「『体を崩す』と言うとファンタジー系のラノベの主人公の攻撃みただけで、『調』という文字を入れる調整をした途端、『体調を崩す』という青春ラブコメ用語じみた言葉が出来上がるのは、日本語の妙と言うか、日本人の業よね」

「お姉ちゃん、大人しく寝てて」

三子もそうだったけれど、私は季節の変わり目に体調を崩しやすい。というか、一区切りついて余裕ができる体調を崩しやすい。——水風呂にゆっくり浸かる余裕ができると体調を崩しやすい。

「でも病にかかると『体を壊す』とも言出し、なら肉体を崩壊させる魔法の類で、敵軍に不治の病を流行らせるということをして説明が出来てしまうのよね」

「……体調悪いと無駄に饒舌になるってあんたなんなの」

「饒舌家よ」

「お姉ちゃんは小説家でしょ。……ごめんね、私もう学校行かなきゃ」

「受験生にいらん心配かけるな。私ももう行くけど、大人しく寝てなよ」

「私をなんだと思ってるの」

「水風呂趣味」

……そうだけでも。

私の部屋だと仕事道具が手の届くところにありすぎるからと、リビングのソファに寝せられたまま、二人を見送る。……あんまり眠くないわね。

すぐそばのテーブルには三子が用意した、『お姉ちゃんでも分かる携帯電話の使い方』という電話のかけ方を丁寧に書き連ねたA4サイズの紙と、文鎮代わりのスポーツドリンクが置かれている。

……。

『もしもし、どうした不可思議。欠席の連絡はもう聞いたぞ?』

「今暇かしら。……授業時間だし、出られるなら暇なんでしようね」

三十分ばかりの苦戦をしながら、平塚先生に電話をかけることに成功したらしい。

『……まあ、今日の午前中は授業はないが。で、どうした?』

「恋愛モノでは風邪をひくと、心細く、寂しくなるそうよ。実際こうしてみると、風邪をひいたからっていうよりも、家に自分以外誰もいないという状況がそう思わせるので

しようけれど」

『……そうか。だが、暇つぶしの相手で真つ先に私が上がるのはどうかと思うぞ。君には一体どのレベルで友達がいなんだ』

「小学生も同級生も妹も、授業中に出られるわけじゃないじゃない。というか留美はまだ携帯電話を持っていないし、沙希と三子は普通に怒られるわ」

『私なら怒らないという発想に私も怒りそうだよ……。あと妹を友達枠に入れるな』

「兄弟姉妹なんて所詮は血の繋がった他人なのよ。だから血の繋がった友達も、血の繋がった親友も、血の繋がった恋人も、血の繋がった夫婦も、ありうるのよ」

『あり得ちゃいかんだろう、特に最後。何かの事件性を感じるぞ』

「事件なんて何も無いわよ。夫婦のように仲が良かったところで、別に何かに迷惑を掛けた訳でもない。姉妹に限るなら、近親相姦も悪くないと思うのよ」

『君とあの妹はそんな関係だったのか!?!』

「キスしたり、一緒に寝たり、裸で抱き合ったりするだけよ」

『……虚言に対するツツコミを過激な方向で肯定するのは君の悪い癖だぞ』

「大体実話よ」

『そういうところが悪い癖だと言っているんだ。……で、大体と言うならどのあたりが嘘なんだ?』

「私と三子が血の繋がった夫婦というのが嘘よ」

『それはまだ聞いていないぞ。未来の嘘を先に白状してくれるな。ツツコミ甲斐が無い』

「行間も読みなさいな、国語教師。……血の繋がった他人とは言ったけれど、どうなろうと私と三子の関係は姉妹よ。血の繋がった姉妹。……こう言うどめつちや普通の関係に聞こえるわね」

『急に我に帰るな。あと君の声で「めつちや」とか聞きたくなかった』

「失礼な。私だって健全な女子高生なのよ」

『君が健全なら世の大概の女子高生は潔白な女子高生だ。頭が頭四つくらい高いぞ』

「潔白な女子高生、いるのなら会ってみたいものね」

『嘘だな』

「クククツ、正解。そんな気持ち悪い生物とエンカウントなんてしたら、私は自殺の道を選ぶわ」

『それは道ではなく崖ではないのか？ ……というか、君も声に出して笑うのだな。意外というか、予想外だ』

「滅多に笑わない自覚はあるわ。……嫌というか、苦手なのよ、人に感情を見せるの」

『他人の感情を誰よりも見ている癖にか？』

「苦手というのには不得意って意味よ。……結局は自己嫌悪なの。他人と自分の境界が希薄だから、私の感情は周囲に引つ張られる。というか、塗り替えられる。コピーアンドペーストされる」

『共感力……、か。実行委員会の時も、そういうのはあるのか？ かなり苛ついているように見えたが』

「あれは、……そうね、スピーカーを搭載されていないパソコンの外付けスピーカーみたいなものよ。怒りたくても怒れない人間がいるのを私は知っている。泣きたくても泣けない人間がいるのを私は知っている。感情が溜まり込むと苦しいのも、私は知っている」

『なら聞くが、喜怒哀楽のうち、喜と楽も知っているんじゃないのか？』

「怒りや哀しみと違って、喜びと楽しみは人によって入力も出力も全く違うものよ。サディストがいればマゾヒストもいるようにね」

『その例えで納得した私の方が自己嫌悪に走りたくなってくる』

「笑えないのは周りに引つ張られて楽しんでいる自分を、それこそ他人事に見ているからなの。他人を切り離し、自分を切り離し。……だから私が笑うのはかなりレアなのよ、ラッキーね」

『……一応、前例を聞こうか』

「テニスコートの時よ」

『……三浦か。というかよく覚えていたな』

「女の脳は感情が動いた時のことを決して忘れないそうよ。……それが私にとつては貴重な経験だったから、あの時だけは自分のことも好きでいられた。……もつたいたいことをしたわ。もつと引き伸ばしていれば、一生分笑えたかもしれない」

『そうか。……ん？ ああ、はい。……すまん、長話が過ぎるとお叱りを受けてしまった。もう切るから、君は安静に寝なさい』

「迷惑かけるわね。……じゃ、また明日」

『ああそうだ、雪ノ下と由比ヶ浜に君のことを伝えておいたから。……じゃあ、おやすみ』

プツリと音を立てて、通話は切られた。

十分も経たない暇つぶしだったけれど、溜まっていた承認欲求の欲求不満はある程度解消された。

「あーあ。あーあ。あーあ」

……小説書きたかったのに、言いたいことを語り尽くしてしまった。こんな時は水風呂か不貞寝に限る。

何時間寝ていたのかわからないけれど、日が落ち始めた頃に鳴ったインターホンで私は目を覚ました。

カメラの向こうには、雪ノ下と由比ヶ浜の姿があつた。

「……おはよう」

『ナーちゃん、来たよー』

『挨拶を間違えているわ、あなたらしくもない。……辛いなら無理に出なくても構わないわ』

「……少し寝過ぎただけよ。コーヒーくらいは出すから上がって。鍵は開いてる」

『じゃあ、お邪魔するわ』

デイスプレイに映る、二人の姿が消える。

「……お姉ちゃん、お客さん？」

帰ってきていたらしい三子が、部屋から顔を覗かせながら尋ねる。

「三子は勉強中？」

「うん。コーヒー淹れるけど、何人？」

「二人よ。悪いわね」

「いいよ、私も飲むから。……あとお姉ちゃんが淹れたやつはあんまり美味しくない」

「悪かったわね」

「だから私以外に飲ませないでね」

「はいはい」

……コーヒーマーカーに入れるだけなのに、味ってそんなに変わるのかしら。

「お邪魔しまーす！」

「失礼するわ」

「……お姉ちゃんのために、ありがとうございます」

「気にしないで頂戴。話したいこともあったから」

二人は勧められるままに、向かい側のソファに座り、三子はコーヒーを出してから部屋に戻って行った。

「……そういえば、三子さんは受験生だったわね。申し訳ないわ」

「平気よ。成績だけ見るなら三子の頭の出来は上等だし、そんなに勉強熱心じゃないから」

「へー、三子ちゃん頭いいんだー」

コーヒーの味なんて、ただでさえ味覚の残念な私にはわからないけど。でも愛している人間から受け取ったものなら、泥水でもきつと美味しい。

「……何か話があつて来たんでしよう。語りきつた私に話せることは、聞かれたことくらいよ」

私が一人で座るには大人すぎるソファに深々と腰掛け、私は聞き手に回る。

雪ノ下はコーヒーをテーブルに置いて語る。

「まずは、ごめんなさい。相模さんの件、私が考えなしに引き受けたせいで、色々と迷惑かけたし、痛い思いもさせてしまったわ」

「私からもごめんなさい！ ……その、あんまり協力できなかつた」

二人から頭を下げられて、こつちまで謝意と罪悪感が湧いてくる。

「気にしなくていいわ。概ね満足はしているから」

「自己満足でしょう?」

「そうよ。そして今、ちゃんと満足した。蛇足はどれだけ達筆であろうと蛇足よ」

「それでも、こつちは納得いかないのよ」

「だからこそ満足したのよ。いっそ、『殴られてくれてありがとう』とでも嫌そうに言われたら、最高だったわ」

「……ナーちゃん、何言ってるの?」

「面倒だから平塚先生にでも聞きなさいな。三子と蒼さんを除けば、私を熟知しているのはあの人くらいよ」

「病人に無理をさせるわけにはいかないわね。その件に関しては以上よ」

「なら他の件があるのね」

「……前々から思っていたけれど、貴女つて人形にでも話しかけるように話すわよね」

「前にも誰かに言われたけれど、私は小説家よ。語る会話は自問自答。話す相手は自身」

「なら私の言いたいこともわかっているのね」

「私のやりかたが暴力的で気に入らないという話でしょう?」

「概ねその通りよ。やり方が幼いといえは満点だったわね」

「ククツ、クククツ。そうね。きつと私は大人にはなれない。やられたらやり返す以外の解決策なんて諦めて忘れる以外知らないし、他人任せ以外の動機なんて知らない。そして何より、座右の銘が生涯不変」

「……ナーちゃんさ、もつと自分を大事にしてよ」

「しているわ。私は常に自分のために生きてる」

「その自分の中に私達とか、優美子とかさがみんとかもいるから、……なんて言うのかわかんないけど、こう、なっちゃったんじゃないの?」

「ククククツ、その通り。だって、自分が傷つこうが他人が傷つこうが同じことじゃない」

「全然違うよ！ ナーちゃんはそうかもしれないけど、……あたし達は違うもん」

「由比ヶ浜さんの言う通りよ。これも貴女には分かっているのでしょうけど、不可思議さんが傷ついた時とその他の人達が傷ついた時じゃ、全く違うのよ」

「同じよ。バックノズルとジェイルオルタナティブ、どちらも私の好きな小説で出てきた用語だけど、簡単に言えば、ifなんてものはあり得ない。どんな選択をしようと起きたことは起きるし、私がいなくとも私の場所で誰かが似たようなことをして、その人が傷ついてあなた達は罪悪感を植え付けられた」

「机上の空論ね」

「誌面の概念よ。所詮人類は十人十色程度で、七十億人七十億色とはいかない。私の代わりだっていくらでもいるし、貴女達の代わりに成れる人間はいくらでもいる。この世に唯一無二の主人公なんていない。漫画と現実の区別はつけなさいな」

「お互いにね。……今日のところは帰るわ。あんまり三子さんに気を遣わせるのも悪いし」

「あ、じゃああたしも。えっと、お大事にね、ナーちゃん」

「ん。多分明日には完治しているわ」

私の物語に、終わりはない。

だから、『めでたし、めでたし』とも、綴らない。

たぶん海老名姫菜が美少女なのは間違っている。『羊』

一日休んだ翌日。

何事もなく放課後まで過ごしたけれど、しかし放課後に平塚先生から呼び出された。

「進路希望調査がまだ提出されていないのだが、どういうつもりだ？」

「今より先に進んだりしないもの。高校だって親に言われて受験したらなんか受かったらただけだし」

先って言えば、それこそ書籍作家とかアニメ作家とかそういう、アンチの湧く世界だ。そんな地獄に進んで行く気はない。

「別に、未来を決める予言書じゃないんだから、適当に書いて出せばいいんだよ」

言いながら、座る私の前に未記入の進路希望調査票を差し出してきた。

「君の人格は心配しているけど、君の将来についてはあまり心配していない」

「そう」

《アイアンマン》

「……さては休んでる間に観たな？」

「ああいうの、先入観で食わず嫌いしていたけれど、観てみたら面白かったわ」

「七夕に戦隊モノの名前を書く子供か君は」  
「小説家よ」

私の評判が『整形疑惑』『同性愛好者』『文化祭の件』とかとかで散々になつてから、暫く何もない日々を過ごしていた。それこそ、体育祭なんか何も起きずに、何もせずに終了したくらいだ。

その分、学園百合モノの小説を書いてみたら想定以上に見られて、文化祭で起きた損失を遥かに上回る収益が出たりした。

そんな日々も終わりを告げる。

「不可思議さん。修学旅行のことなんだけど……」

「シューガク・リョコー？ ……何よそれ。美味しい洋菓子の正式名称？ 悪いけど私、日本語専門だから」

「えっと、シュークリームのこと？ 全然違うつてば。修学旅行。修めるに、学ぶ、旅に行く、で、修学旅行」

相変わらず居心地の悪い教室でノートパソコンに打ち込んでいると、戸塚が話しかけ

てきた。

「旅行なんて私に出来るわけないじゃない。千葉県内どころか、校内ですら迷子になるのよ。平塚先生を説得して私は近場のコンビニで済ませるわ」

「いやアンタ、そんな断りにくい飲み会の誘いじゃないんだから……」

沙希が呆れたように言いながら、家を出る前に結えなかった髪をポニーテールに結う。

「そもそも班行動が基本なんだから、単独行動さえしなければ平気でしょ」

「そつ、そうだよ！」

「なら二人に案内を任せるわ。……行かなかつたらそれはそれで三子に心配されるし」

「ほんとおつ！　じゃあ一緒に班だね！」

「……いやまあ、私もいいけどさ。アンタほつたらかしてどうなるか分かつたもんじゃないし」

……外見だけは麗しい三人組が出来た。一人は社会不適合者、一人はオカンの姉御肌、一人は男の娘で、普通の奴なんて一人もいないけど。

「そもそもだけど、どこに行くのよ。私はローソンに行きたいわ」

「アンタの旅行判定どんだけ狭いのよ」

「京都だよ。金閣寺とか、清水寺とか」

……へえ。京都、ねえ。

放課後。

いつも通りといえば、いつも通り。部室で小説を書いていたら、依頼人がノックをしてやって来た。

来たのは、葉山とその友人のヘアバンドをつけた煩い奴。……名前はそう、……ドベ？

「何かご用かしら」

「ちよつと相談事があつて連れてきたんだけど……」

「いや、やつばないわ」

葉山に背を押されるも、ドベは首をブンブンと振った。

「七五三なごみさんに相談とかないわ」

「頼みに来たのはこつちだろ？」

「いやでもほら、七五三なごみさんにはこういうこと話せないでしょ。信頼度ゼロだわ」

……この部活にそんな、平等なだけの人外のパチモンみたいな名前の人、いたかしらね。

「……不可思議さん。何をそんな不思議そうな顔をしているのか知らないけど、怒った時は怒るべきよ」

「ドベと言ったかしら。彼にしか見えない地縛霊か何かがいると思ったのよ。私のことだったのね」

「戸部つちの言ってることはひどいけど、ナーちゃんの呼び方大概だ……」

……まあ、地縛霊っぽいのは否定しないけど。遠距離移動とかほぼ不可能だし。

「……まあ、不可思議さんの自業自得なところもあるけれど、それでも彼女も部員よ。奉仕部は金を基本受け取らない方針だけど、それでも彼女の言い方を借りるなら、……文句があるのならまず礼儀を弁えなさい」

そのセリフ、対価を払えば文句を受け入れるという意味では言っていないのだけけどね。

「……まあ、俺たちが悪いな。戸部、出直そう」

「う、うくん……」

「俺たちだけで解決すべきだ」

「いやっ、もう後には引けないでしょお、コレ」

葉山の言葉も拒否して、ドベは言った。

「あいつ、実は俺さ!!」

口調が煩かったから手短かに要約すると、クラスメイトの腐女子、海老名姫菜に告白して付き合いたいらしい。

見たところ葉山は乗り気ではないのが気になるけれど……。

「そうそう、そんな感じ！ 流石に振られるとかキツイわけ！」

「振られたくない、ねえ……」

「なんかそういうのすっごくいいじゃん！ 応援するよ！」

まあ、由比ヶ浜の言う通り、応援は出来る。

「やっぱり、難しいかな……」

葉山は苦笑いしながら言った。

「一応聞くけれど、葉山含めてこの面子の中に恋愛経験者はいるのかしら？ 片思いで

も一目惚れでも付き合ってたでも、微小なりとも経験してきた？」

試しにと言ってみたけれど、全員が顔を逸らした。

「……つまり、あつても片思い止まりってわけね。つまり四捨五入すればゼロ」

「大事な思い出を切り捨てちゃダメだよ！ ナーちゃんは無いの!? そういう話！」

私の恋愛話……。周囲にいる男なんて戸塚くらいしかいないし……。あ。

「そういう惚れた腫れたの類なら、平塚先生かしらね」

「なんで言えるの!? しかも色々禁断すぎる……」

「同性愛は別に否定しないけれど、年齢差や生徒と教師という関係は大きすぎる障害ね」  
「本人にも言われたわね、それ。複雑超えて面倒臭いつて」

「告つたんだ……、というか振られたんだ……」

「……どうなのかしらね。何をもって告白の言葉と定義するか、何をもって失恋とするのか。小説でも難しいところなのよ。」

「……悪いけれど、お役に立てなさそうね」

「えー、いいじゃん！ 手伝ってあげようよ」

雪ノ下が断ろうとして、由比ヶ浜が駄々をこね始めた。断る側を多数派としたいのか、雪ノ下は私に視線で訴えてくる。

「七五三なごみさんつ、オナシヤス！」

「そう言われてもね……。振られる覚悟もないチキンなんて、女から見ればフライドチキンの方がフラれてるだけまだマシよ。諦めて葉山と付き合つて、エビフライさんのオカズになりなさい」

「ナーちゃん酷くない!?!」

「でも割と的確で、しかも上手いわね」

「そこで俺も巻き込まれるのか……」

これでも小説家なのよ。

「ゆきのーん、ナーちゃーん、戸部っちも困ってることだし……」

「……まあ、そこまで言うのなら考えてみましょう。不可思議さんは？」

雪ノ下は折れた。

ならもう、ドミノ倒しのように私も折れるしか無くなる。

「……………はいはい。構わないけれど、幾つか条件を設けさせて頂戴。そっちの方がお互い、信頼度はともかく、安心感は得られると思うわ」

「条件？」

ノートパソコンの文書作成ソフトに、思いつく限りのことを書き記す。

その一

最終的に振られたとしても基本的に依頼人の責任である。その後の人間関係については関知しない。

その二

告白する前に、完全に脈なしだと判明した場合、潔く諦めること。例として、本人が「今誰かと付き合う気はない」なんて言ってるような場合や、他に付き合っている者がい

た場合。

その三

期限は修学旅行終了までとする。それ以降はまた別途ご依頼を。

その四

奉仕部、依頼人の全員に諦める権利がある。決して何かを強制してはいけない。

「まあ、ざつとこんなところね。文化祭の反省を踏まえ、これくらいのご事は事前に決めておいた方がいいと思うのだけど、……何か文句はあるかしら？」

見やすい程度に拡大して、全員に見えるように見せる。

「文句があったところで君は聞き入れないだろう。……しかし、よくここまで思いつくな。俺は悪く無いと思うけど……」

「つべく。……もしかして七五三なごみさんってマジスゲエ人？」

「期限を設けたのは何か理由があるのかしら？」

雪ノ下が軽く挙手しながら尋ねる。

「そりゃ、タイムリミットがあつた方が緊張感が増すでしょ。……それに、他人の恋愛沙汰なんて押し並べて面倒くさいモノなんだから、そんな長々と付き合っていられないわ。私は部活の他に仕事があるの」

「タイムリミット云々が建前すぎるわね……。まあ、私は異論無いわ。何か足りなかったら随時追加つてことで」

「あたしもいいと思う！」

「戸部、どうなんだ？ 結局はお前次第だぞ」

「そりやもちろん！ よろしくお願ひします!!」

……奉仕部に来た依頼人史上、最も大声の返事だった。煩い。

ドベと葉山は部活があるらしく、具体的にどうするかは後日ということになった。

そして、数日後。新たな依頼人によって扉がノックされた。

「失礼しまーす」

やってきたのは、ボブカットで赤いメガネの女子。

「て、姫菜じゃーんっ！」

「やつ、結衣」

奇妙な挨拶を由比ヶ浜と交わしながら、雪ノ下に勧められて席に座る。

「その、戸部つちのことで、ちよつと相談があつて……。その、できれば七五三しめさんに」

「…………え、私?」

「海老名さん、それは奉仕部に依頼ではなく、個人的な相談ということかしら?」

雪ノ下が尋ねると、彼女は慌てたように首を横に振って否定した。

「ううんっ、違う違う! お願いたいことはあるけど、…………でもその、相手によっては話しくいっていうか、なんていうか…………」

「別に構わないわ。奉仕部に依頼つてことなら、私から伝える分には構わないのでしよう? 言うなど言うなら言わないし、私は内容次第じゃ普通に断るけど」

「うん、ありがとう」

彼女は丁寧な、礼儀正しく頭を下げた。

「…………不思議さん、大丈夫なの?」

「まあ、人間関係の外側にいる他人の方が話しやすいこともあるでしょうよ。別に、薔薇の布教がウザい程度で蹴ったりはしないわよ」

「その心配はしていなかったのだけれど。…………いざ言われたらそっちの方が心配になるわね」

「ああ…………、優美子を笑いながら蹴り倒してたもんね…………」

「姫菜、ナーちゃんを怒らせちゃダメだよ!」

「…………私は集落の守神か何かなの?」

「七五三さん、ファンからしたら割とそんな感じだよ」

……私のファンってそんな感じなんだ。

私と彼女は、いつかの因縁の地、……と言うほど思い入れもないけど、あまりいい記憶のない、この特別棟の屋上へと出た。

「で、なんの話なのかしら、エビフライさん」

「……私のこと、そんな呼び方してたの？」

「狂人の多い薔薇趣味の人間の中でも特殊だから流石に覚えるわよ」

「待って。それで覚えてるつもりなのなら覚えられてない。私の名前は海老名<sup>えびな</sup> 姫菜<sup>ひな</sup>」

「エビ ナヒナ？」

「発音がエビフライに引つ張られてる!？」

「もういいかしら、エビ」

「苗字呼びしようとして悪口みたいになってる！ 私別にエビの国の使者とかじゃないよ!？」

「別に、貴女がエビでもカニでもタコでもなんでもいいのよ。イカリングになりたくなければさっさと本題を話さない」

「アツ、ハイ」

彼女が語ったのは。望んだのは。それは言ってしまったえばドベ……じゃなくて戸部の告白を阻止し、現状の人間関係を維持すること。

これまで散々、居心地の悪い思いをしてきたため、今のような環境は久しぶりだとも語った。

「……それで、なんでそれを私にだけ話すのかしら」

「わかってもらええると思つたから、かな。なんていうか、……同類の臭いがした」

同類……、ねえ。

「まあ、当たらずとも遠からずかしらね。三人称視点と語り手視点。真逆のようだけどやっつてることの本質は似ている」

「や、そうじゃなくて。七五三さん……、もう私も不可思議さんって呼ぶね？ 不可思議さんって、百合が好きなんじゃない？」

「それなら同類どころか真逆でしょうよ。相要れる相容れないじゃなくて、端点と端点で」

「アツハハ、そうかもしれない。でも、お互いに端点だからこそ分かってくれた」

まあ、そもそもの話、同性愛と異性愛にも大した違いなんてない。人を好きになるのに理由なんて必要ないんだから、男が男を好きになろうと、女が女を好きになろうと、異性を好きになろうと、そこにあるのは性別という小さな差が一つあるだけ。

その差を大袈裟に騒ぎ立てて差別する者がいるだけで。

「それも違うわね。諦めと妥協を許容している、私が誰かと似るなら、そういうところでしようよ」

「……諦め、妥協。……うん、そうかもしれない」

「でもまだ諦めきれないから、こうして依頼にきた」

返答は無い。

彼女は静かに屋上の扉を開けた。

「いつか暇なときにも、どこかでお茶しようね。お礼に奢るよ」

「まあ、腐り合いながらもよければ付き合おうわ」

もう既に成し遂げたような表情をして、彼女は奉仕部を去って行った。

たぶん海老名姫菜が美少女なのは間違っている。『頭』

修学旅行当日。

私たちは新幹線に乗り込んでいた。……別に侵略とかそういう意味ではなく、乗車という意味だ。

「公共の椅子って、どこもかしこも大きいから腰が痛くなるのよね……」

「なにその、うっかり聞き逃したら勘違いしそうになる言い回し」

「あはは、まあ体格はしやうがないよね……。僕は温泉で男湯に入って通報されたことがあるよ」

「あんた達も苦労してんのね」

「沙希はないのかしら？ 微妙に笑えないけどいつそ笑い話にしてしまいたい勘違いされエピソード」

「タイトルが長い。それに私は別に……。あ、妹と一緒に出かけるとよく親子に間違われるかな。……つと、ほら、こつちきて」

沙希が窓側に座ったかと思ったら、腕を引っ張られて、そのまま膝の上に乗せられた。「三子ほどじゃないにしても、幾らかマシでしょ」

「あはは、そうしてると姉妹みたいだね」

確かにマシだけど、別に楽だから三子に乗せられてるわけではない。あれは抱き枕かぬいぐるみにするのと同じように、愛情ではなく愛着で近くに置いてあるだけ。

「そういえば沙希の妹とは会ったことないわね。今度うちに連れてきなさいな」

「いいけど、……手え出したら殺す」

「人をロリコンみたい……。普通に会ってみたいだけよ。クラスメイトでも半ばどころでなく妹扱いできる沙希の、マジの妹を」

「あんたが特殊すぎるだけだから。あとマジじゃない妹ってなんだよ」

「そうね……、義妹？」

暫く適当に雑談していると、新幹線は京都に到着、クラスごとでの観光が開始した。

神社仏閣の類を転々と巡り、集合写真を取ったりお参りしてみたりお土産見たり、結構バラバラに見て回っている。

「ナーちゃん、あんまり楽しくなさそうだね。また乗り物酔い？」

「いや、普通に退屈なのよ」

自販機でコーラを買ってからベンチで休んでいると、由比ヶ浜が話しかけてきた。

「なんで？ 初めてくるところだし、意外と面白いところもいっぱいあるよ〜」

「京都は母親の地元なのよ。ここだって家族で何回も来たことがあるし、親戚にうち連れ回されたから、私にしてもほとんど地元みたいなものよ」

「うわあ……」

「地元民は地元の観光地に行かないっていうけど、千葉に住んでた私には新鮮だと思われたんでしょうね。……その頃には冷めてたから、最初っから楽しめてもいなかったけど」

「うわあ、うわあ……」

「その態度がさらに何かに火をつけて、観光地だけじゃなくてあちこちの料亭やらにも連れまわされたわ。……味の違いが分かるほど私の舌は達者じゃないのに」

「もうやめてナーちゃん！ 親戚の人たちが居た堪れないからー！」

「はいはい。……ところで、依頼の方は順調なのかしら」

現状、私は大勢の中に入って行きにくいし、完全に裏方に回っている。裏方と言っても、できることなんて偶にメールでアドバイスする程度だけだ。

由比ヶ浜は、気まずそうに目を逸らす。

「まあ、その……。ごめん、今んところ『いい人』止まり」  
「そうでしょうね。見てれば分かるわ」

戸部自身、私たちがなにもせずとも、ちよいちよい海老名に近寄って二人で何かしている。けれど、どう見てもただ仲のいい友達同士にしか見えない。——友達同士で一生が終わるようには見えない。

「……腐女子の恋愛感情って、どんな構造なのかしらね」

「ナーちゃんでもわかんないの?」

恋をしてるか否か程度は見ていればわかるけれど、好きというのはい口に言っても色々ある。三子が私に向けるような愛着、留美が私に向ける敬愛、沙希が私に向ける友愛、葉山が周囲に向ける他愛。

「さて、どうかしらね。人の考え方や考えてることが分かったところで、その程度じゃその人を分かったとは言えないのよ」

「じゃあ、あとなにを知ればいいのか?」

「なにも知らなければいいのよ。他人なんて知らない方がよっぽど愛しやすい。知れば知るほど、弱みに付け込んでるだけなんじゃないかと思えて愛せなくなる。……頭の弱い馬鹿の方がよっぽど恋愛経験が豊富なのは、きつとそんな理由なのよ」

「……そっか」

それでも尚知りたくて、全てを知っても、嘘、偽り、躊躇い一切なしに愛したいなら、盲目に愛するしかない。

旅館で夕食を終え、あとは数時間待って入浴して寝るだけだったのだけれど。

ホテルのロビーで、室内なのにサングラスをかけたか、妙にコソコソしてたりと怪しい格好をした平塚先生と出逢ってしまった。

「……あ」

他人の振りをすればいいものを、しかし平塚先生はそういうことがとてつもなく下手くそだった。

「ハア。……せっかくだし、ちよつと付き合いなさいな」

「今からどこかへ出かける気なのか？」

「昔からの知り合いに会いに行くだけよ。夜じゃないと開いてないし」

「飲み屋か何かか？」

「まあ、酒はあるでしょうけどね」

私達二人で外に出て、一分としないうちにタクシーを捕まえた。

「ドーも、おこしやす」

「それ、タクシーでも言うのだな……」

タクシー運転手のおそらく観光客向けの挨拶に、平塚先生は思わずツツコミを入れていた。

「三年坂の近くまでお願いするわ」

「こないな時間に、観光かいな？」

「知り合いを訪ねに行くだけよ。別に観光でもないわね」

旅館から三年坂までは、そこそこ時間がかかるらしい。

「とういか、京都に知り合いがいるとはな」

「地元みたいなものなのよ。生まれだけなら京都だし、どつかには親戚もいるし」

「その割に、京都弁じゃないよな」

「……いけずなこと言わはるなあ」

「ああ、なるほど。大体分かった。君、面白いくらいに京都弁が似合わないな」

「なしてそないなこと言いはるん？ かなんなあ」

「悪かったからやめてくれ」

「……うち、せんせのこと好っきやわあ」

「やめろ。……不覚にもキユンときた」

「クククツ。ほんま、かいらしなあ」

京都弁を多少話せはするけれど、これは京都生まれとかよりも小説家としてのスキルという側面の方が強い。訛りさえ掴んでしまえば、話せないこともない。

「まさか、そっちが素だったりしないよな？」

「そんなわけないでしょう。可愛げがありすぎて私には似合わないわ。……でも案外効いているみたいだし、たまに使ってみるのも良いかもしれないわね」

「全員が混乱すると思うぞ」

「でもうちの口調、雪ノ下と被ってはるんよねえ」

「気に入ったのか？」

「まあ、そうね。今のは演技臭くなっただけ、日常会話レベルでも扱えるわ」

数十分後に、三年坂近くのコンビニでタクシーを降りた。

「教え子にタクシー代を奢らせるのは、教師としてどうか社会人として色々不味いん

だが……」

「収入の量が違うし、十二分に収入を得ているという意味じゃ私も社会人みたいなものよ。むしろ社会の爪弾き者だけど、まあ別に気にしなくて良いわ」

湯水のようにとまでは言わないけれど、お金は使わないとただの数列でしかない。

「ここからだ……、こつちね」

「方向音痴じゃなかったのか？」

「この辺はそう複雑に入り組んでいないし、方向さえわかればそう迷いはしないわ」

「まあ、ここまで来てしまった以上は任せるが」

最後にあつたのは中学一年生か、中学二年生か。何年かぶりに近くまで来たけれど……。

「……やっぱり人間、変わらないものね」

「何の話だ？」

「これから会う奴の話よ。薄れてるけど、色そのものは変わっていない」

まだ会ってもいないのに伝わってくる、通夜のように辛気臭く、墓場のように気味悪く、死人が住み着きそうな雰囲気というか、気配というか。

三年坂から少し外れた位置で長年営業されている、小さな料理店、店名を『蛭』、私が

会いに来たのはその一人娘。

前に来たときは京都にあつても違和感の無い、和風な建物だったけれど、今は全く違うものになっていた。

言うなれば、フアンタジーの酒場に、中途半端に現代日本の要素を落とし込んだようなお店。

「色んな意味で雰囲気あるところだな……」

「別に老舗の高級料亭とかじゃないわよ」

「じゃあ何の店なんだ？」

「料理専門店」

木の板から削り出したような扉を開けようとしたら、自動で開いたからそのまま入る。

「いらつしやいませ、ようこそ料理店『蛭』へ。……って、およ、ナナ、……じゃなくて可思議ちゃんだっけ？ 久しぶりだねえ。もしかしてそっちのお姉さんは彼女？」

店内には人を喰ったような笑みを浮かべる人間一人。青い着物の上から藍色のエプロンを掛け、金髪ポニーテールの頭には青色の三角巾。

「友達とか親戚とか選択肢は色々あるでしょうに。高校の先生よ、平塚先生」

「へー」

私<sub>が</sub>会いに来た彼女は、興味深そうに平塚先生の顔を見る。

「え、なに、可思議ちゃん高校行ってるの？ 大丈夫？ 事件とか起きてない？」

「一緒にしないで。……紹介するわ。この店の店員で昔馴染み、海胆岬うにみさきほろり。殺人鬼だから気をつけなさい」

「やだなー。殺人鬼はもう引退したよ？ 今は料理人一筋。アツハツハー、『筋』って文字は人によって全く違う意味になるから楽しいよね。料理人なら食材の難点、小説家なら文脈のあらまし、極道なら肅清の肯定、ロリコンなら女兒の股間部」

平塚先生は、彼女の言葉に固まった。さすがに非現実的というか非人道的すぎるし、私が補足説明する。

「大人なら法で殺されるレベルの罪を重ね、しかし子供だから家族諸共法で守られた殺人犯。少年院を出たと聞いて、そのうち会うつもりではいたのよ」

「そーそー、少年院。いやはや懐かしいねえ、追い出されたし嫌な思い出しかないけど」  
「……追い出された？」

「扱いきれないとか、置いとくだけで害悪とか、偉そうな大人に散々言われたんだよねえ。言われただけまだマシだけど」

彼女の殺人には色々事情があつたけれど、嬉々として殺していたのは真実。料理人として血肉を食らっていたのも、反省の色が全く見えないのも現実。

「……不可思議。よく会おうと思えたな」

「別に普通よ。どんな殺人犯も誰かの子供で、誰かのクラスメイト。縁があればまた会おうと思えるくらいの縁ではあるのよ。遺憾ながらもね」

「……君がそう言うのなら、済んでしまったことならあまりとやかく言う気はないが、それでもたまに心配になるよ」

別に友人というわけではない。もちろん家族でも恋人でもない。……ただ、縁があっただけ。

「あー！ あー！！ あー!!! 暗い話は後だよアトアト！ 注文を聞こうか、お客様」

悶えるように頭を押さえて喚いたかと思ったら、私達をカウンター席に押し込んで尋ねた。

「そういえば他の店員はどうしたのかしら。母親が店長をしていたはずでしょう」

「んー？ あー、あたしが捕まったときに色々知っちゃってねえ、娘が人でなし過ぎて引き籠っちゃった。だからあたしが店長。店員は逃亡。お店も改装したんだよ。じゃ、まいどありー」

「いや、注文がまだなんだが……」

「注文の少ない料理店なのよー」

雑な接客文句で挨拶しながら、注文を聞かずに厨房へと消えていった。

「そもそもここ、何の料理の店なんだ？ 和食とか洋食にはあまり見えないんだが」  
いつそマンガ肉でも出てきそうですらある。

「さあ、前に来た時とは色々変わっているし」

……その前に来たときだって、何の店なのかわからなかったけれど。

「貴女、教え子が殺人犯になった経験はあるかしら」

「あるわけがなからう。予備軍がいたら、殴ってでも矯正していたさ」

「そう。……でも、きつと予備軍なんていないのよ。海胆岬ほろりは生粋の料理人で、血統書つきの料理人で、約束された料理人だった。それでもなる時はなってしまう」

どんな世界でも、『俺はどこにでもいる普通の高校生』なんて存在はいない。代わりの人間はいてもどこにでもいる人間なんていないし、目立たない人間はいても普通の人間なんていない。

人生が変わる瞬間なんてないし、人生を損することなんてないし、人生はゲームではない。

人生は時間であり道だ。一直線に駆け抜けても風景は変わるし、立ち止まっても季節は巡る。下り坂があれば登り坂もある。誰かの道と重なることもあれば並ぶこともあれば離れることもある。

ともあれども。かくあれども。

ただの知り合いが殺人鬼になってそれから料理人になる人生があるし、ただの中学生が高校生になっても小説家を続ける人生もある。

「だがそれは、君が殺人を許容できる理由にはならないぞ」

「許容も妥協も諦めもしてないわ。強いて言うなら、同情、というか同感ね。それとも共感かしら」

「……君が殺人を犯すと言うのなら、殴ってでも止めるから安心したまえ」

「私は小説家よ」

二十分程度経つと、二人分の料理が出された。平塚先生は塩と油の塊のようなラーメン、私はミルクレープ。

相も変わらず、何屋かわからない。確か前に来た時はハンバーグだったし、三子にはクッキーの盛り合わせが出された。

「別に私に話があつてきたわけでもないんでしょ？ ならさっさと食べて帰りなね。空腹と夜更かしは殺人鬼の始まりだよ」

「京はいつからスラム街になりはったん？」

「……可思議ちゃん、相変わらず京都弁似合わないね」

帰りもタクシーを捕まえた。

「奢らせてしまつてすまん」

「良いのよ、私が連れてきたんだから。それに、休業してまで京都に来た甲斐もあった」  
「それ、平気なのか？」

「読者さん達には、京都が舞台の小説を書く取材も兼ねてって説明をしているから、大したダメージでもないわ。それでも収益は減るでしょうけど。……それより、美味しかったでしょう？」

「ああつ！ 最高に美味かった。値段と場所がネックだが、近場だったら常連間違いないだ。……しかし、もしや彼女は」

——君と同じ体質なのではないか。

「違うわよ。あれは見る目があり過ぎるだけ。——目の前の人間の思考と自分の思考の違いを見続け、見せつけられ続け、彼女はあらゆる他人に殺意と憎悪を抱いた」

旅館に戻つてからは、沙希に捕まり、熱湯の風呂へと放り込まれたりして就寝した。

たぶん海老名姫菜が美少女なのは間違っている。『狗』

指先や爪先からの感覚が消え、心臓がなり叫び、関節の節々が肌を寄せ合う。

「い……おい、起きろ！」

「……あら、沙希じゃない」

「修学旅行に来てまで朝から水風呂で寝るな」

「大浴場に水風呂が無かったから物足りなかったのよ」

「そりゃ、サウナ無いんだからわざわざ作らないでしょ」

朝早起きしてから、部屋の浴室で水を張って、いつものように水風呂に浸かっていた。

……そしたら眠気がやって来て、沙希に起こされた。

……あ、着替えを持ってくるの忘れてた。

「ちよつ、裸で出るなよ！」

「着替えを忘れたのよ」

「脱いだパジャマ着直すかせめてタオルを巻け」

「いやよ、貧乏くさい」

体を拭いてから浴室を出て、荷物の中からとりあえず下着を取り出す。

「ナーちゃんなんで裸なの!？」

「見ての通りよ。……制服着るの面倒ね」

由比ヶ浜の言葉を適当に流して、擦れない為程度の意味しかない下着をつけて、制服は面倒だから代わりに楽なワンピースを着る。

三子が用意した私の荷物の中には、私が絶対に使わないであろう、名前も知らないけど肌や髪に塗る物達や、化粧品が色々入っていた。

「……ちよつと、髪乾かすから大人しくして。あと制服」

「ん、任せるわ。制服は面倒だから嫌」

「神かあんたは」

シャツに上着にリボンにスカートについて、数が多くて面倒なのよ。

「旅行にドレスコードなんて無粋よ」

「水風呂で寝落ちした奴が旅行を語るな」

女子達が鏡片手に化粧している中、私は沙希に髪を結われる。

「史上最恐のお化け屋敷……。胡散臭いわね」

「不可思議さんっ！ 川崎さんっ！ ここっ、入っついていい？」

「え、ええ？ ええ……」

戸塚が今までに見たことないくらいに目を輝かせていて、反面沙希は途轍もなく嫌そう。どうやらホラーが苦手らしい。

現実の恋愛のセオリーは知らないけれど、恋愛モノでお化け屋敷は定番イベント。とりあえず戸部にはお化け屋敷のことを伝える。

「沙希。苦手なら私と戸塚だけで行ってくるから、出口で待っていなさいな」

「え、あ、ああ。じゃあ、そうさせてもらうわ」

「ついでに三人分の飲み物を買っておいて頂戴。お釣りと物は沙希に任せるから」

沙希に千円札を一枚渡し、二人でお化け屋敷に入る。

古めかしい木造建築に、血糊やら井戸やら墓場やら、それらしいものを何でもかんでも詰め込んで、総合値的には最恐と言えなくもないようなお化け屋敷だった。

「……貞子と八尺様と唐傘お化けと宇宙人と吸血鬼と殺人鬼が一堂に会しそうなお化け屋敷ね」

「あはは、それホラーじゃなくてスマブラみたいにならない？」

「タイトルも做うならそうね……『大怪戦オカルトファミリーズ』ってところかしら」  
「怖くは、ないね。そういうえば不可思議さんはホラー平気なの？」

「さてね」

怖いという感情が無い、というわけでは無いけれど、しかし私が何を怖がるのかって、自分だとわからない。命の危機とかだと、『怖い』よりも先に『嫌だ』っていうのが出て来て、怖がる前に解決を図ってしまうし。

「体質的にも家系的にも霊感はあるんでしようけど、お化けを怖いと思ったことはないわね。感覚的には、ゴーストとかスペクターってより、モンスターの認識が近いんじゃないかな」

「へー。霊感あるってことは、もしかして見えるの!？」

私見だけでも。霊感があるというのは、決して霊を見たり祓ったりできる異能ではない。見えるというよりは、感じられる。心配がするとか、状況が普通じゃないとか。

霊感があるからポルターガイスト現象によく合うのではなく、感覚が鋭いから気づくことができるだけ。あるいは、起きているように見えるだけ。

「どうかしらね。でも、幽霊にはぜひともいて欲しいわ。物語が死んで終わりなんて悲しいもの」

「意外とロマンチックなんだね」

「小説家なんて大概そうだと思うわ。現実が辛いからせめて小説でくらい、って意識が無意識に、あるいは意識的に働くのよ。……だからこそ、現実よりも辛い物語を人は評価したがる。絶望を見れば現実がまだ幾らか楽に見えるから」

だからこそ私は、ハッピーエンドもバッドエンドも好まない。あんなのただの打ち切りの言い訳。

死ねば物語は終わるし、死んでも終わらないなら物語は永遠に終わらないべきなのだ。

「そろそろ出口ね。期待もしていなかったから期待外れではないけれど、拍子抜けね」  
「僕は楽しかったよ？」

「お化け達も楽しまれたら恐怖でしょうね。……京都を舞台に書く小説はそんな感じにしようかしら」

人間を脅かすことで生命維持している妖怪達は、昨今の人間達のホラー耐性によって絶滅の危機に。そんな状況を打開すべく立ち上がったのが、京都で人間に紛れてお化け屋敷を運営している、半妖反魔の怪物。

西洋と東洋の両方に通ずる伝手を通じて、危機に陥っている古参の妖怪達をお化け屋敷にスカウトして……みたいなの。

「なんか、不可思議さんも楽しそうだね」

「否定はしないわ」

三人分のファンタオレンジを購入して待つていた沙希と合流して、徒歩で巡れる範囲を適当に観光した。

まだまだ班行動時間はあるけれど、ここで私一旦二人と別れる。奉仕部の活動とだけ伝え、平塚先生にも一応連絡した。

そして私がタクシーでやって来たのは、雪ノ下と由比ヶ浜が合流地点に指定した嵐山。

モーゼの十戒のように竹林を二つに分けて出来た道は、無数の竹が太陽の光を軽減、分散させていて、昼間でも十分に使える環境ができていた。足元には灯籠が等間隔に並んでいて、きつと夜にはライトアップされる。

「ナーちゃん、どうどうっ！ 告られるならここが良いと思わない？」  
「ロケーションとしてかなり良いと思うのだけど、どうかしら」

二人には、海老名からの依頼の詳細を伝えていない。せいぜいが、『最近人間関係が変わってきちゃってるから、壊れる前になんとかして欲しい』くらいのもの。その理由に

は色々あるけれど、一番の理由は、説明が面倒だから。世の中には知らなくて良いことは多いし、知らない方が幸せに成れることも多い。

そして、依頼人達にはもう手を打ってある。戸部には一通のメールを、海老名には電話を一本。タクシーでの移動中の片手間で終わるのなら、それで良い。

「まあ、そうね。……ここで振られないシチュエーションってあんまり想像できないけど」

私の思っていることは、常人には多分理解されない。だってこれは、作る側の視界の話だから。

「どういうことかしら？」

「私が小説でここを使うなら、失恋シーンに使うって話よ」

「漫画と現実の区別をつけなさい。……これはあなたのセリフだったはずよ」

「そうね。だから異論はないのよ」

これ以上ここについても仕方ないし、私は次の工程に移行する。工程というか、まあ、あるかもしれない障害の排除だ。

その障害というのが、葉山隼人。戸部の依頼に同行しておきながら、その行動は行動担当の由比ヶ浜が気がつかない程度に非協力的だった。

「やあ、不可思議さん」

「話を聞かせてもらいに来たわ。そして聞いてもらいにきた」

地名なんていちいち覚えていないけれど、人気のない河川敷へと呼び出された。間を開けてベンチに座る。

「無駄な問答は切り捨てるわ。——葉山、貴方はこの依頼、どう終わるのを望んでいるのかしら」

「ふっ、……言わずとも、君には分かっているのだろう」

「一人で解決できるからといって、推理を語らない名探偵はいないわ。私は語り手だけ」

葉山は語る。

「俺は、今が気に入ってるんだよ。戸部も姫菜も、みんなでいる時間も、結構好きなんだ。だから……」

「二度破綻した人間関係を持続させることほど無意義なことはない。だったら破綻する前に何か手を打つ。その理屈は私にも理解できるわ。……でも、あなたのしている行動は博愛主義者のそれよ」

「なら良いんじゃないのか？ 博愛って確か、全てを平等に愛するって意味だろう？  
俺にそんなつもりはそんなつもりもないけれど」

「すべてを平等に愛するなんて、そんなの愛していないのと同じよ。愛っていうのは差別そのものだもの。博愛なんて矛盾と同義よ」

「矛盾していることの何が悪い」

「悪いかなんて本人達の都合だし、どうでも良いわ。私が聞きたいのは、貴方が戸部をどう思っているのかよ」

「……姫菜に布教でもされたのかい？」

「その時は宗教戦争が始まるわね。百合と薔薇は暗黙的に不可侵だもの。……真面目に答えなさい」

空気が一度緩んだ。

「何度か、諦めるように言ったよ。今の姫菜が心を開くとは思えないから」

「でしようね。アレはそういう人間で、そう簡単に開ける人間は限られる」

「……だが、先のことはわからない。だから戸部には、結論を急いで欲しく無かったんだ」

勝手な言い分ではない。博愛ですらないし、他愛でもない。完全なる自愛だ。

「……恋は盲目とは確かに言うけれど、周りすら盲目にさせるのかしらね」

「どういう意味だ」

「あなた達全員、……今なら戸部以外、勘違いしているわ」

「勘違い？」

葉山は力なく言葉を返してきた。

「振られる程度で失恋とは言わないのよ。一度でも疑問に思ったことがないのかしら？」

恋愛の難易度に対して人類の夫婦の多さ」

「言われてみれば、確かに気になるな。その答えも知っているのかい？」

「模範解答が一つじゃないけれど、そのうちの一つ。——人間っていうのは基本的に、自分のことが好きな人間を好きになるのよ。振られたとしても、人間関係さえ消滅しなければむしろ可能性が高まる」

「……人間関係が消滅しなければ、か。それができれば苦労はしないさ」

「苦労なんてする必要はないのよ。解決への近道は妥協と諦め、苦悩と工夫は成功への遠回り。何か難しいことなんて必要なくて、ただ正直に教えてあげれば良いのよ」

私はベンチから立ち、その場を離れた。

日が落ち始め、旅館へと向かう道中。私はコンビ二に寄った。

店内を適当に見て回って、地域限定のジュースでもないかと探し、結局なくてカルピスソーダを手にとった時。後ろから声を掛けられた。

「あ、七五三なごみじゃん」

「……七五三と書いて、しめ、と読むのよ。そして私のことは不可思議可思議と呼びなさい」

金髪縦ロール、いつか私にピンタをして、その仕返しに蹴り倒した女子だった。

「……あんさあ、あんたら一体何してるわけ？ あんま海老名にちよつかい出すのやめてくれる？」

「さてね。結果を見据えるなら、大したことはしていないわ」

「ならやめてくれる、そういうの迷惑なんだけど」

「私は何もしていないわ。貴女が何か困るのなら、それは貴女の自己責任でしかない」

「はあ？ 何意味わかんないこと言ってるの」

「わかる必要はないわ。世の中、知らない方が気楽なこともあるもの」

「……そういうはぐらかして、一番腹が立つのよ」

……流石に、ここで喧嘩はできないわね。平塚先生にも迷惑がかかるし。

「じゃあ、ヒントだけ。私達奉仕部への依頼人は、件の二人、海老名と戸部よ。あ、あと一応葉山もか。……私としても最小限の被害で収めるつもりだから、余計な手出しはしないでくれると全員助かるわ」

結露で濡れてきたカルピスソーダをレジに持って行って支払い、私は真っ直ぐ旅館に戻った。

「おい、不可思議。単独行動は確かに許したが、私服での行動は許していないぞ」

「そない、いけずなこと言わんとつて。うち、怖いわあ」

旅館で偶然にも平塚先生に出会い、朝は見つからなかったワンピース姿が見つかった。咄嗟に京都弁が出たけれど、平塚先生の右拳は音を立てて握られる。

「言い残すことはあるか？」

「待つて、待つてえな。これも奉仕部の活動に必要なやつたんよ。やからほんに、かんにんしたつてや」

「……正直、違反行為云々よりも君の京都弁の方に殺意が湧いてくるよ」

「難儀やわあ」

殴  
ら  
れ  
た。  
。

たぶん海老名姫菜が美少女なのは間違っている。『肉』

「本当に、大丈夫なのかしら」

「ナーちゃん、勝算はあるの？」

夜、完全に日が落ちた時間帯。ライトアップされた嵐山で、私達奉仕部や、戸部の友人達は、海老名に告白する戸部から離れた位置で見守っていた。

「黙って見ていなさいな。心配不要、確実に私が想定した終わり方で依頼は終了するわ」

海老名が来る時間まで、残り一分もない。

「正直、彼の告白が成功する想像があまり出来ないのだけれど」

「そんな分かりきっていること、いちいち口にしないで良いのよ。……正直、今日は喋りすぎて眠いし、殴られて頭も痛い」

これが終わったら速攻で旅館に戻って、水浴びだけしてさつきと寝よう。

予定の時間ジャストで、海老名は現れた。

「……………あの」

「……………うん」

戸部の告白は、互いに緊張感のある二文字から始まった。

「俺さ、……………その、俺、海老名さんのこと好きなんだ！ 付き合ってください!!」

戸部の告白を受けて、海老名は無機質な笑みを薄く浮かべる。

「……………ごめんなさい。今は、誰とも、誰に告白されようとも、付き合う気はないの。でも今、ね。今。——いつか今とは違う時に、それでも私が好きだっていうのなら、その時はその時だよ」

戸部にメールで伝えたことは、葉山に言ったことと概ね同じこと。

『人は自分のことが好きな人を好きになりやすいものよ。振られようが振られまいが、告白した後のの方が好感度は上がりやすい。』

傷心はしても消沈は絶対にしてはいけない。今付き合うことが出来なかったとしても、未来まで諦める必要はないのよ』

すぐ後に『振られる前提!?! 振られないアドバイスはねーの!?!』という返信が来たけれど、そんな目の前で切腹の覚悟を見せて自分を人質にするくらいしか思いつかない。そう送ったら返信が来なくなった。

海老名が背を見せて去っていくのを、戸部は呆然と、無気力に見ていた。けれど、その心は折れていない。告白そのものが、恋仲への第一歩なのだから。こんな中途半端なところで折れたら、フライドチキンどころかサラダチキンになってしまう。……そつちの方が女子受けしそうね。

海老名の断り文句は、私が伝えたものだった。

——いつか今とは違う時に、それでも私が好きだつていうのなら、その時はその時だよ。

ただ振るだけじゃ、人間関係が歪むに決まっている。だからちゃんと、本心でなくとも、未来に可能性を与えなければいけない。そう、伝えた。

「……どういうことか、説明しなさい。あれが貴女の想定した終わりだつていうの？」  
「そうね。予想外の展開は何一つとして無かったわ」

「ナーちゃんは、分かったの？」

旅館への帰り道。由比ヶ浜と雪の下が私に尋ねる。

「……やらずに後悔するよりもやって後悔した方がいい。そんなのは失敗をした後悔を知らない人間の戯言よ。やらずに後悔した方がいいに決まっている」

「それこそ戯言よ。失敗を恐れて何もしないんじや、成長できないし、何も変わらないじゃない」

「でも、やらずに後悔しないのと、やって後悔しないのなら、断然後者を選ぶべきなのよ。私はそうなるように口八丁で唆しただけ。……疲れたからこれ以上語らせないでちょうだい」

旅館に着くと平塚先生に出迎えられ、私は水だけ浴びて即就寝した。

後日談。それと、ネタバラシとか諸々。

まず先に語っておくべきは、やっぱり戸部達のことだろう。しばらくは海老名も心配そうにしていたけれど、戸部の恋心を知った男子達の友情はむしろ深まったと言って良い。決して敵対しているわけではないけれど、海老名が敵の位置にいたわけだ。

女子の方、海老名の周りはあまり変わりはなくいつも通りだった。そりや多少、戸部を揶揄ったりはしているけれど、互いに冗談だと分かり合える範疇。

京都から帰ってきて、振替休日をしつかりと消費した翌日の放課後。平塚先生ではなく、海老名に呼び出された。

場所は、もう何回か来ている、特別棟の屋上。

「あら、待たせたみたいね」

「ハロハロー。そうでもないよー」

既に海老名は来ていて、下の風景を見ていた。

「お礼、言いそびれてたなって思ってた」

「別に。携帯電話を使うのはまだ全然慣れないけれど、大した労力でもなかったわ。それにお礼を言われるようなことはしていない」

「ううん、してくれた」

海老名は首を横に振りながら振り向いた。

「全部君達に任せようとした私に、人任せにしないで自分でやりなさいって、叱ってくれた」

「言っていないわ、そんなこと」

「行間もちゃんと読めるのよ。……今のために未来を妥協する。……うん、最善手だったと思うよ。戸部うちにとつても、私にとつても。ダメージは最低限ですんだ」

……実のところ、あんなのは最善手ではない。なぜなら、戸部の振られたくないという依頼をほとんど無視してしまっているから。

今回一番ダメージを受けたのは当然戸部であり、自業自得にダメージを受けるべき海老名は軽傷も軽傷。未来次第じゃ無傷で終わる。

もつと最善の手はあったのだ。もつと諦めさせるべき場所が別にあつた。もつと妥協させるべき場所があつた。

「だから、今回はありがとう。優しいけど厳しい不可思議さん」

「別に。私は諦めさせただけよ」

「それをさせてくれたのが、不可思議さんだけなんだよ。……私、不可思議さんとならうまく付き合えるかもね」

「そういうことは平塚先生くらい格好良くなつてから言いなさいな」

「……うん、普通に無理ゲーすぎる。性格どころか種族から違うし、それに私、腐ってるから」

「そう。せいぜい、肥料にならないようにだけ気をつけなさいな」

階段を降り、そのまま部室へと入った。

「あ、ナーちゃん」

「あら、やっと来たのね」

「最後の事後処理をしてきたのよ」

「なら、やっと説明してもらえるのね」

私は席につき、ノートパソコンを開く。

「……面倒ね。とりあえず、どこまで分かっているのかしら？」

「一から全てを語るの、流石に面倒臭すぎる。執筆と同時並行で話せるくらい、気軽に手軽に軽々しく。」

「海老名さんに付き合う気が全くなかったことと、戸部君が告白する時にはある程度下向きの覚悟を決めていたのはなんとなしに理解したわ。……そこで、貴女は何をしたの？」

「表立ったことはしていない。今回そういうことは、全て由比ヶ浜に任せることになっていた。」

「まず、海老名の正確な依頼はそもそも『戸部に告白させないこと』で、戸部の依頼は『海老名に振られないこと』だった。前者は私の意向で、ある程度隠させてもらったわ」

「それはどうしてかしら。教えてもらえれば協力もできたはずよ」

全く、この優等生は。本人の望んだところに限って、勘が働かなくて面倒くさい。

「この二つの依頼が矛盾していて、そして依頼主達に互いのことを察せられるのが人間関係の致命傷になりうるからよ。それこそ、最悪の形で依頼は解消された」

「でも結局、二つの依頼は失敗に終わっているじゃない」

「解決の近道は妥協と諦めよ。今回、依頼主二人には無自覚ながらに依頼のハードルを下げてもらった。妥協してもらった」

戸部の振られたくないという依頼は、恋愛を進展させて欲しいという依頼に。

海老名の告白されたくないという依頼は、振っても人間関係に響かないようにするという依頼に。

「……ねえ、ナーちゃん。戸部っちの時にその、ああいう条件を付けたのもそういうことなの？」

「そんなわけないでしょう。私が楽をしたかっただけよ」

その一

最終的に振られたとしても基本的に依頼人の責任である。その後の人間関係については関知しない。

その二

告白する前に、完全に脈なしだと判明した場合、潔く諦めること。例として、本人が「今誰かと付き合う気はない」なんて言ってるような場合や、他に付き合っている者がいた場合。

その三

期限は修学旅行終了までとする。それ以降はまた別途ご依頼を。

その四

奉仕部、依頼人の全員に諦める権利がある。決して何かを強制してはいけない。

「条件その二については、だからまあ歪めた形になるのよねえ」

おおよその説明を終えた。

質疑応答を挟みながらの戦々恐々な説明会だった。

「……あたし、今までナーちゃんのこと誤解してた。優しい子なんだと思ってた」

由比ヶ浜は冷め切った紅茶の残ったカップを見つめながら言った。

「人への印象が『優しい』って出てくるのは、アイドルに対して可愛いとしか思えないのと同じくらい無意味なことよ」

「うん。……ナーちゃんね、忘れちゃったか、知らないんだよ。努力とか挑戦とか協力とか、わかんないけど色々。だから、臆病になっちゃったんだと思う」

「さてね、それで解決するなら喜んで使うわよ」

私は知っている。

努力なんてどれだけでも強者に踏み潰されることを。

挑戦なんてどれだけでも障害に見下されることを。

協力なんてどれだけでも一人は一人だということ。

「七つの大罪は全て、罪であると同時に生物の生存に必要な欲求が連ねられている。けれど同時に、七つ全てが殺人へと直結する。誰もが思っているより、ずっとすぐ近くで。

——だからこそその大罪。……何かを求めるといえるのは押し並べて、誰かを殺すということなのよ。協力も共犯も、私は御免よ」

臆病、その通り。

傷つく痛みを知っているから、傷つける痛みを知っているから、私は何よりも私が大切。

そもそも、終わった話なのだから。

誰も苦しんでいないならそれでめでたし、めでたしで締めるべきなのだ。それこそちよつかいをかけて、誰かが辛い思いをしたら、誰よりも私が辛い。

だから強制的に締めるべく。  
——めでたし、めでたし。

もちろん一色いろはが生徒会長なのは間違っている。

『首』

「……お姉ちゃん、ちよつと肉付きがよくなったよね」

「さあ、運動量が増えたからかしら」

修学旅行で離れた反動か、三子はよく引っ付いてくるようになった。

今までは集中してもらいたいからと、小説を書いている時なんかはなるべく近づかないようにしていたのに、今日も私は三子の膝の上で小説を書いている。三度の食事もとイレもベッドも常に一緒に、しかし水風呂だけは止めた。

「まあ、健康的だしいいんだけどさ」

筋肉と脂肪が骨を覆い始めた腹筋辺りを、私とは比べ物にならないくらい大きい手が撫でる。

「……お姉ちゃん」

「なごよっ」

「ずつと一緒だよ」

頭頂部に鼻と唇をのせて、脇腹を撫でるように腕が這う。

「そうね」

キーボードから手を離し、三子の手に私の手を重ねて返す。

土日の四十八時間のうち、四十七時間くらいを三子と過ごした翌日の放課後。  
私は平塚先生に呼び出された。

『修学旅行を振り返って』 2年F組 不可思議可思議

世は現代。人類が平然平凡と暮らしている裏では、あらゆる種が絶滅の危機に瀕していた。

原因は別に地球温暖化や災害、戦争でも人口爆発でも自然破壊でもなく、巨大隕石でも勿論なく。適切な言葉がないけれど、それらしく言うなら『若者の恐怖心の移り変わり』と言ったところだ。

世界各地に存在している、人の恐怖心を糧に生きている魑魅魍魎達は、『ホラー』という自分たちを遥かに凌駕する概念が生まれると同時に生き場を失っていった。

そんな中、同類でも同胞でもない魑魅魍魎達を救うべく手を広げる魔王救世主がいた。

名は無く、種族も無く、性別も無い。妖怪と悪魔のハーフであり、魑魅魍魎から弾かれて居場所も無い、無い無い尽くしの化け物は人間に紛れ、『お化け屋敷』を運営していた。

当然のように、従業員は全員魑魅魍魎。

——装飾過多で草食系の吸血鬼

——男性恐怖症のサキュバス

——淫魔よりも肉食系の雪女

——カフエイン中毒の座敷童

——家族を失い転ばせるだけになった鎌鼬

——案内の為に生まれたはずが迷子中の八咫鳥

——弟がクズ過ぎて家出中の苦勞神、天照大神

——増殖した櫛名田比売の十三人目で呪いの神

——半妖半魔で妙にコネの広いお人好し

不可思議可思議の最新作！ 京都が舞台の神話的ドタバタコメディー、『ファントムハウス』好評連載中!!

「……なにをどう振り返つたらこうなるのか、十文字以内で説明しろ」  
〔参式参肆伍陸漆捌玖〕  
「書きたくなつたのよ」

「説明するな!!」

「理不じやん!!」

軽くではあつたが、頭を殴られた。

「まつたく。……いいかげん更生したかと思つていたが、やはり君は生涯不変を貫くのかね」

「貫いてこそその座右の銘よ。たかが十五だか十六だかで折れるようじゃ、ただの中二病じゃなご」

「やめろ。世の中の大人達がグツサリ来てるから」

「打たれて人は強くなるのよ」

「刺されても脆くなるだけだろう……。で、なんだこの愉快的小説の宣伝は」

「京都のお化け屋敷に入ったときに思いついたネタよ」

「君にはこれ以外に糧となるものはなかつたのか?」

「何度も歩いた地元に得るものなんてこれでも多いくらいよ」

「級友との旅や保護者から離れることへの思いはないのか?」

「級友なんて沙希くらいでいつも通りだし、私の住んでる家は母親にとって別荘みたい

なものだし、物理的な距離ならむしろ近いくらいね」

……そういえば、海胆岬ほろりとの再会なんかもあったわね。殺人鬼の話題だし、書いて困るのは平塚先生の方だけだ。

「まあ、いい。小説の出来次第である程度評価に補正をかけるさ」

「不平等が過ぎる気がするけど」

「世の中は不平等なものさ。……ほら、これをくれてやるから部活に向かいたまえ」

平塚先生は私に三本のMAXコーヒーなる、黄色い缶コーヒーを渡して職員室から送り出した。

遅れて部室に来たため、当然ながら二人は先にいた。

「……来たのね。今日は来ないと思っていたわ」

「職員室でナンパにあったたのよ。これ、平塚先生から」

二人にMAXコーヒーを渡してから、私はノートパソコンを開き、例のお化け屋敷小説を書く。

「な、ナーちゃんは相変わらずなんだね……」

「小説を書くのが好きというのはあるけれど、それ以上に稼げるときに稼いでおきたいもの。三子を路頭に迷わせるわけにはいかないわ」

修学旅行以来、二人は私に対して気まぐずいらしい。私からそんなことを思うことはないけれど、怒りやら罪悪やら、色々入り混じって強引に薄めたような感情が伝わってくる。

ちようどコーヒーを飲み切ったくらいタイミングで、扉がノックされた。

「邪魔するぞー。少し頼みたいことがあるんだ」

入ってきたのは、平塚先生だった。

「用事なら職員室で聞いたわよ」

「悪いな、不可思議。だが私のことではないのだよ。……入って来ていいぞー」

「ちよつと、相談したいことがあつて……」

呼ばれて入つて来たのは、確かゼンマイ仕掛けみたいな名前の生徒会長。

「城廻先輩？」

そう、それ。雪ノ下が意外そうな表情で言った。

すぐに続いて、もう一人女子が入つて来た。

ゆるふわ系、とでもいうのだろうか。いかにも軽そうで、男性から好かれそうな、由比ヶ浜に近い属性の外見をした女子だった。

「ああつ、いろはちゃん！」

「結衣先輩！　こんにちわー！」

私から見れば同類の二人は、どうやら親しいらしい。

今回の依頼主は彼女達、主に一色いろはのことだった。

なんでも、一色は生徒会長選挙の候補者だけれど、決して生徒会長になりたいから協力してくれ、では無く。むしろ、落選したらしい。しかし立候補が一色だけで、それも難関。

おまけに自分で立候補したのでは無く、他人が勝手に名前を使って立候補させたのだとか。

「無論、しでかした生徒はこちらで指導する」

「なら立候補もなかったことにできるでしょう？　本人の希望も合わされば、不可能じゃないはず」

「それができればわざわざここまで連れてこないさ」

そりゃ、そうよね。

「なら、私が職員室なり生徒会室なりに乗り込んで、全員説得しようかしら？」

「……なにこのちっちゃい先輩、超頼もしい……」

「相変わらずの過激派ね、不可思議さん……」

依頼主達からは私の意見は好評らしいが、平塚先生がNOを出す。

「やめろ。最悪、君が退学にもなりかねるぞ」

「その時は警察沙汰にでもするわ」

「私までクビになるじゃないか！」

「その時は私が養うわ」

「……君、私のことが好き過ぎるだろう……」

平塚先生は呆れたようにため息を吐いた。

「不可思議さんの案が全てダメなら、やっぱり信任投票での落選しかないわね」

「でもー、信任投票で落選って、めっちゃくちや格好悪いじゃないですか」

「イレギュラーな事態だし、注目は集まると思うけどね」

「絶対問題児だと思われてるじゃないですかあ！」

「優秀であれ無能であれ、目立つ人間なんて総じて問題児よ」

「あのごめんなさい私問題児と思われながらも優秀だと思われるほどにはハイスペックじゃないですお願いですから悪の道に誘わないでくださいごめんなさい」

悪の道って……。しかしこの早口。この後輩、存外に面白いわね。

「じゃあいつそのこと、何もかもをボイコットするとかどうかしら。演説やらなにやら、生徒会長になってしまっても仕事を全てすっぽかして仕舞えば問題はないはずよ」

「無いわけないのはわかりますよそれえ！」

「責任は立候補させた馬鹿に取らせるわ。平塚先生、何か問題があるかしら？」

「問題しかないぞ。問題児どころじゃなくなる問題が生まれてる」

「そういけずなと言わんとつてな、せんせえ。うち、これでも気張りはつたんよ？」

「「なんで京都弁?」」

「別人かと思うからやめろ」

「難儀やなあ」

この後しばらく話し合いがされたものの、どれもこれも却下されて案は一つも立たなかった。依頼人二人を置いて平塚先生は行ってしまったし、私も小説の執筆を再開する。

「あのー、ナーちゃん先輩って京都の人だったりするんですか？」

「生まれと母親の地元がそうってだけよ。京都弁は後から覚えたの。あとその呼び方はやめなさい、私の名前は不可思議可思議よ」

「え、でも結衣先輩は『ナーちゃん』って……」

「訂正しても直せない馬鹿だから諦めただけよ」

「ひどい言われようだ!」

「えっと、じゃあ可思議先輩で」

この後輩は見た目が馬鹿っぽいだけで馬鹿ではないらしい。

翌日。改めて、一色と奉仕部の話し合いが行われた。

「とりあえずやっぱり、いろはちゃん以外の候補を誰か立てて、決選投票で穩便に負けるっていうのが、やっぱり一番いいと思うんだけど」

「そうですねえ。あ、でも、すごい人に負ける方が、私的にはいい感じでーす」

「こちらが立てる候補者の公約と演説の内容は、考えておいたから」

「……そんなやり方だと完全な傀儡候補になるわね。組織の長の質が悪いと、被害の規模は組織どころじゃ済まなくなる。文化祭の時に経験したことでしょう」

「だから、それがちゃんとできる人を探せばいいだけで……」

「私が葉山を選び、葉山がアレを選んだ結果がああ惨状だった。……貴女達に、葉山でも失敗したことを間違いない成功出来るといふの?」

雪ノ下は、鋭い目で私を見ながら言う。

「何もしないよりマシ」

「何もしない方がマシ」

妥協と諦め。やることなんていつも通りが一番良いに決まっている。

「二人つて、仲悪いんですかあ？」

「うーん、悪いのは仲つていうより、相性かな」

「方向性の違いよ」

「人間性の違いね」

「……つまり、性格の違い？」

属性の違い、というのが明確に適切。

「私がいても話にならなさそうだし、もう帰るわ」

「待ちなさい！」

「文句はお金を払ってから言いなさい」

「え、ちよつと、先輩!？」

「依頼を放棄するわけじゃないから安心しなさいな」

部室を出ると、そこには平塚先生がいた。

「生涯不変を謳っていても、不老というわけではないのだな」

「……どうだかね」

様子を見に来たのか、ただの暇つぶしか。部室と廊下を隔てる壁に背を預けていた。

「ひとつ聞きたいのだけれど」

「なんだ？」

「一色の立候補を取り消せない理由は何なの」

「そ、それはだな……」

平塚先生は言い淀む。

「他人に勝手に立候補させられ、本人はその状況を拒絶している。それなのに拒否権もない。——これは歴とした虐めであり、犯罪よ」

「……否定はできません。私はそう思っているし、相応の罪悪感と反省もある」

あくまでも言いたくないというのなら、推測するまで。

「推測その一。一色以外に他の立候補者がいないから——否。優秀な生徒を教師が説得すれば幾らでもやりようはある。」

「推測その二。一色が万人よりも優秀だから——否。彼女は有能ではあるけれど優秀で

はないし何より従順ではない。トラブルメーカーの気質が十二分にある。

「推測その三。一色が嫌われ者だから——否。女子受けは悪いけれど男子受けはある程度いい。人柱にするには不十分。」

「推測その四。一色が気に入らないから——保留。それくらい大雑把な理由なら悪ノリする共犯者は多い。けど否定派もいるはず。」

「推測その五。一色の相手が面倒くさいから——可能性あり。公立高校なんて時給五百円以下のブラック企業。一生徒を犠牲に樂できるのなら切り捨てる選択肢は十分あり得る。」

「はあ……。さて、どうかしら？」

「まったく……。君は恐ろしいくらい賢いな。そして聡い」

「で、どの程度正解なのかしら」

「ノーコメント、と言いたいところだが無駄なのだろうな。……ここでは大体合っているとっておこう。コーヒーでいいかね？」

平塚先生は自販機でブラックの缶コーヒーを買い、私に尋ねる。

「外ではなるべくコーヒーや紅茶を飲まないようにしているのよ。覚えておきなさいな」

「君はつくづくキャラと設定が噛み合わないな。……じゃあペプシにするか」  
「はいはい」

「家まで送ろう。校内で話すべきではない話だ」

特別棟を出て、正門から郊外に出ると平塚先生は話し始めた。

「先に言っておくが、私は全面的に一色と奉仕部の味方のつもりだ」

「さて、どうかしらね」

「まあ、口ではなんとも言えるからな。……立候補者の話が公になるまで、一色は全くそのことを知らなかったらしい」

「塵も積もれば山となる。群衆は時に恐ろしいものね」

「全くだ。……担任を経由し、職員室に一色の意思が伝えられた。そこで職員室は二つに分かれた」

「ぞっくり、一色の味方が敵か、みたいな感じかしら。……違うのね」

「ああ、そうだ。一色の意思を無視して生徒会長にしてしまおうって連中と、一色を説得し納得させて生徒会長にしてしまおうという連中だった。私はそのどちらも反対だっ

たんだが、一人になった一職員に発言力は無い」

「そしてハブられたから奉仕部に来た」

「君や雪ノ下にコミュニケーションを説いておきながら、恥ずかしい話だ」

「そんなことないわ、ヒーローはいつだって孤独なもの。……ほんま、かつこええよ。……一色にとつても味方がいないのと一人居るのとじゃ違うはずなもの」

「そう言ってもらえると助かるが、しかし京都弁を混えるな」

「捻くれ者は本気と本音を冗談めかすのが基本作法なのよ。……それを思い出したのも京都でのことだったけどね」

「つまり本気なのか!？」

「冗談に決まっているじゃない」

「どっちがだ? ……はあ、暖簾に釘を刺された気分だ」

「効き目があったようで何より。でもその言い回しは読み慣れていないと理解されずに白けるから気をつけなさいな」

「痛ましいくらい至れり尽くせりだな……」

——閑話休題。

「で、結局私はどの程度ならしてもいいのかしら？」

「どういう意味だね？」

「職員室に乗り込んで全員説得するのはアウト。警察沙汰にするのもアウト。なら私はどこまでやりすぎてもいいのかしらね？」

「そうだな——」

——私のすべきことは、決まった。

もちろん一色いろはが生徒会長なのは間違っている。

『尾』

苦悩は人の歩みを止める。

工夫は人の思考を止める。

努力は人の考えを殺す。

挑戦は人の覚悟を絞める。

だからゆっくり、のんびり、はんなりと。詩的に素敵に不敵に無敵に、私は依頼を解消する。

「セーンパイっ！ お待たせしましたー」

「別に、大して待っていないわ」

「……先輩って、髪とかちゃんとすれば可愛いのに可愛げないですよねー」

物事を進行させるために、私は一色を呼び出した。場所は校内の空き教室。鍵は平塚

先生から借り受けた。

「いや、雪ノ下先輩も似たところありますけど、でもずっと徹底してるっていうか、隙がないっていうか」

「徹底しているのが正解ね。だってモテたら大変じゃない」

「それを真顔で言えるって、逆にカッコ良すぎてモテそうですけどね」

掃除だけはしているのか埃一つとして被っていない机に腰掛けている私を倣い、一色も向かい側の机に腰掛けた。

「貴女はモテたいのね」

「普通そうじゃないですか？」

「でもそのおかげで、今貴女は苦しめられている」

「う、……まあ、はい」

「結局、人間は比較することしか幸福も不幸もわからないものよ。平等なんて現実には存在せず、対等なんて理想も存在しない。人間、幸福と不幸はプラスマイナスで零って言ってくれるけど、個人ではなく全体で見ると、やっと相殺されて零になる」

「はあ……。ごめんなさい、なに言ってるのかよくわからないです」

本当にわからないようで、困惑している。

「要するに、シーソーで片側が上がればもう片側が下がるように、貴女が不幸になればな

るほど、貴女をここに追い詰めた馬鹿共は幸福になる。……そう考えるとムカつくわよね」

「そう言われると、……そう思っちゃいますね」

一色は苦笑いを溢した。

「今頃、大爆笑よ。ザマアみやがれつて指差して、そのままどん底まで落ちぶれろつて親指下げて、這い上がるうともがく今を見たらさらに爆笑。……腹筋が裂けて死ねばいい」

「先輩、もしかして怒ってます?」

「怒っているのは貴女よ。私は感化されて同情して共感してるだけ」

「や、やだなあ、そんなわけないじゃないですかあ」

無駄に可愛らしい笑みを浮かべながら一色は言った。

「先輩は私がそんな怒ったりするように見えますか?」

「表情に出なければ、言葉に出なければ、態度に出なければ、それで怒っていないということにはならないのよ」

「……わかったみたいに言いますね」

一色はキツと睨む。

「私、誰かのために怒れる人ってあんまり好きじゃないです。そういう人って大体……」

「何かあった時に他人のせいにするから」

「……そうですね」

「でも、私は私のために怒っているわ。私は泣き虫でその上我が儘なのよ」

怒りに身を任せ、怒りに心を任せ、怒りに脳を任せる。

「質問。というか、提案よ。——仕返し、したいとは思わない？」

「えっと……」

一色は言い淀んだ。

「追い詰めた奴らに、見捨てた教師達に、一矢報つてやろうと言っているのよ」

「……やっぱり、先輩つて超頼もしいけど過激なんですわね」

「貴女の答えは乗るか反るかよ。——乗るならクズ共を叩くついでに貴女を生徒会長へと押し上げる。これから共犯関係になるのだし活動が大変なら多少の協力は惜しまないわ。——反るなら私はただ叩く。貴女がどうなるうと知ったことではない。雪ノ下や由比ヶ浜が失敗して貴女が生徒会長になったところで、私は関与しない」

「それ、ほとんど一択じゃないですか……」

「言つたでしょう、私は泣き虫で我が儘なのよ。選択肢には常に妥協と諦めを伴わせる。友達百人なんて作らせないし、みんな手を繋いでゴールなんてぶつちぎる。——さ、選

びなさいな。どうせもう普通の学生生活なんてできないのよ」

私が再度尋ねると、一色は笑った。腹を抱えて、愉快そうに、周りから何を思われるとか一切考えられていない、下品とすら思える爆笑だった。

「まつ、まあ、これだけ言われちゃったら仕方ないですね。先輩と友達になつておくのも悪くありませんし」

差し出してもいない私の右手を、一色は取った。

「先輩と共犯してあげます。仲良くしてくださいねっ」

「ま、後悔はさせないわ」

翌日の放課後。私は一色を連れて、職員室へとやって来た。

「一色いろはの立候補を取り消してもらいに来たわ」

「ストップ待つてバック止まってハウス!! 単刀を直入しすぎです先輩!!」

いつもなら私が来ても一切動じない職員室も、今日はあちこちがざわついた。

「いきなり来たと思つたらなんだ」

立ち塞がるように、ジャージ姿で汗臭い、男性体育教師が席を立つてこちらに来た。

「聞こえなかったのかしら？　一色いろはの生徒会長の立候補を取り消してもらいに来たのよ」

「ふんっ、馬鹿馬鹿しい。我々も暇ではないのだから、帰った帰った」

そいつは言いながら、羽虫でも払うように手首を振るった。

「我が儘でも要望でも提案でもないわ。私は命令をしているの。立候補を取り下げなさい。本人がやりたがっていないことも伝わっているのでしょうか？」

「一色の本心かどうかが分からない以上は無理に決まっている！」

「なら生徒会長になりたいのが本心だとしても？　無償で仕事を押し付けられるだけの立場に望んで立ちたがるわけじゃないでしょう」

「じゃっ、社会経験もない子供が口出ししていい問題ではない！」

「教職が社会経験だと思っているのならそっちこそ社会経験が不足しているわね」

「屁理屈を言うな!!」

「そういうことはせめて理屈を語ってから言いなさいな」

言われては返すようにしていたら、そいつの顔は茹で蛸のように真っ赤に染まる。間違ひなく、私という小娘に反抗されてプライドが傷付いたとか、そんなことだろう。

「とにかく！　決まったことは決まったことだ!!　もう公表もしてしまつた以上どうしようも無いことだ！　諦めろ!!」

「……まるで大声を出せばなんでもしてもらえると信じてやまないガキ大将ね」

「なんだとお!!」

あ、平塚先生いた。「何をしているんだ!?!」とでも言いたげな目で私を見ている。

「そもそも、たかが体育教師には用もないのよね。——聞くけれど、一体私は誰の頭を一色の前で叩き落とせばいいのかしら」

「帰れと言ったのが聞こえなかったのか!!」

「暗に黙れと言ったのが聞こえなかったのかしら?」

もういい加減、鼓膜に響いて喧しくなってきた。

「何をしているんだ君達は……」

「平塚センセ、先輩が〜!」

「まったく……。彼女達は私に任せてください」

平塚先生は体育教師を宥め、私と一色を職員室から出した。

「で、何を考えてこんな強硬策に出たんだ?」

私と一色はベンチに座らされて、見下されている。

「計画を立てる段階は終わったから、実行する段階なのよ。そしてそれも大部分は終わった」

「いや、どう見ても生徒が教師に反抗しているだけにしか見えなかったんだが……」

「というか私も先輩に連れてこられただけで何にもわかってないんですけど?」

「反抗するのが大事だったのよ」

当初の計画では、状況をリセットするところまでやるつもりだった。一色が無理やり生徒会長にさせられるのではなく、一色が進んで生徒会長になるという状況に正すために。

けれど、あの声のデカイ体育教師のおかげで、より良い方向で計画は進んだ。一色がただ一人で従うだけの生徒会長では無い、という認識を職員室中に広めた。そして私のような味方がいることも知らしめた。

計画を大まかに話すと、平塚先生も一色もため息を吐いた。

「あ……、つまりなんだ、一色の発言力を我々教師陣と同等近くまで引き上げてから生徒会長にしようということか?」

「権力と言つて欲しいけれどね。言われるままに、されるがままに、仕事と労働を強制させられるだけの貧乏籤なんて誰も引きたく無いに決まってるじゃない」

「私、そんな女王様みたいな生徒会長になるんですか……?」

「生徒の長になるのだから、似たようなものでしょう。せいぜい、全校生徒で酒池肉林を実現させるくらいのことをして見せなさいな」

「それ絶対わたし殺されるじゃ無いですかあ!!」

「貴女は死なないわ、私が守るもの」

「……君がエヴァネタを言うと言いにしか聞こえないのはわたしが悪いのか?」

話が落ち着いたところで、新たな共犯者に平塚先生を迎え入れた。

「……とは言っても、もうやることは殆ど済んでいるのよねえ」

「え、そうなんですか? もつとこう、前生徒会と戦争とか、わたしの推薦者への私刑リンチくらいでかしそうだと思いますけど」

「私刑はともかく、戦争なんてしないわよ。勝ち目ないし」

「私刑はともかくなんですね、さすが先輩……」

場所を空き教室に移してから、平塚先生は面倒な話をしだした。

「そういえばだな、あ……、雪ノ下と由比ヶ浜が選挙に立候補するらしい」

「え……、先輩、二人に伝えてないんですか？」

……忘れてた。説明が面倒臭かったし、何より面倒臭かった。

「……事後承諾で済ませるつもりだったのよ。そもそも協力してるわけじゃ無いし」

「しかしどうする。職員達は意固地になっていて二人のキャンセルも受け付けないと思  
うぞ」

大人として、というか社会人としてそれはどうなのよ。

「仕方ないわね。面倒だけど、まあやりようなんて幾らでもあるわ」

「先輩の目がいつになく怖い……」

### 後日談。

「セーンパーイ！ やばいですやばいです!! とにかくもう色々やばいんです!」

「何よ。わたしは今、SNSで湧きまくってる一色アンチを一人一人黙らせる作業で忙しいのだけど」

「もう知られてた!?!」

二年生二人と一年生一人の生徒会選挙は、一色いろはの辛勝ではあったけれど、それ

でも一色いろはの勝利という形で幕を下ろした。

基本スペックで二年生に勝てない一色の勝因となったのは、SNSでの活動。校門なんかでの喧しくそして疲れる演説ではなく、楽でその上に数多の人間の目に付くSNSで、手を変え品を変えひたすらに文言での演説を繰り返した。

「ナーちゃん、あたし達に手伝えることってある?」

「何か役に立ちたいなら投稿しているクズの携帯電話を破壊してきなさい」

一つ弊害として、というか辛勝につながった要因でもあるのだけれど、一色を嫌う人間達が未だに騒ぎ回っている(当然、その中には一色を生徒会長に勝手に立候補させたクズもいるらしい)。

校内で言いまわっている分には殴る蹴るで解決するけれど、SNSでのアンチコメントは何かと面倒くさい。

「わたしも何か手伝うけれど」

「正論主義者とネットのアンチは相性最悪よ。由比ヶ浜なら火に油でも和ませて消火できる可能性があるけど、貴女じゃ火に火炎放射するようなものだから無力。物理的に止められないなら下手なことをしないで頂戴」

「……くだらない連中もいたものね」

「ほんとよ……。これだから文句はお金を払ってからと言っているのに」

「なんかこう、……ご迷惑おかけします」

無事……かは分からないけれど、一色は不満なく生徒会長になることが出来た。  
めでたし、めでたし。



「……三人。なんの数字かわかるか？」

「平塚先生が今年告白して振られた回数かしらね」

「違う。君の反省文という名のテロリズムで保健室送りになった教職員の数だ」

放課後、私は職員室に呼び出されていた。

一色と職員室に乗り込み体育教師と言いつ争いになったことに対し、反省文五十枚を言い渡されたけれど、私は反省文というものを書いたことがなければ、何を書けばいいのかわからない。

そして謝意を伝えるなら『ごめんなさい』が適切だと判断した結果が、今だった。

「大体、君が反省している様子が想像つかないよ……」

「失礼な。雪ノ下と由比ヶ浜が立候補する前に止めておけばという反省は今でもしているわ。報連相って大事よね。ほうれん草は嫌いだけど」

反省文はシュレッダー送りになり、私は部室に向かった。

道中にコーラを買ってから部室に来たら、ドアを開ける前から何やら騒がしい。依頼人でもきているのかと思いなながら扉を開けてそこにいたのは、一色だった。生徒会が正式に始まってしばらくはあまり来なかったけれど、最近はよく来るようになっていた。

「あつ、セーンパーイ！ ヤバイですー！ 今日には本当にやばいんですー！」

「はいはい。人類の頂点に立つのならまず落ち着きを持ちなさいな」

「あ、いえ、そんな宇宙人の襲来とかじゃないです」

何度も相手をしているうちに、ある程度だが扱い方がわかってきた。

強引に落ち着けさせて話を聞くと、海浜総合高校という学校の生徒会との合同でクリスマスイベントをするらしいのだけれど、それが非常に不味い状況らしい。……そしてそんなイベントを言い出したのが向こうで、一色は断るつもりだったのに、平塚先生が乗り気になったらしい。

「……それで始めてみたものの、上手く纏まらないっていうか……」

「まあ、平塚先生が乗り気じゃ仕方ないわね。とりあえず先生には時間外労働に励んでもらうとして……」

「え、先輩は手伝ってくれないんですかあ？」

「当日は私も予定あるし難しいけど、準備くらいは私も協力するわよ。そういう約束だしね」

十二月末というのは、クリスマスに正月に冬休みと、イベントごとが多い。小説家業でも一枚噛みたいところではある。けれどそれ以外は大した用もない。

「いいねー！ ゆきのん、手伝ってあげようよー！」

「え、いや……」

由比ヶ浜は乗り気だけれど、雪ノ下は乗り気ではないらしい。

「……申し訳ないけれど、私は反対よ。生徒会初仕事から外部に頼ってというのは、外間的によくないと思うわ」

「まあ、そうね。……私が個人的に手伝うわ。最悪の場合、貴女達は『手伝う私』を手伝うという形でお願するわ」

「……最悪の状況で呼ばれても困るのだけど」

「私の言う最悪は、私以外の参加者全員の話す言語がドイツ語にでもなつて言葉が通じなくなるレベルのことよ」

「本当に呼ばれても困る事態じゃない……」

「コミュニケーションセンターというところでやるらしく、方向音痴で辿り着けるはずのない私は一色とともにそこへと向かった。」

「先輩って、そんなに方向音痴なんですか？」

「校内でも迷子になる程度には方向音痴よ」

「うわあ……」

途中コンビニに寄ってお菓子や飲み物を買ったりしながら、手を繋いで目的地に向かう。

「店員さんに姉妹だと思われてましたねー」

「まあ、美人なんて誰も彼も似たような顔してるものね」

「おじさんのアイドルに対する偏見みたいなこと言わないでくださいよお」

まあ、店員が姉妹と判断したのは顔以上に身長差でしょうけど。

迷うことなく、私たちはコミュニケーションセンターとやらの会議室に到着した。既に面々は揃っていて、他校の高校生と思われる集団は賑やかに話している。反面、総武高の生徒会の面々は静かに座っていた。

「お疲れ様です」

一色が声をかけると、一人がこちらへと寄ってきた。

「僕は玉縄。海浜総合高校の生徒会長なんだ、よろしく」

「私は不可思議可思議。小説家よ」

「……先輩、こういう時でもその自己紹介するんですね」

「事実であり史実だもの」

一色が言った通り、似たような自己紹介を生徒会役員や顧問にして変な顔をされた。

「歓迎するよ。お互いリスペクトできるパートナーシップを築いて、シナジー効果を生んでいけないかなって思ってたよ」

……???

「日本人なら日本語で話してもらえないかしら。何を言っているか——ンヌヌツ」

日本語で話すよう伝えようと思ったら、一色から口を塞がれてしまった。

「あれ、もしかしてナナツチャン?」

一色があの外国人モドキに連れられていって手持ち無沙汰になっていると、見覚えのない他校の女子から聞き覚えのある呼び名で声をかけられた。『ナナツチャン』という呼び方は、確か中学二年か三年の時に、陽気な女子が言い始めたあだ名だったはず。

「……誰かしら」

「忘れられてるの!? あたしだよ、あたし! 折本かおり!」

……覚えていない。というか、中学校の同級生で名前まで覚えてる人なんて多分ほとんどいない。

「……そう」

「ナナツチャン、髪染めてたから一瞬誰だか分かんなかったよ。生徒会とかするようなキャラだっけ？」

「そんなわけないじゃない」

「だよなーっ！ マジウケる！」

……??

私はここに、外国人との異文化交流にでも来たのかしら。

気がついたら、折本は去っていた。

「……先輩、お友達とかいたんですか？」

「いたとしてもあんな外国人じゃないわ」

一色が戻ってきて、会議が始まる。……悪夢のような、というかサバトのような会議だった。

「えー、じゃあ前回と同じく、ブレインストーミングからやっついていこうか。議題はイベントのコンセプトと、内容面のアイデア出しから」

海浜の生徒会長が議長になって会議は進むらしい。

別の海浜の生徒会が挙手して発言する。

「俺たち高校生の需要を考えると、やっぱり若いマインド的な部分のイノベーションを起こしていくべきだと思う」

「そうなると当然、俺たちとコミュニティのワインウインの関係を前提条件と考えていけないといけないよね」

「戦略的思考で、コストパフォーマンスを図っていくべきなんじゃないかな」

……??

何を言っているのかさっぱりわからない。

「……うち、何言ってるのかようわからんやけど」

「京都弁でいきなり話しかけないでください。……私もさっぱりですけど」

海浜生たちが盛り上がっているところに一応気を使って、小声で一色に尋ねてみたけれど、一色もわからないらしい。——あれは日本語じゃなかった！

「……みんな、もっと大切なことがあるんじゃないかな」

突如、議長が何かを言い出して注目を集めた。

「ロジカルシンキングで論理的に考えるべきだよ」

ロジカル、ムシキング？

「お客様目線で、カスタマーサイドに立つって言うかさ」

カスタード？ お菓子の話？

ああ、子供向けの何かだろうか。

「なら、アウトソーシングも視野に入れて」

「今のメソッドだとスキーム的に厳しいけど、どうする？」

「一旦、リスケする可能性もあるよね」

「もつとバッファをとつてもいいんじゃないかな」

「ああー、そうだね。全体をよく見たい」

……やっぱりわからない。全体どこるか一部分も見えてこない。

よくわからないまま、会議は終了した。

「大体どんな感じかわかりましたー？」

「……あんたはんが何に難儀しとるか、くらいはなあ」

「京都弁が抜けないくらいですか……」

「おもしろい思つとるんか、かいらし思つとるんか知らんけど、うちにはさっぱりやわ」

「まあ、なんか難しいこと言ってますもんねえ。……でも、先輩もたまにあんな感じですよ？　意識高い系っていうか、不思議ちゃんっていうか」

「私は日本語をおもちゃにしてるだけよ。あんな怪文書の読み上げと一緒にして欲しくないわね」

「……急に普通に戻らないでくださいよ。一秒くらい思考が止まりますから」

「難儀やねえ」

暖房ですっかり温くなったコーラを飲み干してゴミ箱に捨てて戻ってくるうちに、一色は向こうの会長から何やら紙束を受け取っていた。

「……まあ、こんな感じで、議事録纏めもうちの仕事になりそうです」

一色の言葉を聞いた、こちらの生徒会達の顔は、いつかの文化祭で見た表情をしていた。

各々作業を進め、私は小説を書き、その日は終了した。

次の日も、会議はあった。

「企画の概要として、まだちよつと固まり切っていないから、昨日のプレストの続きからやっつていこう」

いわゆる、ビジネス用語と呼ばれるらしい、……言つて仕舞えばウザいだけの意識高い系、ナルシストの言葉について多少調べ、なんとなく理解はできるようになった。

「せつかくだし、もつと派手なことしたいよね」

「それあるー！ やっぱり大きいことつていうか、とりあえずドカーン的なね！」

「うん、確かに小さく纏まりすぎていたかもしれないな」

……やっぱり話している言語が違うかもしれない。日本語とビジネス用語を足し合わせて見ても、議事録に書かれているのは『みんなで考えることを考えてその考え方もみんなで考えて……』みたいな、意味のない話し合いでしかないように見える。

「……何をするのか、メールか何かで決まったのかしら？」

「いえ。まだ何やるか具体的には何も決まってませんねー」

……まとめるも何も、ロープの内側に何も無いじゃない。

「ちよつと規模を上げようと思うんだけど、どうかな」

海浜の生徒会長は、なぜか私や一色の方を向きながら尋ねる。

「あー……、そうかもですねー」

「規模を大きくするには時間も人も資金も場所も足りないわよ」

「ノーノー、そうじゃない」

思わず日本語で口出ししたら、急に否定された。

「ブレインストーミングはね、相手の意見を否定しないんだ。『問題があつて大きくできない』、じゃあどうやって解決していくか。そうやって議論を発展させていくんだよ」

「それなら、私の意見も否定しないのが定石じゃないのかしらね。ブレインストーミングは独創的なアイデアを出すための集団思考法という意味だったかしら。——けれど、独創とは否定という彫刻刀で削つて現実に嵌め込むから意義があるのよ。妄想と現実の区別をつけなさい」

「……申し訳ないが、何を言っているのかさっぱりだな。意見があるなら、みんなに分かる言い方で言ってもらえないかな?」

こっちのセリフ過ぎるのだけれど。

「問題は見つかった。ならどう可能にするかを話し合おう」

私のことは見限つたらしい。

「近くの高校をさらに入れるっていうのは?」

海浜の一人がそんなことを言い出した。

蒼さんレベルとまではいかずとも、雪ノ下姉妹レベルの人員じゃないと無意味だと思うのだけれど。

「入れて何をさせるのかしら？ 労働力ならうちとそつちから適当に希望者でも連れて来ればいいじゃない。私みたいに」

「否定はダメだと、伝えたつもりだったんだけどな」

「ブレインストーミングそのものが愚かだと語ったはずよ。苦悩と工夫は成功への遠回り」

「……しかし、君の意見で人手そのものの問題は一応解決と言える」

「なら、近くの小学校ならどうだろうか」

……会長を折るまではいかずとも歪められたと思つたら、次弾がまた凶悪だった。

「なるほど。ゲームエデュケーションって言うのかな、ああいう風に楽しみながら作業するようにできれば、地域の小学生の力を借りられるんじゃないかな」

会長が補足するように何か言うと、海浜の面々が「ウインウインだね」と、おそらく肯定しまくる。

「小学校へのアポイントメントとネゴシエーションはこちらでやるとして、その後の対応、お願ひできると嬉しいんだけど」

なんかもう決定事項らしく、「呼ぶだけ呼ぶからそのあとは全部よろしくね」的なこと

を一色に向かつて言い出した。

「そうですねー」

「どうかな？」

「はい、わかりましたー」

一色が請け負ってしまったということは、つまりはさらに総武校生徒会の仕事が増えるということ。複数のため息が重なった。

そんなところで、今日の会議は終了した。

「セーンパイ!!」

「……何よ」

一度会議室から出て、自販機で飲み物を買ったところで戻れなくなったから、近くのベンチで休んでいると、一色が声をかけてきた。

「どうしてあんな、波風立てまくるんですか！ 見てて冷や冷やしましたよ！」

「……別に、平塚先生を連れてこれなかったから、いつそ台無しにしてやろうとか考えていないわよ」

「そんなこと考えてたんですか!？」

「だから、考えてないわよ。普通にウザかったから黙らせたかったの」

「それはそれでどうなんですか……。あ、そういうえば先輩、こんなところで何してるんで

すか?」

「迷子よ。部屋にも出口にも辿り着けなかったの」

一色に手を繋いでもらってなんとか外に出て、どうにか帰宅することができた。

まさかクリスマスが地獄なのは間違っている。『意』

昼休み。三子が昨日衝動買いしてきた焼きそばパンを教室で食べていると、由比ヶ浜が寄ってきた。

「ナーちゃん、今日部活くる？」

「そうね……。悪いけれど、依頼が特にならないのなら休ませてもらうわ」

「……そっか」

「この時期は書かなきゃいけない小説が多いのよ」

「いろはちゃんのお手伝いで忙しいとかじゃないんだ!？」

……忙しかったら、まだそっちの方がマシかもしれないわね。

「そっちはそっちで面倒なことになってるのよ。……材木座の中二病が真っ当に見えるくらいには面倒な集団だったわ」

「それ、日本人？」

多分違う。

放課後も放課後、空がすっかり赤らんでいる頃。

「ごめんなさい先輩つ、遅れましたあ……」

「別に平気よ」

一色から『部活に顔出してから行きますね〜』と連絡されたから、私は無人の生徒会室で小説を書いて待っていた。

「そこは『今来たところだよ』って言うところですよ」

「今来たなら私は今まで何をしてたのか聞いてくるでしょう」

「そんなの当たり前じゃないですかあ。先輩のミスを突ける後輩を目指してますから」

「いい趣味してるわね」

致命的に方向音痴な私は相も変わらず一色と手を繋ぎ、あのサバトよりも悍ましい異界へと歩み出した。

事態は進み。

今日からは、小学生が八人ほどが手伝いに来る。

「君たち一人一人のマンパワーに注目している。これから一緒に決めていこう。積極的  
に、いろいろ言って欲しい」

「「よろしくお願いしまーす!」」

既に私達以外は集まっていて、海浜の生徒会長が言うだけ言って放置、離れていつてしまった。

「何すればいいか聞いてくる?」

「誰が? 私無理……」

「先生に聞いてもらおう?」

小学生から見れば、高校生は強大すぎる存在。誰も彼もが萎縮している。

「……私、行くよ」

その中の一人、妙に大人しいと言うか、大人らしい雰囲気のある黒髪ロングの少女が、こちらへ来た。強大な存在の目の前へ赴く緊張感を滲ませながら。……って。

「留美じゃないのよ」

「……可思議?」

気がついていなかったらしく、総武校の生徒会に尋ねに来た留美は私を見て目をキョトンとさせた。

「先輩、知り合いですか?」

「私の友達よ」

「……ロリコン?」

「年下趣味と言いなさい。……違うけど」

私の趣味は平塚先生や沙希のような年上感のある人であって……。

「可思議。私達、何したらいい？」

私がいるからか緊張感の抜けた留美は、再度尋ねる。

「何、と言われても、まだ何も決まっていけないのよねえ。決まっていけないっていうのは、留美達にさせることが決まっていけないってことじゃなくて、このイベントでやることが決まっていないという意味で」

「……じゃあなんで呼んだの？」

「私に聞かれても、なのよ。……時間が時間だし、小学生と高校生が遊びまわる時間でも無いわね」

暇ならゲームセンターにでも連れていこうかと思っただけれど、時間はもう十七時。小学生在遊ぶには危うい時間帯。

「あ、それじゃあ飾り作っちゃいましょうか。材料はほとんど揃っていたはずですよ」

妙案閃いたと言わんばかりに一色が言った。材料といっても、画用紙や折り紙だったけれど、それならむしろ小学生の方が得意そうでもある。

「一色、ここは任せるわ」

「え、先輩は手伝ってくれないんですか？」

「私はタイピングより細かい作業は苦手なのよ。料理とか工作とか、やるだけ材料の無駄よ」

だから私は、できることをやる。

海浜の生徒会は私達も小学生も放置して何をしているかと思いきや、あの日本語モドキで話し合いのようなことをしていた。

「ねえ」

なるべく威圧的になるように、聞き流されないように、声をかけた。

「なんだい?」

生徒会長が爽やかそうな微笑みを浮かべながら振り向いた。

「いい加減何をするのか決めないと、小学生が来ようが誰が来ようがさせることが無いのよ」

「それはそちらに一任させたつもりだよ?」

「だったら内容の決定権も寄越しなさい。貴方達には口ではなく手で働いてもらうわ」

「いや、それはダメだ。視野を狭めることに他ならないんじゃないかな。みんなで解決

する方法を模索するべきだと思っただよ」

「その時間も惜しいという話をしてるつもりよ。イベントの準備が二日、三日で終わるとでも思ってるの？」

「そうだね。それもどうするかみんなで話し合わないとね」

私らしくもなく、舌打ちの一つもしたくなかった。

この話し合いが大好きで仕方がない愚か者が何を考えているのかといえば、要するに責任の分散。『言い出しっぺの法則』という、最初に言い出した人間が実行し、責任を持つべきという理念がある。

この場合の言い出しっぺというのは、このクリスマスイベントを提案してきた海浜総合高校のことであり、イベントの内容を提案した人間を指す。——その人間になりたくないけれど、誰かに押し付けられるのも心苦しいというわけだ。あるいは、誰か一人に決められるのが気に食わないというのも相応にあるだろう。

「焦るのは分かるけど、頑張ってみんなでカバーしていこうよ」

「……はいはい」

阿呆も東ねれば折れなくなる。共犯者がいるだけでその心は自信に満ちる。

「だったらその会議、今すぐ始めなさいな。……いい加減、カバー仕切れる範囲を過ぎるわよ」

誰かと協力してやるとするのは、何にしても時間がかかるもの。それは当然一人が独走するより確実に安全なのでしょうけれど、物事の認識を統一できなければいけない。そのためには必要以上に綿密な話し合いが必要で、故に時間がかかる。

「じゃあ、早速会議に入ろうか」

何よりも問題は、海浜生徒会の目的は決してイベントでもボランティアでもなく、この話し合いそのものなこと。私から見れば無駄でしかない、無益で無意義で無意味な話し合いをしている自分たちに酔っている。意識高い系、なんていうけれど、まさしく、自意識過剰。話し合いという手段そのものが目的であり、最終的な失敗はみんなで分け合えば問題なし。

そんなことを、意識的であれ、無意識的であれ、認識を統一してしまっている。

「これまでのブレストでグランドデザインはみんなと共有できたと思うんだけど、今日をもっとクリエイティブな部分について、ディスカッションしていきましょう」

そんな長つたらしい前口上から、会議は始まった。

「これについてはゼロベースで始めることだから、みんな自由に発言してね」

自由に言っつていいというのなら、イベントの中止を言いたいところなのだけれど、流石にこれをこのタイミングで言うほど私も愚かでは、あるいは殊勝ではない。

海浜生徒会から、次々と意見が上がる。

「やっぱクリスマスっぽい方がいいよねー」

「トラディショナルな部分は外せない要素かな」

「でもうちの需要って高校生らしいことなんじゃない？」

会議を長引かせる、楽しい時間を続ける手段として、彼らは抽象的な意見ばかりを出して、結論を遅らせる。

「……クリスマスらしいものって、何があるかしらね」

言葉が通じずとも、方向修正くらいはできるはずであり、案の定効果があったらしく芋づる式に意見が出てきた。

「クラシックなクリスマスコンサートなんて地域のイベントのスタンダードって感じがするよね」

「でも、若いマインドも加味した方がいいんじゃないかな。バンドとか」

「それならいつそ聖歌隊とか。パイプオルガンとか借りて」

具体的な案が出て来れば、結論への道筋が見えてしまう。それを許容できるほど、議長は阿呆ではなかった。

「よし。それじゃあ一度、全部検討しよう」

会議を長引かせるために。かっこいいビジネス用語を一つでも言うために。

当然、そんな時間は残されていない。イベント当日まで残り一週間とちよつとしかないし、何をするにしても準備に加えて仕込みや練習までとなると、今決まったところでまだ無茶。

「この中から選んで決めた方が早いでしょう。決めた内容の割に練習不足でグダグダなんて、愚の骨頂よ」

思わず言うと、議長は首を横に降って反論する。

「すぐに意見を否定するより、みんなの案を取り入れて全員が納得できるものを作るべきだよ」

「全員の納得と内容の完成度、どっちを優先するべきなのかしらね」

「それも後で話し合おう」

「話し合う時間は完成度を削って出来ているのよ。時計とカレンダーを見なさい」

「……何を言っているんだい？ 記録はしっかりと残しているさ」

そんな話はしていない。

会議は様相を変えて進行する。

「音楽系にまとめて、いろんなジャンルのクリスマスコンサートはどうかかな？」

「まとめるっていう観点で考えれば、ミュージカルと音楽の親和性は高いよね」

「いつそ全部混ぜて映画にするっていうのは？」

折衷案という名の闇鍋レシピにしか、私には聞こえなかった。

否定を禁じられるブレインストーミングでは、一度組み上がったものを否定で削ることとはできない。

会議は混沌を極め、時間ギリギリになっても会議が終わらず、結論は持ち越しとなった。

小学生は外が真っ暗になる前に帰っていて、留美と話す時間もなく、一色と共に帰った。

「お姉ちゃん、おかえり」

「あんた、こんな時間まで何してんの」

玄関で靴を脱いでいる間に、三子と沙希が顔を出した。

「朝帰りしてた沙希には言われたくないわね。……というかこんな時間までいて平気なのかしら？」

沙希は放課後にアルバイトでうちに来るけれど、家での家事のために、いつも五時前には帰ってしまう日がほとんど。

「今日は母親が休みで夕飯作るっていうから、少しね。でももう帰るよ」

「沙希さん、最近お姉ちゃんが帰り遅いから心配してくれてたみたい」

「そう。……沙希、心配はいらないわ。別に危険なことをしてるわけじゃないから」

「なら、なんか手伝えることある？」

「テロリズムでもしてイベントの中止へ追い込んでもらえると助かるわ」

「……何言ってるの？ てか何やってんの？」

「サバト」

いや、魔女でも話し合う時はもつと計画的に話し合うと思うけど。

翌日。

今日は会議は無く、他の作業を進めたいらしい。

「先輩、もう飾り作りが殆ど終わっちゃいそうなんですけど、次何やったらいいですかね？」

「そう……」

そもそも、小学生に任せていい仕事というのが少ない。それこそ飾り作りのようなイ

ベントの修飾ばかりで、本題周りは決まってすらないのだから、下手なことをやらせてもどうしようもない。

「飾り方向で何かするしかないでしょうね。ツリーの組み立てなんてどうかしら」

「物は届いてますけど、今組み立てちゃっても邪魔じゃないですか?」

「エントランスにでも置かせて貰えばいいんじゃないかしら。残り一週間だし、交渉すれば多分平気よ」

一色は納得したようで、会議室から出てどこかへと向かって行った。

そして、私にできることも、多分これで最後になる。

データを纏めた画面をノートパソコンに移し、海浜の生徒会長に見せる。

「これは?」

「予算や時間的にどうしようもないアイデアを精査したわ。まあ大半が予算、残り幾つかが時間的に無理なのだけけど」

「おおっ、ありがとう!」

最低限必要な予算と比較して切り落としたものや、映画などの時間的に不可能と切り捨てた文字列を見て、顔を顰めながらも、小さくうなづいた。大層不服らしい。

「これで問題点は明確になった。みんなでどう解決するか考えよう」

「時間をかければかけるだけ、今なら採用できるアイデアを切り落とすことになるのよ

「？」

「バンドとかは外部に発注するとかもあるんじゃないかな？ プライベートライブの派遣サービスとかも結構あるんだよ」

「少ない予算でそんなことできるわけじゃないじゃない。時は金なり、時間を短縮しようとするだけでお金がかかるのよ」

「……みんなで検討して次の会議で決めよう」

意見を求め、聞く。承諾を得て、行動。問題が起きないように、後から揉めないように調整。なるほど大事なことなんですよ。でもそれが出来るのは、意見を切り捨て、相手を説得し、失敗すれば責任を取る覚悟のあるものだけ。

「次の会議で決まらなければ全て不可能。私も善処はするけれど、決まらないようなら総武高校はこの件から手を引くよう私は働きかけるわ」

何かを得るには、何かを諦めなければならぬ。解決の近道は妥協と諦め。楽しくかつこいい会議は諦めろ。

返事を聞かぬまま、私はそこを離れる。

席に戻って小説を書こうとも思わなかったけれど、ふと、部屋の隅に目がいった。

一人ハサミを片手に黙々と作業していて、雪の結晶の飾りを作っているらしい、留美がいた。

「飾り作り、楽しい?」

「うん」

こちらに目もくれず、無表情で切り続けているのを見るに、没頭しているらしい。

私は隣に座り、膝にパソコンを乗せてキーを叩く。

「可思議、やることないの?」

「ないのよねえ。おかげで、クリスマスと年末年始の分の小説が書き上がってしまったわ」

「どんな話?」

夏休みから始まった留美とのメールのやりとりは今でも続いている。その内容というのはまあ他愛もない雑談が多いのだけど、時々、私の小説の感想を送ってくれている。あまり長時間はパソコンを使えないそうだけど、それでもちゃんと読んでくれているのを私は知っている。

「そうねえ。ネタバレしない程度に話すなら、死んだキャラクター達の会話とか、普通にクリスマスデートとか、一家の正月とか、まあ色々書いてるわ。留美の気に入ってた娘も登場したわね」

「そっか。じゃあ今書いてるのは何？」

「秋頃から書き始めた、ファントムハウスね」

「へえ。いつ書き終わる？」

妖怪モノが小学生にウケるのは今も変わらないようで、お化け屋敷を舞台とした小説は留美のお気に入りの一つ。

「明日には更新できると思うわ」

「楽しみにしてる」

「存分に期待していなさいな」

「うん。……あ」

留美が作っていた雪の結晶の最後の一枚が、出来上がってしまった。

手持ち無沙汰になってしまい、使い道の無くなったハサミを留美はジツと見つめる。

「別に、無理に働く必要はないわ。暇なら話し相手ぐらいにはなれるわよ」

その日も、準備はほとんど進行しなかった。

# まさかクリスマスが地獄なのは間違っている。『識』

外が暗くなってきたから留美達を帰し、さらに一時間ほど経って解散になった。

今日の帰りは一色とではなく、様子見に来たらしい平塚先生の車へと放り込まれた。

「イベントまで残り一週間だろう。見ていてもどういいう状況か分からなかったが、君から見てどうなんだ？」

「色々ダメそうね。目的が噛み合っていないもの」

「ほう？」

「私たちの目的はクリスマスイベントを恙無く終わらせること。なのに対して、あの日本人モドキ達の目的は格好よく会議することにある。そりゃ、終わるはずがないわよね」

「君の口をもつてしてもかね？」

平塚先生の言う通り、大抵のことは口先で解決してきた。中には蹴り倒したり、メールで済ませたこともあるけれど、肉体言語であれ活字であれ、基本はコミュニケーション。

「学校とは言ってしまうえば隔離施設。違う学校とはつまり違う世界。……言葉が通じる

はずがなかったのよ」

「小学生相手には通じたのか？」

「……どうかしらね」

言い訳でしかない。世界が違うなんて、言葉が違うなんて、そんなことはない。同じ世界の住人で、日本語の使い手であるはずだ。

「君は人の感情も心理もよく分かっている。それなのにどうしようもないというのなら、それは見ていないのだろうか」

「そんなことないわ。あの愚か者達の考えていることも、したいことも、私は知っている」

「なら、雪ノ下と由比ヶ浜はどうだ？」

雪ノ下と、由比ヶ浜。二人は今回の件とは概ね無関係なはずだけれど……。

「戸塚は、川崎はどうだ？」

「……平塚先生、何の話をしているのかしら」

「人形師と殺人鬼は難しいにしても、君の周りにはまだまだ人間がいるはずだ。……何故一人でやろうとしている？ 何故一人にやらせようとしている？」

「二人でできるなら、そっちの方が早いからよ。失敗しても自己責任で済むし、成功してもやっぱり自己だけで完結する」

「だが限界があった、だろう?」

……その通り。

「君は今回困らされて、それでも片時も誰かを頼ることをしなかった。無関係の人間を巻き込もうとは思えなかった。発想すらしなかった」

「……そうかしらね」

考えあつてのことでは断じてないけれど、希望者に限れば連れて来れる状況は私が作った。

「君はもう少し、他人に依存するのではなく、頼るということを覚えた方がいい」

「……別に、頼ることができないわけじゃない。私は任せられないだけよ。道案内は頼めても、お使いは任せられない」

「君の心がどれだけ繊細に成り立っているのか私には想像もつかない。人に任せることがどれだけ恐ろしいことなのか予想もつかん。その貧弱な体より先に心が壊れて死ぬ様子が目に浮かぶようだ。……だが、だからこそ、それでも頼れるようになった方がいい」

言う通り、私は弱い。口と舌で生きてきた。目と指で書いてきた。

「君の方が知っているだろうが、人間、生きていくだけで誰かを傷つけている。触れ合えば傷つけるし、離れても傷つける。傷つきたくないなら、傷つけたくないなら、それこ

そ死ぬしかないんだろうよ」

気がついたら私は家の前で車を降りていて、私は平塚先生を見送っていた。

三子が受験勉強で部屋にこもっているため、私は一人リビングのソファでパソコンを開く。小説を書くために。

書いては消して、書いては消す。平塚先生の言葉が脳裏に走り続けて、物語が続かない。——小説が書けない。

……私は何がしたいのだろう。

私と同じ学年の学生達は、皆進路というものをもっている。三子だって持っている。

——私だけが、持っていない。

やりたいこと。なりたいもの。欲しいもの。——私は全て手に入れている。

……ならどうして苦悩している？

苦悩と工夫は成功への遠回り。そう信じて今まで小説を書いてきた。——語ってきた。

それで問題なんてなかった。悩む暇があれば指を動かし続けてきたし、余計な手出しをして手間を増やすようなこともしてこなかった。——他人の手なんて一切入れてこなかった。

……何を諦めたらいい？ 何を妥協したらいい？

妥協と諦めが解決の近道。そう信じて生きてきた。——書いてきた。

諦めさせて、妥協させて、諦めて、妥協して。切り捨てて切り落とし切り裂いて切り崩して、切って切って切って切って、針の穴を通るサイズまで削って通してきた。

……私は生涯不変の小説家。

傷つかず、傷つけられず、変わらず、変えられず……。

『生涯不変を謳っていても、不老というわけではないのだな』

……平塚先生の言う通りだ。

私はきつと老いた。弱った。——切りすぎた。

要らない部分を削いで削いで削ぎすぎて、自分に切つていい部分を失った。

子供が現実の醜さを知って大人になるように。現実に関心を削られて老いるように。

……切り落としたものが元に戻るはずがない。

接着剤で固めようが、鉄の棒とバーナーで溶接しようが、万力で押し固めようが、それは全くの別物だ。

「あーあ。本当、あーあ」

こういう時は、水風呂で全て冷やして固めるに限る。

「……お姉ちゃん。何に悩んでるのか知らないけど、風邪はひかないようにね」

……浴槽に水を張るのも煩わしいわね。シャワーを浴びる程度に抑えましょう。

「小説、書きたい……。あと読みたい……」

材木座の新作、まだかしら。

放課後の生徒会室。クリスマス合同イベントのため相変わらず無人の部屋で私は何をするでもなく、椅子に座って天井を見続けていた。——詰まるところ、現実逃避をしていた。

昨夜はあれから全く寝付けず、授業中ですら居眠りの一睡もできなかつた。

映画でよく見る設定の、『人間は脳を10%しか使えていない』みたいな、脳の一部が働いていない感覚を知覚しながら、本能に身を任せて口呼吸を繰り返す。

「あーあ」

いっそ、呼吸することすら面倒くさい。

生きること、口を動かすことも、小説を書くことすら面倒くさい。

「あーあ。あーあ。あーあ」

あーあ。

面倒くさいけど、生きるために。小説のために。

——私は私を諦める。

「はあーあ」

向かう先は、久しく行っていない気がする奉仕部部室。

いつそ忘れてしまいたいほどに歩き慣れた道を最短ルートで歩いてしまった。

扉が、大きい。思えば見上げるのすら初めてな気がする。

あと一步踏み込めば、そこは針の筵。何をして心も削れる地獄に他ならない。

心臓が悲鳴を上げるように騒ぎ立てている。釘でも打ってるのかお前は。肺が潰れるから大人しくしなさい。

「あれ、ナーちゃん?」

「ウニャツ?!?!」

変な声出たあ!!

……この時間なら用事がなければ部室にいるはずの由比ヶ浜の声が何故か背後から聞こえてきた。

「……ナーちゃん?」

「な、なんでもあらへんよ……」

逃げ場は失われた。もう部室に入るしかないし、扉を開けた。

いつも通り雪ノ下は椅子に座って読書に励んでいた。

「扉の前で騒がしいと思ったら、貴女だったのね。今日も来ないものだと思っていたわ」

「……ええ、まあ」

いつも私が座っている横並びの椅子ではなく、二人の対面に私は座った。

「ナーちゃん、どうかしたの? なんか変だよ?」

そりや、違うわよね。

右手を頭上に回して左側頭部まで伸ばして当て、首をほぼ直角に曲げる。ベキベキと、首や頭蓋骨周りの骨が鳴る。

回りきつていなかった脳に痛みと快感という二色の刺激が走り、脳は覚めた。

「……その、お願い。……頼み、……依頼があるのよ」

似た文言ならいくらでも小説で書いてきた。言わせてきた。それなのに、このザマ

だった。辿々しく、顎や歯茎が震えている。

「……私の手伝っていた、……手伝うはずだった、クリスマス合同イベント。……頼る気なんてなかったのだけど、頼らざるを得なくなっちゃわ」

「けれど……」

私が言ったことだ。全員ドイツ語で話し出して言葉が通じなくなるレベルでないと助力は不要だと。

「二色のためにならない、……そんなことはどうでもいい。でも、最低限、私がこれからも小説家であるために、イベントを完遂する。……だから、だから……」

だから。

息が詰まる。心を落ち着けようと深呼吸しようにも、肺が空気を受け付けない。

「……助けて、もら……ほし、……」

何を言おうとしているのか、わからない。口が脳の指令を無視して動いてるような感じがする。

「助けて、ちょう、……くだ、……そう。助けて、くだ、さい」

言えた！ 言えた私の口！

いや、落ち着け私。そんな子供が第一声を発してはしやく母親か！

「私を、助けてください」

今まで一度でも、こうも人に助けを乞うたことがあつただらうか。——否。

「お金を払えというなら、払う。無礼を詫びろというなら、なんでもする。……だから、わたしを助けて」

どうにか言い終えて、顔を上げる。

「……そう」

雪ノ下は本に目を落としたまま、小さく返す。

「うあ……」

顔を上げてようやつと、視界が濡れていることに気がついた。目元が熱くなり、頬に一筋、細いものが走る。

「なつ、ナーちゃん!?!」

「あ……あ……」

別に、この状況が辛くて泣いてるわけじゃない。

私がか今まで見て見ぬふりをして溜まった負の感情が、発散仕切れず溜まった感情にもなれなかつた何かが、諦めによっていつも以上に栓が緩むことで溢れ始めている。

「ナーちゃんなんで泣いてるの!?! ちよつとこつち向いてえ!」

「いや、ちが……」

三子とは違う、力任せで雑にハンカチで目元を拭かれる。

私にとつて、泣くことは別に珍しいことではない。むしろ最近読者が大幅に増えたおかげで、酷評が幾らか来てよく泣いている。

「……もう、わかったわ。一色さんや生徒会のこととも思うと複雑だけど、貴女の誠意と涙に免じて、その依頼引き受けるわ」

雪ノ下は。パタンと本を閉じて、諦めたように頷いた。

「泣けば許されると思ってる女ほど不快なものもそうないけれど、貴女のそれが別物なことくらいは分かるわ」

「……別に、そんなんじゃないわよ。……これは、」

ひと段落済んだからか、急に肺が大量の空気を求め出した。

「違うのよ、……私は、元来泣き虫なだけで、ヒクツ……」

違う。私はこんな、子供みたいに泣くような奴じゃない。詩的に素敵に、不敵に無敵に、私は……。

「よしよし……。勇氣いるもんね、人をお願いするのつて」

頭を、優しく撫でられる。

「初めてのこことつて怖いよね」

「……うん」

誰だこいつ。

誰だこいつ、誰だこいつ、誰だこいつ!!

いつから私は妹キャラに変貌した!?

私にこんな萌えるキャラなんてなかったはず!!

いやそりや、三子の膝の上に乗ったりとか京都弁で喋ってみたりとか、素であざとい  
ようなところもあるかもしれないなかったけれど！ でも涙目で「……うん」って！

誰だこの妹科ロリ属妹系美少女!!

撫でられつつ、内心悶えていると。留美からのメール以外でなることが殆どない携帯  
電話に着信があった。

機械音痴ならぬ、携帯電話音痴な私でも、未だ涙を垂れ流し状態のままでも、電話に  
出るくらいはスムーズにできる。

「……私よ」

『え〜つと、先輩？ 不可思議先輩の電話ですか？』

電話をかけてきたのは、何か困惑している一色だった。

「私が不可思議可思議よ。だから何」

『いや、声がいつもと少し違いますし。なんて言うか、泣いています？』

「放っておいて頂戴。そして用がないなら切って」

『そこは、「切るわよ」じゃないんですか？ いや、今日は会合休みつて伝えたかっただけですよ』

私は電話に出ることはできても、切ることは若干難しい。ただでさえ顔の见えない相手との会話の切り方がわからないのに、その上操作しなければいけないなんて、なんの冗談か。

「そう。それだけ？」

『はい、それだけです。また明日』

「ええ。……ああ、言っておくけれど。盗み聞きするならもつと上手くやりなさい」

切られた。適当に言っただけなのに。あの愉快だけど決して無能ではない後輩なら私との会話に電話なんて使わないと思っただけなのに。

「……不可思議さん。泣きながら平然と電話するのはやめなさい、不気味よ」

「私は泣き虫なのよ」

ハンカチでどれだけ拭われても止まらない涙のことも、いろいろ諦めたついでに諦める。

「忘れていたわ。——雪ノ下。変態呼ばわりして、ごめんなさい。——由比ヶ浜。雌豚呼ばわりして、ごめんなさい」

「……あつたわね、そんなこと。言われなきや思い出しもしなかったわよ」  
「私そんなひどい呼ばれ方されてたっけ!？」

二人とも覚えていなかったらしい。実はここに来るまで気がかりだったことの一つ  
なのだけれど。

「女は感情が動いた時のことはよく覚えているのよ」

「……つまり、本当に私のことを変態だと思っていたのね」

まさかクリスマスが地獄なのは間違っている。『過』

家に帰ってから私がしたことといえ、一貫してハグだった。

諦めたとはいえ、生き恥にして生ける恥だったことに違いなく、私は三子に抱きついてわんわんと泣き喚いた。子供のように、姉としてのアレコレも全て投げ捨てて。――  
諦めて。

「みこお……」

「はいはい。……夜ご飯、作る暇ないしなんか頼むけど、お姉ちゃん何がいい？」

三子は体格以上の包容力で私を抱き抱えて、いつもとは逆向きに、向かい合う姿勢で膝に乗せながらソファに座った。

「……ドーナツとコーヒー」

「それオヤツじゃ……。まあいいけどさ。ミスドつてウーバーあったかな……」

「……なかつたら私が買ってくるわ。一人で夜道歩きたい」

「お姉ちゃん、前に似たようなこと言って私が搜索願いまで出す羽目になったのを忘れたの？ ……一人になっちゃダメだからね」

「……お姉ちゃんにも一人になりたい時はあるのよ」

「自分より大きい妹に泣きついて泣きじやくる人なんてお姉ちゃんじゃないよ。お姉ちゃんの方がよっぽど妹だよ」

三子は片手間にスマホでミスタードーナツの宅配を頼んでから、背骨が軋むほどに両手で抱きしめた。

「……ねえお姉ちゃん、一回だけでいいから、私のこと『お姉ちゃん』って呼んでみて?」  
「いやよ。これ以上私に妹キャライメージが付いたら大変じゃない。最近じゃそういうのを解釈違いって言うらしいわよ」

「お願い。私もお姉ちゃんって呼ぶから」

「複雑な家庭環境になってるじゃない」

あとそれじゃ何も変わっていない。趣味じゃないけど『お姉様』くらいは言ってみなさいな。

「『家庭環境なんて家庭な時点で複雑なものよ。むしろ両親が離れて単純になったわね』って、お母さんと会えなくて泣いてた私を慰めてくれたのお姉ちゃんでしょ」

「私が小学生の頃のことじゃない。今聞くと意味不明だし、それで慰められてる貴女はなんなのよ」

「慰められてるっていうのが嬉しかったんだよ」

「……そうね。三子、ありがとう」

「どういたしまして。お礼ならお姉ちゃんって呼んでくれればいいよ」  
「それは嫌」

翌日放課後。昨日とは別の意味で入りづらい部室へと、私はやって来ていた。ここにくる前に平塚先生に用があつただけけれど、出張だかなんだかで不在なため会うことは叶わなかった。

催促して送らせた材木座の新しい小説を読み進めていると、雪ノ下の方から声をかけた。

「そ、その、今日のことだけれど、場所と時間を教えておいてもらえるかしら」

「場所は覚えていないし、時間なんていつもバラバラだったわ。……それよりも、ビジネス用語や意識高い系という存在について、ネットで前知識をつけておいて頂戴」

「よくそれで今までやってこれたわね……。ビジネス用語というと、……アウトソーシングがどうか、アライアンスがなんとかって、ああいうのかしら」

「合同先の高校ではそういうのを乱用して会議ごっこをするのが流行ってるみたいなのよ。……正直、中二病全開モードの材木座以上に話が通じないわ」

「……それ、日本人なの？」

「これ言うとはぼ全員が同じようなことを言うわね。……まあ、使えずとも意味さえ分かっていたら問題は無いけれど」

「いえ、前にテレビの特集で見かけただけで、付け焼き刃にもなっていないのだけど……」

「なら知識という名の耐性だけでも焼き付けなさいな。……貴女の性格だと、最悪の場合合胃に穴が開くどころか胃が消滅するわよ」

「私の胃はそんなに貧弱じゃ無いわ」

「……そっちの自信なのね」

この後、由比ヶ浜と一色が部屋に集まってから、現地へと向かった。

「状況があまり良く無いそうね」

「そうなんですよお。先輩でもまだ過激さが足りないって言うかあ、パワー不足って言うかあ」

場所を知らない雪ノ下と由比ヶ浜を先導するように一色が前を歩き、私は逸れないように手を繋ぐ。……繋がれた手に、注目が集まっている気がする。

誰かが逸れることもなく、無事にコミュニティーセンターへと到着した。

「……とりあえず、覚悟はしておきなさいな」

主に雪ノ下へ忠告しながら、私が扉を開けた。

「やあ。そちらは初めてみるニューフェイスだね、よろしく」

海浜の生徒会長が、新顔二人を見て言うと、二人は揃って微妙な表情を浮かべた。

「それじゃあ、会議を始めようか」

——数時間後。

会議が終わると、二人は逃げ出すようにエントランスに駆け込んだ。私も一色と共に

二人のところに向かった。

「……正直、予想以上だったわ。不可思議さんの言っていたことの意味が分かった」

「だね。外国人の話聞いてるみたいだった。……それで、どうしよつか」

雪ノ下は頭を抱えていて、由比ヶ浜も困った笑みを浮かべている。

「……二人を巻き込んでおいてあれだけど、さっぱりよ。うちでクリスマスといえは夕食が重たくなる日でしか無いし、どんなものがクリスマスらしいかってそもそも謎なのよね。……聖書の音読会とかでいいんじゃないかしらね、もう」

「いや先輩、クリスマス過ぎませんか？　ここ日本ですよ？」

「じゃあ般若心経とか古事記でもいいけれど」

「ただ音読会やりたいんですか」

「やりたく無いことを無理やりやらせるから面白いんじゃない。クリスマスは食いつぶした高校生の客前でやるのが面白くもなければ感動もない黙々とした音読会。きつと楽しいわ」

当然だけれど、却下された。

翌日。

私たち四人は面倒臭くなって平塚先生に相談することになり、職員室に来た。

「とりあえず、歯あ噛み締めなさい」

「せめて食いしぼらせろ!」

「ナーちゃん!」

平塚先生と顔を合わせてやったことは、頭突き。大した筋力もないしダメージなんてないだろうけど、しないわけにはいかなかった。やっておかなきゃ、互いに気が済まなかった。

「いっつー……。やってくれるな、不可思議」

「ナーちゃんどうして!」

「いや、構わないよ由比ヶ浜。私が不可思議にやったことの報いだ。甘んじて受け入れる」

私を一度あそこまで追い込んだのは、全面的に平塚先生だ。

車で聞いてた時は納得させられた、というか言いくるめられていたけど、思い返せば文脈が滅茶苦茶だった。

どこから企んでいたかなんて知らないけど、平塚先生は多少強引にでも私を追い込み、誰かしらに助けを乞わせようとしていた。

「では、相談とやらを聞こうか」

一応の責任者である一色から、今出ている企画案や懸念事項である予算の問題について話す。

私からも補足しつつ話し終わると、平塚先生はわざとらしいため息を一つ吐いた。

「で、まずは予算というわけか」

「他にも色々あるけど、何をするにもまずそこね」

「そういうことなら、これをやろう」

平塚先生が引き出しから取り出したものは、見たところ四枚のチケットだった。

「どうしたのよ、これ。安くないでしょう」

「嗚呼、結婚式の二次会で当ててな……。くれてやるから、これで少し勉強してきたま

え」

差し出されたチケットを、私は思わず受け取ってしまった。けれど別に、嬉しくもな  
んともない。

「……ディスプレイニールランド、ねえ。一回だけ行ったことあるけど、ここのイベントが無く  
ても混むじゃない」

「そうね、私もあまり……」

雪ノ下もあまり乗り気でないらしい。

「君たちはクリスマスなのなんたるかを分かっていない。あそこのクリスマスは凄いし、  
参考になるだろう」

色々渋ったのに、部活の冬合宿だの取材だのと色々こじつけられて、翌日の土曜日に  
行くことになってしまった。

で、まあ翌朝。駅までは三子に案内してもらいながら（受験生に何させてるんだらう  
……）、舞浜駅に集合した。

「先輩つ、やればできるじゃないですか!!」

「鬱陶しいから離れなさいな」

部活で夢の国に行くと伝えたら、家を出る前に三子と沙希による可愛がりが発動。た

まにされる、髪を整える程度で十分だったのに、蒼さんが好きそうなフワフワモコモコした動きにくい格好に着替えさせられた。あとは髪の色を全部金髪に染めたら、完全にどこかのアニメのヒロイン。

ツボに刺さったのか、一色があちこち触ってきて鬱陶しい。

「あれ、七五三なごみじゃん。……あんたそんな可愛かったっけ」

「風呂上がりの私を見てるでしょうに。顔はかわいいのよ、私」

……というか、なんでいるのかしら。

三浦の他に、葉山、海老名、戸部がいた。

誰が何を思ってるこんな、奉仕部対陽キヤの戦争みたいな組み合わせにしたの。

聞いただしてみれば、というか問わずともほとんど分かっていたけれど、呼んだのは由比ヶ浜らしい。

「だ、だってもともと遊ぶ予定だったし……。そ、それに、いろはちゃんの味方だけをするってわけにもいかないじゃん！ 私も板挟みで大変なんだよー！」

「これから人間の缶詰に行くっていうのに、なんでもうサンドイッチになつてるのよ。……というか一色貴女、葉山に惚れてたのね」

セットでの光景を見たことがなかったから想像もしてこなかったけれど、一色はサツカー部のマネージャーなのよね。そういえば。忘れてたけど。

「……先輩、これからナーちゃん先輩って呼ばれたくなかったら口を謹んでくださいね」  
「別にいいわよ、それくらい」

先々日に『独力独走の格好いい私』を諦めたのだから、外聞を気にする理由も特にな  
い。……というか由比ヶ浜を諦めた時点であまり気にしてはいなかった。

「まさか言いふらす気ですか?!」 ナーちゃん先輩!!」

「はいはい。……年下女子を先輩呼ばわりする痛い女に思われたくないなら口を閉ざす  
ことを薦めるわ」

多分、構図的にはそんな感じになっているはず。そこそこ視線が集まってきてるし。

入場待ちの列に並び、エントランスゲートでチケットをパスに変えて中に入る。

広場のようなところで、右手をつなぐ形で掴まれた。

「ナーちゃん、逸れちゃだめだよ」

子供扱いだった。それも由比ヶ浜に。

……まあ、方向音痴だし放置されたら確実に逸れるから助かるのだけけれど。

「……片時も離さないわ」

「大胆な告白!？」

「切実な懇願」

なんかもう、一個諦めただけで色々とダメになってる。枝一本折れるだけで桜が弱るみたいに、あるいはガラスに傷がつくとそこで割れるように、私は弱体化している。平塚先生は繊細と評したけれどまんまその通りだ。今の私は、欠けたガラス細工のように脆い。

クリスマスが近い、というかここではもうクリスマスなのかもしれないけれど、とにかく、赤と黄色と緑の装飾が目立つ。

あちこちにいる人間臭い動物のキャラクターたちも装飾が施されていて、子供からは大人気。

「先輩たちも写真撮りますよー!」

「はい!」

由比ヶ浜に引つ張られるように、私もツリーの前で何人かと写真を撮った。外見が可愛くさせられてしまっているわけだし、可愛げのあるポーズを試してみたり。

「ナーちゃんって、可愛げがないだけで可愛くもできるんだね……」

「そうね。髪も染め直したらいいじゃない」

由比ヶ浜が取材用に持ってきたカメラの画面を見ながら言うと、雪ノ下も覗き込んだ。

「そんなことしたら誰だかわからなくなるじゃない。私と気づかれずに惚れられでもしたら面倒よ」

「かわいい自覚のある美少女って、なんか最強って感じだね……」

写真を撮った後は、アトラクションを一通り巡るらしい。

けれど、一つ目のスペースなんとかってアトラクションを降りたところで既に限界を迎えていた。

「重力が、重いわ……」

重力を感じさせないほどに振り回すアトラクションで、私ほどでなくとも皆足元がふらついている。

それに、ここら一带は人が多い上に、アトラクションも多い。ただでさえ周囲を無差別に共感してしまう私の体質とは、頗る相性が悪かった。

「ちよつと、……あんた大丈夫？」

「ええ……、悪いわね」

壁に手をつけていると、三浦に背中をさすられる。

周囲ににいるだけの人間と、触れている人間とじゃ伝わってくる情報量も違う。——無数の乗り物酔いの積み重ねと圧迫感が、一人の女子に駆逐されていく。

「……もう、平気よ。歩ける」

「水、いる？」

「貰うわ……」

幾らか楽になつてから差し出されたペットボトルを受け取る。むせ返りそうな食道に温い水を流し込み、泡立った胃を鎮める。沸騰しそうなほどに熱い脳が幾らか冷める。

「……助かったけれど、急なキャラ変更は混乱を招くからやめておきなさいな」

「は？ 何意味わかんないこと言ってるの？」

良かった。ちゃんと古風なギャル、三浦だった。いきなりいい奴になられても反応に困る。

「パンさん、ねえ……。小説か何かで読んだ記憶があるけれど、デイスティニーのキャラだったのね」

パンさんのバンブーフアイトなるアトラクションの近くのお土産屋で、古い思い出に嵌るピースを見つけたような気分させられた。

妙に渋く、凶悪そうな見た目のパンダのぬいぐるみ達がジツと私を見てくる、という  
か睨み付けられる感覚。

「それって、原作の翻訳版かしら？」

「さあ。読んだのが昔すぎて、内容も覚えていないわ」

アトラクションを降りてから向かってきた雪ノ下が、大量のパンさんのぬいぐるみを  
両腕に抱えながら話しかけてきた。

「というか、そんなに買って帰り平気なの？」

「……今から選ぶところなのよ」

絶対後先考えずに全部買う気だった。

「はあ……。送料がかかるけど郵送できるわよ」

「よく知っているわね。意外だわ」

「別に。前に一回来たことがあるだけよ。……三子はぬいぐるみとかあんま興味ない  
し、買うならお菓子かしら」

パンさんの顔が描かれたクツキーや、パンさん型チョコ、他にも箱や缶をパンさん仕  
様にただけに見えるお菓子が大量にあった。

……選ぶの面倒ね。

「これ、全部郵送でお願いするわ」

「は、はあ……」

疲れてきて選ぶのが面倒になった私の選択は、全て買ってしまおうというものだった。学生が出すには大きすぎる出費だけれど、もうなんか色々疲れた。

夜風が吹き始めた頃。アトラクションは一通り巡って、最後はパレード。途中から私の保護者を交代した雪ノ下が見たこともないほどはしゃいでいる様子を見ていたら、誰かに左腕を掴まれた。

「え」

力がいつもよりずっと強いけど、掴んだのが一色だったことに気がつくのにそう時間はかからなかった。

「ちよ、ちよつと、痛い」

周囲の騒がしさのおかげか、私の声は一色に届かない。ただ何かから逃げるように、パレードに集る人混みから離れていく。

「いった……。あー、なんなのよ……」

「……すいません、先輩」

エントランスゲートの手前でやっと、一色は足を止めて口を開いた。

「どうしたっていうの。振られたって言われても、今の私は慰められるほど強くないわよ」

「……なんでわかるんですか。もしかして、見てましたか」

「そんな悪趣味なことするわけないでしょう」

ただ弱っている分だけ、人の弱みに共感しやすくなってる。……気がする。

「葉山にその気が無いくらい、見ればわかることじゃない」

「いや、普通わかりませんって……」

先日私が三子にしたように、一色は私に抱きついてきた。

「しようがないじゃないですか。盛り上がったっていうか、当てられたっていうか……」  
「当てられた？」

抱きつかれたまま哀しまれると、その感情や思いが肌を通して濃密に伝わってくる。こつちまで泣きそうになってくるし、情なんて大してないはずなのに頭を撫でてやるくらいはしたくなる。

「……先輩のせいです。先輩が悪いんです」

「……はいはい」

一色の言わんとすることは言われずとも分かる。

私が奉仕部に依頼しにいった時の一部始終を、一色は聞いてしまっている。当てられたというのは、もっと具体的にいえば勇気づけられたということに他ならない。

私の心にメスを入れる行為に、悪い影響を受けてしまった。

「振られる程度で失恋とは言わない。人は自分を好いている人を好きになる。——とは言うけれど、って感じね」

「先輩はなんでもわかっちゃうんですね……」

「分かりたくなんてないわよ。失恋なんて私のいないところでして欲しかったわ」

共感してしまうから。栓の壊れた私に涙を止める方法なんて、枯れる以外に無いんだから。

「えっ、なんで先輩が泣くんですか……」

「放つといて頂戴」

一言メールで伝えて、私たちは帰った。

まさかクリスマスが地獄なのは間違っている。『剩』

休み明け、月曜日の放課後。

生徒会と私達奉仕部は、今日の会合での会議の前に、会議をすることになった。というかすることにした。会議のための会議を。

「えっと、これ集められた理由ってなんですかね？」

生徒会から、一色が私に尋ねる。

「方針の確認と今後について、よ。現状の案は不可能。実現できても一部分で、看板のわりにしよばい結果に終わる。——そうならないためにどうするか、という会議よ」

「はあ、分かりませんけど」

一色はまるで条件反射のように答えた。というか、返した。

「問題は言うまでも無いだろうけれど、あのごっこ遊びにしても悍しい会議にあるわ。意見を纏めるだけ纏めて、その実誰も決定は下さない。——決定権を持つ者がいないし、決定そのものを許さない。だからこそ、このような馴れ合いも遠慮もいらぬ、否定もするし切り捨てもする、そういう会議が必要だと思ったのよ」

長いセリフを言い終えて、一度深呼吸。弱体化している私には、喋るだけでも心に負

担がにかかるらしい。

「えつと、どうですかね？」

「俺は、波風立てない方がいいと思う。このタイミングで対案出すのはちよつと難しいし、俺たちもそれに反対しなかった」

一色に尋ねられた副会長は、眉を顰めながら、否定的なことを言った。否定的というより、保守的。

「ですよー。……でも、やります」

苦笑いしながら続ける。

「私的に、しよぼいのは嫌かなって」

それでこそ、私が共犯を選んだ生徒会長。保守派を駆逐し、言われた通りになれない天邪鬼。

衝突、否定、切り捨て。なんでもありの話し合いは、しかし摩擦の存在しなかったあのサバトよりも悍しい会議より、ずっとスムーズに進み。

こちらから提案するものは、小学生や保育園の子供が主演の演劇になった。

「小道具は保育園から借りられるでしょうけど、問題は練習時間ね……」

「セリフ覚えるの大変そう……」

提案が決まれば、細かい場所の詰め。雪ノ下はやはり練習時間に目を向けた。

「舞台の役者と声優を別で用意すればいいわ。脚本も私が書くし、簡単で且つ楽しめる演劇を用意できるわ」

「そんなものが短時間で作れるの?」

雪ノ下は煽りなどではなく、純粹な疑問として聞いてきた。

「簡単に作れないと簡単で無くなるじゃない。生涯不変の小説家は休業中だけれど、——美術的な女子高生、七五三七しちご七め七めは不可思議可思議の四割増しで素敵に過激よ」

「……先輩、死者は出さないでくださいよ」

定刻通りに始まった会議は、だんだんと熱気が冷めていった。

「うん、考え方としてはアリだと思うんだけど、二校合同でやることに意義があると思うんだよね。別々にやるとシナジー効果が薄れると思うし、ダブルリスクなんじゃ無いかな」

「そうかもですけど、でも私的にはけっこうこっちやりたいなーって思うんですよねー。どっちも見れるとか超お得じゃ無いですかあ?」

生徒会長同士のやりとりは、もう何度も繰り返されている。

会議が始まってから海浜の生徒会長が提案してきたのは、追加予算のシエアだった。そこに一色の「私、ちよつと思つたんですけどー」という言葉から、演劇の案をプレゼンした。

しかし敵も然るもの、現状プランの幕間に演劇を組み込む折衷案を繰り出してきた。無論、予算的に現状プランが不可能なことに変わりはない。一色はそれを理由に、現状プランを削減しての二部構成を提案している。

ここまでは、事前に想定済な光景だった。しかし、この問答が何度も繰り返されると話は別。今回サポート役に徹するつもりだった奉仕部一同は見ているだけでもストレスが溜まっている。

「……ねえ、ナーちゃん。これってなんで揉めてるの?」

「そうねえ。……、マラソン大会で最下位二人が『一緒にゴールしようね』って約束していたところを、一人が近道、抜け駆けしようとして、もちろん誘ったけれど、でももう一人は真面目で喧嘩になつていてるところかしらね。——さて、どっちが悪いでしょう」

「ズルしようとしてる方じゃないの?」

「いいえ、由比ヶ浜さん。ふかし……、七五三さんの言い方だと、『どっちも悪い』が正

解よ」

由比ヶ浜の答えを、雪ノ下が訂正した。

「その通り。何をしようと最下位なんだから、どつちも成績は悪い。だったら少しでも早くゴールしたほうが良いじゃない。時は金なりよ」

海浜の生徒会長が気にしているのもそういうところで、二部構成にしてしまうと、片方の失敗は片方だけのものになり、単純計算で責任が二倍になる。それを恐れている。

「あの、ちよつと良いかな」

会長同士の冷たい言い争いが続く中、水を刺したのはこちらの生徒会副会長。

「二部構成に反対な理由って、何？」

波風立てないほうがいい、なんて言っていたとは思えない、鋭い言葉の槍だった。

「反対ってわけじゃなくてさ。ビジョンを共有すればもつと一体感を出せると思うんだ。イメージ戦略の点で考えても、合同イベントの大枠は外さないほうが良いんじゃないかな」

思わぬ反論に、少し考えてから続ける。

「これはフラッシュアイデアなんだけど、二つのプログラムを作るのであれば、二つの高校を混ぜて二グループ作るとか、そういうソリューションもあるんじゃないかな……」

「でもそれって間に合わなくないですかねー。こっちはもう準備できてるんですけ

どー」

一色が加勢する。もちろん準備なんてほとんどできていない。できていることといえば、心の準備くらいだ。脚本は現在進行形で書き上げている。

「時間の問題なら、今から新しい企画を走らせるより、元の一つに絞ってみんなで協力したほうが効率上がるし、コストパフォーマンスいいと思うんだよね、費用対効果的に」  
敵は旗色が悪いと判断したのか、向こうも一人加勢してきた。

そしてまた、議論は逆戻り。繰り返される。

いい加減、結論を出さないとやりがなくなる。下手をすれば、本当に私の手で、口で、イベントそのものを消滅させる方向に動かなければ無くなる。

「合同でやる必要って、どこにあるのかしら」

「もちろん」

自信満々に答えられた。

「合同でやることで、グループプロジェクトを産んで、大きなイベントを」

「シナジーなんて言ってる場合じゃないでしょう。大きなイベントをしたいのなら、今必要なのは協力ではなく強力。合同で十段階の十を出すか、二部構成にして六を二つ出すか。その程度の計算もできないのなら、この会議にも意味はないわね」

「コンセンサスは取れてたし、ブランドデザインの共有はできてたわけで……」

取れていたかもしれない。できていたかもしれない。

でもそれは、もう決まったことだからと、意を唱えるものは異端者であると暗に脅迫したことで得られただけだ。

「……そんなもの、ただの思い上がりよ。人は自分の間違いを簡単には認められない。自分の失敗を誤魔化したかったのでしょうか？ そのために策を弄し、そんなことのために言葉を弄んだ。失敗を誰かのせいに行きたら楽なものねえ。——何かを求めるなら、ある程度の損失をしなさい。リスクを覚悟できないのなら、何かを望むことをやめなさい」

——見苦しい。

私は『独力独走の格好いい私』を諦めた。損失した。だったらそっちも、諦めなさい。しかし私に向けられるのは、鳥肌が立つほどに冷たく、心臓に突き刺さるように鋭い視線。

「そういうことじゃなくてさー、コミュニケーション不足だけだと思うんだよねー」  
「二度クールダウンの期間を置くとかして、もう一度落ち着いて話し合いを重ねてさ……」

海浜から飛来してくる言葉は、冷たくも甘ったるい。否定はせずに丸め込み、引きずり込もうとしてくる。

いつの間にかキーボードを叩く手が止まっている。呼吸が浅くなり、思考が回らなくなってきた。敵意に晒され、敵意を持たされ、まるで殺人鬼に殺人を強要されるような、それこそ敵役に引きずり込まれるような、そんな恐怖が私のひび割れた心に流れ込んできた。

しかし、鶴の一声がそれを防いだ。

「ごっこ遊びがしたければ他所でやってもらえるかしら」

雪ノ下は動きの止まった私の手に手を重ねて、決して大きくはないけれどよく通る声で言った。

意図したわけではないだろうけれど、ただの慰めか労いなのだろうけれど、私には十分な触れ合いだった。敵に持たされた私たちへの敵意を塗り潰すように、雪ノ下が抱いている敵への敵意が私に流れ混んでくる。

「さつきから随分と中身の無いことばかり言っているけれど、覚えてたての言葉を使っただけのお仕事ごっこがそんなに楽しい？」

雪ノ下雪乃に対して、口を開くものはいない。

「曖昧な言葉で話した気になって、わかった気になって、何一つ行動に移さない。そんなの前進むわけがないわ……。何も生み出さない。何も得られない。何も与えない。

——ただの自己満足」

ふと見上げて顔を見れば、雪ノ下は俯いている。けれど、私が見ているのに気がつく  
と、顔を上げて凜とした顔で、強い眼差しで前を見据えた。

「これ以上、私たちの時間を奪わないでもらえるかしら」

静寂が部屋を満たした。誰も彼も、雪ノ下の迫力に呆気にとられて言葉を失つてい  
る。言葉の戦争に、空白地帯が生まれた。

空白地帯。——つまり攻め入る隙であり、攻めてしまえば攻戦一方となれる。

「私たち総武高校に、わざわざペースを落として足並み揃えて並び立つ気兼ねは皆無よ。  
貴方達の時間に追われ予算に追い込まれた滑稽な出し物を踏み台に、私たちは私たちで  
やる。——せいぜい焦って、私たちと相乗効果を生み出せるくらいの苦悩と工夫をしな  
さいな」

——有無を言わず、会議は終了した。

会議が終われば、失われていた騒がしきはすぐに帰ってくる。総武高校も結論が出た  
おかげで本格的に動き出すことができる。机の上には本や資料が並んでいる。

……それを横目に、私と雪ノ下は一色に怒られていた。二歩ほど離れた位置から、由

比ヶ浜が見守っている。

「なんで二人ともああいうこと言っちゃいますかねー、雰囲気最悪ですよー。このイベントなくなっちゃうかと思いましたがよー！」

一色は移動式の黒板をバンバンと叩く。

「それならそれでいいじゃない。どちらにしても、今日で決まらなければ私は職員室を相手に中止へ追い込む気だったわ」

「私は間違ったことを言ったつもりはないけれど」

「正論かもしれないですけど、もつと空気を読むっていうか、いろいろあるじゃないですかあ」

「彼女に空気を読むことを期待するだけ無駄よ。部室だろうといつだろうと文字列しか目が無いのだから」

「失礼ね。私ほどの読書家は文脈と行間だけでなく作者の心情まで読み取るわ。そして今怒られているのは私と貴女」

「一色さんは今、正論だと認めたじゃない。だったら怒られる謂われは無いわ」

「正論が正解とは限らないということをここで助言するわ。正しさとは常に他人を切り刻むことで意義を得るのよ」

言い返していると、一色の黒板を叩く手に力が入り、大きな音を立てる。

「あーのー！ 私の話聞いてますかあ？ 二人のそういうところを言ってるんですよー」

「ま、まあまあ、丸く収まったんだからいいじゃん？」

由比ヶ浜がとりなすと、一色も深いため息を吐きながら引き下がった。拗ねている様子の一色を由比ヶ浜はさらにフオローする。

「イベントも無くならなかったんだし、良かったじゃん、ね？」

「はあ。まあ、それはそれでつて感じですけど……。それに、まあ、……すつきりしましたし」

「貴女も加われればもっと楽しかったわ」

「ナーちゃんは反省しようよ……」

後日談。——あと私の仕返し。

クリスマス合同イベント当日は現場に居られなかったから、聞いた話だけでも、無事に終了したらしい。演劇の主役に留美を勝手に抜擢したときには軽い喧嘩になったりはしたけれど、海浜総合高校と大きな問題が発生したりとかは特になかった。

そして今。

「何か弁明をしなさいな、平塚先生」

呼び出されたのではなく、自発的に、私は職員室で平塚先生に対面していた。

「まず弁明があるかどうかを聞きたまえ……」

タバコに火をつけながら、平塚先生は続けて言う。

「して、弁明か。……君を構成し直し更生させる。それが君を奉仕部に入部させた理由であることは、入部初日に話しているだろう？ 今回でなくとも、更生の予兆が見えなければいつかのタイミミングで私は似たようなことをしたさ」

「私は頼んでいないわ」

「私も頼まれた覚えがないな」

似せるように返し、平塚先生は続ける。

「私は君を気に入っているが、それ以上に、それだからこそ、心配なんだよ。何もせず卒業させたら、自分の力だけじゃどうしようもなくなったら、君はあっさりと死んでしまいうそだ」

私は一人では生きていけない。そんなことは言われずとも分かっている。三子がいなければ私はきつと孤独死してしまう。——誰かに助けられることもなく、助けを求めすることもなく。

「極論してしまえば、私のエゴだよ。気に入った人間には死んでほしくない。優秀な人

間には優秀な人生を歩んでももらいたい。大人としての基礎理念だ」

私は子供。生涯不変を謳った時から、私は成長をしていない。精神的にも、肉体的にも。

「……まあ、言わんとすることは理解したわ。私のことを思つてのことだつていうのは分かつてはいたし。——でも、やっぱりエゴよ。……平塚先生のこと、少しだけ嫌いになつたわ」

「教え子に嫌われるのは教師の仕事のようなものだ。少しくらい望むところさ」

……あーあ。

あーあ。あーあ。あーあ。

「……平塚先生のそういうところ、好きよ」

「……冗談か？」

「超マジよ。——生涯不変の小説家、不可思議可思議はつまらないウソは言わないのよ」

休業していた不可思議可思議は無事、活動を再開した。

めでたし、めでたし。

そろそろ雪ノ下陽乃がラスボスなのは間違っている。

冬休み。基本的にクリスマス前後から始まる長期休暇のことであり、学生時代という時代の空白期間。受験生は接着剤で固められたように机に張り付き、そうで無いものは暖房に溺れる。

私や三子の場合、母親の実家であり私たちの生まれ故郷である京都に帰るのが例年のこと。だけれど今年は、三子が受験生であることを理由に、千葉で冬休みを過ごすことにした。

今は年末年始に起こるあらゆる店の閉店に備えるため、スーパーへと買い物に行つた帰り道。

備えるとはいっても、重たい物は通販で済ませたから、買ったのはもっぱら調味料。親戚が我が家に大量の餅を送つてくることも例年のことで、段ボールいっぱい餅が届いた。冷凍庫にも収まりきらない餅を消費するためにも、あらゆる調味料が必要になる。

「ねえ可思議ちゃん、これあたしいる？」

「当たり前じゃない」

スーパーに行くときは大概一人だけれど、今日は違う。元殺人鬼の料理人、海胆岬ほろりが、両手にレジ袋をぶら下げて私の隣を歩いている。

「私の味覚が適当なのは貴女も知っているでしょう。それに小説家の命である腕が傷んだら大変じゃない」

「……それで荷物持ちに京都在住のあたしを呼ぶのはどうかと思うよ?」

「無償で労働を押し付けても心の痛まない知り合いなんて貴女くらいよ、ほろり。それにどうせ暇でしょう?」

「名前で呼んでくれたのは嬉しいけど理由が嬉しくない! 殺人鬼使いが荒いよ可思議ちゃん! 警察でももうちよつと丁寧だったよ!」

「……親しさ故の気楽さというものよ」

「それが嘘なのを見抜かれることもわかってて嘯く可思議たん超キュート」

「それが嘘なのは見れば分かるわ、ほろりちゃん」

「何その呼び方可愛い。これからもそう呼んで」

「嫌よ」

最終学歴小卒、生まれも育ちも京都で、関西からほとんど出たことのないほろりは、物珍しそうに周囲を見渡している。と、何かに気がつき、目つきを鋭くさせた。

「アツハツハー。……あたしのお友達を尾行とは、いい度胸してんじゃん? ぶつ殺す

ぞ」

ねっとりとした、ゆっくりとも滑らかとも言えない動きで後ろに振り向きながら、ほろりはさつき曲がった曲がり角の方向を睨みつけている。

「……やーやー、可思議ちゃん。久しぶり、文化祭の時以来だね」

遠目でも分かるくらいに冷や汗を流しながら出てきたのは、妙に馴れ馴れしい女性。不自然なほどに自然な苦笑いを浮かべている。

「そして着物の君は初めまして。可思議ちゃんの友達なんだけー」

「……可思議ちゃん。幾ら私が恋しいっていつても、他の殺人鬼を友達にするのはどうかと思うよ?」

「あれ、なんか誤解されてる?」

「別に恋しく思ったことなんてないし、友人でもなんでもない、知らない人よ」

「それに忘れられてる!?!」

小気味いいリアクションを見て、思い出した。あれだ。雪ノ下の姉の方。名前は……、そう。

「思い出したわ。確か、雪ノ下雪乃の姉の、雨乃あめだったかしら」

「そんな四色のカードゲームで最後の一枚を宣言する言葉みたいな名前じゃないよ! 随分頑張って間違えてくれたみたいだけど私の名前は陽乃!! 絶対覚えてたよね!?!」

「……やっぱり可思議ちゃんの友達？」

「いくら貴女でも殺すわよ」

「そんなに嫌なの!?! 私と友達になるのが! 友達を殺すことよりも!?!」

「別にほろりも友達じゃないわよ」

「『そうなの!?!』」

……多分。

経験則にしては経験が少なすぎるけれど、感覚的に、ほろりは友達ではない。沙希や留美とは別方向の縁に感じている。

「まったく……。私にこんなことさせるのなんて可思議ちゃんくらいだよ?」

「私と同等の存在なんていないのだから、私が複数存在しないのは当然のことよ」

ほろりが警戒をいくらか解くと、雪ノ下姉も表情に余裕を見せ出した。

「そんなことよりも、何か用かしら?」

「いや、全然? 家柄的に年末年始は忙しくつてき。今は気晴らしに散歩中」

聞くに、私が着物の女性と歩いているのが目について、暇つぶしに尾行してみたらしい。

「あたしは海胆岬うにみさきほろり。京都で料理人をしているよ」

「私は雪ノ下陽乃。ここらで謎のお姉さんをしているよ」

一触即発って感じに、口元を三日月のように歪めながら二人は睨み合う。

そしてその光景に、あちこちから視線が向けられている。……そりや、目立つわよね。ほろりや私みたいな染められた髪は千葉じゃ目立つし、着物なんてさらに目立つ。そして雪ノ下姉も十二分に美人。そんなのが固まって何かしていたら、そりや目立つ。

「馬鹿なこととしてないで、帰るわよ。貴女にはうちでお汁粉を作る使命があるんだから」「無いよ？ いや、別にいいけどさ。……じゃ、いつかの来店をお待ちしますよ、霧乃きりのさん」

「君たち、どうしても陽乃お姉さんの名前を覚えてく無いみたいだね。……じゃあ、またね。とろりちゃんにカジキちゃん」

互いに間違いを正すことなく、私たちはすれ違い別れた。

「そういえば三子ちゃんって、噂の受験生ってやつなんだよね」

「噂でもなんでもなく事実そうよ。模試の結果は問題なかったみたいだけれど、それでも毎日勉強しているわ」

「大変そうだねー。あたしなんてもう何年勉強してないんだかって感じだよ」

「少年院でも勉強くらいするでしょう」

「しなかつたよ。『こんな奴に勉強を教えるくらいなら死んだほうがマシ』、だったかな。そんな感じのことを言われちゃって、とうかされちゃってね」

「世も末ね」

「あたしみたいなのがいっても回ってるんだから、むしろ末長いよ」

「とうか末広いわね、世界って。多様化にもほどがあるわ」

「それで死んじや世話ないっていうか、世話出来ないけどね」

家に帰ってきてすぐ、ほろりはお汁粉を作って颯爽と帰っていった。あれで常連客が結構いるらしく、何日も店を閉められないのだとか。

十二月三十一日、大晦日と呼ばれる日。大掃除やら何やら済ませた三子は、ついに重い腰を上げた。

「お姉ちゃん。……髪、染め直すから色選んで」

「……嫌よ」

髪を乱雑に染めて、もう二年が経っている。中学三年生の時に受験対策で染めたけれど、そういうえばこの時期だった。

丸二年という日数は、私の頭頂を黒くするのに十分で、確かに見苦しく見える。

去年も同じような状況になり、その時は逃げ切ったけれど、今年は捕まり、身ぐるみを剥がされ、椅子にロープで縛り付けられた。

「黒、茶色、金色。どれでもいいよ？ 余ったのは私が使うから」

「……なら全部使うわ」

縞模様が揺らいでグラデーションになりそうだけど、どれか一色になるよりはずっとマシね。

「じゃあ金色ね。私もいきなり金髪にするのはなんかあれだし」

話に通じてない！

というか……。

「ねえ、待って。三子、貴女も染めるの？ 本当に？」

「え、うん。流石に受験が終わってからだけど」

「勿体ないからやめなさい」

「お姉ちゃんにだけは言われたくないよ」

三子の黒髪が癖なく美しい黒色でストレートなように、私も元は似たような髪質だっ

た。それが染めたり、ケアの一切をしなくなつてからいつの間にか性根のように曲がくねつた癖つ毛になっている。

「ほら、せつかく可愛いんだからお洒落しよ？」

怖い怖い怖い！

私を椅子ごと持ち上げて、浴室へと三子は向かい……。

「——つていうことがあつたのよ」

「三子ちゃんも大変だね……」

根から先までシャンパンゴールドに染められ、どういう原理なのか癖つ毛まで鳴りを潜めた私の髪に触れながら由比ヶ浜はぼやいた。

今日は一月二日。なんでも、雪ノ下が明日誕生日らしく、プレゼントを買おうとシヨッピングモールに呼び出された。

「でもナーちゃん、今の方が可愛いよ？」

「だから嫌なのよ」

周囲から好奇の目を向けられるのはこうなる前でも同じだったけれど、そこに下心が加わると話は全く別物になる。自分への下心までも共感してしまう私にとって、混雑している場は心底居心地悪い。

「それに三子が染めるって言うじゃない！ この世の終わりよー！」

「どうどう、落ち着いて。ナーちゃんが染めても可愛いんだから、三子ちゃんだつてきつと可愛いよー！」

「そんなこと言われなくともわかっているわ」

そうでは無く。

三子は美しい黒髪だからこそ、外向けの深窓の令嬢のような外見で男を避けている節があるけれど、染めてしまえばそれは失われる。ただ可愛い長身の女の子じゃ、言い寄ってくる男が湧いてくるに違いない。

「……三子は誰にも穢させないわ」

「ナーちゃんにとって三子ちゃんってなんなの？」

生活必需品。あるいは、私の人生。

話もそこそこに、幾つか店を巡る。

由比ヶ浜のお眼鏡にかかったのは、雪ノ下とは対極に位置していそうなファッショングッツの店。そのの、猫の手をモチーフとしたミトンだった。

「ゆきのん猫好きだし、これどうかな」

「まあ、それなら既に持つてるみたいなの事故は無さそうだしいいんじゃないかしら。」

……キャラ的に外で付けるかどうかはともかく」

「……き、きつと大丈夫！」

「……あれで純粋な善意にはとことん弱いし、逆に夏でもつけて何か痛い目を見そうな気もするわね」

「そのゆきのんちよつと見たいかも」

決定したらしく、レジに持っていった。

「ナーちゃんは どうするの？」

プレゼント用にラッピングされ、紙袋に入れられたものを受け取った由比ヶ浜は尋ねる。

「そうねえ……。選ぶのも面倒だし現金じゃダメかしら」

「いいわけないでしょ。三子ちゃんにはどうしてるの？」

「三子相手なら簡単なのよ。一日三子の言うことならなんでもするっていう、いわゆる『プレゼントは私』ってやつね。年々遠慮するようになって葛藤してるのがまた可愛いよ」

そういう時には髪を染め直せとか言わないあたりが、もうね。

「それ、誕生日プレゼントじゃ無くて母の日の恩返しじゃない？」

……言われてみたらそうかもしれない。母親に感謝の念なんて感じたこともないからイメージだけだ。

「じゃあ、ナーちゃんのお誕生日は三子ちゃんどうしてるの？」

「二日中抱きついてくるわ。本人曰く、誕生日はその人が生まれてきたことを家族が喜ぶための日、らしいのよ。何かを渡す日では無く、感謝と愛を伝える日だって」

「全然参考にならないね……」

「私が三子の真似を雪ノ下にしたところで、困惑させるだけよ。……やつぱり現金じゃダメかしら」

「ダメ」

「洗剤の詰め合わせ」

「なんでいけると思ったの？」

「五枚刃の髭剃り」

「……ナーちゃん、ゆきのんをなんだと思ってるの？ あ、しかも地味に高い」

「三子が無駄毛の処理には五枚刃の髭剃りが最適だって力説してたのよ。……妹が髭剃りを持っている光景は、姉として複雑だったわ」

「へ、へ……。いや、でもダメでしょ」

……誕生日プレゼントを選ぶシーンも渡すシーンも何回か書いているはずなのに、い

い案が全く思い浮かばないわね。

「とりあえず重たいものは持ちたくないし……。無難に文房具かしらね」

「あー、いいんじゃない?」

文房具屋でも悩んだ末に、私が愛用している万年筆と同じ海外ブランドのボールペンを送ることにした。万年筆はインクやらメンテやらで、実用性よりも趣味性が高いし、贈り物として妥当だと思う。ラッピングだけでなく、名前の刻印をいれるサービスまでしてもらってしまった。

「ありや、可思議ちゃんだー!」

「……誰よ」

「また忘れられてる!?!」

店を出て、帰る前にどこかカフェにでも寄ろうと話していたところに名指しで呼び止められた。二人組で、なんと葉山と雪ノ下姉。

「陽乃さんと、隼人くんじゃん」

「……どういう組み合わせよ。魔王と勇者?」

「あつははは……」

誘われるがままに、私と由比ヶ浜は二人と共にカフェへと入りテーブルを囲った。と  
いうか配置的に、挟んだ？

「あー、なるほど。雪乃ちゃんもう誕生日だもんね」

「私たちのことなんでなんでもいいのよ。それよりそっちの、冗談みたいな組み合わせは一体なんなのかしら？」

魔王と勇者というか、理系と文系というか、相容れないはずの二つが横並びになつている光景は異質に写る。

「あー……、私たちは新年の食事会」

「昔から、両親同士が親しくしてゐるんだよ。俺たちはそれに付き合わされているだけさ」  
雪ノ下姉妹の両親と、葉山の両親。良い家柄同士が親しくするのはわかるけれど、その子供達まで家柄に似合う優秀な人間だらけというのは、不思議な話。まあ、人間の性能には才能の他に環境による部分もあるのだから、不思議ではあつても不自然ではないか。

「……両親、ねえ」

子供三人、どれか一人でも十全に優等な人間を育てたような傑物というのは、どんな人間なのか。

「親なら今は別の挨拶回りに行つてるよ。私たちはそれ待ち」

「それは残念ね」

全く全く。どんな愉快的人間なのか気になったのだけけれど。

「あ、そうだ」

雪ノ下姉は何か思いついたように、スマホで電話をかけ始めた。静かな店内にコールが漏れ出ているうちに、やがて繋がった。

『もしもし……』

「あ、雪乃ちゃんん？ お姉ちゃんですよー。今から出てくれる？」

相手は雪ノ下だった。葉山も由比ヶ浜も思わず苦笑いする。けれど、もう何度もしているやりとりなのか、動じず、揶揄うような口調で続ける。

「あれー？ 切っちゃって良いのかなー？」

『……何？』

雪ノ下姉は、ニヤリと笑いながら私にアイコンタクトを送る。——了解。

「実はね、今、可思議ちゃんと一緒にいるんだよー！」

『またくだらない嘘を……。良い加減に』

「はい、可思議ちゃん」

「任せなさいな」

受け取り、さながら人質の首にナイフを突きつけるような心情のもと電話を代わる。

「おぼりばくふやなりしろうぐんけちよつかつあずかりたてまつるところいくさどころ  
尾張幕府家鳴将軍家直轄 預 奉 所軍 所総監督、奇策士とがめよ」

『誰よ』

ふざけたらプツリと切られた。

「かけ直して頂戴」

「はいはい」

雪ノ下姉に掛け直させると、今度はコールがなる前に繋がった。

『……もしもし』

「我が名はめぐみん！ 紅魔族随一の魔法の使い手にして爆裂魔法を操りし者！」

切られた。

「ん」

「はいはい」

再度かけ直す。

『……もしもし』

「詩的に素敵に不敵に無敵な生涯不変の小説家、不可思議可思議よ」

……切られた。

もう一度掛け直させようとしたら、今度は逆に掛かってきた。

「もしもし。美術的な女子高生、七五三七子よ。いきなり切るなんて失礼ね」

『失礼はこつちのセリフ過ぎるのだけど。……で、どうして貴女がそこにいるの』  
「買い物中にエンカウントしたのよ。負けイベント以外じゃ魔王からは逃げられないの」

『……もういいわ。すぐ行くから、姉さんに代わって』

「ええ」

言われるがままに私は電話を返し、疲労の滲んだため息を吐き出す。

電話というのは、どうしても慣れない。話している相手が目の前にいないという状況を脳が受け入れず、ついつい話している相手を目が勝手に探してしまう。

「我こそは怪異の王！ 鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼、キスシヨット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードじゃ！」

切れた。あと多分、流石にキレた。

電話をかけてから三十分も経つと、雪ノ下は姿を現した。

「雪乃ちゃんおつそーい！」

「いきなり呼び出しておいて、よくもまあ抜け抜けと……。由比ヶ浜さんも来てたのね」  
姉を一睨みしたあと、私と由比ヶ浜の顔を見て驚いた表情を浮かべて言った。

「あ、うん。ナーちゃんと同じ物に来てたら、なんか捕まっちゃって」

「そう。……それはそうと不可思議さん、その髪は何よ。顔が整っているのは知っていたけれど、随分と可愛らしくなったじゃない」

「三子にしてやられたのよ。まあ座りなさいな」

由比ヶ浜の方に詰め、一人分座れるスペースを確保すると、雪ノ下はそこに収まった。

「ほらこれ、貴女への誕生日プレゼントつてやつよ」

隣に座った雪ノ下に、ラッピングされた箱の入ったレジ袋ごと手渡すと、恐る恐る彼女は受け取った。

「あ……、ありがとう、でいいのかしら」

「別に礼を言われなくて用意したわけじゃないし、要らなかつたら捨てても構わないわ」

「いえ、大切にさせてもらうわ」

「そう」

由比ヶ浜もプレゼントを渡したりなんかして、他愛もない話をしばらくしていると、着物姿の婦人がこちらへと真つ直ぐ歩いてくるのに私は気がついた。

空間の異物。異質にして異界。人の身でありながら人の心を持たず、人の心を持っておきながら人の身体を持たない、そんな怪物のように、私の目は認識した。

一言に着物とは言っても、趣味で着ているほろりとは違い、なんというか外向けに着ている。優雅だとか、美麗だとか、そういう雰囲気。

「陽乃」

婦人は、雪ノ下姉の名を呼んだ。

顔つきをよく見れば、雪ノ下姉妹に似通った顔つきをしている。

「あ、お話はもういいの?」

やはり、この姉妹の母親らしい。

「ええ。このあと食事に行くから呼びに来たの。隼人くん、お待たせしちやつてごめんなさいね」

「いえ、お気になさらず。みんなのおかげで退屈しませんでしたから」

葉山が気さくに答えて、視線を私たちに向けける。よつぼど雪ノ下妹の存在が意外だったのか、弾むような声で「まあ!」と声を漏らし、柔らかな笑顔を浮かべる。

「雪乃、来てくれたのね。良かった……」

「母さん……」

妹の方が母親似なのか、並べてみれば瓜二つにも見える。それでも、見なければそう思えないのは、それこそ雰囲気やオーラみたいなものの違い。迫力や覇気と言ひ換えてもいい。あるいは威厳とでも呼ぶべきものの格が違う。

それこそ、弱体化していたクリスマススの頃の私が遭遇したら、足音だけで成仏していたかもしれないほどに。

「陽乃、そちらはお友達？」

私と由比ヶ浜が姉の方の友人だと思ったのか、そつちに尋ねた。

「雪乃ちゃんのおね」

「あら、ごめんさい。隼人くんぐらいしか雪乃の同級生を知らないものだから。これからも仲良くしてあげてくださいね」

心にも思っていないことを言える人間というのは結構いるものだけれど、心にも思えないことを思いながら言える人間というのは、それはそれは気持ちが悪い。勇者が殺意を叫ぶように、魔王が平和を詠うように、釣り合わない。

「はいー」

由比ヶ浜の元気の良い返事を聞いて、雪ノ下母は軽く頭を下げる。

「じゃあ、そろそろ行きましようか」

「はいー」

呼びかけられて雪ノ下姉と葉山は席を立ったけれど、妹の方は動かない。それを見て、母親は穏やかな声で「雪乃、貴女もくるわよね？」と、尋ねた。そこには額面通りの意味では無く、暗に「来なさい」と言っているように聞こえた。

「私は……」

「貴女のお誕生日祝いでもあるのよ」

ほとんど強制の命令であるにもかかわらず、威圧的では無く、むしろ慈しみすら感じる声音。

「……」

雪ノ下は縋るような目で私の方を見てくる。……けれど、私にはどうしようもない。

あの異物は、異界の住人は、私とは次元が一つ違う。蒼さんと同格と言っている。話を通じても理屈が通じる相手ではないし、今は手も足も口も出せる状況ではない。

「雪乃ちゃん、ダメだよ」

姉は見かねて、見咎めた。獰猛な笑みを浮かべての厳しい口調に、私まで肩が跳ねた。

「そうだ、よかつたら二人も一緒に、……どうかしら？」

「……悪いけれど、私もそう暇ではないの。遠慮させてもらおうわ」

これ以上はまだ全盛でない私ではきつと耐えられない。どうしようもない、戦略的、というか戦力的撤退だった。

終わりなくともそれでよし。しかしそこには終わりなし。

だから、『めでたし、めでたし』とは綴らない。

そんなに三浦優美子が女王様なのは間違っている。『文』

冬休みというのも、正月シーズンを過ぎれば、あちこちが騒々しくなる。

三子はやうやつと受験勉強に身を入れ始めたし、沙希もうちに来て私の世話を片手間に、三子と共に勉強をしている。

そして私も、SNSや動画配信サービスで紹介され、爆発的に読者の増えた代表作となりつつあるお化け屋敷が舞台の小説、『フアントムハウス』が佳境を迎えていて、日々常々展開の妄想と執筆を繰り返している。

そんな日々を繰り返しているうちに、大した物語もなく、冬休みは終わりを告げた。

冬休み明けの教室は、朝のシヨートホームルームが始まる前から『あけおめー』だの『ことよろー』だのと騒々しく、それは放課後になつても収まるどころを知らない。

長期休みで積もる話があるということ以外にも、もう一つ。朝配られた、進路希望調査票が一因だろう。

今までも何度が配られたもので、これが二年生最後のものらしく、これによって三年生の文理選択の最終決定がなされるらしい。

とりあえずここを離れようと席を経つと、一際騒がしかった三浦、葉山の集団から由比ヶ浜が抜け出してこつちに来た。

「ナーちゃんもう部活？」

「ええ、そうね」

「じゃあ私も行くこと」

どうやら一緒に来るらしく、急いで自分の机から荷物を回収して、走って戻ってきた。「待てと一言言えば別に置いていたりしないわよ」

「言ったらナーちゃんはむしろ置いてくじゃん！」

「よく分かったわね」

ぎやあぎやあと喚く由比ヶ浜を連れて、私は教室から出た。廊下も相應に騒々しいけれど、それでも教室ほどではない。

「ねえナーちゃん、さっきの話、聞こえてた？ ゆきのんと隼くんがーってやつ」

「なんの話よ」

三浦が何か叫んでいたのは聞こえたけれど、内容までは知らない。

「えっと、ほら、冬休みの時に一緒に出かけたときあったじゃん？ その時を誰かが見

てたみたいで」

「ああ、そういうこと。……それなら女五人侍らせるクソ野郎になる可能性もあったわけね」

「五人？」

「私と貴女。あと雪ノ下家の親子三人」

「ゆきのんのママまで入れちゃうんだ!？」

「親子丼と姉妹丼を同時になんて、贅沢すぎるかしらね」

「……ナーちゃん、何言ってるの？」

「なんでもないわ」

流石に説明するのが面倒、というか普通にしたくない。

「ハーレム疑惑はともかく、カップル疑惑にしたって不自然よね。あの雪ノ下が誰かと付き合うなんてあり得ないじゃない」

「すごいこと言ってる。すごい酷いこと言ってるよ、ナーちゃん」

「人類最後の雌が雪ノ下だったら、間違いなく人類は滅ぶと思うわ」

「ナーちゃん、それ絶対ゆきのんの前で言っちゃダメだかんね」

「言わないわよ」

というか、最低限人類が再建するには二千人くらい必要だったんじゃないかしら。

私と由比ヶ浜は部室の扉の前で一度領き合ってから、扉を開けた。

部室では既に暖房がつけられていて、沙希に無理やりつけられたマフラーを暑苦しく感じつつ席に座った。

机には由比ヶ浜が用意したホールケーキが四等分に切り分けられ、雪ノ下が淹れた紅茶が四人分用意されたいる。

「お誕生日おめでとー!」

「改めて、おめでとー」

「おめでとーございますー」

それぞれで祝いの言葉を言うと、雪ノ下は照れ臭そうに身を振る。

「雪ノ下先輩って一月三日がお誕生日だったんですねー。ちなみに私は四月十六日ですよ、ナーちゃん先輩」

「聞いてない、というかなんでいるのよ」

ケーキが四等分であり、紅茶が四人分。しかし奉仕部は三名。四人目というのは、生徒会長、一色だった。

「まあまあ、いいじゃないですかー。っていうか、しばらく見ないうちになんでそんな可愛くなっちゃってるんですか? モテたくないとか言っでぐちゃぐちゃに染めてた

カッコいい先輩はどこに行っちゃったんですかー！」

「……面倒だし冬休みデビューってことでいいわ」

「あ、その顔知ってますよー。オタク男子が『こいつどんだけ説明しても空返事しかしないよなー、でもこいつかわいいしなー』って私に対して思ってる時の顔とそっくりですー！」

……返事くらいちゃんとしてあげなさいよ。材木座が泣くから。

「あ、そういうえば」

と、一色は視線を私から雪ノ下へと移した。それに雪ノ下が首を傾げると、一色はあろうことか、私と由比ヶ浜が触れないようにしようとして互いに了解し合ったことを平然と言つてのけた。

「雪ノ下先輩って葉山先輩と付き合ってたんですかー？」

「は……？」

流石にわざとでしょうけれど。きっとここに来た目的の一つは件の噂の真意を確かめるため、というのがあつたに違いない。性格的に。

「……一色さん」

呼びかける雪ノ下の声は、暖かいはずの紅茶が凍りついたかと錯覚するほどに冷淡な声音をしていた。眼も口元も微笑んでいるのに、そこからは温かみなんて微塵もなく、

行間では『この小娘、どう仕留めてくれようか』と語っていた。

「はっ、はいいい！」

怯えた草食動物のように飛び立ちながら返事をし、私を盾にするように背後に隠れた。

「そんなわけないでしょう」

「で、ですよねー！ いやでもほら、そうだと分かってはいても、噂で聞いちゃったならもしかしてとも思っちゃうじゃないですかー！」

「噂？」

噂そのものが初耳なのか、雪ノ下は不思議そうな顔をしながら私と由比ヶ浜の方向を交互に見た。

「冬休み中に会った日があったでしょう。そこを誰かが見て、勝手に勘違いされてそれが広まったのでしょうかよ」

「つまり、下衆の勘繰りというやつね……」

雪ノ下はうんざりした様子でため息を吐いた。

「まあ、色恋沙汰なんて勘繰った方が面白いのでしょうかね」

葉山に好意を抱いていた一色が興味を持つのも、別に不思議なことでは全くない。

「まあ、ただの噂ならいいんですけどお、葉山先輩って今までこういう噂なかったんです

よ、不思議と。みんなの葉山隼人って感じで」

「まあ、高嶺の花すぎて誰とも釣り合わなかったんでしようね」

「はい、多分そんな感じですよ。でも、雪ノ下先輩なら釣り合っちゃったんです。それでです、葉山先輩にちよっかいかけようとするのが増えちやつてるんですよ」

「ちよっかいかい、ねえ。要はきつかけを与えてしまったってことね『いるの？ いないなら私立候補しちやおつかない』、みたいな」

「さすがナーちゃん先輩、話が早いです。告つたりとか、そこまで行かなくても確認だけしてアピール、みたいな」

「確認ってどういうことかしら」

「それでアピールになるの？」

一色の話に、雪ノ下と由比ヶ浜が全く同じタイミングで、全く同じ角度に首を傾げた。

「えっと、……それじゃあナーちゃん先輩、どうぞ」

「言い出したんだから貴女がやりなさいよ……」

「まあまあ、いいじゃないですかあ。せつかく可愛くなったんですから、使いこなさない」と

「まったく。染めるなら黒にするべきだったかしらね」

まあ、できないことはない。冬休みの間、沙希を相手に散々やってきたことだから、こ

れくらいなら余裕。

なるべく可愛らしく、あざとく、しかし如何わしくならないように声音を調整して……。

私は席を立ち、雪ノ下の腿に両手を乗せて、中腰の姿勢で上目遣いで顔を近づける。

「……お姉ちゃん、恋人ができたって、ほんと?」

全力でロリっぽく、さながらアニメのヒロインのように演じた。

効果靦面のように、雪ノ下は頬を薄らとだけ赤くしながら、顔を背けた。

「……いい、いいいわ。だからその、離れてもらえるかしら」

……チャンス。

「ほんと? ほんとにほんと?」

今度は両腕を首元に回し、そらした方向に体ごと移動して顔を突き合わせる。

「あの、ちよつと……」

「お姉ちゃん?」

この手が沙希には十全に効いた。別に何か役に立つかと言われたら大したことにはならないけれど、遊びでするにはなかなかの愉悦を味わえる。罪の味は蜜の味。

「降参よ。分かったから、お願いだから離れて頂戴」

「……仕方ないわね。もう一押しで落とせると思ったのだけれど」

腕を離すと、雪ノ下は安堵の息を漏らした。

「つて、言い方の問題じゃん！」

「予想以上でした……。ナーちゃん先輩が本気で取りにきたら、私でも勝ち目ないかもですな〜」

私が席に戻っている間に、由比ヶ浜はツツコミ、一色は慄く。

「き、気分を切り替えましょう」

雪ノ下はうろたえながら、型の古いノートパソコンを取り出した。それは平塚先生がどこからかもらってきた、奉仕部用のパソコン。

奉仕部の新年最初の仕事は、メールの確認。

久しく放置されていた「千葉県横断お悩み相談メール」を読むべく、雪ノ下はパソコンを起動させた。

「あ、メール来てるね」

「ええ。三浦さんから、かしらね」

〈Yumiko☆からの相談〉

みんなは文系と理系、どうやって選んでんの？

「ふーん、進路つてやつですか。実際どっちがいいんです？」

ケーキを食べながら、一色はあろうことか私に聞いてきた。

確かに、高校生なら誰しも気になることではある。それこそ、『こんな勉強なんの役に立つんだ』の、一つの集大成でもあるのだから。

「大学受験までなら、文系の方が楽しいわ。就職は理系の方が楽しいけれど、私は行く気ないし詳しくは知らないわ」

「え、先輩まさかの就職ですか？」

「私は小説家よ。いつまでも学生ではいられないのよ」

ぶつちやけ面倒なだけけれど。

「じゃあ先輩は文系ですねー」

「まあ、そうね。私相手なら教師も強く出れないでしょうし」

「最悪の理由ね……」

あと、平塚先生は現国教師。授業担当、あわよくば担任になるかもしれないという下心もあつたりなかったり。

と、その時。見計らつたようなタイミングで、ノックもなく威勢よく扉が開いた。

「……今いい？ チョット話あんだけど」

やってきたのは、件のメールの送り主、三浦だった。

「じゃ、じゃあ進路相談会の件、よろしくお願ひしますねー」

あからさまに不機嫌そうな三浦に怯えた様子で、一色は部室から退散して行く。

「聞いてないわよ。詳細をメールで送りなさい」

「はいはい！」

三浦が開けっぱなしにしていた扉を閉めて、一色は去って行った。

「んで、話って？」

「この場で一番近い由比ヶ浜が座るよう勧めながら聞いた。

「……アンタ、隼人となんかあんの？」

しかし、向けられる視線の先は由比ヶ浜ではなく雪ノ下。

「別に何もないけれど。昔からの知り合いというだけよ」

「ほんとに？」

「ここに来た理由の一つは、噂の真相を確かめることらしい。三浦には似合わない心配

そうな、不安そうな声で雪ノ下に確かめる。

「そういうの、昔から迷惑だったわ」

一色が尋ねた時と同じく、あからさまに雪ノ下の態度は冷淡になっていく。

「ハア？ 何その言い方、マジム力つくんだけど。あーし、アンタのそういうところ、ほ

んつときら」

「優美子！」

冷淡、冷静、冷血な雪ノ下と対極的に、三浦は熱烈、熱狂、熱血に怒り始めようとし

て、とっさに由比ヶ浜が大声を出して嗜めた。

「その話ならもう説明したじゃん。ほんと偶然会って、それだけだった」

「……それだけだったら隼人、あんなに気にしない。なんかあんじゃないの？ 別に今のことじゃなくて、昔にとか」

まあ、あるのでしょうか。ただの顔見知りという関係だとは、詳しく知らない由比ヶ浜や私でもなんとなしにわかっている。

しかし雪ノ下がそれを語る理由は、ない。

「何かがあったとして、それを全て語って、それで何か変わる？ 貴女は、周りは、それを信じる？ ……結局、意味が無いことなのよ」

仮に、雪ノ下が全校放送で事実を語ったところで、状況は何も変わらない。ただ反感を買う、怒りを買う、楽しみを奪われた全校生徒が雪ノ下に矛先を向けるだけ。何も語らず、静まるのが最善策に決まっている。

「っ、アンタのそういうところっ！ ほんっと！」

勢いよく立ち上がり、力強く拳を握ったのを見て、私も動いた。

記憶を衝撃で消し飛ばすように、私は足を踏み下ろした。私がやっていたのは短い期間だったとはいえ、卓球部仕込みの足踏みはただ大きい音で対戦相手のリズムを崩壊させる。テニスには無い、場外からの合法的攻撃手段。

「「っ!？」」

床と靴裏で起きた破裂音に三人とも肩をびくつかせて、私の方に顔を向けた。

「その噂の件に関しては、雪ノ下には一切も非は無いわ。それ以上攻撃の色を出すのなら、今度こそその綺麗な顔を踏みつぶすわよ」

「な、ナーちゃんも優美子も落ち着いてって、ね?」

「私は感化されただけよ。落ち着かせるなら雪ノ下になさい」

複数人の怒りというのは、混ぜれば混ぜるほど厄介で面倒くさい。当人たちが勝手に発散してくれる分には構わないのだけれど、それには痛みが生じる。痛み分けなんて糞食らえ。

「不可思議さん、私は落ち着いているわ。私は近しい人が理解しているなら、それだけで構わないから」

「私を近しい認定している時点で正気じゃ無いわね。今すぐ紅茶を飲み干して外で頭冷やしてきなさい」

私と雪ノ下はそんな関係じゃ無いのだから。そんな友達とか仲間みたいな温かみのある関係じゃなくなつて、もつと綱渡りで直角な、衝突事故のような関係であるべきなんだから。

「私はここぶる冷静よ。仮に敵対関係であつても、それが遠距離である必要は皆無なの

だから」

「敵だと思つてゐるのなら近づかないで欲しいものだけね」

「敵だとも思つていないから安心なさい」

私と雪ノ下のやりとりをから目を逸らすように、三浦は涙の滲んだ目を伏せながら、か細い声で言つた。

「……そんなの当たり前だし、だからなんじゃん……」

「え？」

由比ヶ浜が聞き返すと、三浦はギリツつと齒軋りを慣らしながら顔を上げる。

「……近しい人つてやつ。……それになりたいから知りたいんじゃん」

三浦が知りたいというのは、噂の真相よりも、雪ノ下と葉山の関係よりも。そんな過去のことも、先のこと。葉山の進路に関することだった。——もう一年間、同じクラスでゐるために。

「だったら簡単よ。知ればいい。世の中には知らない方がいいことしかないけれど、知ろうと思つて知れないことは無いのだから。——けれどそれは知らない方がいいこと。それでも知りたいのかしら？」

知の無いものは感情で人を愛する。知の有るものは理屈で人を愛する。

知の無いものは理屈で人を愛せない。知のあるものは感情で人を愛せない。

誰かを愛したいのなら、相手のことなんて知らない方が幸せに決まっている。

「知りたい。……それでも知りたい。……それしか無いから」

「なら、知らせてあげるわ。——知ってしまいう絶望を。知ってしまった後悔を」

今なら、まだ間に合う。

「不可思議さん、……貴女、何をやる気なの」

「まあ、任せておきなさいな。ハッピーエンドもバッドエンドも嫌いだけど、どちらか選ぶなら私はハッピーエンドの方がまだ好きなのよ」

王子と姫が必ずしも結ばれるとは、限らない。

そんなに三浦由美子が女王様なのは間違っている。『理』

葉山の進路を知る手法の一手目として、私はとりあえず直接聞いてみることにした。今ならまだ、サッカー部が終わるまでいくらか時間があるし、待ち伏せをするのに十分すぎる。

それにしても、真冬の夕方というのは冷える。おかげで買ってから暫く経っているコーラがまだ冷たい。

「見てるこつちが寒いんだけど！」

「貴女は防寒という概念まで喪失したのかしら？」

「……なんでついてきてるのよ」

「どうやら三浦も帰ったらしく、部活の鍵ももう閉めてきたのだとか。」

「別に私一人で十分、というか邪魔だから帰りなさいな」

「でも、任せつきりっていうのもなんか……」

由比ヶ浜は言葉をつまらせ、雪ノ下に同意を得るようにチラリと見る。雪ノ下もうなづいたけれど。

「周りに知られたく無いことを話させるのだから、聞き手は少ない方がいいに決まって

いるでしょう」

というか、このタイミングで雪ノ下と葉山を近づけることが下策極まりない。というか、葉山の近くに身内以外の女子が近寄ることそのものが危うい。……私もその一人ではあるけれど。

「……まあ、それもそうね」

「んー、あたしが聞ければそれが良かったんだけどね」

「別に、喧嘩しにいくわけじゃ無いのだから心配は不要よ」

「そこが一番不安なのだけれど、私たちにはどうしようもないし、任せるしか無いわ」  
「うん……。ごめんね、ナーちゃん」

由比ヶ浜も踏ん切りが付いたようで、リュックを背負い直した。

「ほな、また明日」

正門へ向かって歩いていく二人に手を振って、サッカー部の方へと視線を戻す。やつと終わったようで、グラウンドから部室の方へと向かって行っている。

太陽がすっかり沈み、夕方ではなく夜と呼ぶべき時間帯になって、ようやっと私は、ユ

ニフォームではなく制服姿の葉山と校門近くで対面した。

「俺の進路？ 誰かに頼まれたのかな？」

「まあ、そんなところよ。貴方の大事なお友達の一人にね」

「……奉仕部、奉仕活動か。相変わらず似合わないな」

「あら、私は小説家に次ぐ天職だと思っただけけれど。……こんな時間まで私を待

たせたのだから、送って行きなさいな」

「君が勝手に待つていたんだろう……」

私の言葉に、葉山は盛大な溜め息とともに頷いた。

「なあ、俺からも頼んでいいかな」

「それで教えてもらえるのなら、ある程度の依頼は請け負うわ」

何も、無条件で聞き出せるとは最初から思っっていない。多少強引でも、思惑から逸ら

してでも、話の通じるステージまで引き摺り下ろす。

葉山は苦笑いを浮かべながら言った。

「やめてくれないか、そういう煩わしいの」

「人生なんて一生煩わしいものよ。そしてその煩わしさを解消までは行かずとも軽減く  
らいはしてあげるのが私達。噂の根絶でも実現でも、あるいは誰かへの告白の協力でも、  
なんでも協力するわよ」

一歩歩く程度の短い時間だけ葉山は悩んだ。けれど、すぐに首を横に振った。

「いや、そういうのは自分でなんとかするよ」

静かに、けれど響く声だった。

「……なんて、相反することを言われたら今度はどうするんだい？」

「その時は勝手に動くまでよ。詩的に素敵に、そして過激に。貴方が私達をどれだけ煩わしく思ったところで、依頼人が望むうちは止まらない」

「そうか……。それは、まいったな」

「なら諦めなさいな。それが解決への近道よ」

「またそれか……」

この私のスタンスは、スポーツと関わりが深ければ深いほどなかなか理解されない。葉山とて、それは例外では無い。

「聞いておきたいんだが、君はどっちなんだい？」

「私は文系よ。小説家だし、平塚先生がいるから」

「そうか。なら俺は理系にしよう。君のことは嫌いだからな」

聞けた。聞けてしまった。しかも結構悲惨な理由での選択をされてしまった。

しかし、それでも依頼そのものは完了。

「なら聞くけれど、なぜ文系を選んだのかしら？」

問うと、葉山は驚いた表情を浮かべた。

「……君は心を読む超能力でも持っているのかい？」

「似たようなものよ。私に嘘は通じない。私の会話は常に自問自答なのよ」

「なら、俺が言おうとしていることもわかっているんじゃないのかい？」

「言おうとしていることは分かっても、言うことは言わせるまで分からないもの。こと将来に限っては、自分の口で言ったことは高確率で実現するのよ」

私の『生涯不変』という座右の銘にしたって、言い出してから明らかに私の肉体の變化は微小に収まっている。身長や体重、体型なんて特に。

「……進級や進学程度で人間関係はリセットされない。そして出来ない。俺達の互いに向け合ってる嫌悪だってそうさ。……それに、それしか選びようが無いものを選んだとして、それを選択とは言わないだろ？」

「それを言うのなら、そもそも人生に選択肢なんて無いのだけれどね。何を選んだところで結果が変わらないのなら、そんなのはただの文脈の違いよ」

「ふつ、そうかもしれないな。……頼むから、言いふらさないでくれよ。煩わしいのは御免だ」

「言われなくても分かっているわ。私のクラスが騒がしくなるのは私も御免だもの。……こっちからも頼みがあるわ」

「分かった、任せてくれ」

葉山の歩幅に合わせたため、下校は十分と満たなかった。

翌日。私は何の気の迷いか、何人かに進路を聞いて回った。

一人目は、別件でも用事があった材木座。書面上で伝えにくい小説の感想を話すついでで進路について聞いて聞いてみた。

「我なら理系だぞ」

予想外。仮にも小説家を志すのなら文系を選ぶものだと思っていた。

「文系っぽい知識は趣味の範疇で勝手に入ってくるのでな。問題は興味のない分野よ。これは必要にならぬ限り、身につかぬ」

ああ、なるほど。

一理ある、どころではなく、私も経験はある。

私の場合、小説で登場した意味のわからない言葉を調べていくうちに色々と知識が身につけてしまったところがあるけれど、その情報収集に学校の授業が使えるのならそれ

に越したことは無いのだから。

「それなら教えておくけれど、あまり難しすぎる言葉を乱用するのは要注意よ。読者の知識は中学生程度を想定して書かないと、専門書と同じく近寄りがたい小説になってしまうわ」

「ま、まあ、我別に理系が得意というわけでもないのだけだな」

「せいぜい頑張りなさいな。私は文系でのんびり遊んでいるから、そのうちに追いついて見せなさいな。結構期待してるのよ」

二人目は、戸部。海老名との現状を一方的に聞かされた仕返しも兼ねて、進路を尋ねた。

「一応理系にしようと思ってるんだけど。でも、大岡も大和も文系つつーしきー」

「ま、存分に悩みなさいな。ちなみに海老名は文系よ」

「なんで悩みの種を増やすんすかあ……」

「即断即決できる男はモテるわよ。それが必ずしも正しいとは限らないし、慎重でいた方が安全ではあるけれど」

「悩むことすらさせてもらえねえ!？」

三人目は戸塚。昼休みに外の自販機でファンタグレープを買いに行ったら、テニス部の練習中だったらしく声をかけられた。

「戸塚、あなたは文系と理系、どっちを選んだのかしら？」

「あはは、珍しいね。不可思議さんの方から聞いてくるって、もしかして初めてじゃない？」

「そうかしら」

「うん。いつもは我が道を行くって感じで、周りのことなんてあんまり気にしてない感じだもん」

まあ、確かに。仮に私以外全員が理系に行くと言われても、あるいは文系に行くと言われても、私は進路を変えたりはきつとしない。

「不可思議さんは？ やっぱり文系？」

「その通りよ。進学も就職もしないから、楽な方がいいもの」

戸塚は昼食に食べていた弁当箱に箸を置いて、少し悩んだ後決した。

「じゃあ、ぼくも文系にしよっかな」

「まあ、私からそんな『もつと考えた方がいい』とか言う気はないけれど、何かしたいことではないのかしら?」

「ううん、別に考えてないってわけじゃないよ。ぼくが受けようとしてるところって、文系科目でも受けられるから」

「へえ、そうなの」

興味もなかったから知らなかった。でも大学でも文系、理系ってあるわけだし、そりや分けた方がいい、……のかしら。

「所沢の人間科学かスポーツ科学にしようかなって」

「……素人の私にはアニメのマッドサイエンティストになるための進路にしか聞こえないわね。何よ、人間科学って。サイボーグ?」

「うーん、仮面ライダーを作ったりはしてないと思うけど、……中の人くらいにはなれるかも?」

「よく知らない世界だけど、まあ怪我には気をつけなさいな」

「うん。不可思議さんもね」

四人目は、沙希。毎年この時期恒例のイベントである、マラソン大会。……の、開始直後に歩いてたら沙希に捕まった。

「あんた走れよ！」

「嫌よ、疲れるじゃない」

「神かあんたは！」

手慣れた動きで沙希は私を抱き抱え、ペースを落とさずにそのまま走る。

「そういえば聞きたかったのだけれど、貴女は進路どうするのよ？ 金銭面の問題はだいぶ解決したと思うのだけれど」

「それ今じやなきやだめ!? 結構きついんだけど！」

「別に降ろして構わないわ。私はリタイアするから」

この後も沙希は十分程度走り続けたけれど、流石に限界を迎え、私を降ろした。

「……国公立文系、だと思おうよ」

「あら、うちに就職してくれてもいいのよ。正社員ならボーナスも弾むわ」

「……その話、今じやなきや駄目？」

「そんなことないわ。またあとで」

「ん」

沙希は私を置いて、前方の集団を追いかけて駆け出した。

最後に、雪ノ下。先に下ろされた地点で座っていたら、最後尾を歩き、逸れたものを回収する係の教師に棄権させられた私は、保健室で雪ノ下と遭遇した。

「あら、不可思議さん。……もしかして貴女も棄権させられたのかしら」

「そんなところよ。一歩も走ってなんかいないからなんともないのだけどね」  
「何をしているのよ……」

呆れの目を無視して、私は待合用のベンチに腰掛ける。

「そういえば、貴女はどっちに進むのかしら？」

「私は国際教養科だから、文理選択はないのだけど。というか、あなたがそう言うことを聞いてくるなんて意外だわ」

「流れるに聞いておきたかったのよ。興味はないけれど、知らない具合が悪いしね」

雪ノ下は言いづらそうに、咳払いをしてから答えた。

「……一応、文系ということにはなっているわ」

「そう」

「ええ。だから、一応みんな一緒ね」

「私は進学する気ないけれど、まあそうね」

放課後。

マラソン大会の打ち上げに三浦が向かう道中で、相談の報告をすべく道中を共にした。

「そっか……。隼人、文系行くんだ」

「ええ。けれど分かったからといって、後悔したくなければ、誰にも言いふらさないことを勧めるわ」

煩わしいことを嫌った葉山の意味も汲むべく、雪ノ下との噂を私が居ないうちに解消してくれた礼も兼ねて、釘はしっかりと差し込んでおく。

「葉山はみんなから好かれてはいるけれど、みんなから好かれたがっているわけではない。ただなるべく多くの希望に応えようとしているだけで、大多数は煩わしい存在に他ならない。——貴女はまだその大多数にならずに済んでいるのだから、下手なことはよしなさいな」

「七五三なごみに言われなくても分かつてるし」

「気まずそうに髪を弄りながら、口を尖らせながら小さな声で三浦は言う。

「……でもその、ありがと」

「別に、大したことじゃなかったわ。……こつちこそ悪かったわね。いつか、蹴り倒しちゃって」

「……別に。これでチャラで別にいいし」

「そう。ならもう用はないし、私は帰るわ」

「あんたも来ればいいじゃん、打ち上げ」

「嫌よ、面倒くさい。何が悲しくて外でまでクラスの奴と顔を合わせなきゃいけないのよ」

「……あんた、せつかく可愛くなったんだから友達作りなよ」

「気遣いはありがたいけれど、別に誰かのために私は可愛いわけではないの。可愛くなった程度で出来る友達なんて御免よ」

「……意味わかんない」

「お互い様よ。——ほな、さようなら」

きつと、私と三浦は相容れない。水と油とか、火と油とかじゃなくて。性質の違いじゃなくて、それはきつと世界の違い。生きる世界観の違い。

日の光を浴びて生きる人間と、画面の光を浴びて生きた人間じゃ見える世界が違うし、百人に口を開いてきた人間と一億人に口を開いてきた人間じゃ言葉の意味が違ってくる。

メートルねじとインチねじどころではなく、それこそ文系と理系の違いだ。

それでも、私も葉山も三浦も由比ヶ浜も戸塚も沙希も、一応雪ノ下も、文系という世界に結束されるのだから、現実の小説よりも奇なり。

めでたし、めでたし。

たまにはバレンタインデーが甘味なのは間違っている。

『松』

二月に入ってしばらくのこと。

順調に春に近づいているはずなのに、むしろ冬以上に冷え込み、最近は大寒が冷蔵庫代わりになっている。

今日も放課後になれば、私は自販機に寄り、ジンジャーエールを買ってから部室に向かう。

「ナーちゃん!」

「……何よ」

落下の衝撃で吹き出さないよう慎重に蓋を開けようとしていたら、背後から由比ヶ浜の叫びが響いた。

「なんで先に行っちゃうの!?! 待ってて言ったじゃん! ……言ったよね?」

実は言われている。最近部室にくと、雪ノ下だけでなく一色までもが先に来ていて、最後にくるのが自分であることを密かに気にしだしたらしい。

「私は天邪鬼なのよ。待てと言われて待つ訳がないじゃない」

「訳がないの!？」

「皆無よ」

うあーんと叫びながら追ってくる由比ヶ浜を放っておいて、私は一口ジンジャーエールを呷る。炭酸と生姜の甘味と辛味とが、冷えて乾燥した喉を刺激する。

案の定、私と由比ヶ浜が部屋に着く頃には一色が来ていた。

「先輩、おつそーい!」

「はいはい」

一色は冷えた手で、私をカイロかゆたんぽのような扱い方で、あちこちを抱きしめたり撫でくりまわす。

「鬱陶しいから撫でるなら頭か肩にしなさいな」

体型が小柄だからか知らないけれど、私の体温は一年通して平均より高い。軽く調べたところ、犬猫やネズミみたいな小型の生き物は体温が高いらしい。

「ところで先輩、甘いものって好きですか？」

「葉山なら相当不味く無い限り喜ぶと思うわよ」

「じゃあナーちゃん先輩は？」

「そうね。……まあ嫌いじゃないわね」

「不可思議さんの場合、不味い判定が小さ過ぎる上に食への関心が薄いよね。由比ヶ

浜さんのクッキーを完食できるくらいに」

「先輩、それは一回ちゃんとした病院行きましょ？ 私もついて行ってあげますから」

「ゆきのんもいろはちゃんも酷くない!？」

……物を美味しく食べられるならいいじゃない。

とは言ったものの（言っていないけれど）、どうやら世間一般では由比ヶ浜のクッキーは不味いらしい。

「でも、それじゃあちよつと困りましたねー」

「何がよ」

「甘さをどれぐらいにするか悩んでたんですよー。人によって好き嫌いがあるじゃないですかー」

甘さを……?..

あ。

「なるほど、バレンタインのチョコのことね」

「え、ナーちゃん先輩今気付いたんですか?」

「忘れてたのよ」

基本的に女から男に渡すイベントであり、私が誰かに贈るなんてまず無かったから忘れていた。

「というか一色さん、自分で作るつもりなの？」

「だって、相手はお菓子作りとか分かんない男子ですよ？ だから手作りチョコ口いです。低コストで大量生産、あとは仕上げの時に手間加えて、個々にカスタマイズ。これで男子受け余裕です」

「二応、私は女子なのだけどね」

「ナーちゃん先輩は確かに可愛いけどそういうんじゃないんで。女子の領域とは別世界っていうか、別次元の人なんで」

「……いろはちゃんって、なんだかんだナーちゃんのこと大好きだよね」

由比ヶ浜の言葉に、私も雪ノ下も何も言わずに頷いた。

「ま、まあ……。それで、ナーちゃん先輩。甘いものだとどういものが好きですか？」

「甘いもの、ねえ……。最近食べたものと、メロンパンとチョココロネかしら」

「ナーちゃん先輩、それはお菓子じゃなくてお昼ご飯です」

「菓子パンなんだから似たようなものじゃない」

「不可思議さん、それは違うと思うわ」

「ナーちゃん、今度一緒にスイパラ行こ？」

遺憾である。いや、別に怒ったりしての訳じゃないけれど、ここまで言われることなのかしら。

呆れと心配の視線を無視してジンジャーエールを飲んでみると、部室の扉がノックされた。

軽やかにノックされた扉を見ることしばし。やがて壁の向こうから賑やかな声が聞こえてきた。

「別に、あーしここに頼まなくても……」

「いいじゃんいいじゃん。ていうか私も得意じゃないし」

聞こえてくる二つの声は、そのどちらも聞き覚えのあるものだった。

ノックまでされて帰られるのもなんか鬱陶しいし、私の方から扉を開けることにした。

「……聞こえてるわよ。ノックまでしたんだから入りなさいな」

頼み事に勇気があることは私も重々知っている。直前まで自力での解決策を探しまわりたくなる気持ちも。

「は、はろはろ、不可思議さん。ちよつといい？」

「ダメだったら扉に鍵をかけてたわ。入りなさい」

「あれ、姫菜じゃん？ 入って入ってー」

やってきたのは、海老名と三浦だった。特に三浦は半年前なんかは顔を合わせれば険

悪になっていたほどなのに、よくもまあ来れるものね。素直に尊敬するし、引き摺ってくれる友人がいるのは普通に羨ましいとも思う。

「何か、御用かしら」

対面に座った雪ノ下が声をかけると、三浦は言いづらそうに口をもごつかせながら、一色をちらりと見る。

「……その子、なんでいんの」

「うーん、私的にはそれ私のセリフじゃないですかねー、……みたいなの」

とりあえず険悪な二人を置いておいて海老名に聞いてみると、三浦は何やら手作りチョコを作り、葉山に渡したいらしい。

けれど、由比ヶ浜が言うには、葉山はそもそもチョコを受け取らないのだとか。「揉めるからに決まっているじゃない」とは、雪ノ下談。

「作る作らない以前の問題じゃない。諦めて市販品を家に郵送するんじゃないかダメなのかしら?」

冗談で言ってみただけけれど、ダメらしい。この手のイベントに消極的な雪ノ下にまで却下されてしまった。

三浦と一色が第二ラウンドを始めようとしたところで、私は扉の方で一つ気がつい

た。私が気づいたことに向こうも気づいたらしく逃げ出したけれど、すかさず私は携帯電話で電話を掛けた。細やかながらの着信音が廊下から聞こえてくる。

『……………もしもし』

「お姉ちゃん……………、助けて……………」

なるべく声をか細くなるようにして呼びかけたら、力強く地面を踏み締める足音と共に通話は切れた。

そして十秒としないうちに、窓ガラスが割れるんじゃないかと思うくらいの轟音が扉から響いた。

「可思議!!」

「……………私が言うのもあれだけど、チョロすぎるでしょう。とりあえず座りなさいな」

「アンタほんともう、ほんとアンタ……………」

全速力で走ったらしい沙希は、たかが高校で私が窮地に追い込まれることなんてそうそう無いという考えが湧かなかったのか、本気で心配したらしい。

「お、サキサキじゃーん。はろはろー」

「サキサキ言うな……………」

つつけんどんなセリフだけれど、今はその言葉に一切の覇気が見られない。

明らかに落ち込んでいる沙希を慰めるように、由比ヶ浜が椅子を勧めながら話しかけ

る。

「沙希が来るって珍しい、っていうか初めてだね」

由比ヶ浜はいつの機会かに沙希と仲良くなったらしく、名前で呼んでいる。嫉妬を抱くどころか、あの沙希に私以外に名前前で呼ぶ人間がいることには感動すら覚えた。

「それで、何か御用かしら」

雪ノ下は紙コップに紅茶を淹れて出しつつ尋ねた。

「あの、えつと……」

「つつーか、あーしの話まだ終わって無いんですけど」

「は？ あんたお茶飲んでるだけじゃん」

沙希が言い淀んでいると、三浦が不機嫌そうに睨み、恨み言をぼやき、沙希も睨み返す。

「前に言わなかったかしら？ ここで攻撃の色を出すのなら、綺麗な顔面を踏み潰して追い出すわよ」

私が言つてすぐ、二人は表向き怒りを内に収めた。内心は一触即発なままだけれど。

「まあまあ。とりあえず、話してみそ？」

この場で一番中立な海老名が代表して、沙希に話すよう促す。

「あー……、その、チョコのことなんだけど」

言つた途端、三浦がふつと、標的を見つけたような笑みを浮かべた。

「何？ あんたも誰かにあげんの？ ウケる」

「あ？」

「は？」

すぐさま、さつき内に秘めたはずなのに、ガンをくれあう。

「沙希。喧嘩をするなら外でしなさいな」

「外でならいいんだ!？」

ここで暴れられると、紅茶やら私の荷物やらがあつて危ないからそう言つただけなのだけれど、由比ヶ浜はツツコミを入れた。

「ナーちゃん先輩の知り合いつて、変な人ばかりですね」

「は？」

「あ？」

ふと口から出たのか、一色はそんなことを言い出して二人から睨まれた。

「一色。あなたもその一人なのよ。それより、チョコがどうしたのよ。彼氏でもできたの？ おめでどう」

「んな訳ないの分かつて言つてんでしょ。そういうんじゃない、妹が作つてみたいつて言い出して。なんか、小さい子でも作れるやつつてない？」

まあ、分かってて言ってるのはそうなのだけれど。そんな暇も見合う相手もないのは私が誰よりも知っている。

「小さい子でも、ね」

雪ノ下は復唱し、ふむと頷く。

「でも貴女、料理得意じゃないのよ」

我が家の台所は基本的に三子の領域だけれど、三子も受験勉強があるため沙希が手伝うことも多い。

「お菓子と料理じゃ全然違うんだってば」

「ああ、そういうえば三子もそんなことを言ってたわね」

なんだったかしら。料理に必要なのはあるもので完成させるアドリブ力で、お菓子作りに必要なのは材料を揃える気兼ねと、レシピに従う根気と、一切間違えない慎重さ。って、そんな感じのことを三子が言ってた気がする。

結局、こちらが依頼の数と依頼人の癖の強さに圧倒され、すぐにはうまく話がまとまらなかつた。

依頼人たちを帰した後、再度話し合う。

「とりあえずチョコ菓子が作れて、葉山にも渡せばいいのよね」

葉山が受け取らない理由は、人間関係を歪めない為。想像することしかできないけれど、きつとそこには女子同士の苛烈な争いがあるのでしよう。

「それができれば苦労はしませんよー」

「苦労しているから成功しないのよ。もつと楽な方法を考えなさいな」

「ナーちゃん、そんなのあるの？」

由比ヶ浜が持ち込んで来たお菓子を摘みながら聞いてくる。

「そうね……。チョコを渡すのは、言ってしまえば告白みたいなものなんだし、それが理由で渡す方も受け取る方も躊躇する。本質的に葉山が受け取らないのはそういうことなのでしよう？」

三人は一様に頷く。

「だったら、その山を乗り越えるんじゃないやなくて、回り道してしまえばいい。恋仲へは遠回りになっても、チョコは渡せるし立ち止まったままよりは進展する。よく言うでしょう——急がば回れ」

「告白にならない渡し方って、例えば……『義理ですけど、どうぞ』、みたいな感じですか？ あんま意味ないと思いますけど」

「もつとバレンティンから遠ざけなさいな。そうね……。『部活への差し入れです、先輩もどうぞー』とか、どうかしら」

「……ナーちゃん先輩の私の声真似のクオリティの高さに驚いています。なんですかそのあざといセリフ。私だってまだ言ってますよ」

一色を意識したわけではないけれど、確かに似ていた気がする。

「それだと三浦さんは渡せないけれど、要するに、食べて当然の環境を作ってしまったばいいのよね？ それも野次馬のいない場所で」

「まあ、そうなるわね。料理教室で試食を頼むとか、そういうのが現実的などころかしら。——逆に振り切って自宅に連れ込んで食べさせると言うのもあるけれど」

「ナーちゃん、優美子にそんなことできるわけないじゃん、あれで乙女なんだから」  
「由比ヶ浜さん、何気に酷いわね……」

「でもいいですね、料理教室。それでいきましよう。依頼の人たち纏めてイベント的なのを開いて雪ノ下先輩が教えるって感じでどうですか？」

一色は方向性さえ決まっていれば動くことに躊躇いはない。それこそ、これで雪ノ下が了承してしまえば企画が始まる。

「え、ええ……。それは構わないけれど」

困惑まじりに雪ノ下が頷くと、一色は携帯電話を取り出した。

「あ、副会長？ 企画書の提出を命じます。お料理教室イベントー！ みたいななの……は？ いや、だからとりまハコ押さえて告知打つのだけやってもらってー、で」

電話越しに、相手の困ったような声が漏れ出ているけれど、一色は舌打ち混じりの低い声で指示を出し始める。

あ、そうだ。

「一色、生徒会での打ち合わせに私も一枚噛ませなさいな」

「え、いいですけど、何かしたいんですか？ ある程度融通は効きますけど」

「まあ、話してたら私も作りたくなつたのよ。あと都合のいい人材を思い出したわ」

決まってしまえば、私も向こうに電話を掛けた。

「もしもし、私よ。今から一週間程度予定を空けてこっちに来なさい。報酬は美少女のスマイルでいいわよね」

返事が聞こえぬ内に、私は通話を切った。切るのに手間取って泣き言が聞こえた気がするけれど、聞こえなかった。

「はい。はーい。はーい、よろしくです」

一色の方も、泣き言を無視して電話を切って席を立った。  
「それじゃ、行きましょつか。ナーちゃん先輩」

「ええ」

私と一色は部室を後にし、生徒会室へと向かった。

たまにはバレンタインデーが甘味なのは間違っている。

## 『竹』

怒涛の相談が舞い込んだ日から数日が経ち、イベント当日。

会場として使うことになった、クリスマス合同イベントぶりのコミュニティセンターではがやがやと、あちこちで若い声が響いていた。葉山一味に沙希、他にも総武校の顔見知りが何人かいてそこまでは想定内。けれど想定外な集団もいて……。

「やあ、いろはちゃん。いやー、よかったよ。やつぱり前回のイベントが評判良くてね。今後一緒に緊密なパートナーシップを築いてアライランス活動を継続していきたいと思っていたところに今回のオフアードだったからね」

「ですねー。お疲れ様ですー」

長々と語ったのに一色が一切触れずに流したのは、意識高い系でおなじみ、海浜総合高校の生徒会長、玉縄だった。

いや、まあ、来ることは知ってはいたのだけれど。合同にすることで予算を引っ張ってくると言う名目は一色から聞かされたし、メールでのやりとりには私も参加していた。

「こういう機会ってビジネスチャンスでもあるよね。クラウドファンディングとかで資金集めて展開していくスキームもありかもしれない」

「それ、アグリーだね」

「インセンティブを還元していくメソッドを構築できればアーリーアダプターに刺さるかもしれない」

「アメリカではフリーマーケットのときに子供がレモネードを売って経済感覚を養っていくんだけど、それにニアリーかな」

「そうだね、それも一つのケーススタディだね」

「……けれど。」

けれど、相変わらず、何を言っているのかはさっぱり分からない。クリスマスの際に一度は勉強したものの、二ヶ月弱という時間はそんな不要な知識を忘却するのに十分すぎる時間だった。

「……他校を財布にするにしても、別の学校にするべきだったかしらね。言葉が通じないんじや面倒だわ」

私の言葉なんて全く聞かれていなかったと思うけれど、何かを言われたのに勘付いたようで。

「き、君たちもいたのか……」

「あー、言ってませんでしたっけ? ……ちよつと、先輩?」

言つてない。雪ノ下や私が当日に参加するという話は、私が意図的に省略していた。

「一色さんと不思議さんの組み合わせて、時々凶悪なのよね」

「人聞きが悪いわね。組み合わせではなく共犯よ」

「もつと悪くなつてない!?!」

雪ノ下の言葉を訂正して由比ヶ浜にツツコミをもらつたりしていると、ガララツつと音を立てて扉が開いた。

「ひゃつはろー!」

「ちやつおー、可思議ちゃーん!」

高校生ばかりのこの空間に、異形が二人。一人はヒールを鳴らし、一人は仕事以外では絶対に履かない下駄を鳴らす。

「姉さん……。と、誰?」

雪ノ下は姉の存在に思わず顔を顰めたものの、もう一人、青い着物に青の三角巾をつけた金髪には首を傾げた。

「というわけで、特別講師のはるさん先輩とほろりちゃん先生でーす!」

「はーい、はるさん先輩でーす!」

一色が甘つたるい声で言うと、それに乗つかるように雪ノ下姉が冗談めかして返す。

「あーあーあーあー、可思議ちゃんったら。京都からここまで何時間掛かったと思ってるのかなあ？」

甘口な二人とは対照的に、ほろりは怒気の滲んだ、拗ねるような声で私を責め立てる。「いいじゃない。どうせ暇でしょう？」

「うちは正月でも年中無休だったの」

「じゃあ出張つてことにしなさいな。料理するのは同じなんだから、問題はないでしょう？」

「問題しかないよ。問題でしかないよ！ 可思議ちゃんじゃなかったらぶん殴つてたよっ！ このっ！」

ほろりは髪だけでなく脳味噌までかき回すかのように私の頭を掴み、グリグリと強引に揺らす。あつ、首が、首がガチャつてっ！

「ちよ、はなつ、離しなさいっ！」

「どうせなら東京辺りを観光したいんだよね〜？」

「わかったからつ、いくらでも付き合うから離しなさいっ」

「じゃ、明日デートね。今日は可思議ちゃんちに泊まるから」

急に手離されて地を踏み損ねた私は倒れそうになって、雪ノ下に支えられた。

「……彼女、一体何者？」

「きよ……、京都の料理人よ。……私が知る限り、最高の料理人……」

私が息絶えながらに言った直後に、ほろりはウィンクとピースをしながらに名乗った。

「あたしは海胆岬うにみさきほろり。可思議ちゃんはまだ七子ちゃんだった頃の友達で、料理店『蛸』の店長だよ」

……そこまでの仲じゃなかったはず。

幼少の頃、毎年京都に連れていかれて、あちこち連れ回されているうちに、ほろりの店（当時はほろりの両親の店）に行き着き、当時は私の一個下で私より小さかった一人娘のほろりが私に懐いて……。

なんやかんやで中学で殺人事件を起こし、ほろりは少年院。元々年に数日しか会っていないかったし、疎遠になって当然だった。むしろ修学旅行で顔を合わせようと思いついた気まぐれがなければ、今日も顔を合わせることはきつとなかった。

「アツハツハー。それにしても可思議ちゃん、こんなに友達居たのなら紹介してよね？」

お姉ちゃん寂しいゾ？」

「大切な友達が仮に私にいたとして、そうだったら貴女のごことは死んでも紹介なんてしないわよ。あと貴女、私より年下じゃない」

「アツハツハツハツハツ！ 細かいことは言いつこ無しよん？ ——あー、チヨコだつ

け？ オーキードーキー、ちよろいちよろい。胎児のシチューをよりも楽な料理よ」

……胎児のシチュー？ 何よ、そのホラーゲームでありそうな料理名。

「まあ、それじゃあさつさと始めよつか。空腹は殺人鬼の始まりだよ」

沙希の妹を除けば、一色と同一年で最年少のほろりが先導し、料理教室は始まった。

この時期は大抵のスーパで買える、菓子作り用の分厚いチョコレートを包丁で切るのだけれど、速攻でほろりに腕を掴まれた。

「待たれよ、可思議ちゃん。そのまま包丁下ろしたら何が起こると思う？」

「チョコが切れるに決まっているじゃない」

今はまな板にチョコの塊を乗せ、とりあえず真つ二つに切ろうとしているところ。

「うん、それが出来るのはあたしみたいな馬鹿力のある馬鹿だけだから。知ってる？」

チョコつて硬いんだよ？ 潔く端から薄く切りなさい」

「……包丁を熱せば切れるかしら」

「それ氷を切るときのやつね、なんでそういう知識だけあるの。あとチョコでそれやつちや駄目。包丁が焼き鈍されて刃が駄目になって切れなくなる」

焼き鈍す、というのがどういふことなのかいまいちピンとこないけれど、切れなくなるのは問題ね。

と、だから端を五ミリ厚程度に切ろうとしたら、包丁は刺さってピクリとも動かなくなつた。

「……切れないわ」

「んっん、ちよつと貸してみそ?」

ほろりは言いながら包丁の柄を握り、チョコごと数センチ持ち上げ、まな板に叩きつけた。和太鼓を叩いたような音とともにチョコは切れる。

「可思議ちゃんつて、基本弱っちいんだけどねえ」

そのまま、まるでバターを切るように（実際に切つたことなんてないけれど）、等間隔にほろりはチョコを切っていく。

「腕力とか握力もそうだけど、そうじゃなくなつてさあ。度胸つていふの? それか勇気かな」

「何が言いたいのかしら?」

ほろりはまるでドミノのようになつたチョコを、微塵切りし始めた。

「……アツハー。あたしが見るに、クリスマス前後くらいに何かあつたのかな? 年末に会つた時は今日よりもなんか難しそうにしてたし、まあ幾らかマシになつたみたいだ

けど、なんて言うのかな……」

言葉にしにくいようで、悩みながら、生クリームのパックを鍋の上で包丁を突き刺し、中身を鍋に入れる。

「んー……、幼くなった、でいいのかな。小説家じゃないあたしにはこれ以上の表現はできないけれど、でも可思議ちゃん、——まるで七子ちゃんみたいだもん」

私には『エンパス体質』という、簡潔に言えば並外れた共感力を持つという体質があり、そのエンパス体質の中でも私は共感力が高い。それ故に、周囲の人間の感情が我ごとのように分かる。共感できてしまう。周囲が怒れば私も怒り、周囲が悲しめば私も悲しい。

対してほろりは、そういう特異な体質ではないけれど（恐らく）、けれどほろりは異様に目が良い（むしろ、本人的には最悪と言って良いほどに悪質）。『目は口ほどに物を言う』、とは言うけれど、ほろりの前ではむしろ『顔が何よりも物語る』と言うべきで、思考を満遍なく見抜く。

その精度は私の共感を遥かに上回り、しかし似通つてもいて、その人間の弱い部分や

悍ましい部分、辛い部分ばかりが表立って見えてしまう。

結果ほろりは同級生の黒く如何わしい恋心という名の下心に絶望と怒りを覚えて殺人を犯すことにもなった。

ほろりの前で顔を晒すということは、心や脳を切り開くと同義。

私はほろりの言葉に従いながら、生クリームとチョコレートを鍋で煮込みながら混ぜ、バッド？ というらしい、金属のお盆のようなものに溶けたチョコを移して冷蔵庫に入れた。三十分程度待つらしく、私はほろりの膝の上に乗せられてしばらく休憩となった。

「捕まる前までは、と言うか久しぶりに会うまでは、七子ちゃんのことを本当にお姉ちゃんみたいに思ってたんだよ。幾らちっちゃくても、大人びて見えてさ。……修学旅行だっけ？ 先生連れて店に来た時はびっくりした。『七子ではなく不可思議可思議と呼んで』ってメールで言われたからそうするつもりだったのに、七子ちゃんまんまなんだもん。——そして今はそれよりも、ずっとちっちゃい」

ほろりが言うには、私は生涯不変どころか、若返っているように、幼くなっているよ

うに見えるらしい。

そう、なのかもしれない。

七子の名は、私にしてみれば過去のものと、思っていた。——そして私は、あの地獄のようなクリスマス前に、名乗っている。

『簡単に作れないと簡単に無くなるじゃない。生涯不変の小説家は休業中だけれど、——

——美術的な女子高生、七五三七子は不可思議可思議の四割増しで素敵に過激よ』

記憶を遡っていると、ほろりがゴツンと顎を私の頭に乗せて静かに笑う。

「アツハツハア。……ねえ、可思議ちゃん。誰か同じ年か年下相手に『お姉ちゃん』とか、そんなことを言ったこと、無い？」

「……心当たりがあり過ぎるわね」

沙希相手に揶揄い混じりにそんな呼び方をしたり、一度だけ雪ノ下相手にも、それこそ冗談だけどそんな呼び方をした。……三子にそう呼ぶように強請られたこともあったわね。

「可思議ちゃんって昔から嘘が下手だよねえ。偽れないって言うのかな。無意識に、無自覚に、その人達を自分よりも年上に見てたんだよ」

ほろりから呆れの感情が流れ込んで、私まで私に呆れてきた。

「そう……、かも、しれないわね」

「ほら、そういうところ。幼くなってるし、何より弱い。あたしの知ってる七子ちゃん  
は、周りにどれだけ共感しても流されたりはしなかった。怒りも悲しみも全部飲み込ん  
で糧にするような人だった。——どれだけ怒っても恨まない、どれだけ悲しくても泣か  
ない、強くてかっこいいお姉ちゃんだった」

「……私は昔から泣き虫だったわ」

なんとというか、苦し紛れな言い訳みたいに震えた声が私の口から出た。

「そんな七子ちゃんをあたしは知らない。見たことがない。……きつと、見えないとこ  
ろで泣いてたんだろうけど。でもね、可思議ちゃん。涙を見られたくないって思える人  
は強い人だけなんだよ。七子ちゃんは人前で泣くような人じゃなかった」

「……そう、だったかしらね」

ほろりから流れてくる感情は、呆れでも悲しみでもなく、心配。それと不安。一心不  
乱に私の身を案じていた。

「ねえ、何があったの？ 可思議ちゃんを追い詰めた何かって、何？」

……なんなんでしょうね。

タイミングはわかる。クリスマス前。

始まりは一色が持ち込んだ依頼と、クリスマス合同イベント。きっかけは、車の中  
の平塚先生との会話。

終わりは、依頼の解決。

けれど終わってから、私の弱体化は続いている。小説が無事書けるようになったりと、改善はしている、……はず。

いや、追い詰めたのが何かなんて分かり切っている。

「結局、私なんでしょうね」

願まじない。転じて、呪まじない。座右の銘やモットーというものには、そういうところがある。

『生涯不変』

言霊とでも言うのか、いつか私も言ったことだけど、将来に対して、口に出して言ったことは実現する可能性が増幅する。

生涯不変を、だから私は実現してしまっていたわけで。

成長も老化も退化も劣化も修復もしていなかった私は、子供のまま高校生になった私には、針の穴を通すために自分を切り刻みまくった私には、あの地獄のようなクリスマスが耐えられなかった。

「まあ、そのうちある程度は戻ると思うけどねえ。戻るって言うか、治るって言うか、塞がるって言うか。——ねえ、あたしに出来ることって、無い？」

「とりあえず、美味しいお菓子でも食べたいわね。作ってくれない？」

「うん、まいどあり」

殺しと料理にしか能のない料理人にしてもらうことなんて、それくらいしかなかつた。

ほろりは私を膝から下ろし、チョコを切り刻み始めた。

たまにはバレンタインデーが甘味なのは間違っている。

## 『梅』

イベント開始からおよそ一時間が経ち。

私は冷蔵庫から取り出した、チョコと生クリームを混ぜた物を取り出し、二十個程度、丸めてラップに包んで再度冷蔵庫で三十分冷やし固める。

その間に私がしていることといえば、一貫して試食。と言うか、いっそ餌付けのようでもあった。

菓子の類ならカレー味でもない限り美味しく食べられる私は気軽に味見役をさせやすいらしく、誰も彼もがチョコやスプーンを片手に私の元へとやって来る。

「ナーちゃん先輩、あーん」

「あぐ……。……。ん、美味しいわ」

いつか由比ヶ浜が作ったものとは比べ物にならないほどに柔らかく（脆く？）食べやすいクッキーは、……。うん。美味しかった。

「……。感想、それだけですか？」

「これ以上に何を言えと言うのよ。私の舌はかなり雑に出来てるのよ」

「それは聞いてましたけど、嘘でも褒めてくださいよ〜」

「可思議ちゃんは嘘とか苦手だもんね〜。はいあーん」

「む〜」……」

強請る一色をどう相手しようか考えていたら、横合から明らかに一口では食べられないサイズの焼き菓子がねじ込まれた。

粉で服を汚しつつ、クツキーよりも軽い噛み心地のそれを三日月型に噛み切つて掴み取る。

「もっ、もしかしてマカロンですか!？」

「そだよー。はい、いろはちゃんもあーん」

「あ、あーんっ」

一色は私と同じように、マカロンを口にねじ込まれて口を塞がれる。

……それにしても、これが、噂のマカロン。

「さすが、美味しいわね。……分厚いモナカ?」

「いや、結構違うものだからね? モナカは和菓子だし。ほいもう一個」

「いや、うぐ……」

私が頼んだことだし、ダメダメな私の舌をしても違いが分かるほどに美味しいお菓子を食べることに忌避感は全く無い。けれど、口にねじ込まれるのは普通に鬱陶しい。

「やあ、不可思議。何やら愉快なことになっているな」

「んく……、平塚先生じゃない。なんでいるのよ」

どこから現れたのか、突如私の前に平塚先生を姿を見せた。

「一色から報告があったからな、一応様子見に来たんだ。要注意人物もいるこ」

「センセーちゃんも、はいあーん」

「うづつ……」

ほろりの方をチラリと見た平塚先生は、一色や私と同じく、口をマカロンで塞がれた。

「……ほろり。口にねじ込むなら小さいサイズで作りなさい」

「マカロンなんて大概こんなもんだよ？」

「だとしても人の口にねじ込んでくれるな……」

平塚先生はマカロンを飲み込み、恨み言をぼやくも、当のほろりは私の元を離れて、あちこちにアドバイスをして周りに行っていた。

私もそろそろ作業を再開するため、冷蔵庫に向かう。

ラップに包んだ丸い玉から、ラップを剥がし、丸め直して皿に並べる。あとはココアパウダーをまぶして完成。

黒光りする玉に、同じような色の粉をふりかけ、光沢を消していく。

「……これでもいいのかしら」

「なんだ、君も作っていたのか」

バレンタインチョコとは言いにくい、彩りの少ないチョコをどうしたものかと見ていたら、平塚先生が目を丸くしながら見ていた。

「ええ。ほら、食べてみなさいな」

一つ摘んで平塚先生の方へ差し出すと、苦笑いしながら腰を低くして、口で受け取った。

「……ああ、甘いな」

口の中で転がしながら蕩して、どこか満足そうにしながら飲み込んだ。

「ククツ。……ええ、やってみるものね。そしてやっぱり私には向いてない」

私も一つ、口に放る。

ココアパウダーが多すぎて頬の内側や舌まで粉っぽくなるし、噛めば中途半端に硬くて柔らかいチョコは砂糖の味がするほどに甘く苦い。

「……ほんま、甘いわあ」

「……少し似合うようになったな、京都弁」

「クククツ、せやろか？」

「ああ。可愛いやつだよ、君は」

いい加減、舌がお菓子でおかしくなってきた。甘みを感じる部分が麻痺してきて、口の中にはチョコと砂糖の苦味だけがこびりつく。

「しかしまあ、準備期間の割りに随分といいイベントになったじゃないか」

「私が共犯したんだから、当たり前じゃない」

「共犯、か」

残りのチョコにもココアパウダーをまぶし、生徒会が用意した、四個二列の八つに区分けされた箱に納めていく。

「さて、そろそろ私は仕事に戻るよ。見たいものは概ね見られたからな」

「もう少し居ればいいじゃない」

「いやあ……、少し仕事をため込んでしまっていてな。三月まで残り少ないし、今のうちに片付けてしまいたい」

平塚先生は何か気まずそうに——失言でもしたかのように、一步私から退いた。

「ちよつと待つて」

急いで箱に蓋をして、平塚先生に差し出す。

「少し早いけれど、あげるから持って行きなさいな」

「あ、ああ。……ありがたく受け取っておくが、……義理だよな？」

恐る恐る、といった表情で平塚先生は受け取る。

私は貼り付けるように口の形を笑みに変え、喉を鳴らすように笑いかけた。

「ククツ。——うちがせんせのことめっちゃ好きなん、知つとるやろ？」

平塚先生は何も言わず、表情を隠すようにしながら足早に部屋を出て行った。

なんであれ、どんなものであれ、どれだけ騒がしいイベントや祭りも終われば静かなもの。

一色が簡単に閉会すると、片付け作業に入った。そんななか私は、いつの間にか椅子に座ったまま眠っていた。

「んっ……」

何かの拍子に、私は目を覚ましたらしい。部屋を見渡すと、ずいぶん人が減ったらしく、いつの間にか残っているのは生徒会と奉仕部、そしてほろりだけだった。

私が作業していた机も既に元どおりに戻っていて、この部屋で残った作業といえばあとはゴミ出しくらいに見える。

「あとは生徒会でやるので、大丈夫ですよ?」

歪な姿勢で寝てて痛んだ関節をほぐしていると、ポスターを回収してきたらしい一色に声をかけられた。

「あ、ナーちゃん先輩、やっと起きたんですか? お腹一杯になったら寝ちやうつて、ほんと子供みたいですね?」

「そうですね……」

首と肩や頭蓋骨との付け根を鳴らす音で一色は私が起きたことに気づいた。

「あれ、ナーちゃん先輩から覇気が感じられない」

「寝起きなんて、誰でもそうでしょ。……ほろり、なんでもいいからカフェイン」

「ほい、コーラ」

「ん」

ほろりから半分程度まで減っている温ぬるいコーラを受け取り、一気に飲み干してようやくと脳が覚めてきた。

「もう、終わりかしら」

「そうですねー。あとは忘れ物のチェックだけです」

一色はそう言いながら、私の荷物を持ってきた。バックの中にはノートパソコンと、チョコが一箱。

「なら、もう帰るわ」

雪ノ下や由比ヶ浜も、手持ち無沙汰になっているし、ほろりもすっかり持ち込んだ自前の調理器具を仕舞い切っている。

「はい、お疲れ様でした、先輩」

私たちは生徒会に見送られ、コミュニティセンターを出た。

外はすっかり真つ暗で、女子四人だしと、多少遠回りをしてでも各家を巡るように帰ることになった。

一軒目は雪ノ下の家だったのだけれど、大きな公園の脇道を通り抜けて、横断歩道を渡り、雪ノ下の家だというマンションが見えてきたあたりで、雪ノ下は足を止めた。

「およ？ 雪乃ちゃん、どうかした？ 忘れ物でも思い出した？」

「い、いえ……」

一人だけ着物で手ぶらのほろりに尋ねられても、雪ノ下の反応はなんと言うか、心霊体験でもしたかのように鈍い。

一点を訝しげに見ていて、視線を辿ると、そこには黒塗りの、詳しくない私でもわか

る高級車が止まっていた。

そつちも私たちに、あるいは雪ノ下に気がついたのか、ドアが開いて一人の女性が降りてくる。

「母さん……。どうしてここに……」

降りてきたのは、私も一度会っている、雪ノ下の母だった。相変わらず、ほろりとは方向性の違う華やかさの着物を着ている。

「陽乃に聞いてもあなたの進路がわからないというから、こうして聞きにきたの。雪乃、あなた、こんな時間まで何を……」

母親の気遣わしげな視線に、雪ノ下は俯いてしまう。その姿を見て雪ノ下の母は小さくため息をついた。

「あなたはそういうことをしない子だと思っていたのに……」

雪ノ下は一瞬視線を上げたけれど、母親の瞳を見て、何も言い返さずにまた視線を逸らした。

——けれど。

「アツハア。あたし達は何をしていたのかも知らなくせに、その叱るような物言いは母親であれなんであれ、気に入らないな？」

庇うように、というより攻めるように、ほろりが雪ノ下親子の間に立った。ほろりの

野外だというのに三角巾のついた頭を見て、母親はキョトンと不思議そうな顔をした。

「あなたは……？ えっと、はじめましてよね？」

「そうでなくとも、忘れられてたらそれはもう初めましてってことでいいと思うよ、うん」

ほろりは口元こそ笑っているけれど（所謂、営業スマイル）、その声には殺気とまでは行かずとも、怒気のようなものが滲んでいた。

「あたしは海胆岬ほろり。京都で料理人をしているよ。今日はバレンタインデーのイベントで講師役呼ばれたの。——お姉さんが真っ先に何を考えたのか知らないけれど、如何わしいところなんて異性にチョコを渡したりする程度しかない、高校生らしいイベントだったよ」

「……そう、京都からわざわざ……。少し早とちりをしてしまったみたいね。不快に思わせてしまったのなら、ごめんなさい。でももう遅いし、あなた達の親御さんも心配されてるわ。……ね？」

暗に、これは家の問題だから首を突っ込まずにさっさと帰れと、雪ノ下の母親は言った。

「アツハツハア。……そう言われちゃ、返す言葉もないから、返さず言いたいことだけ言っって帰るよ」

ほろりは背を見せ、つまりはこつちを向いて、子供のように小さく見える雪ノ下の頭を軽く撫でる。

「親のすることは全て虐待だよ。中でも過保護や過干渉なんて、『過』って付くくらいだから過剰なまでの虐待だ。そこに愛があろうと優しさがあろうと、受ける身からしてみればそれこそ不快でしかない。——掛けた温情に恩返しを期待する親を、世間一般じゃ毒親って言うんだよ」

雪ノ下親子は揃ってほろりをみて、固まった。

喜怒哀楽、どれともとれない表情を浮かべた雪ノ下親子をほろりは嘲笑う。

「アツハツハツ。帰るよ、結衣ちゃん、可思議ちゃん。空腹と夜更かしは殺人鬼の始まりだからね」

ここから先は、本当に家庭の問題でしかない。これ以上は、ほろりがしたように一般論で外壁を壊すしかない。私たち外野にできることは、何も無い。

何やら話し出した親子を置いて、私たちは由比ヶ浜の家へと向かい歩き出した。

道中は全く会話が無かったけれど、私はふと思いついたことを口にした。

「……母親といえ、ただのだけ。ほろり、何日も家を開けて大丈夫なのかしら？」

「さあ？ まあ、大人だしなんとかするでしょ。ご飯も材料ならあるし」

ほろりの両親は、ほろりが殺人鬼として警察に捕まった際に精神を激しく消耗し、家から一步も出られなくなったらしい（多分そこには精神的要因以外にも、外間的要因が多にあると思うけれど）。

「海胆岬さんのママって、どういう人なんですか？」

沈黙が破れば、由比ヶ浜も普通に話し出す。

「んー？ まあ、四捨五入したら雪乃ちゃんのお母さんと大体一緒だよ。年中着物でプライド高くて、娘に対して過保護で過干渉。そしていざ娘がグレたら滅茶苦茶落ち込んで、今や両親ともに引きこもり」

いつか聞いたけれど、ほろりの両親は別々の料亭の次男、次女の夫婦らしい。別に戦略や政略があつたわけではなく、唾み合い競い合うような関係の家柄でもなく、普通に仲のいい幼馴染みで中学校からの長い恋愛の末の結婚だったらしく、端から見てる分にはそれなりに幸せそうな夫婦だった。

「へ、へ……。な、ナーちゃんは？」

「うちは……、多少オタク気質で放任主義だけど、概ねノーマルな母親よ」

……というか、もう一年以上会っていないのよね。最後に会ったのは去年の年末年始

に三子と二人で京都に行つたときだし。

「いや、可思議ちゃんのお母さん、かなり独特だし、怒ると怖いよー？ 悪いことしたら、子供でもガチで泣けるタイプのラノベ読まされて、感想文書かされんの」

「……なんで?」

由比ヶ浜は本気で不思議そうに首を傾げているけれど、紛れもなく真実。

なんでも、自分は子供を叱れるほど大した人間ではないから、代わりに適切なライトノベルで感動させて反省させるとか、そんなことを言っていたし、そしてそれはただの説教よりよっぽど効果的でもあった。

「あ、あたしの家ここだから。ありがとうね」

話していると、由比ヶ浜の家についたらしい。

「そう。じゃあ、また明日」

「またいつかね、結衣ちゃん」

「うんっ。またね!」

由比ヶ浜と別れ、私達二人もようやくと帰路についた。

「そういえば最近、可思議ちゃんのお母さんがよくうちの店に来るんだよね。なんか知らない？」

「知らないわ……。あ。そういえば、正月あたりにあなたが今店長してるって教えてたわね」

「娘達に会いたがつてるでしょ、それ。あたしを二人の代替人オルタナティブにしないでよね、まったく。あ、夜ご飯何がいい？ なんでも作るよ」

「会いたければこっちに来ればいいのよ。あと夕飯はオムライスがいいわ」

「あれだけ食べておいてちゃんと食べられるの？ 残したらぶっ殺すよ？」

「貴女の料理は別腹よ」

「いや、意味わかんないから」

途中スーパーに寄って足りない材料を買い込んでから、帰宅した。

依頼人達は全員満足行ったようだし、雪ノ下の方は後日なんとかするとして、とりあえずは、めでたし、めでたし。

やはり雪ノ下雪乃が美術的なのは間違っている。『花』

ほろりを呼び出してバレンタインチョコを作ったり、三子に早めのバレンタインチョコを渡して締め上げられたり、ほろりと東京旅行と称して、渋谷でナンパしてきた男達を土下座させたり、新宿で強面の男達を土下座させたり、秋葉原でピラ配りしていたバイトメイドを土下座させたり、ノートパソコンを MacBook Air に買い換えてみたりして、数日後——もう、バレンタイン前日。

高校入試前日ということもあってか、授業は午前中だけで終了。多くの生徒達が机の引き出しや傍の荷物に阿鼻叫喚しているのを尻目に、パソコンを新調して軽くなったバッグを片手に奉仕部へと来ていた。

雪ノ下と由比ヶ浜も来ているが、実は料理教室イベント以来、久方ぶりの部活だった。というのも、雪ノ下は家の事情、私は稼業と三子で少々忙しくしていた。特に私は、三子の受験で母親の署名が必要な書類があったが為に、学校を休んで京都まで行ったりしている。

クラスも違う雪ノ下とは顔を合わせる機会が極めて無く、気まずそうにしている。

「この間は、……その、母がごめんなさい」

言いづらそうにしながらも、三人分の紅茶を淹れながら雪ノ下は言った。

結構大変だったらしく、私たちが去った後に姉までやって来て、しかもどちらに味方するとうわけでも無く、三つ巴の口論に纏れ込み、今は一時休戦状態なのだとか。

「ぜんぜんっ！ あたしも帰りが遅いって、よくママに言われたりするし」

由比ヶ浜は気にするなど、手をぶんぶんと振りながらに言う。

「こつちこそ、ほろりを止められなくて悪かったわね。変に振れたりは、……あれだけイカれた人間ならしなさそうね」

あの日、ほろりはあの女に大層な高説を垂れていたけれど、あれは別に雪ノ下を氣遣って言ったわけではない。私が共感して、連動して泣かれたら泣くように、ほろりは雪ノ下の母親の口ぶりに反感しただけで、言っってしまったばただの八つ当たりだった。

「ええ……。多少反省の色を見せたところもあったけれど、大して何も思っていないようにもあつたわね」

雪ノ下は私たちの言葉に、表情を和ませて小さく笑みを浮かべた。

「それより、不可思議さんの妹さん、明日受験なのよね。大丈夫そう？」

「平気でしょうね。参考書やら教科書やらの処分をあらかじめ済ませていたわ」

「それは気が早すぎない!？」

先々日くらいに三子がしていたことを話すと、由比ヶ浜がちょうどいいタイミングで

ツツコミを入れてくる。

「沙希が同じツツコミをしていたわ。三子は試験が終わつたらその後学校に行く気も無いらしいのよ」

多分、それ以上に景気付けの意味合いがあるのだと思う。私の場合はそもそも教科書なんて一度目を通したら後は押し入れの肥やしでしかなく、受験勉強なんて全くして来なかった。

「気持ちとは分からなくも無いけれど、……なんと言うか、濃いわね。不可思議さんの周囲の人って」

その濃い人間の一人である雪ノ下は呆れ混じりにそんなことを言う。

けれどそんなこと、言ってしまうと普通のことではない。

類が友を呼ぶ、とは少し違う気がするけれど、自己というのは他人との関わりで確立され、その中で能力を獲得していく。私にしてもほろりにしても、近くには小説家や料理人や人形師、他にも数名、特殊な職や立場の人間がいる環境で育つて来た——いわゆる、環境の問題というやつ。

雪ノ下姉妹や葉山にしても、あの母親という名の強靱な狂人が身近にいる環境で育つたのだから、考えてみれば彼女達が偏りながらも高スペックなものも分かる。

「お姉ちゃんとして心配だったりはしないの？」

由比ヶ浜は氣遣わしげに尋ねてくる。

「三子は基本的に私の上位互換よ。私に出来ることは三子にも私以上に出来る。受からない道理が皆無よ」

「案外、貴女が姉という理由で落ちそうね」

「その時は私が姉としてちゃんと叱るわ」

「え、三子ちゃんを？」

「三子を落とす決断をした愚か者をよ。モンスターペアレンツも辞さないわ」

「……」

私の何気ない言葉に、二人とも固まったように押し黙った。

結局、今日は誰一人として、一色すらも来ないままに部活は終了。由比ヶ浜の受験工ピソードや留美の近況なんかを肴に紅茶や菓子を口にしていただけだった。

少し早めに、日が落ち始めた頃に出たけれど、外はまだまだ冬のように、由比ヶ浜は未だに夏服を着ている私を恨めしそうに見ながらマフラーを巻き直している。

遅れて、鍵を返して来た雪ノ下も来てから帰路につこうとして、校門を出る前に私た

ちは足を止めた。

ヒールがアスファルトを叩く音が聞こえてきた。

「雪乃ちゃん、迎えに来たよ」

「姉さん……」

コートポケットに手をつ込み、不敵な笑みを浮かべて待ち受けていた雪ノ下陽乃は、雪ノ下の顔を覗き込むように首を傾げた。

「迎えに来られるような用なんてないと思うけれど……」

「お母さんに言われたの。一緒に住むようにって。あ、部屋余ってたよね？ 荷物、明日届いちやうんだけ大丈夫かな？ 午前中は私いるからいいけど、午後から出かけちゃうからそしたらお願いしていい？」

私に口を挟ませないためか、矢継ぎ早に言葉を連ねる。というより、言い方が自然すぎて、面倒くさそうに、まるで決定事項を述べているだけだと、態度で示してくる。

「ちよ、ちよつと待つて。なんでそんなこと、急に……」

避難と困惑の入り混じった感情を隠せずにそんなことを言うと、雪ノ下姉は肩を震わせて大袈裟に笑った。

「あるでしょー？ 心当たり」

どうやら本当に、ほろりの言葉は全くと言っていいほどに意味を為さなかったらし

い。

雪ノ下は姉を睨みつける。

「……それは、私が自分でやることよ。姉さんには関係ないわ」

拒絶するように、刺のある言葉でもって返す。

詳しい話は知らないけれど、私やほろりが思っていた以上に、あのイカれた母親はイカれているらしい。それこそ、さながらモンスターのように。

「雪乃ちゃんに自分なんてあるの?」

姉は、見透かしたようにそんなことを言った。

「今まで私がどうするかを見て決めてきたのに、自分の考えなんて話せるの?」

「なっ……」

容赦のない言葉に、雪ノ下は戸惑う。何を言っているのかと問い出そうとして、しかし姉が遮るように続ける。

「雪乃ちゃんはいつも自由にさせられてきたもんね。でも自分で決めてきたわけじゃない」

優しい、ともすれば憐れむような声。

——まったく、まったく。

「姉妹喧嘩を人前でしないでほしいわね、見苦しい」

つい思わず、雪ノ下に同情——共感して、口を挟んだ。別に大した理由があったわけではないけれど、なんとなく、雪ノ下を言われっぱなしにしちやいけない気がした。女の勤ならぬ、小説家の勤である。

「ケンカ？　こんなのケンカにもならないよ。昔からケンカなんてしたことないんだから」

「だったら弱い者いじめね。ますます見苦しいわ」

言つて、互いに冷めた視線をぶつけ合う。

「いくら可思議ちゃんでも、家の問題には口を挟まないでもらいたいな？」

「だったら挟ませないでほしいわね。それに家族なんて結局は他人じゃない」

兄弟とは血の繋がった他人である、とはよく言ったもの。どれだけ色濃く血のつながりがあるうと、親しくないのならそんなのは他人と何ら変わらない。

「まあ、じゃあ……。帰ったら、聞かせてもらうよ。どうせ雪乃ちゃんが帰れる場所なんて、一つしかないんだし」

付け足すように言つて、雪ノ下姉は踵を返す。また鳴るヒールの音がだんだんと小さくなるにつれて、肩の力が抜けていく。完全に見えなくなるまで、私たちは一歩も動くことはなかった。

雪ノ下は唇を噛んで俯き、由比ヶ浜はそれを悲しげに見つめる。

——見ていられなくて、いられない。

「あーあ。……あーあ。帰りたくないのなら、うちにでも来なさいな」

らしくもないことを言っているのは分かるけれど、それくらいに、今の雪ノ下は詩的であつた。——まるでクリスマススの私を見ているようであつた。

徒歩十分ばかりの距離を十五分ほどかけて、私は二人を我が家へと招いた。

三子はすでに帰ってきていて、沙希は弟の受験が心配だからと、今日は休み。

「えつと……、コーヒーでいいですか?」

リビングで、並んでソファに腰掛けた二人。受験前日の受験生とは思えぬくらいに寛いで、気を抜いていた三子の問いに何も言わずコクリと頷いて返した。

三子も何も言わずに立ち、キッチンへと向かつて行く。

「……ごめんなさい。……迷惑をかけてしまつて」

「ええ、迷惑極まりないわ。だからさつきと解決しなさいな」

一応でも近くの人間に、近しいと自称する人間に、こうもマイナスでいられると気が滅入る。

「……ええ」

雪ノ下は弱々しい声でぼやくように返す。

「ゆきのん、ナーちゃん……」

少しすると、三子は四人分のコーヒーを運んできた。それと、一冊の本も一緒にトレーに乗せて。

「この本、お貸しします」

小説というには厚く、辞典というには少々薄い本に、私は見覚えが、というか身に覚えがあった。

『第三章、美術的な女子高生』

著——不可思議可思議

イラスト——シトリング・ラファイ

まあ、言わずもがな、私が過去に書いた、書き上げた小説だった。

愛読者達からは『美術シリーズ』と呼ばれている、七つの章で完結した連載小説。『美術室の芸術家』『美術品の殺人鬼』と続き、『美術的な女子高生』は第三章にあたる。

最終章『美術商の魔法使い』が完結したときに、私は私らしくもなく舞い上がり、挿絵をとある芸術家に依頼し、七冊の書籍にした。全七巻、この世には各三冊、全二十一冊しかない貴重な本。

雪ノ下が受け取ったのは、私が三子に渡したものだ。三子はその第三章が一番に気に入っていた。

「詳しい事情は知りませんが、私達のお母さんは、私達が悪いことをしたり、何かに躓いたりしたら、『他人の人生を読んで自分を反省しなさい。自分だけが誰かと違うなんて思い上がるな』って、叱るんです」

私も三子も、後ついでにほろりも、幼少の頃はあのオタク気質な母親からは悪さをしてよく怒られた。その度に本を読まされて、反省させられた。ついでに読書感想文を書かされてきた。

「きつと、それで改善できると思います」

三子は自分の分のコーヒーを持って、部屋へと去って行く。……一応、受験生だものね。……一応。

「……不可思議、可思議」

雪ノ下はその白魚のように穢れない指で、表紙を撫ぜた。

「……そういうえば、まだ読んだことが無かったわね」

「ナーちゃん！ あたしも読みたい！」

パラパラとページをめくる雪ノ下を見て、由比ヶ浜が叫んだ。

「……なんであれだけ読むように言っていたのに二人ともまだ読んでないのよ。ネットに

投稿してるから、私の名前で検索すればいくらでも出てくるわ」  
「へへ」

雪ノ下も由比ヶ浜も、めっぽう静かに読書を始めた。その様子を尻目に、私もノートパソコンを開き執筆を始める。

「読んでいくなら今日は泊まって行きなさいな」

およそ一時間が経ち。

奉仕部が揃って何も言わずに画面や紙面と向き合っているところに、エプロンを着けた三子が声を掛けた。

「……鍋の準備できました。お姉ちゃん、パソコン片付けて」

気がつけば、もう夕飯時。ダイニングではなくリビングの、ローテーブルにカセットコンロと鍋が置かれ、具材の肉やら野菜やらが並んでいる。

「あつ。……ごめんなさい。そろそろ帰るわ」

「あ、あたしも。なんか悪いし……」

三子が火を付けた音でようやく二人は気がつき、急ぐようにして立ち上がった。

「泊まっていけと言ったでしょう。まさか私と三子だけでこの量を処理させる気じゃないでしょうね？」

三子は体格が大きいし並より食べられるけれど、反面私は体格が小さく、少食。明らかに四人分はある具材が、すでに鍋用に切られ、下味まで付けられてしまっている。

「うちはお母さん帰ってこないし、大丈夫ですよ。余っても捨てちゃうので、食べていただく下さい」

「えっと、じゃあお世話になろうかな。ねっ、ゆきのん！」

「え、ええ」

由比ヶ浜が家に電話をかけるのを見て、雪ノ下は電話をした方がいいのかと、悩んでいた。

「……一晩考えてから話したいと言っても言っておきなさいな」

「そうね」

由比ヶ浜は何を話しているのか、母親との電話が妙に盛り上がっていた。雪ノ下はそんな様子を微笑ましく見届けてから、あの姉に電話を掛け始めた。

通話は、すぐに繋がった。

「もしもし。……今は互いに冷静でないし、一晩考えて、改めて話に行くわ。一応連絡だけ……」

姉がそうしたように、雪ノ下は一方的に矢継ぎ早に話す。けれど、言い終えても、向こうから返答は無い。

さらに数秒間を置いてから、向こうが話しだした。

『ふうん、わかった。そこに可思議ちゃんいるよね？ 代わって』

電話越しに、私たちにもその言葉は聞こえてきた。雪ノ下は躊躇したようだけれど、『早く』と急かされ、私に携帯電話を差し出してくる。

私は肺の中身を一度全て吐き出してから、受けとり、耳に当てる。

「たとえ相手が人類最強であろうとも、私の名前は荻原子荻。私の前では悪魔だって全席指定、正々堂々手段を選ばず真つ向から不意討つてご覧に入れましょう」

『やあ、不可思議可思議ちゃん』

……。

三子からも、由比ヶ浜からも、雪ノ下からも、冷めた視線で八つ裂きならぬ、六つ刺しに射抜かれる。

雪ノ下姉の声はクスクスと、嘲るように妖艶で。姿が見えないおかげで余計に威圧感を感じる。——けれど、その程度じゃ、まだ話を通じる位階でしかない。

『やれやれ、まったく。意外と優しいよねえ、可思議ちゃんって』

「貴女には言われたく無いわね、シスコン」

速攻で切られた。電話越しに何かが落ちる音がした気がするけれど、響ききる前に切られたから詳細は分からない。

携帯電話を雪ノ下に返し、私たちは三子の手伝いをした。  
今日の夕食は、ほろり直伝の味噌鍋。締めはうどんだった。

やはり雪ノ下雪乃が美術的なのは間違っている。『鳥』

翌朝。関東ではもはや毎年お馴染みですらある、受験日にピンポイントで雪が降るという現象が、案の定今年も起きていた。

そんな日でも受験というのは嫌に意地っ張りで、たとえ隕石が降ろうと月が割れようと、テロリストに侵略されようとも、何がなんでも試験は時間通りに強行する。電車が止まろうと、車が渋滞に捕まろうと、日本が海に沈もうと、お構いなしである。

三子が受けるのは幸いにも徒歩十分の距離である総武高校のため問題は特に無いが、遠方から受けにくる受験生は気の毒極まりない。別に気に病んだりはしないけれど。

「じゃあ、行つてくるね」

「ええ。滑つて転ばないよう気をつけなさいな」

「お姉ちゃんもね」

三子は中学の制服の上にコートを着て、足早に総武校へと向かう。体格故かは知らないけれど、三子は寒さにあまり強く無い。さつさと暖房で暖まろうという魂胆でしょうね。

背が見えなくなるまで見送って、私は家へと戻る。

普段あまりつけることがない暖房のついたリビングには、休みであるにも拘らず制服を着た雪ノ下と由比ヶ浜がいる。まあ、一晩泊まって行つたから別に普通のことだけれど、我が家にこの二人がいるというのは何とも見慣れない。

「あ、ナーちゃん。さつきゆきのんと話してただけだし、デートしない?」

「……あ?」

由比ヶ浜の急な物言いに、思わず東京で聞いたような低く短い、威圧的な声が私の口から出てきた。

私も雪ノ下もうだうだと言いつつも準備して、お昼というには早すぎるくらいの時間によつと家を出た。

「……貴女のその見ているこつちが寒くなつてくる格好にはいい加減文句を言つていいのかしら?」

「文句はお金を払つてから言いなさい」

「正直、代金を私が払つてもいいからコートと手袋あたりを買つてきて欲しいわね」

今や私は自他ともに認める美少女だけれど、しかし世間一般の大概の美少女とは異なる

り、私は私服というものをあまり持っていない。ぶつちやけてしまえば、下着を数セツトと夏用のワンピースが幾つかあるだけ。私のような、ほぼ毎日水風呂に浸かるような高体温でもない、冬の外を歩くには心許なき過ぎる。

「えつと、先にナーちゃん冬の冬用の服買いに行く？」

「どうせ着ないし要らないわよ」

今私たちがいるのは、いつか色々あつて大勢で夢の国に来た時にも集合に利用した駅の、一つ先の駅。だからというわけでも当然ないけれど、先で葉山や三浦が待ち受けていたりほしない。

「でも確かに体温が高いのよね、不可思議さんって」

「あ、あたしもっ」

雪ノ下が左手を私の右手とつなぐと、由比ヶ浜も私の左手を塞いだ。

「……なんなのよ、これ」

カツプルとも、姉妹とも称し難い光景が出来上がった。

あろうことかこのまま、私と雪ノ下が由比ヶ浜に導かれるようにこの場を離れ由比ヶ浜の目的地へと向かう。

時折、微笑ましいものを見るような視線を向けられる道中。看板や掲示板の貼り紙な

んかで薄々察してはいたけれど。その目的地に近づくに連れて、加速度的に私の足は重くなり、その建物を前にして完全に止まった。

「……まさかとは思うけれど、ここに入ると言うの？」

「え、うん。前にディスプレイに行った時、ナーちゃん辛そうだったもんね」

「確かにここなら、しかもバレンタインデーとはいえ平日だし、人は少ないでしょうね」  
私の小説家としてでは無く、人間としての本能が、速やかにここを立ち去れと、まるで遺伝子に恐怖という色で書き込まれたかのように近寄らせない。

目と鼻の距離と言えるほどすぐ目の前にある施設は、俗に水族館と呼ばれるアミューズメント施設。遊園地のように燥ぎ騒いで遊ぶようなところではないし、多少は対象年齢が高めで、……そして私がいままであまり得意でない施設だったりする。

具体的には、人混み、組織、水族館といった具合に並んで遠ざけたいものに数えられるほど。

「……え。もしかしてナーちゃん、水族館ダメ？ なんなら今からでも別のところにするけど……」

由比ヶ浜が申し訳なさそうに言う。雪ノ下もどこまで予定を知っていたのか知らないけれど、眉をへの字にして困った表情をしている。

「二人にならなきゃ平気よ。……多分。お願いだから絶対に中に入ったら出るまで私の

手を離さないで」

私以外の感情が常に流れ込み続ければ、どれだけ濃かろうとも多少は恐怖も薄まるはず。

そもそも水族館が苦手になったのなんてまだ歳が二桁にもなっていない頃なのだから、いい加減時効になってそもそも怖くなんて無くなつていてもおかしくないはずである。ええ、そうね。きつと大丈夫よ。テレビのニュースか何かの水族館特集を見てもなんと無かつたじゃない。別に襲われるわけでもなければ、まず相手は心霊や怪物じゃないのだから、恐怖を抱く理由なんて全くないはず。

「えっと、じゃあ入るけど、……大丈夫？　今から入るの、お化け屋敷じゃないよ？」  
「……日本のホラーは別に平気なのよ。私が苦手、と言うか嫌いなのは、泳いでいる海洋生物」

二十世紀最後の怪奇小説作家とも言われる、アメリカの小説家、H. P. ラヴクラフトの小説『インスマウスの影』、あれを読んでしまつて以来、逃げ惑う主人公に感情移入しすぎてしまつて以来、私は泳ぐ海洋生物が、と言うか水中の生物全般に対して恐怖を抱くようになった。海の生臭い臭いにおいさえも苦手である。……さんまの塩焼きは好きだけど。と言うか調理さえされていれば寿司でも刺身でも美味しく食べられるけど。

私は引つ張るようにして二人を肘がぶつかるくらいに近寄せてから、異様に怯える私

を連れた三人組を訝しむ受付を通って水族館へと足を踏み入れた。

そしてすぐ、アクリル越しに一匹のサメと目が合った。

まるで食らう肉も無い、痩せ細った雑魚をただ観察するような食物連鎖の頂点が如き目付きが、私の恐怖心を司る部分を八つ裂きにする。

「ピャツ!?!」

「え、ちよつと」

私は物陰にでも駆け込むように雪ノ下の背に回り、「こつちの方が肉付きが良くて美味いですよ」と言わんばかりに盾にする。……雪ノ下も決して肉付きが良い方では無いけれど。

「あの、不可思議さん？ 蛸とかクラゲが苦手というならわからないでも無かったけれど、貴女サメでもダメなの？」

「……海を生きている時点で、カリブデイスだろうとリヴァイアサンだろうとアスピドケロンだろうと同罪よ」

「苦手という割には海の怪物について詳しいのね」

ファンタジー系の小説を書くための知識集めの一環で、世界各国の神話や民謡なんかを読み漁ったことがあって、その時に覚えた知識である。尚、その時にクトウルフ神話のことをうっかり調べてしまい、リアルS A N値喪失で三子に多大な心配と迷惑をかけ

たのもう過去のこと。

「ナーちゃん見て見て！ ハンマーヘッドシャークだつて！」

「……ハンマーでアクリル叩き割つて水位が足りず酸欠で死ぬば良いわ」

「抽象的なんだか現実的なんだかわからなくなる自殺示唆ね。あと歩きにくいのだけど」

私が雪ノ下に抱きついたことで私の手を離れた由比ヶ浜は、すっかり元のテンションを取り戻し、携帯電話で写真を撮つて回っている。

雪ノ下から流れ込んでくる、私や由比ヶ浜を微笑ましく思う感情に流されることで、前に水族館に来た時ほどの恐怖心はなく、かろうじて、遠目になら悍ましき海洋生物を観察できた。

「う……。あ……」

どいつもこいつも、こちらには目もくれず、思うがままに泳いでいると思つている海洋生物達。水槽の中がこの世の全てだと疑わず、外界からは目を逸らす。

「あ……。あ……」

「そんなに苦手なら目を閉じればいいじゃない」

「……敵前で目を瞑る阿呆がどこにいるというのよ」

そもそも、私の体質にしても視覚と聴覚だけで成り立っているものではない。そうい

う環境に自分がいる、という状況そのものが私の恐怖心を刺激する。

少し先に進めば、私たち以外にも少数ながら客足が見えてきた。老夫婦やカップル、子連れの夫婦に女性二人。由比ヶ浜が言った通り、遊園地とは対極的で、静かな人たちが多い。

薄暗い空間で、小さな水槽がいくつも並んでいる。到底、騒げるような場所では無かった。

『世界の海』と題される水槽群の中で、由比ヶ浜は一つの水槽の前で足を止めた。そこには一見魚が一匹もいないように見えて、視線を下げたら、そこにそれらはいた。

「何も……ピッ!?!」

まるで植物のように、砂から身を伸ばして顔を出す、黄色と白の縞模様の細長い何か。一見何もいないように見える水槽は、私にしてみれば新手の罠だった。

「チンアナゴだつてー。なんか、髪染める前のナーちゃんっぽくない?」

由比ヶ浜はしやがんで写真を撮りながらそんなことを言った。

「なんて恐ろしいことを言い出すのよ。芝刈り機で薙ぎ払うわよ」

そもそも、共通点は縞模様というだけで色も似ていない。

「ナーちゃんの方が怖いよ!?! 芝刈り機!?!」

「常人の発想ではないわね……」

説明書きを見ると、チンアナゴというらしいこれらは、全長三十センチもあるらしく、巣穴に体の三分の二を埋めたまま暮らしているらしい。

「耕運機の方が良さそうね」

「何それ？」

「畑を耕すのに使う機械よ。塊になった土を砕いたりもするわね」

あれなら頭を出していない奴でもしっかりと身を刻み殺せそう。

「貴女、チンアナゴにどんな恨みがあるのよ」

「ゴキブリだつて見つけたら恨みが無くとも殺したくなるじゃない。それと一緒によ」

人間に限らず、他者を不快にさせるものに生きる権利はない。たとえ外見の不快さ以上の害がなかつとも、害がある以上死ななければならぬ。

「一、二世紀前の世界の独裁者の才能がありそうね」

「私は小説家よ。世界を牛耳るのではなく作るのが仕事」

「独裁者よりも偉そうじゃない……」

満足したのか先へ先へと進む由比ヶ浜を、私と雪ノ下は遅いペースで追いかける。

ハリセンボンにカクレクマノミ、タツノオトシゴ、などなど。世界の海の名に恥じぬ種類の魚を見てきて、それだけでなく深海魚まで見てしまい、なんだかんだ結構なペー  
スで削れていった私の精神。そんな私の癒しとなる生物が、この水族館にはいた。

岩山でキューイーと甲高い鳴き声を響かせる、たくさんのペンギン達。岩陰に暖を取る  
ようにくっ付き合っていたり、一匹がプールに飛び込むのを皮切りに数匹が後を追い飛  
び込んで行ったり。

「……………かあいいわ」

私は脇が汗ばむくらいにずっと引つ付いていた雪ノ下から離れ、柵へと近寄る。

「ペンギンも海の生物だと思っけれど、流石に平気なのね」

雪ノ下は写真を撮りながら私の隣に並んだ。由比ヶ浜は燥きながら、あちこち走り  
回って写真を撮りまくっている。

「……………ペンギンは鳥類だからいいのよ。人間だって海を泳ぐじゃない」

いつの間にか外に出ていたようで、見上げれば曇り白んだ空があり、冷えた空気が  
熱っぽい体を冷まし、気管のどこかに溜まっていた、恐怖で澱んだ何かが薄らいでいく。

「……………人間以外に生まれ変わるなら、鳥がいいわね。木の実だけ食べて生きていける奴」  
「冬が来た段階で絶滅しないかしら、それ」

それでも、生きた魚を丸ごとか、昆虫食なんて絶対に嫌よ。

「進路希望は詳細に考えないとダメよ。じゃないといざ選べる時に迷って立ち止まる羽目になるのだから」

「輪廻転生って進路なのかしら。……考えてみれば本質は転職に近いのかもしれないけど」

「叶わないかもしれないことでも、口に出すとそれだけで実現する確率は上がるのよ。……本当に生まれ変わるなら、やっぱり私は私を生き続けたいわね。そして死んだ私の小説の続きを書くの」

「文字通り、死んでも小説家ってわけね」

雪ノ下は呆れたような、それとなんか嬉しそうな表情で言った。けれど、天邪鬼な私はその言葉を決して肯定しない。

「いや、死んでまで小説を書きたくはないわよ。死後の世界に死んだ文豪がいるのなら、きつとそこには未だ見ぬ面白い小説があるはずなのだから、そもそも生まれ変わりたいくなんてない。私は面白い小説の読者になりたいのよ」

小説家が小説を書き始めたきつかけなんて、「無いから自分で書くしか無かった」という自己満足を求めた奴ばかり。かく言う私だって例外じゃない。今だって自分の書いた小説は何処の誰の小説よりも面白いと確信している。

「そう言うことを平然と言えるって、凄いわね。……お母さんとか、小説家になる道を止めたりしなかったの？」

「止められるに決まっているじゃない。だから私は収入が得られるようになった段階で事後報告するまで黙っていた。——親の意向に逆らうって、そういうことだと思わ」

それは別に親が過保護だろうと放任主義だろうと変わりない。子供が親の心を理解できないことを嘆く親は、子の心を自分が分かっていることを知らないだけなのだから。

「……冷えてきたし、中で待っているわ」

「そう。私はもう少し見て行くわ。……入り口近くで待ってて」

これを機に水族館への苦手意識を克服するつもりだったけれど、それはまだまだ難しいらしい。私一人では、水族館に入ることはできそうにない。

「心配しなくても、置いて行ったりしないから安心しなさい」

雪ノ下はそう言い残し、館内へと戻って行った。

やはり雪ノ下雪乃が美術的なのは間違っている。『風』

最後にレストランやショップのあるフロアを抜ければ、順路はそこで終わり、階段を上がれば出入り口へと繋がる。長く恐ろしい海洋地獄も、これで閉館。私の心は安寧を取り戻す。

「ゴォールー！」

由比ヶ浜は元気よく跳びながら、こちらに振り向いた。

「ねえ、もう一周しちやおつか！」

「嫌よ」

「そうね……。少し疲れたし……」

元氣と体力の有り余った由比ヶ浜とは対照的に、私も雪ノ下も結構疲弊していた。私は精神的に、雪ノ下は体力的に。

私はショップで購入した、大概の水族館に売っていきそうな、あざとく丸々しいペンギンのぬいぐるみをあざとく抱き抱えつつ、雪ノ下の様子を見てみると、由比ヶ浜に視線を寄越す。すると、来た道を名残惜しそうに見ながら、髪をいじる。

「うーん、そだね。ナーちゃんも大変そうだったし」

「どうしても行きたいなら一人で行ってきなさいな。……私はあと十年は入りたくない」

水槽の中の魚を見ながら魚料理が食べられるレストランとか、いろんな意味で悪趣味にもほどがある。……料理は美味しかったけど。

「でもまだ時間あるし……、あつー！」

確かにまだお昼過ぎくらいで、確かに今から帰るのでは微妙な時間帯。

由比ヶ浜は時間を確認していると、何かを見つけたらしい。声をあげながら指差した先にあつたのは、遠くにそびえる大観覧車。

遠目に見て大きかった観覧車は、当然だけど近くで見ても巨大で、乗ってみれば遙かに高かった。なんでも、国内最大級らしい。

平日ということもあつて、ほとんど並ぶことなく乗ることができた。

乗ってみての感想なんてものは、さほどでも無し。というのも、以前、かの妖精の如き人形師、蒼さんから貴重な体験ができると、これに負けず劣らずのサイズの観覧車に金属の檻を吊したものに一人ずつで乗せられるという経験を私は過去にしている。『囚

われの姫君の気持ちかわかるかもしれない』、という誘い文句に乗って乗せられたのだけれど、あれと比べたら大概の高所なんて安全が過ぎる。

しかし、私以外の二人は全くもって違う。

「うわあ！ たかつ！ こわつ！ ていうかめっちゃ揺れる!!」

由比ヶ浜はほとんど席を立った状態で窓にへばりつき、滅茶苦茶にはしゃいで揺らしている。一方雪ノ下といえ、まるで水族館での私のように顔を真っ青にさせて、足元をジッと見ていた。

「無理に乗らないでもよかったと思うのだけど」

「べ、別に平気よ……」

声をかけたら、ぷいっと顔を逸らす。そして外の景色が視界に入ったようで、うつと声を詰まらせた。そして由比ヶ浜の腕を掴み、引き寄せて強引に席へと座らせる。

「由比ヶ浜さん、観覧車の中でははしゃいではいけないと、注意書きを読まなかったのかしら。」

「ゆきのん目が怖い！ こわい、ごめんね、楽しくなっちゃって……」

あははーと笑って謝る由比ヶ浜を、雪ノ下は冷たい表情で窺める。けれど、腕を掴む手が離される様子はない。

仕方なしに、水族館で迷惑をかけた詫びも兼ねて、私は席にぬいぐるみだけを残して

立つ。そして向かい側に座っていた雪ノ下の膝の上に座った。片側に三人が集まったことで、籠が少し傾いた。

「ちよ、ちよつと、不可思議さん？」

「怖い時は誰かにひつつくのが一番いいのよ。私を抱きしめてくれて構わないわ」

遠慮気味に片手が腰に回される。へその辺りに触れている手からは、ひんやりと冷たい体温と、深海のように冷え切った恐怖心が伝わってくる。……けれど、私が水族館で味わった恐怖と比べたら、屁でもなし。

「なんとというか、その、……ごめんなさいね」

「別に、お互い様よ。その罪悪感も、それなりに楽しんでいることも」

観覧車から降りると、いつの間にか止んでいた雪がまた降り始めた。傘を差すほどではないけれど、でも公園の芝生にはうっすらと白い層が重なって行く。傘を差すほどではないけれど、でも公園の芝生にはうっすらと白い層が重なって行く。

なんとなしに無言のまま、公園内の道に沿って歩いていく。

由比ヶ浜が先導し、私と雪ノ下が後について行く。

小道はやがて駅へと向かう大通りへとぶつかる。何処に向かっているのかと尋ねようと思つたら、由比ヶ浜は振り返り、右側への道を指差した。

先にあるのは、ガラス張りの建物。表示板によれば、クリスタルビューという、東京湾を見渡す展望台らしい。

私たちが踏み入ったのは、展望台ではなく、開放されたテラス。人気ひとけがなく、私たち三人しかない。

ペンギンのぬいぐるみを膝に乗せるようにしてベンチに座ると、両隣に二人も座った。

「……そのぬいぐるみ、随分気に入ったのね」

「吊り橋効果なんでしょうけど、そうね」

人間の精神というのは結構単純な構造をしていて、『■■■を見ると安心する』という設定経付けを一度してしまえば、それがなんであれ、継続的に効果を発揮する。とはいえプラシーボ効果ほどの効果は無いし、飽きればそれまでなのだけだ。

「これから、どうしようっか」

由比ヶ浜はのけぞって真上を向きながら、私たちに問いかける。

それは今日のこれからの予定を聞いているわけではもちろんなく、もう少し長期的な意味。雪ノ下の、由比ヶ浜の、あるいは私たち奉仕部の、これから。

「ねえ、ナーちゃん。どうしたらいいと思う？」

「……小説家として語るなら、どうもしなくていいと思うし、どうしようもないとしか言えないわね。物語は情性で進むものだから、何をしようが、しなかるうが、変わらない。何をしたところで無駄だし、無為なことなんて一切も無い」

小説家として語った。物語の綴り手として、あるいは読者としてか。この地の文にだつて存在価値はなく、語ろうが語るまいが、雪ノ下は同じ選択をして同じ行動をする。プロットは書き換えられず、展開はどんでん返らない。

「あたしはさ、これからもずっと三人一緒にいられたらなつて思うよ。三年生になつても、大学生になつてもさ」

「私は進学しないのだけどね」

これ以上に学びたいことなんてないし、金銭的にも時間的にも、悠長に大学に通うほどの余裕があるかは微妙なところ。

「えー。ナーちゃんも一緒のどこ行こうよー」

「嫌よ、面倒くさい」

私は何が嫌つて、興味のないことを勉強するのが何よりも嫌いで、面倒くさい。

「……ねえ、ゆきのん。例の勝負の件つて、まだ続いてるんだよね?」

私の答えを予想していたかのように、由比ヶ浜は鬼札を切った。

「ええ。……勝つた人の言うことを、何でも聞く」

由比ヶ浜は笑って言った。

「あたしの願いは、全部が欲しい。これからもこのままでいたい」

彼女らしい。そう思ってしまうほどに、具体的なことなんて全然言えていないけれど、でも嘘偽り無く正直な言葉だった。

「ゆきのんが今抱えてる問題の答え、多分だけど、あたしわかってるんだ」

そう言つて、由比ヶ浜は縮こまつた雪ノ下の手をとつて指を絡ませた。

雪ノ下姉も明言した、雪ノ下の問題。或いは、欠陥。

雪ノ下はずつと、誰かの跡を辿るように生きてきた。成功者の道を歩んできた。王道を迷わずに選んできた。そこに自信はあれども、自身は無い。自意識は無い。

まったく、正気の沙汰じゃ無い。けれど、狂気の沙汰という風にも見えない。狂気というなら、娘や妹をこの状態まで追い込んだ親や姉の方が狂っている。

雪ノ下は自由だけを与えられてきた。地図も磁針も与えられず、歩けるのは身近な人間の歩いた、レッドカーペットの上だけ。転ぶ心配の無い道を、ひたすら惰性で歩いてきた。

「私は……」

雪ノ下は困惑し切った様子で、力なく項垂れて、わからない、と、雪に紛れて消え入りそうな声で呟いた。それに由比ヶ浜はうなづき、手を離す。

困惑して当然。由比ヶ浜は今、自由という広大な空間で、道無き道へと雪ノ下を導こうと——道連れにしようとしているのだから。何処にたどり着くのか由比ヶ浜にもわからない、きつと愉快と不愉快が入り乱れ、理不尽という名の災害が唐突に降りかかり終わる、取り返しのない道。

「多分、それが、あたしたちの答えなんだと思う」

何で終わるのは、誰にもわからない。

理解してしまえば来た道を戻れず、見て見ぬ振りをして歩き続けても背後から襲われる。どうしたって終わるし、なんであろうと失われる。答えなんて、真理なんて、そんなもの。成功率十割の博打なんて存在はしない。

「あたしが勝つたら、全部貰う。ずるいかもしないけど、それしか思いつかないんだ……。ずっと、このままでいたいなあって思うの」

だから、由比ヶ浜は先に答えを確定させた。過程も条件も一切合切無視して、たとえばイコールの直前にマイナス無限大が存在しようとも、巨大隕石落下や宇宙人襲来や異世界転移が待っていないようとも、その先にある答えは『楽しい時間をずっとこのまま』、成立が不可能であろうとも実現してみせると、——だから、由比ヶ浜は言っている。

「どうかな?」

「どう、って……」

結論を先に描いて、それから過程を歪めてでも辻褃を合わせて、その答えに持つている。……別に特別なことじゃない。私が天邪鬼だからとか、捻くれ者だから言っているわけではない。

小説を書くなら、そんな作り方は普通のこと。始まりよりも終わりよりも過程にこそ重きを置きたい私だけど、ハッピーエンドを前提に書き始めることに忌避感なんて無い。——それを現実でやろうとは思えないけど。どんな能天気な阿呆の進路希望よ。

「狂気の沙汰ね」

私とて、無関係な話じゃない。むしろ私だって三角のうちの一角。だからこそ、私も口を挟むし、遠慮なく否定する。

「それが出来れば、人魚姫は海に身投げしないのよ」

人魚は所詮は人外であり、人間至上主義のキリスト教思想の世界観では人間には成りきれない下等な生き物だった。だからこそ王子様と結ばれることを願おうと、足を人間のものにするという辻褃合わせをしようと、結ばれる結末はあり得なかった。

この悲しい物語から得るべき教訓は、どれだけ綺麗に偽ろうとも現実には本物しか選ばないということ。これを覆すには、人魚姫が人間を目指したように、由比ヶ浜は現実を歪める怪物になるしかない。

「……それが出来ると言うのなら、そんなのは自意識過剰よ」

ぬいぐるみを抱く腕に力がこもり、ペンギンは括れて歪む。

由比ヶ浜を下等だと言う気は無いけれど、それほどまでに大した人間でも無い。それほどのことをするには、現実には完成し過ぎている。常人に歪められる余地なんて、無い。

「うん。……ナーちゃんなら、そんな感じのことを言うと思ってたよ」

由比ヶ浜はにつこりと笑った。そして一筋、雫が頬を伝う。

私はきつと、無表情。こんなことで泣いたり怒ったりはしないし、笑える話でもない。「雪ノ下の歩む道は、雪ノ下自身が選ぶべきよ。それが私たち三人仲良く団欒している未来につながるうと、私たち三人が地球防衛軍か宇宙侵略軍かメイド喫茶かをそれぞれ率いて三つ巴の戦争をしていようと、それが正しい答えなはず」

「……少なくとも、その二つを相手にメイド喫茶を率いた誰かさんは間違っていると思うのだけど」

「地球防衛軍はミリタリー系のカフェの店名で、宇宙侵略軍はSF系のカフェの俗称よ。戦場は秋葉原駅前」

雪ノ下はくすりと笑って、私の頭を撫でた。

「不可思議さん、由比ヶ浜さん」

私たちに呼びかけながら、立って私たちの前に向く。まるで、奉仕部で私たちに話す依頼人のような面持ちで、雪ノ下は言った。

「私の依頼、聞いてもらえるかしら」

恥ずかしそうにはにかむ雪ノ下に、由比ヶ浜は微笑みかえして頷き、立って雪ノ下の手をとった。

「うん、聞かせて」

雪ノ下と由比ヶ浜の視線が、私に向けられる。両隣から伝わり続けていた感情が途絶えて、私の心を私の感情が支配する。

ぬいぐるみを抱く力を緩め、肺に冷え切った空気を詰め込んでから、私も笑って返した。

「……クククツ。ええで、詩的なあんたの話、幾らでも聞いたる」

私もぬいぐるみ片手に立ち、雪ノ下の手をとった。右手を通して、雪ノ下の温かな感情が流れ込んできた。

## やはり雪ノ下雪乃が美術的なのは間違っている。『月』

気がつけば、もう空が赤らみ始めていた。

雪は止んだけれど、気温は日と共に下がり冷え込む。

雪ノ下を挟むようにベンチに並んで座ってから、雪ノ下は語る。

「昔はね……、ちゃんとあったのよ。やりたいこと。やりたかったこと」

途方にくれた子供のような顔で、迷子になった子供のような語りで、声音は何処か陶然としている。

「……やりたかったこと?」

由比ヶ浜は訝しむような表情でオウム返しに問い返すと、雪ノ下はなんだか誇らし気にも思える顔つきで答える。

「私の父の仕事」

何時、何処で誰から聞いたかなんて覚えていないけれど、言われて思い返してみれば、そのことを私は知っている。雪ノ下の父親は県議で、かつ建築会社を営んでいるとか、なんとか。そんな話を皮切りにどれだけ雪ノ下が恵まれているとか、格が違うとか、葉山とどうとか、そういう噂話を盗み聞いた。

「けれど、姉さんがいたから……。それに決めるのは私じゃない。ずっと母が決めてきたわ」

己が願望を過去形で語る雪ノ下も、それを聞く由比ヶ浜も、きつともう分かっている。星々が光る点だからこそ美しく、手が届くくらいに近づいたら色褪せて見えてしまうように。そも自分如きが手を伸ばした程度で届くようなものが美しいはずもないと。

「昔から、母がなんでも決めていて、姉さんを縛り付けて、私のことは自由にしていっぱかり。……。だから、姉さんの後ばかり追っていた。どう振る舞っていいかわからなかった」

そして今も、分かっている。

ここまでの事実を口にしただけ。雪ノ下がどうありたいのか、これからどうしたいのか。雪ノ下には自分の将来という星が、手を伸ばしても届かないくらいに遠く離れた星が、一つも見えていない。

一つ、雪ノ下陽乃という名の太陽があるだけで、それすらも、目が眩み、直視しきれない。

私も由比ヶ浜も、何を言ったらいいかと、何から話したものかと、言葉を詰まらせた。雪ノ下はこの痛々しいほどの沈黙に気が付き、誤魔化すようにはにかみ笑いを浮かべた。

「こんなこと、聞いてもらつたの初めて」

その笑みと誤魔化すような言葉に乗つかれるように、私は相槌代わりに口を開く。

「誰にも、言つたことがないの？」

「父と母にはそれとなく言つたことがある、と思うけれど……」

雪ノ下は考えるような仕草をとつた。

きつと、伝わっていないか、本気だと思われていない。子供の戯言だと思われている。それがどれくらい以前のことなのかわからないけれど、あの怪物のような母親は、雪ノ下雪乃を子供としてしか見ていない。

「けれど、まともに取り合つてもらつた覚えはないわ。その度に、あなたは気にしなくていいと言われてきたから。……跡を継ぐのは姉さんだと決まっていたからなんですよけど」

家業を継いだ人間からしてみれば、家業を継ぐということが幸せなことだと思えなくなるらしい。彼らは将来を自分で自由に決められることを至福と本気で確信しているし、それを我が子に愛情と善意で押し付ける。——時折、我が子の望む将来だけを自分が封じていることに気がつかずに。

「陽乃さんには？」

「言つたことは、……無いと思うわ」

由比ヶ浜の問いに、雪ノ下は首を傾げ、苦笑交じりに答えた。

「あの人、ああいう性格だから」

「でしようね」

身内から見て、あれほど相談に向かない人間もそうはいない。他人同士なら一般的な理屈的的確な助言くらい平然としてみせるでしようけれど、身内となれば、反転するほどに話は変わる。

例えば雪ノ下が、あるいは私でも葉山でも、他人に括れない程度にでも近しい人間となれば、まず手始めに笑い、からかい、茶々を入れてくるでしよう。それから問題が解決したところで、済んだことをほじくり返し、臭いものの蓋を開け、なんならそこにドリアンカラフレシアあたりを放り込みかねない。

それを推測、あるいは経験則として知っているのでしよう。

「……でも、話しておくべきだったんでしようね。それが叶わないとしても。……答えが出るのが怖くて、確かめられなかった」

雪ノ下の言葉には、後悔の色が滲んでいる。取り返しのつかない、どうしようもない過去のこと。

けれど、しつかりと。雪ノ下の目はもう前を向いていた。——磁針のない自由という名の広野でどこが前かなんて誰も知らないけれど、視線の先に沈む太陽は無い。足元で

歪に伸びた三人分の影が、進むべき道を指し示した。

「だから、まずは確かめる。一度実家に戻って、ちゃんと話すわ。……自分の意思で決めて、誰かに言われたからとかじゃなく、自分で考えて納得して、諦めたい」

小さな吐息。静かな微笑。

悲観とは程遠い声で、雪ノ下は諦めたいと。確かに言った。

——妥協と諦めが解決への近道。

散々私が言つては、いい顔をしなかつた雪ノ下が、諦めると、いい顔をして言った。

「私の依頼は、あなた達に、その最後を見届けてもらいたい。それだけでいいの」

雪ノ下は首元のマフラーに手をやり、そつと瞼を閉じた。

「妥協と諦めが解決への近道。苦悩と工夫が成功への遠回り。——私が言ったことだし、文句は無い。私が採点者なら満点の答えよ」

雪ノ下が私にしたように、今度は私が雪ノ下の頭を撫でた。共感なんかじゃない。同情でも哀れみでもない。——ただ、近い人間の小さな成長を褒めてやりたくなくなった。

「そ、そろそろ行きましょう。流石に冷えてきたし、女子だけでの夜道は危ういわ」  
照れたようで頬を赤くしながら、雪ノ下は立ち上がる。

遅れて私と由比ヶ浜も、苦笑しながら立った。

数日前にもエントランス前まで来て、ほろりがあの怪物に物申した、ツインタワーの高層マンション。双子のように似た二つのうち、一つの上層階に、雪ノ下の住む一室がある。

何度か来たことがあるようで由比ヶ浜は意外にも落ち着いた様子。観覧車にはしゃいでいた彼女と同一人物とはあまり思えなかった。

かくいう私はといえば、なんとも落ち着かない。別に緊張したりはしないけれど、居心地が悪いというか、居るべき世界じゃないというか。母親の実家が日本家屋で、今住んでいる家も一軒家。マンションというのは、あまり縁のない世界だった。

私達以外に人影のないエントランスは、静寂に包まれていた。耳を澄まして聞こえてくるのは、微かな息遣い。

雪ノ下はエレベーターホールへと続く自動ドアに視線をやってから、鞆から鍵を取り出した。……けれど、それがインターホン集合機に差されることはなく、何度かかちやりと手で音を鳴らすだけ。

「アレ、まだいるの?」

「ええ、多分ね」

私の問いに苦笑いを浮かべながら答えて、ようやくと踏ん切りがついたらしく鍵を差した。

けれど。その鍵が回るより先に、自動ドアが開いてしまった。

「ありや、雪乃ちゃんだ」

素つ頓狂な声で、軽やかな足音を鳴らす。そこにいたのは、アレこと、雪ノ下姉だった。

「……姉さん？」

互いにきよとんとした顔で見つめ合う。

こうして見ると、改めて、この姉妹は顔つきが似ている。——まるで合わせ鏡でも見ているかのように。

その状態もすぐに壊れたけれど。

「おかえり〜」

軽いノリで、バシバシと雪ノ下の肩を叩いている雪ノ下姉の顔は、今まで何度か会って見た中でも頭一つ抜けて柔らかく、自然に見えた。

「可思議ちゃんも随分可愛くなっちゃって〜。ハグしていい？」

「ただでさえ暖房で暑苦しいんだから、やめて頂戴」

私が抱いているペンギンのぬいぐるみをニヤニヤと見ながら、両手を伸ばしてくる。

両手の塞がった状態じゃ払い退けられず、後退ろうにも歩幅が足りず、捕まった。

陽乃という名に違わぬ温かい腕が項に回り、ぬいぐるみを間に挟んで顔が突き合わせる。

「ちよつと、この酔っ払いなんとかしなさいな」

「……姉さん、飲んでるの？」

「ん〜、まあ、ちよつとね〜」

雪ノ下が怪訝そうな顔をして言うと、ばつが悪くなつたのか小さく咳払いをしながら離れた。

「それより、雪乃ちゃん。帰ってきたってことは……」

「ええ。姉さんに話があるわ」

雪ノ下の表情に、緊張や硬さは見られない。それを見て、姉はふつと短い息を吐いた。  
「そ」

興味なさそうな一言、と言うか一文字だけ漏らし、上へと上がって行ったエレベーターのドアに視線絵を向けた。

「とりあえず、上がる？　こんなところですよ話でもないでしょ」

「別に、送ってきただけでも帰るつもりだったのだけど」

「は、はい……。それにどっか行くつもりだったんじゃない……」

出し抜けに言われた言葉に、私も由比ヶ浜も戸惑いながらに答えた。そこまで無遠慮に踏み入る気は無かったし、雪ノ下の心配もしていなかった。

けれど、こつちのこともそつちのこともお構いなしと言わんばかりに、雪ノ下姉は由比ヶ浜の背を強引に押しした。

「いいのいいの。ちよつとコンビニに行こうかなつて思つてただけだから」

やいのそいの言おうと、押されてしまえば押されるしかない。私も雪ノ下も、ため息を吐きながら、酔つ払いと押し込められる由比ヶ浜の後を追つてエレベーターに乗り込むしかなかった。

エレベーターが雪ノ下の部屋がある階まで上がるまで、私達三人は散々酔つ払いに絡まれたけれど、しかし酔つ払いでもエレベーターが止まってまで絡み続けるほど不埒ではなかった。

玄関から廊下、リビングまで通されると、鼻腔をフローラルノートの甘い香りがくすぐった。——雪ノ下雪乃のイメージには無い、雪ノ下陽乃の香り。

「ま、適当に座つて。可思議ちゃんはこつちね」

「……なんで姉さんが仕切るの」

匂いの元を探したりしていたら、ボトルとシャンパングラスをサイドチェストに置き

てソファに座った雪ノ下姉の、隣ではなく膝の上に座らされた。……今日はこうされてばかりな気がするわね。

雪ノ下は呆れたようにため息を吐きながら、四人分の紅茶をローテーブルに並べた。雪ノ下姉は目の前に置かれたカップに手を伸ばし、一口に飲み干し、今度はグラスにシャンパンを注ぐ。……グラスは二つあり、注がれた一つを私に持たせた。

「可思議ちゃん、飲めるでしょ?」

「……一応未成年なのだけど」

なんて、定型的かつ常識的なことを言いつつ、私は口から出た言葉とは裏腹に、シャンパンを一気に呷った。

「ナーちゃん!? それっ、お酒だよね!」

「別に、初めてのことでも無いしなんでも無いわよ」

シャンパンというのは初めてだけど、飲酒は慣れたもの。年に数日とはいえほろりと連<sup>つ</sup>んでいた時に、ほろりの店にあった日本酒やワインなんかをよく飲んでいた。

「……未成年飲酒は問題だと思っただけ」

「三年程度、誤差よ。生涯不変の私は二十になろうと三十になろうと、今と変わらないわ」

そしてアルコールを摂取しても、不可思議可思議は揺るがない。

酒飲み二人に呆れる妹を無視して、姉もシャンパンを呷る。

「大丈夫、大丈夫。ちゃんと話は聞くからさ」

背に当たる胸や臍辺りに触れる手から伝わってくる感情に、不真面目な様子は感じ取れない。あるのはむしろ、アルコールの波に身を任せて妹が話しやすい自分になつてやろうという、優しくも捻くれた気遣いだった。

雪ノ下は「素面でも真面に話を聞く人じゃ無いし」と、諦めたように、もう何度目かわからないため息を吐きながら、私と姉の対面、由比ヶ浜の隣に座った。

「それで、話つてなーに？」

妹の素っ気ない様子を眺め、私と自分のグラスに二杯目を注ぎながら問うた。

「私のこと。……私たちのこと」

凜とした声音で、雪ノ下は答えた。決して大きくは無いけれど、炭酸の弾ける音が掻き消される程に、その声は響いた。

「へえ。それを私に聞かせてくれるんだ」

「ええ。私と姉さん、それと母さんの話だから」

妹の決意したような表情を見咎め、姉としてグラスを置いて聞く姿勢に入った。

——雪ノ下は語った。

強い意志のこもった声だった。トーンもペースもボリウムもいつもと大して変わらないものだったけれど、でもだからこそ、私も由比ヶ浜も、姉である雪ノ下陽乃も、そこに決意を見て取り、口を挟む暇なんてなかった。

あらかた決意を聞き届けたところでようやく思い至ったけれど、こうして私を縛り、酒で鈍らせることも狙っていたのでしょね。……そんな気なんてなかったけれど。

「そっか。それが雪乃ちゃんの答えなんだね」

妹の語りが終わると、私の頭に顎を乗せて、優しくも冷たい笑みを浮かべながら口にした。

「まあ、幾らかはマシになったかな」

そして、しばらく放置されて炭酸の抜けたシャンパンを一気に煽り、満足気に頷いた。「言いたいことはわかった。雪乃ちゃんが本気なら私も協力してあげる」

「……協力？」

二人の会話を聞き流しながら、私は自分でシャンパンを注いだ。いい加減、火照った酔っ払いに抱きしめられてると暑苦しい。それに私の身体は日本酒よりシャンパンの方が好きらしい。

……アルコールと疲労、心労に身を任せ、瞼が降りようとしているところで、グエツと軽く呻く程度に腰を抱きしめられた。

「ちよつと、可思議ちゃーん？ 雪乃ちゃんが大事な話してたのに寝落ちする気ー？」

「……カフェインが枯渴気味なのよ。あとアルコールと温ぬくい人肌に当てられて、余計に……」

「あら、目の前にある紅茶が目に入らないのかしら？」

……ああ、そういえば、あつたわね。暑いしシャンパンがあつたしで忘れてた。

すっかり冷めた紅茶を飲み干せば、酔った脳も幾らか覚めた。

「可思議ちゃんも協力してよねー？ 母さん相手じゃ、私と可思議ちゃん、あと静ちゃんに、ほろりちゃんだっけ？ それくらい頭数集めてもまだ戦力不足だからさ」

「別にいいけど、なんの話よ。ほろりは店が結構繁盛してるらしいし、そうそう呼べないわよ。……ああ、こつちから行つてもいいわね。お腹空いた」

あーあ。……覚めようと冷めようと頭回らない。欲望やら思考やらが垂れ流される実感がある。

「ナーちゃん、酔ってる？」

「そーね。……久しく飲んでなかったし、シャンパン初めてだし、加減を見誤つたわね……」

……いつの間にか、私は眠っていたらしい。少し前まで雪ノ下と由比ヶ浜が座っていたはずのソファで横になって、ぬいぐるみを抱いて。

「ん……」

「妹ちゃんからのメールには『雪乃ちゃんの家泊まる』って返信しといたよ」

向かい側のソファでは、雪ノ下姉はまだ飲んでいたらしい。

時間は夜の十時。四時間程度、思ったより長い時間寝ていた。

「あ、ナーちゃんおはよー」

痛んだ首やら腰やらを鳴らして落ち着けていると、シャワーを浴びたらしく髪を濡らせた由比ヶ浜が出てきた。

「お布団足りないんだけど、ナーちゃんどうする？ ナーちゃんちっちゃいし、頑張れば三人でも一緒に寝れるかもんだけど……」

「……いや、十分寝たし平気よ」

もとより、私はあまり二度寝ができる人間では無い。昼寝だって、徹夜でもしない限りは滅多にできないし。

「じゃあ私と朝まで飲み明かさつか。おつまみ色々買ってきたんだよー」

「……姉さん、まだ飲ませるの?」

雪ノ下が二人分の氷水を持ってキッチンから来た。

「心配はいらないわよ。それに、優秀な妹を持つ姉同士、弾ませておきたい話もあったし」

「お、ついに妹談義しちゃう? ——妹談義という名のシスコン自慢会ー、え?」

寝ようと氷水で冷まさそうと、まだ私は酔っているらしい。らしく無いことを言った口元を押さえて、私をジトリと睨む雪ノ下姉が面白くて仕方ない。

「クククツ。ちよつとした宴会芸よ。蒼さん命名、トークマネジメメント言論侵略」

思ってもいないことを、思うがままに言わせて従わせる、私の隠し芸とも言える、使道の無い技。

「……姉さん?」

「いや、今可思議ちゃんがなんかしたよね? ……そうだよな?」

妹の訝しむ視線から目を逸らす様子が、また愉快。

「ククツ。……読唇術、読心術、腹話術、声帯模写。あと催眠術あたりかしら。その辺の付け焼き刃を重ねて悪用しただけだから、やろうと思えば誰にだってできるわ」

参考にしたのは、蒼さんが人形劇で使っていた、ワイヤーアクションと人心掌握のテ

クニツク。観客参加型の劇の際、これを使って客の口で変幻自在の語り手を演じさせていた。——それを私なりに、語り手らしく再現したもの。

「……人間関係を容易く壊せそうな——素敵な技ね——っ!？」

「ナーちゃん超能力者だったの!?! ——じゃなくて、小説家だっけ——何これ!?!」

「あははっ。なるほど、宴会芸だね。……酔っ払い相手ならこの程度じゃ面白がって怒らない」

「素面相手だとあまり意味が無いけれど、元が見せ物用だもの。見ている分には楽しいわ」

愉快痛快、雪ノ下の件もひと段落。

「三——めでたしめでたし——っ!?!」

「クククツ」

ほんと比企谷八幡が七五三七子なのは間違っている。

「かあごめ、かごめ。

かーごのなあかのとおりーは。

いーつーいいつ、でーやーるう。

よおあーけーのおぼんにい。

つうるうつーるうつつぺえつたあ。

なあべのなーべのそおこぬけえ。

そこぬいてーたあもーれえ」

「……あんた、私がそういう怖い嫌いな分かってて歌ってるの?」

朝に帰って来て、一日入り逃したために朝から気持ち二倍の時間水風呂に浸かったら、沙希に引きずり出された。……だから今、私は小説を書きつつ、仕返しにちよつと怖い童謡を沙希に聞こえる程度の声で歌っていた。

「てか、つるつるなんだかって何? 鶴と亀が滑ったただか転けたただかって歌詞じゃなかったつけ。あと後ろの正面どこ行った」

「今謡ったのは原曲よ。原曲というか、まあわかつている中で一番古い歌詞ね」

三子が昔、こういう童謡が好きだったから私もいくつかは歌えるくらいに覚えてい  
る。

「……この子の七つのお祝いにい、お札を納めに参りますう。行きは良い良い、帰りは怖  
い」

「……あんたがそういうの歌うとマジで怖いんだけど。それなんのやつ」

「とおريانせ。私の苗字が七五三だからってわけじゃ無いけど、この辺りの歌詞が好  
きなよねえ」

確かに、日本の童謡って和ホラーな印象のものが多し怖いというのもわからないで  
も無いけれど、それ以上に歌っていて喉の通りが良いから気持ちいい。

「歌うなら『はないちもんめ』とかにしてよ」

「……ああ、あの人身売買を暗喩してるとしか思えないやつ。あれ、三子があんまり好き  
じゃ無いのよ」

だからあんまり歌ったことないし、歌詞も大分うる覚え。

「そう言われたら好きになる要素確かに無いけど。……え、そうなの？」

「鬼がいるから行かれない、とか、あの子が欲しいとか、この子が欲しいとか、無闇に解  
釈するなど行間で語っているじゃない」

「……なんか明るい童謡ってないの？」

「そうねえ……」

二人つきりでのロンドン橋の合唱は大いに盛り上がった。こういう時主役であるベキ子供、例えば沙希の妹は保育園だし、留美も普通に学校。……私から始めたことだけで、JK二人で何してるのかしら。

しゃぼん玉や、道成寺の童歌、ドナドナに十人のインディアンみたいな歌ったことのない童謡まで歌ってみたりしながら過ごして、粗方歌い尽くしたお昼時に私たちは正気を取り戻した。

「あー……。めちやくちや心配になつて来た……。今だけは本気であんたが羨ましい。妹が優秀なあんたが妬ましい」

「私だって別に心配してないわけじゃないわよ。……雪ノ下に言われたときは冗談めかして返したけど、本当に私が姉という理由で落とされかねないし」

「それ言うなら私もだし……」

私は言わずもがなだけど、沙希だつて善良ではあつても優等生ではない。分類的には揃つて問題児枠。遅刻回数は私と並んでクラスワートップだし、私達を不良だと思つている人間は生徒、教師問わず多い。

「筆記は全く心配してなかったけど、面接ってどうなのかしらねえ」

「あんたはそういうの詳しいんじゃないの？」

「私は小説家であつて面接官じゃないわ。……私が受かつた要因つて、小説家としての内申点と、面接官が平塚先生だつたつてというのが絶対あるのよね」

「あ、それ私も」

自分で言うのもあれだけど、中学三年生といえ、小説で幾らか稼げるようになり始めた頃。——つまり調子に乗りまくつていた頃。

「平塚先生つて、誑しよね」

「それ、真つ先に落ちたあんたが言うの？」

平塚先生が結婚できない原因つて、性別が女だからだと思ふのよね。……あの性格で男だったら私は絶対に近づかないけど。なんなら登校拒否してるけど。

一話、五千文字程度が書き上がり、読み返して誤字を直したり、言い回しを変えてみたりしていたら、唐突に玄関の扉が開く音が聞こえて来た。

「ただいま〜」

朝顔を合わせた時と比べて幾らか疲れた様子の子が、ろくに荷物が入っていないバッグを放り投げて私に抱きついて来た。陽乃のもの以上の、中学生らしからぬ巨乳が私の後頭部に当たる。

「あ、沙希さん。大志の面接が私の次だったから、多分そろそろ学校出た頃じゃないかな」

私の飲みかけのコーヒーに片腕を伸ばしながら、三子は沙希に弟のことを伝える。

沙希は三回深呼吸をしてから、決心したような、諦めたような顔をして立った。

「それじゃ、迎えに行ってくる。夕方くらいにまた来るつもりだけど、なんかあつたら呼んでいいから」

「ええ。幸運を祈るわ」

「……あんたが言う縁起悪い気がするからやめて」

軽く笑いながら、しかし全速力で、沙希は我が家を飛び出し、学校までの道を駆け抜けて行った。

「お姉ちゃん、お昼まだだよ？　なんか甘いもの食べに行こうよ」

「ええ、良いわよ」

私がノートパソコンを閉じながら了承の確認した三子は、コーヒーを飲み干してから満足そうに部屋へと着替えに行った。

小町の試験が終わるまでの待ち時間を、高校近くで適当に隙を潰そうと、俺はとりあえず本屋に入った。

本は良い。何せ、こつちがなんのアプローチもしなくとも勝手に語りかけて来て、語りきつて、満足して、そしてこつちまで満足させてくれる。どころか、読み切ったという達成感と、読書の習慣の無い人間が決して知ることのない物語を知っているという優越感までおまけでついてくる。これが千円せずに買えるとか超お買い得。ブックオフに行けばなんと百円。神か。

とはいえ、今の手持ちは小町との飯代を差し引けばどうしようもなく寂しい。……ボツチなのは俺だけでいい。財布だけは、財布だけは!!

無い物ねだりもそこそこに、バレンタインが過ぎた途端姿を消すお菓子のレシピ本の群れを流し見つつ、ライトノベルコーナーへと直行。目ぼしい新刊は無いが、まだ触れたことの無い物語は目一杯にある。どころか、視界に収まらないくらいに、喧しいタイトルの書かれた背表紙が広がっている。

未だ見ぬ名作の兆しを程々に目の当たりにして、小町と合流して飯行つて。……ただ、これだけで今日という日は終わるはずだった。そう思っていた。

あの千葉県民らしからぬ、関西風味に若干訛った口調、それを上からかぶせて隠したような上から目線の口調で、髪はシャンパンゴールドのサラサラロング。……そんなも

のは後から思い出して記憶した。それよりも、次元一つ見誤ったような美貌に張り付いた——鏡を見ているかと錯覚するほどに似ている瞳。

鏡というより、もう一人。ドツペルゲンガーとエンカウトしたとでも言った方が現実的にも思える、化物。

この出会いは確実に、間違いだ。

店員の訝しむような目を躲して立ち読みに耽っていると、件のそいつは気配もなく突然現れ、メスを入れて内臓を掻き出すように話しかけてきた。

「八月八日生まれ、A型、文系。高校二年生で可愛い妹は中学三年生。今日は受験二日目。座右の銘は『押ししてだめなら諦めろ』」

「……は？」

なんの冗談かと思った。

何、ストーカー？ 小町の？ ……それとも、まさか俺の？

別に知られて困ることなんてそうそう無いだろうが、それでも誰彼構わず、それこそ知らない女子には話したことなんて無いはずの俺のことを語られて、俺は声の主へと視線を向けた。彼女も俺の顔、というか目を見ていた。

「……じゃ、じゃあ俺はこれで」

本を棚に戻すのも忘れて、いち早くここを離れようとした。

けれど、彼女の言葉に俺は足を止めざるを、あるいは全速力で逃げ出すしかなく、俺は足を素直に止めた。誰でも親に言われることだ。お店で走っては行けません。

「待ちなさいな、私の代替元<sup>オルタナティブ</sup>。今の持ち合わせでそれを買ったら、昼食には足りなくなるわよ」

「お、おう……」

ストーカーの上の中二病とか、業が深い……。

俺が元いた場所に帰ろうと、本を棚に戻そうと、彼女は一步もそこを動くことはなかった。

その不動さが、不変さが、小気味よく不気味で、そして美しく見えた。

「クククツ。私たちが私たちが会うことなんて今後無いのだから、ちよつとお喋りしましょうよ。私の代替元<sup>オルタナティブ</sup>」

奇跡のような時間だと、俺も彼女も実感していた。

冗談のような歓談だと、俺も彼女も体感していた。

そして俺たちが今後出会うことはない、出会いを語ることは無いと、共感した。

なあ。小説を書くって、どんな感じだ？

どんな感じも何も、別に無いわよ。

何も感じないのか？ 楽しいとか、悲しいとか、虚しいとか。

ククツ。そんなのがあったら、私はサスペンスを書けないじゃない。

つまりはだから、そうねえ。私が小説家の時は小説家であって読者じゃないのよ。物語に如何わしき可愛らしさも面白さも格好良さも求めてなんていないの。書いて読み返して、読者になって初めて、如何わしく可愛らしく面白く格好良いと思い、作品を  
楽しむのよ。

私からも聞けけれど、本を読むってどんな感じなの？

そりゃ、楽しいさ。面白くなきゃ読まないし、面白くない本は面白くなくなったら途中で読むのをやめたりもするが、それでも俺は読書が趣味だ。何せ、一人で出来るし、一人になる理由が自然発生するからな。一人で読書をしていても何ら不自然じゃない。

小説をそういう言い訳に使われるのは小説家として複雑なのだけれど。でもまあ確かに、ゲームやスポーツと比べて友達作りのためのコミュニケーションツールとしては微妙よね。読書を好まない人間は多数いるもの。

ああ、特に運動部のやつな。本を読むと眠くなるとか、字を見ると頭が痛くなるとか、よく聞く。それで聞かされながら読書してる俺にはキモいだの理解できないだの……。

そうね。言われるこつちも頭が痛くなる。別に読んで欲しいわけではないけれど、読めないと言われたら相応に頭に血が上るわ。

……それなら、そういう奴らに読めるような小説を書くしかねえんじゃねえの。知らんけど。

そういうやつらなんてちびくろさんぼでも読んでいればいいのよ。メロスのように走ってバターになって、二人の若い紳士の肉体に塗りたくられてればいい。

……私は別に私の小説で感動してもらいたいなんて、そんな下劣な承認欲求を持ち合わせてはいないのよ。

おい、別の話が混ざってるぞ。

……なら何の為に書いてるんだよ。金稼ぎか？ 別にそういう作家を否定はしないけどよ。

違うわよ。……いえ、金銭は必要だし稼いではいるけれど、別にそれを欲求して書いているわけじゃないの。お金が欲しいなら働けばいいんだもの。

頭つつーか耳のいてえ話しだ……。

私が小説を書き始めた理由は小説を読みたいから。それは今でも大して変わらない。

それっておかしくねえか？ 目的と手段が入れ替わってるってか、目的と正反対の方向に行っちゃってるだろ、それ。

そうね。執筆時間と読書時間の値が同じだと仮定して、なら執筆時間を読書に当てれば、二倍の時間を欲求に当てられる。別にそれが分かっているわけではないじゃないのよ。

なら、小説を書くのも好き、とかか？

別に嫌いじゃないけど、読みたい小説があれば普通に読書を優先するわよ。ワーカーホリックじゃあるまいし。

だから、まあ、要するに活字中毒なんでしょうね。

薬物中毒者は別に、飲み込んだり打ち込んだりする行為そのものが好きなわけじゃないでしょう？

そりやまあ、それなら風邪薬でも飲んでろって話だしな。

ええ。けれど、薬物中毒者の中に、自分の身体に合った薬物を自作する人間がいても不思議ではないでしょう？ そしてそれを他人に売り払って資金に変えるのも普通のこと。つまりDIYが趣味ってことね。

嫌すぎるDIYだな。

だがまあ、言わんとすることはだいたい分かった。自分のために、自分に合った小説を書いて、それを食う。それができるだけの腕があれば、それ以上のオーダーメイドは

無いか。

ちなみにだけど、DIYにもものづくり的な意味は無いわよ。ぎっくり訳すと『自分でやる』ってなる。私たちのような人に頼るのが苦手な愚か者にはピッタリね。

そう言われると、DIYしてみたくなくなってくるな。ここはひとつ、小町のためにも何か始めてみるか。

シスコンここに極まれり。そこで『自分のため』が出てこないあたり、流石は私の代替元ね。

オルタナティブ  
お前が俺の代替人オルタナティブつつーなら、お前も妹のこと大事にしてやれよ。

そうね。大事な家族だし。

「お姉ちゃん、お待たせ。……なんかいいことでもあったの?」

「別に、ただ自問自答してただけよ」

部屋でかつては参考書や教科書に使っていたスペースを埋めるための本が詰め込まれた紙袋を抱えて、三子は不思議そうに首を傾げた。

「三子。もし私がお姉ちゃんではなくお兄ちゃんだったら、どうなつてたと思う?」

「え？ うーん。……多分だけど、あんまり仲良くはしてないんじゃない？ 一緒にお買い物とかできないさそう」

「あら、残念」

「……というか、普通に水風呂で凍死か溺死してるんじゃない？ お兄ちゃんの裸とか普通に見たくないし」

「見殺しにするほど？」

「だから、見たくも無いって」

言葉とは裏腹に、愉快そうに口元は笑んでいる。そういえば、こうして三子と二人で出かけるというのも久しぶりな気がする。

「あ、そのケーキでいい？ チーズケーキ食べたい」  
「任せるわ」

もつと話しておきたいこと、話すべきことがあったのかもしれない。もしかしたら、話してはいけなかったのかもしれない。

……いや、そんなことないか。

私がどうあろうと、俺がどうあろうと、プロットは変わらず、一つの結末へと収束する。

私だろうと俺だろうと、最後の一文には『めでたし、めでたし。』と。

されど私の学園ラブコメは間違っている。『壺』

三日間の受験休みが終わり、学校をサボる気満々の三子に見送られ、いつもより三分程度早めに登校していた。

それもこれもあれもこれも、だいたい全部平塚先生が悪い。

「この裏切り者めえ……！」

教室を素通りして職員室に入つてすぐから、この調子だった。

何でも、先日の自問自答を目撃していたらしい。……平日の真つ昼間に何でいるのよ。

「君だけは、私の先を行かないと思つていたのだが……」

「別に彼はそんなんじゃないわよ」

「何だ、なら友人とでも言う気か？ そんなわけないだろう」

「そんなわけないわね」

別に異性間の友情を否定する気は全くないけれど、私が男子と仲良く友達やつてる光景とか全く想像できない。葉山とか戸部とかとなんて、百億のパラレルワールドがあるうと一度も無いに決まつている。私に男友達とかパラドックス極まりない。——つま

り戸塚は矛盾をも超越した超生物である。そんなことは置いておいて 閑話休題

「運命共同体……、違うわね。運命共感体というべきかしらね」

人生の道も方向も全く違うけれど、常に似たような道をそれぞれで歩いている、会うはずのなかった別次元の存在。あの対面は、言ってみれば寄り道のようなもの。何となく道から外れてみたら、生涯関わるはずのない私たちは出逢ってしまった。

「別に友達でも恋人でも仲間でも同僚でも同胞でも無い、ただの他人よ」

「そうも否定されると逆に疑わしいものだがな」

「なら勝手に疑って、彼に嫉妬でもしていればいいわ」

「しないよ。何で私が君に惚れている設定になっているんだ」

「あら、違うの？」

「私はレズビアンでは無い」

「バイセクシャルでも？」

「無い。私の恋愛対象は普通に男だ」

「あら、残念ね。調教は私の趣味では無いのだけど」

「君も私のような難攻不落ではなく、普通に男と恋愛したまえ」

平塚先生は言いながら、タバコを啜えて火を付けた。

これは雑談終了という、私たちだけの暗黙の了解のようなものになっていた。

「……それにしても、随分と片付いているみたいね」

二月後半、受験直後ということもあってか、職員室はあちこちで忙しそうにしている。どの机にも書類がビルののように立ち並んでいるというのに、何人かの、例えば平塚先生の机なんかはさっぱり片付いていた。

「いやあ……。まあ、忙しいとついつい現実逃避ばかりが捗ってしまったてな」

あははーと、気まずそうに、頭を書いて誤魔化す。

「けど、そろそろ仕事も片付けないとな」

それは、私へ向けられた言葉ではない。感情というか、思いがそのまま口に出たようだった。

「……もう行くわ」

「そうか。教室の暖房つけて、風邪ひかないようにな」

「そーね」

何となしに嫌な予感がして、そこにいられなかった。

別に、タバコの臭いが嫌というわけではない。そんなに私は潔癖ではないし、二、三年後にはきつと私も吸っているだろうから。

ただ、何となしに、何となく、あれ以上平塚先生と話してはいたくなかった。……聞きたくないことまで、言われてしまう気がして。

「あーあ」

ほんと、あーあ。

面倒くさい女よね。お互いに。

「さあくうらー、さあくうらあ。

のーやあまあも、さーとおもお。

みーわーたあす、かあぎーりい。

かーすーみーか、くうもーか。

あーさーひいに、にーおおう。

さあくうらー、さあくうらあ。

はあなーざあかりいー」

教室で、電灯も暖房も点けずに、自己嫌悪を誤魔化すように、私はちよつとしたマイブームになっている童謡を謡っていた。……歌つておいて言うことじゃないけど、今の季節とミスマッチすぎるわね。もつと冬らしいものにしようかしら。雪やこんこ、とか。

誰もいない教室で一人反省会をしていたら、ノックも無く突然に、ガララツと扉が開いた。別に、私の部屋というわけでもないしノックは不要なはずなのだけれど、自分の世界に入れ込みすぎて普通にびっくりした。

「おはよつ、不可思議さん！　つて寒!？」

「……ええ、おはよう」

誰かと思えば、学校指定のジャージの上にウィンドブレーカーを羽織った戸塚だった。

「なんかいいことあったの？　ご機嫌だったみたいだけど」

電灯を点け、暖房も私に気遣ってか低めの温度で点けながら私に話しかけてくる。

しかも聞かれていたらしいけど、まあ葉山とか戸部じゃなかっただけセーフ。三浦とか、あと顔見知りじゃなきゃどうでもよかったけれど、戸塚だと、まあアウト寄りのセーフといったところ。

「別に、嫌なことを歌って誤魔化したい時くらい私にもあるのよ」

「不可思議さんの嫌なことも気になるけど、それで『さくらさくら』のチョイスも結構謎だよ?」

「デスメタルよりはマシでしょう?」

「それはもう新手的ホラーだよ……」

私はデスメタルと聞いてしばらくはファンタジー世界の関わったら死ぬ類の呪いのアイテムだと思っていたけれど、確かにホラーよね。

「多分、不可思議さんの考えてることと僕の考えてることとて違うんだろうなあ」  
「自分と同じ考え方の人間なんて気持ち悪いだけよ」

「うん、そういうところね」

なんか、戸塚の目が三子のそれに似ているような気がした。

しばらくすれば、葉山や三浦のグループがやってきて、その他諸々がやってきて、最後に遅刻ギリギリで沙希が駆け込んできて、いつの間にか教室は日常に戻りきつていった。

学校全体が賑わいだし、放課後に至る頃には校舎全体に熱がこもり出していた。

朝練風景からも感じたことだけど、運動部の活気付き具合がえげつない。既に野球部やラグビー部なんてグラウンドに集まって騒いでいる。

私もいい加減部活に向かおうと席を立ったタイミングで、由比ヶ浜が駆け寄ってくる。

「ナーちゃん部活？」

「ええ。ここじや騒がしくてどうしようもないし」

言いながらに、二人で教室を出る。

別に、二人一緒に部活へ向かうというのは別段珍しいことでもなく、私にしても由比ヶ浜にしても普通のことなはずだった。……はず、だった。

けれど、由比ヶ浜は持ち込んだらしい毛布に顎先を埋めて抱き抱えながら、気苦しそうな様子。

気になっているのはきつと、雪ノ下のこと。

「どうしたのよ、その毛布」

「毛布？ ああ、ブランケットのこと？」

見たところ、前に部室で二人が使っていたものとは柄が違うように見える。確かに冷えるだろうけれど、一応暖房もあるし、そんな二枚も三枚も使うほど冷えることもないと思うのだけれど……。防災用？

「雑誌買ったら付録で付いてきたの。……ぶっちゃけ、処分に困る」

「三子も何年前かにそんなこと言ってた気がするわ。最近は嵩張るからって、電子ばかり。嘆かわしい限りよね」

「……あれ、三子ちゃんってあたしより大人だったっけ？」

「精神年齢じゃなくて普通に性格と好みの違いでしょう。三子は片付けが苦手ですね。特に付録とかおまけとか、要らないけど捨てるには勿体ないものがどうしたらいいかわからないって」

「へへ。ナーちゃんは？」

「私はそもそも雑誌を買わないわ。必要になったことが無いもの」

「あー、なんかナーちゃんらしいかも」

道中に私が自販機でメロンソーダを買ったりしながら、私たちは部屋についた。いつも通り、既に雪ノ下は来ているようで鍵は空いていた。

「こんにちは。……このあいだはその、ありがとう」

「別に、私は飲まされていただけだよ」

「そうだったわね」

……思っていた以上に元気そうで何より。

「由比ヶ浜さんも、手伝ってもらって助かったわ」

「ううん、全然！ あたしはそんな大したことしてないし」

由比ヶ浜は謙遜するような、照れるような困り笑いをしている。けれど、雪ノ下は視線を逸らさないし、私も雪ノ下の件での功労者は由比ヶ浜だと思っている。

「本当に助かったわ。ありがとう」

その笑みは本当に朗らかで、晴々しい印象を受けた。

由比ヶ浜が小さくうなずくと、互いに照れくさかったようで、雪ノ下ははにかむ。

「こ、紅茶を淹れるわ」

「う、うんっ！　ありがとう！」

何かを誤魔化すように、雪ノ下が紅茶の準備をしていると、不意に、扉が小気味よく叩かれる。

「どうぞで」

雪ノ下が落ち着いた声音で返すと、扉はそれに応えるようにゆっくりと開かれた。

「失礼しまーす」

と、にこやかな声で入ってきたのは、一色だった。廊下から流れ込んでくる冷気が心地いい。

用件は何かと思えば、借りてきたDVDを見る環境が生徒会に無いため、奉仕部のパソコンを、あとついでにサボりだと思われたく無いから部室ごと借りにきたいらしい。

今の時代、DVDを見られるパソコンなんて絶滅危惧種も同然で、何ならDVDドライブを単体ですら置いていない電気屋すらも見かける。私が前に使っていたパソコンはかなり古い型のもののためあつたけれど、今のマックブックにはUSBすらない。タ

イブCが二つにイヤホンジャックだけ。スマホかお前は。

一色は奉仕部のパソコンでDVDが読み込めることを確認すると、鞆から何か、掌サイズで白く、角ばったものを取り出した。

「何それ？」

由比ヶ浜は一色がケーブルでパソコンと繋いでいるのを見て、首を傾げた。その様子を見て、雪ノ下は感心したような声で答える。

「ずいぶん小さいけれど、プロジェクターね」

「です。あ、ちょっとスクリーン下ろしますね」

一色は領き返しながら立ち上がり、これまで一度も使われることがなかった、教室の片隅に天井からぶら下がっているロールスクリーンを下ろした。

わざわざ学校で何を見るのかと、メロンソーダ片手に見守っていると、低い駆動音を鳴らしながら、スクリーンにパソコンの画面が映し出された。

「繋げばスマホの映像とかも出せるらしいですよー」

「ほえ〜。……あ、でもお高いんでしょう？」

由比ヶ浜が思いついたように、口元の笑みを手で隠して冗談めかしながら聞いた。すると一色もそのノリに乗っかって応える。

「それがなんと！ 今なら生徒会の経費で私的には実質無料なんですー！」

「おおー！」

最悪の実演販売だった。それも、闇の部分を開けっ広げに出すことで逆に清々しいという如何わしい実演販売だった。

ともあれかくあれ。

照明を消して、カーテンも閉めて。部屋の光源がプロジェクターだけという状態にして、観賞会が始まった。

音源が古いノートパソコンのスピーカーということもあって小さいため、私たちはパソコンの近くに陣取ってみることになるため、どうしても人口密度が濃くなってしまう。尚、私は雪ノ下の膝の上。この状態が気に入ったらしい。

一々映像の内容を語るのも鬱陶しいので簡潔に語ってしまうなら、アメリカの高校の青春群像劇。スクールカーストって横文字なだけのことはあるのか、海外でも普通にあるのね。体育会系が上位を独占しているのも同じく。……学生がこんなだと、世界って今後どうなるのかしらね。

「……それで、なんで態々ここで映画見せられてるのよ、私たち」

「映画じゃなくてドラマですよー」

一色に問うと、カーテンを開けながら、馬鹿にしたような声音で答えられた。

「別にその違いはどうでもいいのだけど」

映画なんてエヴァンゲリオンとアニメの実写化ぐらいしか見ないし、ドラマなんて生まれてこの方、見た記憶すらない。

「んー？先輩もしかして、こういうの嫌いでした？」

「いや、なんというか、……納豆を食わされた外国人のような、そんな感覚を味わえたわ」  
「八割嫌いじゃ無いですかそれ。……先輩、いくら可愛くなっても女子力はまだまだですわね」

……女子力ってこういうところにも発揮されるのね。確かに、家事ができるか否かだけじゃ、私と由比ヶ浜の女子力はほぼ同等ということになるけど、明らかに由比ヶ浜の方が女子力は高そうだし。

「アベンジャーズとかマッドマックスとか好きって言い出す女子なんて大概は彼氏の影響ですからね？ ナーちゃん先輩も気をつけてくださいよ？」

「……そういえば不可思議さんって、進路希望にアイアンマンと書いた前科があったわね。平塚先生が愚痴ってたのをよく覚えてるわ」

「ナーちゃん先輩、なにしてるんですか……」

……そういえばそんなこともあったわね。観るまで食わず嫌いしてたけど、見てみたら面白かったのを覚えてる。

「面白かったんだから仕方ないじゃない。文句は見てから言いなさい」

「……お金は取らないんですか？」

片付けを一通り終えた一色は意外そうな顔で私を見た。

「だって私が製作したわけじゃ無いもの。どんな文句を言われても痛くも痒くも無いわ」

余裕綽綽に言うのと、一色は不敵に笑う。

「アイアンマンってSFっぽいけど意外と泥臭いですよねー」

「それ以上の侮辱は物理的出血を覚悟の上で宣いなさいな」

「滅茶苦茶怒るじゃ無いですか！ 物理的出血ってなんですか!？」

「しかも文句にもなっていないわ。ただの感想で怒ってる」

「……ゆきのん、それナーちゃんへの文句になってない？ あというはちゃんは観てるんだ……」

物語とは人の子同然。数多の人類を魅了した子が侮辱されて親以外が怒っても仕方のないこと。……とはいえ、今のは些かに器が小さすぎたけれど。

「それより、どうしてここで急に上映会が始まったのかしら」

「ああ、そう、それ。私も聞きたかったのよ」

聞こうと思って忘れていたことを、雪ノ下が改めて尋ねた。頭上からの言葉に私も

乗っかる。

「資料として観てたんですよー。さつきも言いましたけど、生徒会室で観てたらサボってるみたいじゃ無いですかー」

「そんな理由でここを選ぶのもどうなのかしらね」

「そんなことなら家で見ればいいじゃ無い」

「だってせっかく買ったプロジェクトを試したいじゃ無いですかー。うちにはスクリーンないですし。それに、時間外労働はしない主義なんです」

一色は悪びれる様子を一切見せずに、にぱつと微笑んだ。……この調子だとそのうちスピーカーまで経費で買いそうね。私には関係ないし別にいいけれど。

「てゆーか、資料って?」

「今度卒業式があるじゃないですかー。で、その後に、謝恩会? って言うんですか? それを生徒会仕切りでやらないといけないなくて」

「しゃおんかい、……しゃおんかい?」

「……黙祷でもするの?」

「遮音会じゃないですよー。なんですか、そのつまらなそうなの。謝る、恩義、で謝恩会です」

……結局いまいちよくわからないのだけど、一色が言うことだし、要するに後夜祭り

たいなもののかしらね。

「まあぶっちゃけ、普通の謝恩会でもいいんですけど、私の卒業するときのことを考えると、ここで派手にした方がいいかなーと思ってます。……あ、その方が卒業生も喜ぶわけ」

ちゃんと卒業生への思いやりが後付けで付け足されてる。いいわね、実に私好みの小悪党。流石生徒会長。

なんて感心していたら、雪ノ下が訳知り顔で頷いている。

「なるほど、それでプロムというわけね」

「……家庭菜園なら勝手にやればいいじゃない」

確か、そんな名前の植物があったわよね。

「それはプロムよ。日本語ですもも。家庭菜園で作るものじゃないわね」

どこか自慢気に雪ノ下は語る。

「プロムというのはプロムナード、つまり舞踏会の略称。海外の高校で学年最後に開かれるダンスパーティー、まあ派手な卒業パーティーよ」

「ああ、それでさっきのドラマと繋がるわけね」

なんか派手なダンスが始まったと思ってたなら、そういうことらしい。

「……卒業生のことを思うと気乗りしないのだけれど、なんでそんなことをするのよ」

「え、でもナーちゃん、体育の創作ダンスめっちゃ上手かったじゃん。沙希と一緒に踊ってたやつ」

「え……。ナーちゃん先輩と川崎先輩がダンスって、なにしたんですか？　というかナーちゃん先輩も意外ですけど、あの人踊るんですか？」

「人を掌で踊らせる術は間近で見てきたのよ。……だからこそ、踊らされる人間のことを思うと、心が躍るわね」

「ナーちゃんさつきと言ってること違うよ!？」

おっと。踊り慣れていない人間が難しい顔しながら踊ろうとしているのを悠々と眺める愉悦を思い出してしまった。

「まあ、ともかくよ。その話をここで話したということは、いつも通り、私に一枚囁ませに来たってことでいいのよね？」

「流石ナーちゃん先輩、話が早すぎて助かります」

経験則どころか、統計学でも証明できるくらいにいつものことだもの。

「そういうことなら話が早い。もちろん手伝うわ。元よりそういう約束だし、しかも今年で成功の前例を作っておけばきつと来年もできる。つまりあの沙希に嫌々ながらに踊らせることができる」

「いやあの、私が成功させたい理由も、私が卒業の時にプロムやりたいからなのでありが

たいんですけど、……ちよつと重たいんですよ、ナーちゃん先輩の愛って」

そんなつもりはなかったのに、一色に思いつきり引かれた。別に、誰かを愛していたりはしてないつもりなのだけれど。……それでも重たいってことかしら。

「それで、先輩達はどうですか？　ぶつちやけナーちゃん先輩だけで十分に安心感ありますし、大丈夫っちゃ大丈夫なんですけど……、やっぱり人手は多い方が助かりますし」  
「不可思議さんだけって逆に不安だし、私も手伝わせてもらうわ」

「あつ、あたしも手伝うよ！」

受験が終わろうとも、どうやらこの部で暇は長続きしないらしい。明日から、私たちはプラム成功へと足を向けることになる。一色は「ではでは」と言い残し、部室を去っていった。

「私たちも、そろそろ帰りましょうか」

「そーね」

気がつけばもう夕暮れ。青かった空はオレンジ色に染まり、太陽が窓を覗いていた。

されど私の学園ラブコメは間違っている。『弐』

上映会から何日か経った朝。今日は珍しく、私でも三子でもなく沙希が、ソファに顔を埋めるように寝そべったままそこを離れなくなった。

というのも、今日は三子や沙希の弟の合格発表の日。受験二日目の日ですら心配しすぎて、らしくなく歌ったりしていたのだから、今日という日に沙希がこうなるのも薄々分かってはいた。

「……沙希さん、学校遅刻しますよ」

「う〜……、分かってるけど……」

「ウチに居ようが学校行こうが時間は経つのだから、諦めなさいな」

「あ〜。……ん」

声ともため息とも言い難いものを吐きながら、気怠そうに沙希は起きた。……こう、怖い系の美人の間抜けな様っていいわよね。

「……じゃ、行ってくる」

沙希はそのまま、我が家さながらにぼやくように言いながら、玄関へと歩き出した。「私も行ってくるわ」

「うん、結果出たら連絡するから。沙希さんも行ってらっしゃい」

三子も卒業はまだ先で、中学は自由登校とかないし登校日のはずなのだけれど、そんな気配を全く感じさせない様子で私達を見送った。

合否が発表される時間帯は、二限が終わる頃。つまりはもう間も無くで、それまでの間に私がしていたことといえば、沙希の観察だった。

やっぱり落ち着かないようで、頻繁に頬杖をつく位置を変えたり、腕を入れ替えたり、もう片手でペン回ししたりスマホ触ったり、まあ散々な授業態度を晒していた。私とてそれを咎められるような、褒められた授業態度はしていないが、それにしたって今日の沙希は落ち着きがなかった。

やがて二限終わりのチャイムが鳴り、担当教師がさっさと片付けて教室を出ていく。首の付け根の骨を鳴らしていると、最近はよく鳴るようになった私の携帯電話が一件のメールを着信し、ブブブと机を鳴らした。案の定三子からの連絡で、内容は短く『合格』の二文字のみ。……通信量とか気にするにしても、もう少し長文を送ってくれてもいいのよ？

開いたついでに、たまには姉らしい返信でもしてやろうと思ったのだけど、しかし現

実はそうは行かないようで。

「ぎにゃっ」

「なに!?! なになに!?! なんかあんの!?! 行く!?! 俺らも行く!?!」

獣のように駆け出した沙希が私を米俵のように抱き捕らえ、何事かと騒ぎ出した教室（というか戸部）を背に廊下を駆け出した。

「ちよつと、何で私まで……」

曲がり角を通過する際の遠心力を堪えながら物申すも、沙希に私の声は届かないって  
 いか怖い怖い怖い階段怖い!! なんで二段飛ばしで降りるのよ! 胃がシエイクさ  
 れるし落ちそうだしっ跳んだ!?! ちよつと今十段近く飛び降りなかった!?!

怖いから語る暇無し  
 閑話休題。

まさかジェットコースター以上の絶叫マシンが目と鼻の距離にいたとは思わなかったけれど、急ぐ理由はわからないでもない。なんせ、休み時間は十分しかない。本来は移動教室の移動や教材の準備でほとんどを潰されているはずの時間なのだから、一分一秒が惜しいというのもわかる。……けど私を巻き込まないで欲しかったわ。

「お姉ちゃん、大丈夫?」

「ええ。……やっぱり持ち上げられるなら三子が一番ね」

合否が張り出される正門前で降ろされて放置された私を見つけた三子は、猫でも持ち上げるように脇に手を入れて持ち上げた。右手には私の他に、合格者だけが受け取る書類一式の入っているであろう封筒が指に挟まれている。

普段は届かない三子の頭を撫でてから降ろされると、私は私をここまで連れてきやがった沙希の行方を探した。……探すまでもなく見つかった。私も沙希も目立つ容姿をしているのは、外部の人間が多数いても変わらないらしい。

「大志！」

「姉ちゃん、やったぞ！」

姉弟揃って大声上げて気持ちよく喜んでいるようで、こっちまで文句を言う気が失せてくる。……とはいえ、後々に恨み言は言うのだけど。金銭以外のどこかしらに報復をしないと。

三子の長身が目立ったのか、私の金髪が目立ったのか、向こうも私たちを見つけたようで、弟の方がこちらへやってきた。

「お姉さん、俺、やりました！」

「その呼び方は沙希との関係がややこしくなるからやめなさい。よかったわね。あと誰よ」

「ありがとうございます！ 川崎大志つす！ えつと、……七五三先輩！」

「不可思議可思議と呼びなさい」

「不可思議先輩！」

「よろしい」

沙希の妹の京華はちよいちよい会っていたけれど、そういえば弟の方と会うのはまだこれで二回目なのよね。……なんでこんな慕われてるのかしら。

そういえば沙希はどうしたのかと思ったら、一人で隅の方で天を仰ぎ、時折目元に手をやっていた。

「あのー……」

もうあと何分もしないうちに授業が始まるし、三子も用は済んだともう帰っていったし、教室に戻ろうと思ったところで。私は背後から聞き覚えのない女子の声に呼び止められた。

「……？ 私に何か用かしら？ 案内だったら相応の覚悟をしてもらおうけれど」

「いえ、えつと……」

どこか猫っぽい印象を受けるけれど、猫娘というには可愛げのありすぎる、なんとなく一色と通ずる気配のする、私をして美少女と言わざるを得ない美少女。

……の、頭頂から跳ねた一房の髪を見て、私は彼女が何者なのかを察した。

「はじめましてね、小町」

「あつ、はい。……いきなり名前で呼び捨て!?」

俗にアホ毛と呼ばれる、私の代替元オルタナティブが語った、兄妹の共通点。

「えつと、じゃあやつぱりあなたが、兄が『見たら全力で逃げろ』って言っていた、不可思議可思議さんですか? 思ってたよりちっちゃい……」

「ええ、そうよ。というか、そう言われているのに話しかけてくるって、いい度胸してるわね」

……というかそんな忠告をわざわざしていたのね、あのシスコン。

「そりや勿論っ! 兄の数少ない、というか唯一と言っても過言ではない女子の知り合い、つまり私のお姉ちゃん候補ですから! ……ちっちゃいし、むしろ妹?」

「どんな話を聞いたらそうなるのよ。……まあ、あなたは私の妹のようなものなのだし、その程度は笑って見逃してあげるわ」

「まさかの脈ありますか!？」

「そんなわけないでしょう。絶対あわないでしょうしね」

いろんな意味で。

「そうそう、私もあなたのことは色々聞いているのよ。散々容姿や性格を褒め倒した挙句に『見かけても絶対近寄るなよ』って、どんな雑なフリかと思ったわ」

「うわあ……。その話は詳しく聞きたいところですが、……。お姉さん、そろそろ授業の時間かと」

「あら、そう」

小町に言われて周囲を見渡すと、いつの間にか戸部達も沙希もいなくなっていて、ここにいるのは中学生とその親と思わしき大人ばかり。

「じゃ、縁があつたらまた会いましょう。歓迎するわ」

「兄共々よろしくお願いします！」

「はいはい」

小町に見送られ、私は教室へと戻った。……。自販機に寄り道したらすっかりと授業に遅刻したから、存外に世の中は真つ当にできているらしい。

暦ではほとんど春なはずなのに、未だ気温は二桁に足ることなく、力不足な日は落ち始める。

今日の放課後はプロム関係のそこそこ大きな予定があるのだけれど、しかし大きいだけあつて大人数が必要で、集合時間までのおよそ一時間を私たちは持て余していた。

「そういえば、ナーちゃん先輩。いい加減私のこと、名前で呼んでくださいよー」

「……なによ、急に」

奉仕部の部室で、三人の会話を背景に小説を書いていたのだけど、ふと一色に話が振られて、キーボードを叩く手が止まった。

「急って、私達もうそこそこ長い仲じゃないですかー。急っていうか、むしろ旧じゃないですかー。旧友じゃないですかー」

「確かに、友かどうかはともかく私や由比ヶ浜さんも未だに名前呼びなのは違和感ね。

……姉さんは名前で呼ばれていたのに」

旧友って、何年も前の、久しくあっていない友人を指す言葉だと思っただけだ。

まあ彼女達が私に物申しているのは、私の呼び方だった。由比ヶ浜も「ナーちゃんどうして!」と視線で訴えてくる。

「……別に、変に拘ってるわけじゃないわよ。沙希だつて名前で呼んでるし」

「川崎先輩だけ名前呼びなところが、なんかデキてるっぽくて嫌です」

私名前呼びしてる者を挙げてみる。

三子、ほろり、沙希、留美。あと最近だと、夜通し飲み交わした陽乃に、今朝会った小町。

三子とほろり、あと例外に小町はともかくとして、確かに雪ノ下と由比ヶ浜を名字で

呼び続けているのは、客観的に見れば不思議ね。……主観的には全く以て不思議じゃないのだけど。

「嫌と言われても、今更じゃない。それに名字で呼び慣れたもの。直すのが面倒」

「結衣先輩を名字で呼ぶ方が面倒だと思いますけど」

「いろはちゃん!? それあたしが面倒な女みたいになつてない!」

「実際面倒じゃないですか。五文字ですよ? 名前で呼べば三文字も削れます。ローマ字なら六文字無くなります」

「その理屈でいうと、私も面倒な女になるのだけど……」

——ゆいがはま。

——ゆきのした。

確かに、二人とも五文字ね。

「いや、雪乃先輩は普通に属性が『面倒な女』じゃないですか」  
「なっ!?!」

心外だと雪ノ下は声を上げるも、最も近いであろう由比ヶ浜までもが庇う事はなく、ただ目を逸らした。

というか、やっぱりいいわね、一色いろは。最強の後輩、最高の生徒会長。初対面から私が気に入っただけのことはある。

「クツ、ククツ。わかったわ。いろはの正直に免じて、それくらいは尽力するわよ」  
なかなか笑わせてもらったし、忍ぶ恥も見失って久しいし。

「改めて、いろは」

「あ、えつと、はい。……うわ、なんかキユンとききました」

「なつ、ナーちゃんあたしも！」

紅茶の注がれたカップで口元を隠すいろはを見て、由比ヶ浜が顔を突き出してくる。

「じゃあ、結衣」

「う、うん……」

一度として呼んだことのない名前をなんとか思い出して呼んでみれば、同じようにカップを口元に運んで動かなくなった。

「……………」

雪ノ下はといえば、なにも言わず、告白を待つヒロインのような面立ちでこちらをじつと見ている。まるで芸術品のように、儂く綺麗で、可愛らしい。

「ククツ。雪乃」

「え、ええ……」

流石に三人揃ってとはいかず、呟くように返事をしながら顔を背けた。ただ共通して、三人とも頬の辺りが照れで赤らんでいる。——まるで、王子様に名で呼ばれた御伽

嘸のお姫様のように。

「……いつから奉仕部は雪乃ではなく私のハーレムになったのよ」

「え、奉仕部の奉仕って、そっちの意味だったんですか……？」

「そんなわけではないでしょう。……その誤解も懐かしいわね」

呆れたように、雪乃はぼやく。

その誤解は私が平塚先生にここへ連れてこられて、初対面の雪乃に対して言ったことだった。

「じゃ、最後は雪乃先輩ですね」

「え？」

いろいろの擲揄うような声音に、雪乃は困惑した表情で首を傾げた。

「ほら、雪乃先輩も、私はまあともかくとしても、結衣先輩とナーちゃん先輩を苗字呼びしてるじゃないですか」

「あ、あたし、ゆきのんにも結衣って呼んで欲しい、かも」

そう。この場で他人行儀と言えば、ある種私以上に雪ノ下の方が重傷だった。……別に障害ではないし、きつと私も雪乃も他人行儀なつもりなんてないのだけど。

雪乃は困ったように苦笑いを浮かべながら、小さく口を開く。

「えっと、じゃあ……、結衣、さん」

「んん、まあよし！ ゆきのん！」

若干不服そうだけど、それでも距離が一步でも縮まったのが嬉しいのか、結衣は明るく笑って呼び返した。

「……七子、さん」

「ええ、雪乃」

「……なんで名前呼びで逆に距離感生まれてるんですか。ほんと面倒な先輩ですね」

「私が悪いのかしら……」

不思議なもので、『不可思議さん』よりもずっと真に近い呼び方なはずなのに、雪乃の呼び方は酷いくらい距離感を感じるものだった。

「いつも言っているでしょう、私のことは不可思議可思議と呼びなさい」

変なところで抜けている雪乃を微笑ましく思いながら伝えると、雪乃は諦めたように薄く笑った。

「わかったわ、可思議」

「よろしい、雪乃」

流石に私でもわかるくらいに、私たちの距離感は縮まっていたらしい。卒業するまでは、あーだこーだそーだとありつつも、そこそこの距離感のまま卒業して、そのまま関係性が希薄になって忘れられると思っていた。けれど、そうはいかなくなったらしい。

自覚した。もしかしたらずっと前から、最初から知っていたのかもしれないけれど、完全に自覚した。

……私はまだ、全盛期の不可思議可思議まで戻れていない。

去年までの私なら、こんな状況にはならなかった。

この距離まで誰かを近づけたりなんてしなかった。

可愛い妹だろうと。尊敬している人形師だろうと。信頼している殺人鬼だろうと。恋愛している先生だろうと。

彼女達との、今の甘ったるい距離まで近づけることは絶対になかったはず。

……けれど、これはこれで、いいのかもしれない。

居心地が悪いわけでもないし、幸せか不幸せかというなら、幸せであるのに間違いはないのだから。

——まだ微小だけれど、しかし明確に落ちてきている読者の閲覧数から目を逸らし、冷めた紅茶を一口に呷った。

されど私の学園ラブコメは間違っている。『参』

プロムとは一体なんなのか。

一言で言ってしまうえば、まあダンスパーティーなのだけれど、しかしそう言われて「なるほど」と言って納得できる日本人というのは、きつと少数。高校生ともなれば、いっそ虚数かもしれない。

であるからして、ただ『プロムやりまーす』とだけ張り出したところで、それに期待して盛り上がる高校生なんてきつといない。現実にあるのかは知らないけれど、名前が白黒の風紀委員や電撃姫の通っているような、ああいうお嬢様学校でもない限りは、「ご機嫌よう」なんて、相当上機嫌な雪乃くらいしかきつと言わない。

だからまあ、庶民である高校生諸君にプロムとはなんたるものなのか。それを知らしめるために、写真や動画を用意しようというのが、そもそも今日の本題。いわゆる、リハである。リハーサル。決して、名前で呼び合って仲睦まじくするのが今日の目的ではない。

体育館はバルーンアートにフラワースタンド、天井から吊るされたミラーボールがそれらを照らしたりと、十全に、パーティー会場と言える状態へと仕上がっている。

その様子を見ながら、私は他の面々が着替えてくるのをステージで待つ。

「ゆうきはこんこ、あーられやこんこ。」

降うつては降つては、ずうんずん、積もる。

やあまも野原も、わつたぼうしかあぶり、

かあれき残らず、はあなが、さくう」

「その、上機嫌なんだか恨めしいんだかわからない歌声はどうにかならないのかしら？」と。騒がしいのに人のいないステージを観察していたら、着替えた雪乃が私を見下ろした。靴のおかげか、三子ほどじゃないけれど、いつもより目の位置が高い。

「あなたでも歌ったりするのね。そのチョイスも意外すぎるけれど」

「あら、むしろ今の私にはよく似合っていると思うのだけど」

私が着ているのは、『不思議の国のアリス』をモチーフとしたワンピースドレス。白と水色を基調に、フリフリ、フワフワとあちこちに装飾がつけられ、裾周りにはトランプや鏡、猫なんかを描かれている。金髪も相まって、あとは目さえどうにかすれば完全に御伽噺のヒロインである。我ながら、美しきロリであった。

「ええ、まあ、……そうね」

どうやら、雪乃はテンションが低いらしい。結衣とかいろはなんてノリノリで衣装を選んだりメイクしたりしてたのに。レンタルした衣装の微調整を頼んだ沙希も、私を可愛がる延長で、嫌々言ってる口とは裏腹に楽しそうにしていたのに。

まあ、男装だと仕方ないかもしれないけど。

プロムクイーン、プロムキングの再現も撮る必要があったのだけど、クイーン役のいろはと釣り合う男子が、それこそ葉山ぐらいで、それも諸々の事情で頼めなかった。で、身近な女子の誰かが男装するということになり、なんか沙希か雪乃の二択に。……私は身長、結衣は胸囲の都合で真っ先に外れた。

沙希を怖がったいろはが雪乃にキング役を頼んでいたけれど、その選択は正しかったらしく、私の目の前には燕尾服姿の美青年がいた。

「ククツ。よく似合っているわ」

「その褒め方は、女子として複雑なのだけど……」

若い執事と可愛らしいお嬢様。そんな二人組が出来上がっていた。

「あなたこそ、それは自前のものなのよね？　まるで商品棚の人形のような格好ね」

暗に、その服は何時、何処で着るためのものなのかと、雪乃は問うた。そりゃ、こんなファンタジー系のアニメでもそうそう見ない格好、リアルで着る機会なんて普通はな

い。

「その通り、これは元々人形用の衣装よ。蒼さんの人形劇、『不思議の国のアリス』でアリス役の人形が着ていたワンピースドレス。……だからまあ、思い出の品というか、勝負服というか、まあこういうときでも無いと出さない衣装ね」

そして、そのアリス役というのが他でもない、私だった。

と言つても一度だけ、蒼さんと、その夫でありながら人形の制作もしている燈あかりさんが、まだ子供だった私の我が儘を聞いてくれた時のものだけね。

「球体関節がしっかり機能する構造に出来てるから、理論上はジャージや体操着以上に丈夫で動きやすくてきてるのよ」

「とんだオーパーツもあつたものね……」

「そもそも蒼さんのワイヤーアクションがビツクリ人間すぎるもの。使う人形も、作る人間も、相応に並外れていないと成り立たないのよ」

とは言え、私はあまり踊らないつもりなのだけ。

私も現場に立つとはいえ、役目は被写体ではなく、むしろ撮影。頭のヘッドドレスにつけられた、ゴープロ、とかいう小型のカメラで至近距離から、あるいは当事者視点での撮影をしようという魂胆で、低身長の方は、顔を正面から写せるため適役だった。

「まあ、お似合いよ、可思議」

「ありがとう、雪乃」

しばし時間が経つと、演者も揃ってきて、いかにもパーティーっぽい雰囲気が出来上がってきた。あとは暗幕を張って、照明を落とせば、完璧と言ってもいいかもしれない。男子は基本タキシード姿で、女子はそれぞれドレス。事前に伝えて呼び込んだ面子とはいえ、私のように自前なのはごく僅かで、ほとんどはレンタルらしい。このデータも、本番の際にレンタルする業者選びに必要なのだとか。好まれる色合いとか、露出度とかで。

私はカメラと繋がったスマホで、試し撮りの映像を確認しながら位置を調整しつつ適当に歩き回っていると、集団の一角が色めきだった騒ぎ声をあげた。

どうやら、キングとクイーンが揃い踏みで登場してきたらしい。

元来持ち合わせている女性的な魅力を、オレンジを基調とした華やかなドレスでより強調させたいいろはと、元あった魅力を反転させた男装の麗人、雪乃。

「言い方最悪ですけど、美少年侍らせてる感やばいですね。今めっちゃ気分いいです」  
口元を歪めさせて感動しているいろはに、雪乃は思いつき引いていた。

「本当に最悪の言い方ね。身の危険を感じるし、少し離れてもらっていいかしら」  
「紳士の義務ですよ。さつきみたいにちゃんとエスコートしてください」

つい少し前、なんだかんだ言いつつもノリノリになっていった雪乃は、さながら御伽噺の王子様のように、いろはに腕を貸したりなんかして、完璧な作法で会場までエスコートしちゃったりしている。

私にまでお姫様とか言い出して、ちよつと格好よかった。ストライクゾーンに、当たらずとも遠からずだった。

「そろそろ撮影に入りましょうか。ふか、……じゃなくて、可思議。カメラの方は大丈夫かしら」

「そうね。軽く踊ってみてくれる？ やっぱり棒立ちしてる人間じゃ、あてにならないわ」

動いている人間と立っている人間じゃ、頭の位置が結構違うもの。

「なら、コホン。——踊っていただけるかしら、可思議？」

「え、ちよつと」

雪乃プリンスに強引に手を取られ、私は踊らされる。

経験があるとは確かに聞いていたものの、それは経験がある程度のもではなく、音楽なしでも十分に合わせやすいものだった。

本来、身長にあんまり開きがあるかどうかどうしてもやりにくいものだけけれど、それすらも互いの腕でカバーし切れてしまった。私とて、伊達に殺人鬼や人形師と連んでいない。

およそ三十秒踊って、周りから拍手までもらってから、私は雪乃に物申す。

「私が踊ってもスマホで確認できないじゃない。はしゃぐのはいいけど、少し落ち着きなさいな」

「え、ああ、そうね、ごめんなさい。……反省しているわ」

正気を取り戻したのか、冷や水でも掛けられた様子で、反省というよりは後悔をしているように見えた。

とはいえ、一応カメラは回していた。スマホには、楽しそうに笑って踊る雪乃がバツチリと映っている。

「まあいいわ。問題はなさそうだし、多少は編集でどうにかなるでしょ」

「そうですねー。ナーちゃん先輩のダンスも完璧でしたしー」

どこか拗ねているように見えるいろはは、一度大きく手を鳴らして、各々配置について撮影を開始させた。

撮影自体は順調に終わった。

懸念点だったキングとクイーンのダンスシーンが恙無く撮れたことが一つ大きな要因なのでしょう。

雪乃は普通にダンスが上手くて、いろはは下手だったけれど、でもそれを武器に可愛いクイーンをしつかり、というかちやつかりと演じてみせた。

見守っていた者たちも拍手喝采だったけれど、……けれど。

「かっこよくて綺麗ですし、周りも歓声上げてますけど、……別物感がやばいですね。なんかガチの競技ダンスみたいです」

「そうね。我ながらイメージと違うと思ったわ」

いろはの後ろからモニターを覗く雪乃は、ため息を吐きながらこめかみに手をやる。

「ナーちゃん先輩の方のカメラも、どうしても近すぎて使いにくいですね。振り向いたところなんかは切り抜いて画像は使えそうですけど……」

「そうなるとは思っていたわ。広角とはいえ、どうしても踊っていると顔に向いちやうものね」

私のカメラが映した映像の、およそ七割くらいはダンス相手の冴えない顔ばかりが写っていて、途中で見ていられなくなり映像を止めた。

「まあ、チークタイムの映像はなんとかあったとして、もつとウエイウエイした感じのノリの映像が欲しいです」

「全体でダンスしている画を撮りましょうか。カメラは……、可思議、お願いできるかしら」

「構わないけれど、踊りながらだと難しいわよ？ よそ見しながらはなかなか具合が悪いわね」

「というか、あまり動き回れないから全体が映せない。」

「踊らなくていいわ。イメージ的には、そうね。……地上に降りた妖精があちこち見て回っている、みたいな感じ、……かしら？」

「らしく無いことを言っている自覚はあるようで、雪乃は言いながら段々首を傾げた。

「大体分かったわ。でもまあ、固定でいいから外からもカメラを回しておきなさいな」

「はーい。……ナーちゃん先輩って、こういう時ほんと話が早くて助かります」

「話が早いというか、しつかり行間まで読んでくれるのよね。十聞いて十二分に為すというか」

ヘッドドレスにカメラを付け直そうと、一度外すと、雪乃というはが私の頭を撫でた。軽くだけセットされた髪型が崩れない程度の、優しい手つきと感情が、妙にむず痒い。「ん……。いいから、決まったならとつとと始めるわよ。疲れたからさっさと終わらせ

て帰りたいし」

照明が暗転し、音楽が鳴り始める。

最初はどうしても、誰もが肩を揺らす程度の小さい動きから始まり、けれど段々と、戸部あたりが拳を高く突き上げれば、それが周りに伝わっていく。……こういう時だけはマジでパないわね。パリピってやつかしら。

音高くクラツプすればタタンツと響き、徐々にみんなの距離が縮まっていく。一步踏み込みツイストして、さらに一步踏み込めばハイタッチ。中には冗談めかしてロボットダンスをする者が現れたりして、中には腕を組み出す者たちもいて。

音楽に皆々が酔いしれる頃に次の曲へと繋がる。バラードまでは届かずとも、先ほどより幾らかメロウな楽曲。

私はあちこちを隙間を縫うように歩き回り、時に軽く踊ったりなんかしながら、ウエイウェイしたプロムらしき何かを映して回る。

途中に結衣、雪乃、いろはをそれぞれ捕まえて強引に踊ったりなんかしながら、最後の曲を迎え、私まで楽しくなってきた頃に曲は終わった。

拍手と歓声が沸き上がり、そのまま明明にお喋りに興じ、パートナーや周囲の者と写真撮ったりなんかしている。

その辺りまでしつかりとカメラに収めつつ、私は輪から外れて。ケータリング類が用意されているテーブルへと向かった。

ヘッドドレスを外してカメラの電源を切ったりしていると、いろはがこつちにやつてきた。

「お疲れ様です、ナーちゃん先輩」

「……そーね。大分疲れたわ」

踊るのなんてもう何年振りだし、楽しいと思うのなんて初めてかもしれない。

蒼さんならもつと楽しげに、全員巻き込んだ一つのエピソードにしてしまうのでしようけれど、やっぱり私には真似できそうに無い。

「つていうか、ナーちゃん先輩ってあんなに動けるんですね。意外とパリピなんですか？」

「そんなわけないでしょう」

いろはの問いに答えると、「ですよねー」と、軽く返してきた。

「でも、昔は憧れてたのよねえ」

「……え、パリピにですか？」

どんな子供よ、それ。

「人形師、……っていうか、人形になりたかったのよ。蒼さんに縛られて、蒼さんに操られて、蒼さんに踊らされたかった」

「なんですか、それ。プリキュアに憧れる子供みたいなものですか？」

楽しみに、揶揄うようにいろはは言った。

「まあ、似たようなものなんでしょうね。……物語の人形が人間に憧れるように、人間とこの人も人外に憧れる。人魚姫とか、神様とか英雄とか」

「あれ、でも人魚姫って確か、バッドエンドじゃありませんでしたっけ」

「あれはバッドではなくデッドでしょう。悲劇ではあるけれど、でもだからこそ、人魚姫は読者の目に美しく映った。……王子を殺せず、泡になるなんて詩的な死に様をバッドエンドなんて言い方、無粋だわ」

「……ナーちゃん先輩って、意外とロマンチストなんですね。なんとなくリアリストだと思っていました」

「この私のどこがリアリストなのよ」

十七歳にもなってアリスのコスプレをしてるリアリストとか、冗談にしても面白くない。

「そうですねー。雪乃先輩の例えじゃないですけど、妖精みたいに可愛いです。捕まえて抱きしめていいですか？」

「体がまだ火照って暑いからやめてちょうだい。……外で涼んでくるわ」

「あ、じゃあ飲み物適当にお願いしまーす。お金は後で返しますんで」

「はいはい」

十七歳にもなつてアリスのコスプレをして、頬を赤らめながら後輩にパシられる美少女がいた。……というかまあ、私なのだけけれど。

されど私の学園ラブコメは間違っている。『肆』

リハの撮影翌日。

公式サイトに載せる写真は顔をボカしたりなど、プライバシーに考慮された編集を依頼する。けれど、そもそも依頼先にみせられないものもあるため（パンチラとか、普通に手ブレとか）、それらを弾くのが今日の仕事。

生徒会と奉仕部全員で仕事を分配しても、映像からの切り抜きを合わせると数千枚、頑張れば数万枚にもなるため、何も考えずに作業できるけれど、それでも地味に具合が悪い分量。

いつからか付き合っているらしい生徒会の書記と副会長が生徒会室の隅で作業しながらいちやついているように、私たちも手とは別に口を動かしていた。

「ナーちゃん先輩って元彼とかいないんですかー?」

「誰かと恋仲になったことは無いわね。……というか、私にいると思ったの?」

「いて欲しくは無いですけど。でももしですよ? 例えば戸部先輩と付き合ってたとか言い出したら、完全無欠と見せかけて穴だらけなナーちゃん先輩を小馬鹿にできて楽しいじゃ無いですかー」

「……いろはちゃんの中の戸部っちってどんな存在なの？」

女子三人集まれば姦しいだか、騒がしいだか、その例には私たちも漏れないらしく、いろはがしようとしてしているのは、いわゆる恋話というやつだった。

……まあ、綺麗所が四人いて全員、恋愛経験が良くて片思い止まりなのだから、真つ当な恋話ができるはずもなかった。

「いや、でもナーちゃん先輩って今でも平塚先生にぞつこん真つ只中じゃ無いですか？ そんな人の恋愛遍歴とか普通に気になりますって」

「……恋愛に限らず、これまでの交友関係は気になるわね。料理人の海胆岬うにみさきさんや、人形師の有製さん。まさかその二人だけとは思えないもの」

「確かにっ！ あたしらとあんま歳変わんないのに、なんかもうテレビの人みたいだったよね」

この場において分かりやすく友達でない仲間である雪乃の言葉に、結衣が乗っかる。いろはも興味があるようで、よく見ずとも生徒会役員たちも聞き耳を立て始めた。

別に隠すようなことでは無い。……けれどもまあ、現実味の薄い人間関係というのは、確かにある。

「……話のネタにはなるし別にいいけど、あくまで子供の頃、私がまだ小説家となっていない頃のことだぞよ」

料理人、人形師のように、何か分かりやすい肩書きを持つような、知り合い以上の縁ある人間は、多くはないけれどそれでも確かに何人か居る。……そうでない者もいるけれど。そうでないものの方が危うすぎるけれど。

例えば、芸術家。

シトリング・ラファイ。本名、有製きいろ黄彩。

メディア露出を病的なまでに嫌う、私以上の社会不適合者にして都市伝説当事者。それでも名の知れた界限じゃ密かに『日本のダ・ヴィンチ』『生けるモナリザ』と称されるほどの、綺麗に可愛く美しい芸術品のような芸術家。……美術室の芸術家。

有製、という苗字からわかるでしょうけれど、蒼さんの息子。実際に会ったのは昔に一度きりだけど、今でも覚えているくらいには美術的な美少年だった。

黄色の宝石、シトリンと、視覚表現を意味するグラフィックを足し算のように繋げただけのペンネーム、シトリング・ラファイで活動する彼には、一度だけ挿絵の依頼をしたことがある。

少し前に三子が雪乃に貸し出した小説がそう。

小説の挿絵は私が描くこともあるけれど、どうしても素人とプロの専門家とじゃ雲泥の差が生まれるもの。足の生えた蛇ですら美しくなることを、私は知っている。見ている。魅せられている。

と、残念ながらこれだけ。私の少ない交友の一角、昔に一度顔を合わせ、何年か前に電話で数分会話して、メールで三往復程度やりとりしただけの仲。

私の人間関係の中から、関わりが最も新しい一人を語った。

数年前が新しいというのがもう悲しみを超えていつそ笑い話だけれど、中でも雪乃の反応は頭ひとつ抜けていた。

「……あの絵を書いた人間が、実在していたのね」

この場の誰も彼もが私の古い知り合いの情報に慄く中、雪乃だけは、芸術家の存在に感動した様子で驚いていた。

「世界中にある入館料の高い美術館にでも行けば、一つか二つは、シトリング・ラファイの名と作品が展示されると思うわ」

「そうね。あれは絵だけでもかなりの金額を取れるものだったもの」

「挿絵なんて無駄遣いをしているのなんて私くらいのものでしょうね。……当時の私には痛い出費だったわ」

もつとも、ネットに投稿している方にもその挿絵は使われていて、おかげか支払った金額以上の金額が、その小説だけで毎月生まれているのだけど。

「……ちなみにですけど、ナーちゃん先輩、そのレベルのお友達、後何人いるんですか？」

「そうねえ……。人前で語れるのだと、あと一人だけね」

「語れないのも含めて、恋人は？」

「だから、いないわよ」

カップルならいるけど。

「……血生臭すぎて、できることなら会いたく無い奴もいるしね」

……実はその元予備軍がほろりだったりもするのだけど。

彼女に料理人や小説家のような、分かりやすい肩書きはない。分かりやすい偏りはない。あえて言うなら、天使とか、頭領とか。

私の好きなどおりゃんせ発祥の地でもある川越に住う、とある型破りなバカップルの

片割れ。

顔面刺青のシスコンの恋人。

私を含める、私に並ぶ、私を遥かに上回る、奇人変人を八人率いた究極のリーダー氣質。

認めるのは遺憾だけれど、雪ノ下陽乃以上の魔王様体質。

窃盗事件を強盗し、暴行事件を撲滅し、殺人事件を殺戮した、法律よりも馬車馬のよ  
うに働く、正義の使い。

暴れ馬のように、障るもの全てを気が触れたかのように薙ぎ払った、怪力の怪人。

現地の不良からは『アブダクションブル接触絶死』の異名で恐れられる、『人間寸前の銀翼天使』を自称す  
る可愛らしいお姉さん。

名を、しらかみいおり白神彩織。

凶悪な笑み一つで信仰を集める、銀翼の天使。

凶悪な暴力だけで解決する、優しい天使。

凶悪すぎて悪が善に目覚める、可愛い天使。

まったく冗談のような本当の、人間かどうかとも疑わしい、天使のような人間。

「……あの、超怖い人ってことしかわかんなかったんですけど」

「……可思議が信じられないものと居たのは分かったわ」

微妙に語り疲れて（というか気疲れ？）、温い紅茶を飲み干すと、いろはと雪乃が同情のような視線を向けているのに気がついた。

真に同情すべきは、私や芸術家、料理人すらも凌駕するあの天使の被害者（という名の犯罪者及び犯罪者予備軍）なのだけだ。

「な、ナーちゃんの友達って、個性的な人が多いんだ、ね？」

「恐ろしいのは、これ以上に語れない人がいるってことの方よね」

いや、あれは凶悪なだけで、恐ろしいというなら雪ノ下母や、殺人鬼の頃のほろりの方がよっぽど、よっぽど……。

「ククツ。別に、危険物ではあっても危険人物というわけではないわよ。実際、健常者が暮らすなら川越ほど安全な街もないし、流石に千葉まで逃げ……離れば、流石に察知もできない」

「ナーちゃん先輩、今逃げるって言いませんでした？」

「……言っていないわ」

失言は言い切る前に訂正すればセーフというのは、その天使の姉君から習ったこと

だった。……その姉君こそ、語ることにすらタブーである要注意人物筆頭でもあるけれど。

あんな伏線を引き千切って強引にタイムスリップしたりさせたりしかねない、番外編の人間に、千葉まで踏みつぶさせ……、踏み入れさせるわけにはいかない。

念のため、遠隔操作とかで携帯が勝手に着信状態になつていないか確認してみたりしたりしていると、いろはの方に何か通知がきたようで小さく音楽が鳴った。

「ん？ ……あ、あー。私、ちよつと職員室行つてきますね。多分、すぐに戻れると思いますけど」

携帯の電源を切る方法を思い出そうとしていたら、いろははノートパソコンを閉じて席を立った。

「総下校時刻になつちやったら先に帰つてて大丈夫ですからー」

何かあつたようで、あまり明るいとはいえない表情をしながら生徒会室を出た。

「……なんかあつたのかな？」

大方、平塚先生にでも新しい雑用でも押し付けられたのだと役員はうんざりした様子で言っていて実際その通りだったのだけど。でも数日後、結衣のいやな予感というものもそれ以上に悪い形で実現してしまった。

『ナーちゃん先輩!』

「……帰っていいかしら」

放課後、生徒会室で寛いでいた私の携帯にいろはから電話がきて、『もしもし』よりも先に私の名が叫ばれた。

『ダメですって! あの場合に私一人とかマジ泣きますよ!?!』

「はいはい」

人数が必要ということならと、結衣と雪乃を連れて、職員室へと向かった。

職員室ではなく、隣の応接室の扉の前で、いろはは何時になく険しい表情で待っていた。

「……ちよつとまづいことになりました」

一言だけ言って、気の重さが滲み出る遅い動作で扉を開けた。

そして、見えてしまった。

入り口近くの方のソファに座る平塚先生、こっちはまあいい。

陽乃とその母親、つまりは雪ノ下親子が、並んでソファに座っているという、悪夢。

……なにこれ、ラスボス戦かしら。

対面に座っている平塚先生も、心なしか顔色が悪い気がする。

嫌な予感、どころの話ではない。

確信。予知。察知。言い方なんてどうでもいいけれど、感じたものは、危機感。

平然と、あるいは超然とした態度の親子の視線を一身に受けて、雪乃の背筋は丸まって見えた。

その視線は私たちにも向けられてくるなか、私は受け流し、いろはは受け止めながら、平塚先生を挟むようにソファに座った。視線の前に長時間耐えられなさそうな雪乃と結衣は端の席に座る。

「お待たせしました。プロムについては私たち全員で話し合って決めたものです。……です。実行可否についての議論には私たち全員で参加させていただきます」

いろはは静かに、しかし吠えるように言った。目にも口にも、滲んでいるのは明確な敵意。

しかし、雪ノ下母は困ったように微笑んだ。

「議論だなんてそんな大袈裟なものじゃないのよ？　ただ、こちらの意見を伝えに来ただけなのだから」

「何を言いに来たのかなんて見てればなんとなく分かるけれど、その意見とやらを聞かせてもらえるかしら」

「……なんで揃って偉そうなんですか」

私や平塚先生くらいにしか聞こえないくらいに小さな声でいろはがぼやくも、雪ノ下母にはしっかりと聞こえていかなかったらしく話し出した。

「プロムについてだけれど、中止するべきだって意見が上がっているわ。インターネットの画像を見た保護者の方からうちにご相談いただいたの。あまり健全ではないと、高校生らしくないと、心配してらっしゃるみたい」

雪ノ下母は言葉を選ぶようにしながら言うのと、隣に座る陽乃に視線を向けた。すると、面倒臭そうにちらりと私を見てから、ため息を吐いた。

「卒業生の中でも賛否両論ね。……別に否定意見が多数つてわけじゃないけど」

「少数意見だからって切り捨てていい理由にはならないわ。嫌だと言う人がいるならそれに対する配慮はするべきよ」

陽乃が付け足すように言った言葉に、雪ノ下母は即座に、咎めるように言い返す。

「あら、配慮ならもう十分にしているじゃない。参加したくないならしなければいい。別に強制参加ではないし、卒業式の後のことなのだからその後の人間関係への影響も皆無よ」

「参加したくないからしないなんて自分勝手な行動は、誰にでもできることではないのよ。それに参加したがっている生徒の保護者までもが賛成とは限らない」

「『誰にでもできることではない』『とは限らない』……、意見だと言うのならそう曖昧な言葉を使って欲しくないわね」

そもそも、このモンスターペアレンツに話し合う気なんてまったくないことは話していてすぐ分かった。やっていることは、言っていることは殆ど命令も同然。

言って聞かなきや、圧力で。

同じテーブルについていた以上、使う武器も同等であるべきだ。

言って聞かなきや、暴力で。

「……………」

「……………」

「えっと、不思議ちゃん？ いきなし黙ってどうしたの？」

——キャラクターベスト生態模写、モデルケース、ほろり。

母さんに対して、信じられないほど対等にものを言っていた不思議さんが、突如として黙った。

姉さんも母さんも、対面する小さな少女を前に首を傾げている。



別にこの場にはいない人物の声が聞こえることなんて、決して不思議ではない。何せ不可思議さんは、声帯模写ができるのだから。

けどこれは、どう考えても、声帯模写の域を超えている。

「はっ！ ありがた迷惑う？ 糞でも食らえ！ んなもん迷惑かけるやつ都合だろうが！！ かけられるこっちやあただの迷惑だっつーの！！」

声以外にも、思考だとか、感情だとか。

「はっ！ あなたのためを思つてえ？ 歩いて棒に当たつて死ね！ 好きなのは可愛い娘を心配してるテメエの身の方だろうが！！」

意識だとか、心だとか。

「はっ！ 少数派意見だあ？ 鳴かずに撃たれまいと思いなから死ね！！ 死にたくないや泣くな！！ 少数に留まっちゃう理由くらいテメエで考えろ！！ 改善しろ!!! 現実を見て己を恥じろ!!!」

声こそ、海胆岬ほろりさんのものだけど、口調や態度はまるで違う。この世のすべてへの不満を吐き出すように叫ぶ、殺気立った不可思議さんは、……なんというか、痛ましかった。

「女子高生を卑猥な単語だと思つてるやつは押し並べて死ね！ 蝶のように死に蜂のように死ね！ 子供を自分のものだと思つてる毒親は毒を皿まで食いきれず死ね！ 飯

を残す奴は腹裂けて死ぬ」

……なんかもう、誰もかもがプロムなんてどうでも良くなるくらい、呆然とするしかなかった。「お腹が痛いからトイレに」とか、「ちよつと急用を思い出したので」とか、言える雰囲気ではなかった。

「……一体、何を言いたいのかしら？」

「あたしらは黙つてろつて言いたいのさあ」

眉を顰めながら母さんが尋ねるも、不可思議さんは目に見えて不機嫌そうな雰囲気と声で返した。

「つべこべ言わず黙つて見守つてろ。——テメエのガキの面倒くらいテメエだけで十分見れると、お姉さんに意見させたバカに伝えてよ。……じゃなきや美味しくないよー」

不可思議さんは、最後に脅すような口調で言いながら、ゆっくりと目を閉ざした。

「つは、はあ、はあ、はあ……」

眠つたように目を閉じたまま、酸素を貪るように吸つて吐いてを繰り返す不可思議さんは、確認するように、元の声音で呟いた。

「……私の名は不可思議可思議。生涯不変の小説家」

誰よりも自分に言い聞かせるように出た言葉に、返事をできる人間はここにいなかった。

「……また改めて伺いますので、今後は学校側とご相談させていただきます」  
だから母さんがとった手は、無視という卑劣にして下劣な汚い手段だった。

されど私の学園ラブコメは間違っている。『伍』

私は知らない。

不可思議可思議という小説家のことを、知らない。

七五三七子という女子高生のことを、知らない。

何も、知らない。

知っているのは、記された史実と、語られた事実だけ。

十六年か十七年生きているうちの、ほんの数ヶ月程度。一割にも満たない、数パーセントしか、四捨五入したら消え去る程度にしか、忘れてしまうようなことしか、私の中に彼女はいいない。

希薄で微細で曖昧で、何より不安定。

一キロの綿と一キロの鉄塊を天秤に載せて吊り合わせているような違和感は、より大きくなっている。

気がつけば雪ノ下母はここを去っていて、陽乃は宇宙人でも見つけたかのような、興奮と不安を緋い交ぜにした表情で私をジッと見ていた。凝視していた。

「……ねえ、可思議ちゃん。もしかしてだけどさあ、ブレイク・クラッシュ・デストロイ書物の国のルイスも出来たりする？」

「私は小説家であつて小説の主人公じゃないわよ」

ブレイク・クラッシュ・デストロイ書物の国のルイス——私が書いた小説に登場する、超能力や異能、神通力なんかに分類される技、能力。

何を隠そう、私自身、不可思議可思議と七五三七子を足し算したようなコンセプトで生み出されたキャラクター。私のできる宴会芸、トークマネジメント『言論侵略』や、キャラクターペースト『生態模写』が使えるように設計したキャラだった。

だからまあ、夏あたりからの読者である陽乃なら、あるいは平塚先生でも、疑問に思われても仕方ないことではあった。

疑問の余地なく、私は超能力者ではないけれど。

「生態模写、キャラクターペースト。……だっけ？ 美術的な小説家の持つ異能の一つ。声帯だけでなく性格や感情、技能なんかを自分の体に転写する異能のような技術」

作中で語っていない、詳細な考察を、陽乃は語った。

「心の内まで見逃さない鋭敏な感性と、それを再現できる柔軟な精神、柔軟な声帯あつてのものだと、私は思つてるんだけど、……正気の沙汰じゃないよ。心理学なんて専門外だし細かいことは知らないけど、可思議ちゃんみたいなのが使つていいものじゃないのは分かるよ」

「逆よ。私みたいな弱くて希薄で狂つてるような奴じゃないと、こんな狂気の沙汰は為せない」

去年の夏休み、埼玉県川越市で一ヶ月弱を生き残るために狂気の街で身に付けた、強靱な肉体。凶刃な声帯。狂人な精神。

面白くもないし、こんなものは宴会芸にもならない。秘密兵器というより、ボツ兵器。「まあ、可思議ちゃんがいいならそれでもいいんだけど、……壊れないでよね、退屈だからさ」

「もう壊れてるようなものよ。名前を二つ持つている時点で、人間は人間を辞めてるに等しいの。ハリーポッターのヴォルデモートみたいだね」

不死となるための禁術、分霊箱。あれは確か、殺人を犯すことで己の心を分断し、片方を何かに収めることで、死んでも片方が壊れない限り死なないというものだった。

私の場合、この肉体には二つの心がある。七五三七子と、不可思議可思議。水と油のように、分かれてるんだかそうでも無いんだかわからない程度に分かれています、……そ

して最近はその境界が曖昧になってきている（こう聞くとマヨネーズ見たいね）。

壊れているといえれば壊れているし、あるいは治っている、癒着しているとも、言つて言えないこともない。

そもそも、名前を増やすことで精神を、心を、——知識人が言うに、キャラクターを分けるというのは、川越特有の概念にもなりきれない、裏の影の闇に潜む怪しい風習なのだけだ。

「なんでもいいけどさ、これから大変だと思うよ。可思議ちゃんは、保護者会以前にお母さんに喧嘩を売ったに等しいからね。同じ土俵に立つちやつたんだから。モンスターペアレンツの、怪物の土俵に」

「あら、試合は諦めた方の負けだけど、現実には諦めた方が何かと得なのよ。いつも通り、一切の工夫も苦悩もなく、諦めと妥協でプロムは実現させるわ」

何も、私が諦める必要はない。私たちの誰かが諦める必要も無い。プロムを諦める必要なんて、毛頭無い。

私の言葉じゃないけれど、保護者には諦めて、ただ黙って見守ってくれていればいい。楽しんでもらえれば、それでいい。

「そっか。まったく、まったく。かつこいいんだから、可思議ちゃんは」

陽乃は感心したように笑ったけれど、すぐに笑みを消した。

「でも、お母さんも今回ばかりは本気だろうね。可愛い可愛い雪乃ちゃんのために、雪乃ちゃんの成長のために、雪乃ちゃんの挫折のために、便利な補助輪である可思議ちゃんを全力で切り離しにくるよ」

「ククツ」

笑みを消した陽乃に代わり、私が笑った。

「ボルトナットやリベットと違って、溶接は簡単には切り裂けないのよ」

モンスターペアレンツ襲来から、早くも二日が経ち。

別に中止となつたわけではないし、中止なんて後から言えないくらい早急に進めようと開き直つた生徒会は、今まで以上の作業スピードで進め始めた。

理由がなんであれ一応は前向きな一致団結は雪乃の想定していた最高効率以上の成果を出し続けており、総下校時刻より前には出来る作業の全てが完了してしまつた。

余つた時間は、各自、早めに帰るなり部活に顔を出したりするそうで、私は平塚先生と話そうと、職員室に向かう。

……今は、その途中にトイレに寄って用を足したところ。

陽乃が言っていた通り、あのモンスターは早速全力を出してきたらしい。

「ドウ、ドウフフツツ、き、君がご奉仕部のななっ、七子たんなんだよねっ。たたっ、頼めば誰でもご奉仕してくれるんだよねっ」

予め言っておくけれど、ここは女子トイレである。

そして目の前にいるのは、どう見ても男子。男っぽい女子というわけでもなく、お世辞にも整っているようには見えない顔をしている。

この寒い時期にもかかわらず油汗の滲んだ顔は気色悪く、身長も肩幅も大きい身体は大半が脂肪だと思われる。髪はグシヤグシヤで小汚く、何かで曇った眼鏡も相まって、どう見ても『キモオタ』と呼称される人種。

「ぼっ、ぼくもお願ひしたいなって、おお思つて待つてたんだよっ」

緊張からか興奮からか考えたくもないけれど、鼻息を荒くしながら覚束ない手でズボンのチャックに手をかけながらそんなことを言い出すキモオタ。

……こんな奴、この学校にいたのね。

一応、それなりの偏差値の進学校だし、確かに材木座みたいなのがいるとはいえ、このレベルがこのレベルの学校にいるとは思っていないかった。……というか現実にいるとも思っていないかった。

私が全力で引いているのにも関わらず、キモオタはついにズボンとパンツを膝あたり

まで降ろした。途端、女子トイレに汗の酸っぱい臭いと、塩気のある臭いが充満し始め、私の目の前には三角定規でも測れそうなくらいに小型で、根元が毛むくじやらの汚らしい塔が立ちはだかる。

うわあ、きもい。加えてキモい。キモさを引いて尚キモい。

現存するのかわからないけれど、全国のギャルに見せてあげたい。これが、キモいというもののだと。オタクに向かってキモいと言うなら、これくらいのもは見えてから言ってもらいたい。

死ねばいいのに。

死ねばいいのに。

死ねばいいのに。

三子が入学する高校にこいつが存在しているというのが嫌だし、こいつが先輩とか嫌だし、後輩でも嫌だ。同級生なんて言いたくもない。

「死ねっ!」

「はがっ?!?!」

キモかったから蹴った。

憂さ晴らしも兼ねて蹴った。

根元からへし折るように蹴った。

切除しなければならなくなる蹴り慣れた位置を、出せる全力で蹴った。

ズボンを降ろして歩いて歩きにくそうな膝が床につき、小さく悲鳴を上げ、異臭のする赤と白と橙色の液体を吹き出し始めた。そんな哀れな汚物を尻目に、私はそつと女子トイレを出て扉を閉めた。

耳を澄まさなければ聞こえない程度に、まだ悲鳴と重たい水音が聞こえて来る。

……こういうのって、通報した方がいいのかしらね？

どうせ証拠は何もないし、私の身の安全を考えるならしないのが最善策。

これが善良なる聖人君子なら、救急車を呼び出し、保健室まで運び込んで応急処置の一つでもするのでしようけれど、不幸にも私は小説家だった。

あ、聖人君子ならまず蹴らないのか。

「はあ……」

聖人君子だったら、こういうときどうするのかしらね？

言葉巧みに宥めまし、女子に好感を持って貰えるよう、非現実的なアドバイスでもするののか。

自分の処女なりファーストキスなりに構わず、その身を捧げてやるのか。

善良な一般市民として警察に通報し、やって来るまでの間に犯されて逃亡を許すのか。

なんて、まあ戯言にしても汚らわしいわね。

扉の前のマットであるの汚物に触れた靴裏を拭って、平塚先生に話すネタが増えたな、なんて考えていると。

何人かが足早にこちらにやって来る足音が聞こえてきた。歩いているというには速く、けれど走っているというほど速いわけでもない。音の方向に向く頃には、彼女達はすぐ目の前までやって来た。

四人の女子。別にキモくはないけれど、美少女というには、結衣や雪乃に数千歩は劣る。しかも表情は何やら怒っていて、私の目の前に立ち止まるなり、平手打ちをかましてきた。

全くもって、可愛くない。

三浦のときのように、態々理由もなく叩かれてやる私ではない。当たるより前に一歩下がると、小綺麗に煌びやかな爪が目の前を通過していった。

避けられたのがそれほど嫌だったのか、女子の顔はさらに真っ赤に染まる。むしろ紫がかっているところまである。

「ハのっ！」

計画して襲いかかって来ているのか、後続三人が罵詈雑言を吐きながら私を捕らえようと、腕を伸ばしながら詰め寄って来る。

一人、二人ならともかく、流石に四人相手に喧嘩なんて私には無理ゲーが過ぎる。私  
は人形師でも天使でもなく、小説家なんだから。

だからこの状況を、戦場ではなく儀式へと塗り替える。

「こゝかあごめ、かごめ。」

かーこのなあかのとおりーはあ「こゝ」

宴会芸、トークマネジメント言論侵略。罵詈雑言を吐いていた口から汚い言葉は消え、彼女達ではなく私の歌声が持ち主の意思を無視して這い出て来る（ように錯覚している）。

「こゝいーつーいいつ、でーやーるう。」

よおあーけーのおぼんにい「こゝ」

手は私ではなく己の口へと向かい、足はその場を動かなくなつた。両手で口を閉じようとも、壁に頭をぶつけようとも、かごめかごめは止まらない。

「こゝつうるとかあめが、すうべつたあ。」

うしろのしようめんだーあれ「こゝ」

「ぐおおアアアアアアアア!!!!」

歌声と、壁や床を打ち付ける音の演奏が終わると同時に、すぐその女子トイレから男子の断末魔が廊下まで聞こえて来た。

幸か不幸か、もう放課後なために生徒の大半はこの校舎に居ないし、職員室も部活棟

も特別棟も、叫び声が届くようには出来ていない。

ただ一人正気のまま立つ私を疑える者はいなかった。

これが、この程度が、あのモンスターの本気なのかしら。

私が生キヤラクター態模写するしかないと判断したほどの化物のすることが、こんな面白いとは思えない。蒼さんに匹敵するとは思えない。

職員室に行くのはやめておくべきか、むしろ行って誰か頼れる先生に報告すべきか悩んでいると。バッグの中で携帯電話が震えた。

バイブレーションがいつまでも続くから何かと思い見てみると、メールではなく、電話。相手は陽乃だった。

『もしもし、可思議ちゃん?』

「ええ、私よ」

つなげるとすぐに、向こうから話して来た。

『時間的に今日か明日くらいにはお母さんからのちよつかいが始まると思うんだけど、今大丈夫?』

「平気よ」

『……若干、男子の悲鳴みたいなのが聞こえるんだけど?』

「今は心霊スポットの取材に来てるのよ。ここじゃ昔、女子に男性器を蹴り潰された

ショックで自殺した醜い男子生徒がいたらしいわ。それ以来、ここがかごめかごめを女子が歌うと亡霊に襲われるの」

『……へえ?』

「死んだ男子生徒は処女厨の強姦魔で、その亡霊に襲われた女子は生き残っても生涯処女らしいわ」

即興で話を作って語っていると、電話から離れた陽乃の笑い声が聞こえて来た。しばらく馬鹿笑い続いた後、陽乃の話し声が聞こえてきた。

『当ててあげよつか。その男の子を蹴つたのは可思議ちゃん、女子は亡霊に襲われたんじゃなくって、可思議ちゃんを襲おうとして返り討ちにあつたんじゃない?』

「八十点ね」

『あー、流石に男子のアレを潰したりはできないか』

「返り討ちにしたんじゃなくて、かごめかごめを歌ったら勝手に発狂してすぐに失禁、気絶したのよ」

『……え、じゃあ潰したの?』

「童貞と処女、相對したら生き残るのは一つだけよ」

『普通、その二つは対消滅するか拒否反応起こすんだけどね』

「そもそも私は処女じゃないし」

『マジで?!』

……陽乃の純粋な驚愕の声は、初めて聞いた気がする。

「まあ、膜が破れてるってだけで、男との経験があるわけじゃないけど」

『いや、それはそれでビックリだけどね……』

電話越しに、安堵のため息が聞こえて来た。

別に大した話ではない。柔軟な股関節と処女膜は共存が難しいらしく、体育か何かでやり過ぎたというだけのこと。確か、陸上選手とかで似たようなことが起こるんじゃないかなかったかしら。

「陽乃。わざわざこんな無駄話をするために電話をかけて来たわけじゃないでしょう？」

本題に入りなさいな」

『可思議ちゃんが無駄話のインパクトが強過ぎるんだよ。……本題って言ってもまあ、注意喚起っていうか、忠告っていうか、まあそんな話をしようと思ってたんだよ。それももう要らないみたいだけど』

「そうね」

言われずとも、多少は警戒、までは行かずとも推測くらいはしていた。どんな手を使つて来るのか、とか。

でも今はもう、推測の域を超えた。

「聞いておくけれど、貴女は私の味方？ それとも敵になるのかしら」

問うと、陽乃は愉快そうに笑って答えた。

『私は雪乃ちゃんのみ方だよ。——そして美少女に魅了された一人でもある——これだけ伝えれば伝わるかなー？』

「ええ。それだけ聞ければ十分よ」

『そ。じゃ、静ちゃんには私から言つとくから、今日はもう帰りなね。帰り道の安全からいは保証してあげる』

私は電話を切ると同時に警戒も解き、一度深呼吸をしてから帰路についた。

されど私の学園ラブコメは間違っている。『陸』

美少女。

一般的には、可憐で容貌の美しい少女を指す言葉であり、美しい女性を意味する美人や美女のうち、未成年を指す。類似する概念に美幼女というものもあるが、ここでは割愛。

美少女。

私やいろはは勿論のこと、雪乃や結衣も十分に美少女と言える。云われる。

けれど、一部の、一握りの人間に限り、その言葉はたった一人の女子を指し示す固有名詞となる。

美少女を名乗ることが許された、唯一の人類。

美少女を自称することが許された、唯一の美少女。

美少女であることが許された、唯一の女。

川越に住まう銀翼の天使、白神彩織が率いる九人のチーム。名をチーム。私が八人目

なら、彼女は九人目。

苗字不明、名前は依璃<sup>えり</sup>。年齢は永遠の十七歳を自称。白神彩織、ではなくその彼氏をママと呼び、他のメンバーを兄や姉のように慕う。知識人曰く、ニュータイプの孤独体質。

容姿は決して傾国とは言い難い、どちらかと言わずにまず地味系に分類される根暗な少女である。が、故にあらゆる人類が彼女を口車に乗せ（彼女曰くただのナンパ）、あらゆる人類が彼女を背に乗せる。

かつてのこと。幼い己を犯した父親と、娘に寝取られたと勘違いし嫉妬に狂った母親、その両親を個人的なだけだと見捨てた警察官や教師。そんな下衆共を率いて当時八人のチームに戦争を仕掛け、自軍を見捨ててチームに加わった、群雄闊歩のプロフェツシヨナル。

川越では『ボクのための正義』を執行する、チームの因果の一因。

陽乃から忠告の電話が寄越された翌日。

今日も今日とて、朝と昼休みで強姦魔計三人の物を不能に蹴り上げ、女子達からの現

状理由不明の襲撃を適当に対処した。

二日続けて救急車が何台もやって来たおかげで、学校も犯人探しをせざるを得ないらしく、私は職員室へと呼び出された。

「私はまだ何もしていないわ」

「まだ何も聞いていないんだが？」

職員室ではすっかり『不可思議可思議係』、あるいは『問題児矯正係』が定着している平塚先生と対面した私は、渡されたマックスコーヒをちびちびと飲みながら言ったら言い返された。

「昨日今日で、男子計四人。全員が別々の女子トイレで倒れているのが発見された。怪私の具合は、……とてつもなく言いたくないんだが、その、なんだ、……性器がダメになっっていた」

「オブラートに包み切れていないわよ」

「無茶を言ってくれるな。君はこの程度でセクハラだなんだと言い出すような小娘ではないだろう」

「あら、私は花も恥じらう乙女よ。親友は私を元イヴと呼ぶわ」

「悪女代表じゃないか。あと君に親友はいないはずだし、リリースと表するような奴が親友なわけがない」

「嫌な確信を持たれたものね。否定はしないけど」

「頼むから少しはしてくれ……」

平塚先生はブラックコーヒーを飲み、項垂れながら話を続けた。

「それとだ。男子とは別に女子が十名、廊下で頭や手を打つという自傷行為を行ったり、精神的にダメージを負い失禁していたりしたそうだ」

「嫌な流行病もあつたものね」

「……女子の方は、一人、二人ならよくある自殺で片付けられたんだが、十人ともなるとな」

よくあつちや駄目でしょう。この学校にカウンセラーはいないのかしら。

……いや、学校のカウンセラーなんて大した当てにもならなさそうだけど。いるなら奉仕部なんていらないうし。

「現状、警察には届けていない。どうせ証拠なんて残っていないからな。指紋だのDNAだのを検査しろと保護者がうるさいんだが、それが無駄なことくらい君でも分かるだろう？」

「ええ。指紋なんて多すぎて特定できないし、DNAも同じく。監視カメラでも設置するべきだったわね」

「ああ。まあ、学校側の対応として来週には業者を入れて設置するさ。それでも廊下だ

けだがな」

「教室じや女子が着替えるものね」

「まったくだ。更衣室をなんだと思ってるんだか……」

「移動が面倒なのが問題ね。そもそも、体育のある時は制服の下に着て来るし」

「それならカメラを設置しても良くないか？」

「プライベート」

嫌な核心を突く嫌な言葉を思わず言ってしまった、流石に睨まれたりはしないが、それでも平塚先生の持つ缶が少し凹んだ。

「……一応聞くが、やったのは君ではないんだよね？」

「今こうして呼び出してることは、私を犯人とする証言でもあつたみたいね。……

それとも、前科からの推測かしら」

まあ、何かきっかけでもないとしても襲われたりもしないのだけだ。そのきつかけ、まあ要するに雪ノ下母のちよつかいがどこまで届いているかで、今後のプロムも、保護者会も、学校側の対応も変わって来る。

一つ確信があるのは、プロムが絶対不可能というレベルまでは行かないということ。それは雪ノ下母の望むところではない。

それに襲って来ている（つまり倒れている）面々に卒業生はいないみたいだし、恐ら

くだがSNSで唆されている訳でもなさそう。

「病院で目覚めた女子の数名が怒った様子で何度も君の名、というか苗字を叫んでいたそうなんだ。錯乱しているようだし証言までは至らないが、しかし私のような君を知っている人間からして見ればおかしい話だろう?」

例えば、『雪ノ下』や『三浦』なんかなら、まあわからないでもない。逆恨みや言い掛かりなんて幾らでもされそうだし。

反面、私といえ、そこまでの有名人ではない。多少は、『整形疑惑』とか『レズビアン疑惑』の噂があるにはあるけれど、二人程には至らない。

「人違いじゃないかしらね。七五三<sup>し</sup>という苗字は千葉で多いらしいし」

「残念ながら私の知る七五三は君と君の妹しかないよ」

「それは残念ね」

まあ、私も身内以外に七五三姓の人間なんて見たことないのだけれど。

「それで、私が犯人、あるいは何か関係しているんじゃないかと言いたいわけね。……面白い推測だ、君は探偵よりも小説家が向いているよ。とでも言えばいいのかしら?」

「君に言われたら皮肉でしかないな、そのセリフ」

「誰が言っても皮肉よ。犯人が言おうと、探偵が言おうと、外野が言おうと」

「小説家が言ったらそれは犯人のセリフなんだがな」

「まあ、犯人が言ったセリフだからそうなのだけどね」

でも、犯人呼ばわりされるのは具合の良いものではない。というか普通に気分の良いものじゃない。

「すぐに捕まると良いわね、犯人」

「一応確認するが、君が犯人というオチはないよな？」

「私は風評被害という被害の被害者よ」

「……そうか」

平塚先生のため息を吐く様子は、安堵したようにも、訝しんでいるようにも見えた。

「もつと話したいこともあるけど、残念ながら今日はこれから予定があるの。もう良いかしらっ？」

「あ、ああ。急に呼び出してすまん」

「別に構わないわ。——また明日」

職員室の私用の椅子を隅に片付け、私は職員室を出た。

向かう先は、ここの真下。——会議室。

会議室に生徒が入る機会というのは、基本的に無い。それこそ例外的に文化祭の出し物で文化部が使うくらいで、基本的にここは教職員だけの空間。

けれど、今日は違った。

コの字型に並ぶ机には、そのほとんどが総武校の学生でも教師でもない者達。私を含めて十人が疎らに座っている。

上座に座る三人。

大学生、雪ノ下陽乃。

小説家、不可思議可思議。

美少女、依璃。

廊下側に座る三人。

人形師、有製蒼。

芸術家、有製黄彩。

料理人、海胆岬ほろり。

窓際に座る四人。

他校生、比企谷八幡。

中学生、比企谷小町。

名探偵、八橋やっはしあられ。

その弟子、楽羅來らら。

全員が全員、私の知る人間であり、私を知る人間。

そして集うはずのない、どこか存在するはずの無い面子が揃っていた。

最後にやって来た私が上座の真ん中に座ると、この共通点が私の関係者というだけで共通項の少ないメンバーを一日で集めた美少女、依璃が席を立てて話を進める。

「取り敢えずみんな、初めましてがいっぱいのはずだし自己紹介しよつか。——ね、七子おねーちゃん？」

「取り敢える前にその呼び方をやめなさい」

「じゃあ百億歩譲っておにーちゃん、よろしく」

……あと何歩譲ったら普通に呼んでくれるのかしら、この根暗系美少女。

「……もうなんでも良いわ。私は不可思議——いえ、今はチームの文豪、七五三七子よ」

この面々を前にして、……というか約二名の元同僚を前にして、ペンネームを名乗るのは無料というもの。小説家と兼業するなんて不出来というもの。

「七子おにーちゃんのことか今回の議題なんだよ。議題っていうか、問題かな？」

七五三七ちゃんっていう頭いい子に教えてもらったんだけどね、モンスターと戦争してるんだってさ。それで助けてあげたいからみんなを集めたの。——ボクはチームの美少女、依璃っていうんだ、よろしく——」

私は一言、一文字たりとも、彼女にも、誰にも事情を話してなんていない。いろはなんか生徒会の都合もあって、昨日今日と何人かが不審に倒れていたという事件を知ってはいるものの、その認識も身近なところで起きた事件、程度のもの。

だから、依璃の言った『頭のいい子』、チームの知識人、実は私の遠い親戚らしい、かつては『人類最賢の小学生』の異名でクイズ系のテレビ出演なんかもしていた、元小学生の中学生、高天原<sup>たかまのはら</sup>七七<sup>なな</sup>にだって、話してはいない。——当人曰く、『話さない』と『知られない』に因果関係は皆無、らしいけれど。

「じゃあ次は、そのモンスターの子の、お姉さん」

依璃は赤いフレームの眼鏡越しに、陽乃を見下ろしながら微笑んだ。

「はーい。可思議ちゃん、……七子ちゃんと戦争してるモンスターの長女、雪ノ下陽乃です。大学生だよー」

いつも通りヘラヘラと、冗談めかしながらの自己紹介。

先日に電話で話した時に聞いて耳を疑ったけれど、依璃は事情を私から聞く前に陽乃と接触して味方に引き込んだという。陽乃に限らず、この場の全員がそうと言えばそうだけ。

あの雪ノ下陽乃をしても、この異例の面子に鉄仮面を維持するのは難しいらしく、薄い反応に苦笑いを浮かべながら引つ込んだ。

「じゃあ、あとはなんかテキトーによろしくー」

依璃は急に投げ出すようなことを言い出し、席に座った。

投げ出されて急に拾える日本人なんてそうはいないけれど、生憎とここには拾える人が幾らでもいる。

「じゃあ、はい。あたしは有製蒼、人形師をしているわ、あたし」

先日まで海外にいたはずの蒼さんは、浮き上がるように席を立って、右手をピンと挙げながら名乗った。

「で、こっちは息子。もち、あたしのね」

「……うにゃ?」

挙げた右手が降りて指したのは、隣に座る白髪ツインテールの美少年。タブレット端末にタッチペンで何かを書き込んでいるところに指され、気の抜けるような声を漏らしながら首を傾げた。

「んつと、ああ、自己紹介ね……」

前にあつた時と変わり無いようで、どうせ何か作品でも描いていたのであろうタブレットを仕舞い、気怠げに席を立った。

まるで触手のように、一本たりとも乱れずに揺れる二房の髪は濡れているかのように光沢し、なぜか男であるはずなのに着こなされた花柄のワンピースは一切の違和感を持

たせない。

背は蒼さん同様、私以上に小柄な、小学生にしても小さい子供体型。声も私と高い年とは思えない高い声。

「ん、僕は有製黄彩ゆうせいきいろ。シトリング・ラファイ。芸術家だよ」  
端的に語り、すぐにまた座った。

自分の作品と料理にだけはお喋りなくせして、そうで無いことにはいつだって最低限。芸術家気質というか、オタク気質というか。少なからずオタク趣味があるだけに区別の難しいところ。

「じゃあ、席順的に次はあたしかな」

と、上座側から順番にしていたため、次はほろりの番。

「あたしは京都で料理人をしてる、海胆岬うにみさきほろり。七子ちゃんの幼なじみで、今回はきつと戦闘要員。喧嘩と料理なら頼ってくれていいよー」

中学生がいる故の配慮か、元殺人鬼であることは語らずに、でも戦えることは言っておくような自己紹介。それをジョークだと断じる愚か者がいないことを見届けると、ほろりは座った。

次に立ったのは、ほろりの向かい側に座っていた、私から最も離れた位置にいる、黒髪髪の幼女。

留美に似たストレートの髪は足首あたりで切り揃えられていて、前髪は定規を当てたんじゃないかというほどに真っ直ぐ。さながら幼き日のかぐや姫のような美少女は、年相応の明るい笑みを浮かべている。

「私は川越のとある探偵事務所で買われ飼われている、人権亡き人外、楽羅<sup>らら</sup>来<sup>らい</sup>ららです。こう見えて超能力者です」

言い終えると、彼女は神社で参拝するときのように、一度手を合わせるように叩いた。すると、何の前触れもなく突然、隣に座っていた男の前に赤い文字で『次は私です』と書かれた、白い箱が現れる。

種も仕掛けも、紛れもない超能力。

こういう非日常やオカルトを好む蒼さんなんかは目を輝かせているけれど、中にはこの現象が何でもない自然現象であることを見抜けるものがある。むしろ多数で、蒼さんも例外じゃない。

隣に座る魔術師が『万物創造』と名付けた異能。

たった一つの人の人との違いで彼女には国家予算クラスの値段がつけられ、親から国へ、国から国へと盪回しにされ、つい数年前、探偵に買われて日本に帰って来たという。

そんな彼女を買った探偵というのが、隣に座る男。黒いコートに白手袋と、どこか材木座と同じ方向性を感じる怪しげな格好をしているが、しかし彼は本職。

白い箱が空気に溶けるように消えてなくなると、ため息を吐きながら彼は立った。

「チームの名探偵、八橋やっはしあられた。『魔術探偵八ツ星』という探偵事務所を川越に構えている。カルト好きの探偵とでも思っておけば構わんさ」

この場の誰よりも偉そうな態度で胡散臭い自己紹介をした探偵は、隣の超能力者から冷めた視線を向けられて気まずそうな顔をしながら座った。

なんとも残念な男だけれど、それでも有能な探偵であることに間違いはない。

なんでも、彼が探偵業を始めてからというもの、川越市にはペット探しの張り紙が一枚も無いのだから。貼られてもあるのは一日か二日程度のもので、すぐに剥がされる。

……見つかるペットが生きているとは限らないのが、川越市の嫌なところでもあるのだけ。

これで残されたのは、学生以外の肩書きを持たない二人。兄の方、つまりは私の代替元が、どうせ『最後は嫌だ』みたいなくだらない思考の元、席を立とうとして、妹に肩を押さえつけられて先を取られていた。

「比企谷小町です！ いやあ、ほんと、なんでこんな場に呼び出されてんだかって感じですが、兄共々よろしくお願ひします」

当たり障りのない自己紹介を終え、睨む兄に微笑み返しながら小町は座った。

私が最初に自己紹介をして、私の代替元の出番が最後に回ってくるというのは、何とも運命めいたものを感じる。

仮にこの世界が、私が主人公の二次創作作品だとするのなら、この場にいる原作主人公比企谷八幡という存在はここが原作のルートを外れた証明に他ならない。

否。私の代替元だけでなく、チームと関係者の三人に、有製親子、ほろり。オルタナティブその誰も彼もが現状をイレギュラーたらしめる存在であり、その誰も彼もがメアリー・スーオリ・スー主に値する存在だった。

ならば、この場で唯一無二の……、彼を指して唯一無二なんていうと、座右の銘みたいなになるわね。

こほん。

唯一無二の、ただ一人の主人公である、ともすれば『俺はどこにでもいる普通の高校生』に値しかねる私の代替元であるオルタナティブ比企谷八幡の自己紹介がどうだったかと言えば。

「ひっ、ひきやつ、……………ひきがや、八幡です。はい」

情けなかったし、ついでに覇気とか男らしさとかも色々なかった。

ないわー。

ともあれかくあれ、会議は踊る。

されど私の学園ラブコメは間違っている。『漆』

『暴行担当』

料理人、海胆岬ほろり。

人形師、有製あおい。

『情報担当』

名探偵、八橋あられ。

他校生、比企谷八幡。

中学生、比企谷小町。

『勧誘担当』

美少女、依璃。

『その他』

小説家、七五三七子。

芸術家、有製黄彩。

超能力者、楽羅來らららいらら。

大学生、雪ノ下陽乃。

人形師、芸術家、殺人鬼、名探偵、美少女、中学生。しまいには超能力者まで、魍魎もかくやという面子が集まってまともな会議ができるはずもなく。

この街での役割分担だけなんとか決めて、あの場は解散となった。

今は帰りに寄り道、というか遠回り、あるいは回り道をしてサイゼリアで陽乃とテーブルを挟んでいた。テーブルにはピザにポテトにチキンにビール。女子二人が頼むには女子力が欠けている気がするけれど、ほとんど陽乃の独断で注文したものなため致し方なし。

「……疲れた」

「でしようね」

陽乃は珍しく疲弊した様子で、背を丸くしながらポテトを齧る。私はジョッキにストローを差して啜るといふ、多方面から怒られそうな飲み方をしながら話し相手になっていた。

「可思議ちゃん関係って言うから、かっこいい子が可愛い子か、せいぜいが漫画家くらいだと思つてたらさ〜」

「残念ながら漫画家の知り合いはいないわね」

あの美少年の芸術家ならそれくらい片手間に書き上げるでしょうけれど。

「探偵に超能力者って、……不思議ちゃん、何したらそんなコネできるの」

「私のじゃないわ。……川越にね、いるのよ。社会の逸れ者を集めるのが得意な天使様  
が」

「天使様」

それこそ、チームの九人が集まれば話し合いなんてできたものじゃない。

そもそもリーダーは『可愛い正義』、その恋人のイレズミマンは『家族のための正義』  
を掲げ、日本語よりも肉体言語を好む危険物で、最年少の幼女は言葉が通じるのに心の  
通じ合わせぬ、精神的な化け物だし。永久欠番とメイド長はそもそも集まるのが困難だ  
し。

美少女と人類最賢、名探偵がせめてもの良心、……と言って言えないこともない。そ  
の三人だつてまともな価値観をしていないけれど。

超能力者の楽羅来ららが一番話しやすいというのは、何と皮肉なことか。

「……どうして力のある人間ってまともに生きられないのかしらね」

「それ、不思議ちゃんが言っちゃうんだ？」

言われながら、差し出されるポテトを口で受け取る。語ると年寄り臭くなるから多く

は語らないけれど、アルコールと塩気の組み合わせはいつでも心躍る。

「なんていうか、実感した。己の小ささを。あと母のみみっちさを」

「人間皆兄弟とよく言うじゃない」

「それ、滅茶苦茶遠回しに自分に返って来てるの分かって言ってる？」

「私が小さいのは一目瞭然じゃない」

外見的に。ロリ的に。論理的に。

「今日、もつと小さい子を見ちゃったけどねえ。芸術家、黄彩くん」

「シトリング・ラファイ。普通、仕事の依頼をするなら何百万でも足りない、ダ・ヴィンチやピカソと名を連ねる偉人に分類される人間なのよ」

「偉人。小さいどころか偉大、むしろ巨大じゃない」

「性格は小さい、と言うか見た目相応の子供なのだけだね」

「それは知ってる。あの子とはだいたい話したから」

芸術家、シトリング・ラファイは芸術家家業の傍ら、似顔絵屋まがいの小遣い稼ぎを趣味でしている。

肖像画を依頼すると数億はくだらないはずなのに、似顔絵だとなんと五百円。クオリティは芸術作品に劣らないが、唯一の難点は本人が選んだ人間しか請け負わない。額が

小さいだけでやってることはほとんどカツアゲと一緒。

そして陽乃は当然のように目をつけられ、強化外骨格も鉄仮面も化けの皮も猫被りも、何もかもを引き剥がされていた。

「これで五百円は、破格つっちゃ破格よねえ。……二度と御免だけど」

メールで送られて来た件の似顔絵を見ながら、陽乃はビールを一息に飲み干した。

「こつちから頼まなきや二度目は無いから安心しなさいな」

「もしかして可思議ちゃんもやられた感じ?」

「陽乃ほど疲れたりはしなかつたけれどね」

シトリング・ラファイは似顔絵を描く際、『お喋り』と称して心を暴くような質問を幾つもある。なんでも、絵を描くのに必要な情報を、視覚と嗅覚以外からも読み取る必要があるらしい。

私の場合は自分を小説という形で出力し続けているため、大した負担にはならなかつたけれど、陽乃のような人間にはかなりのストレスになったと思う。

帰る。食って飲んで、他愛もないことを駄弁つて潰して、陽乃をタクシーに放り込んで私は

翌朝。いつも通り三子に起こされ、沙希に水風呂から引き摺り出された。

いつもの日常だけれど、しかし違うのは、沙希の服装が制服ではなく私服であること。休日に会うことも多いのだから別に見慣れていないということはないけれど、どうも平日にその姿を見ると曜日感覚が混乱してくる。

今日は平日で、祝日というわけでもない。

けれど、今日は周辺の学校のほとんどが臨時休校。その旨を伝えるメールが、私にも沙希にも三子にも届いている。

なんでも、深夜未明、俗に暴走族と呼ばれる集団と、偶然巻き込まれたと思われる高校生数名が暴行を受け、とある公園で山積みになっていたらしい。公園は今も立ち入り禁止らしく、そもそもどここの公園なのか明かされてもいない。

で、総武校での事件と関係があるかもしれないと、まあそういうわけだった。

それでも仕事というのは無くならないもので、大人は普通に出勤するし、生徒会と奉仕部もプロムに関する仕事は絶え間ない。

「行つてらっしゃい、お姉ちゃん。気をつけてね」

「ん。多分、昼過ぎには帰ってくると思うわ」

いつもより一時間ほどだから、ゆっくりしてから登校。洗濯物を干している沙希と三子に見送られて、私は家を出た。

例の事件はすっかり広まったのか、いつも以上に人影の無い通学路。せいぜいが、休校を喜ぶ男子中学生が自転車でどこかに向かうのを見かけたくらい。途中に寄ったコンビニでも品揃えがいつもより充実していた。

平和な世の中に起きる大事件というのは何も悪いことばかりではないらしい。

そんなことを、コカコーラの期間限定フレーバーを飲みながら考えていると、総武校の正門へとついた。メールを見ずに来てしまった生徒が屯している様子を尻目に、閉まった門に足をかけて飛び越え、昇降口ではなく職員玄関から校舎へと入る。

履き慣れないスリッパをパカパカ鳴らしながら生徒会室へ向かう道中、ふと中庭の方を見て異変に気が付く。

「……………」

総武校の本校舎は口の字の形をしていて、内側には四方を壁に囲まれた中庭がある。その壁、四つ全てが塗り潰されていた。

白かったはずの壁は闇夜のように真っ黒く、窓だけは避けるように塗られ、その上に黄色で線画のような絵が描かれている。というかまだ描き途中のようで、母親のように

空中浮遊して筆を振るっている芸術家もいた。

描かれているのは、プロムのポスター。

線画でも十分に美しく、プロムキングとプロムクイーンがダンスを踊っている様子が描かれていて、足下には卒業式とその後のプロムの日程が記されていた。

窓の位置のおかげか、ここから見える三つの絵はどれもポーズが違う。芸が細かいというか、まあ芸術家のやることに野暮なツツコミは無粋。

見なかったことにして生徒会室に行こうとしたら、猫を持ち上げるように、首根っこを平塚先生に掴まれた。

「どういふことか話してもらおうか、不可思議」

「どういふも何も、私も今来たばかりなのだけど」

「それは見れば分かる」

平塚先生が睨む先は私ではなく、中庭で腕を振るっている小さい芸術家と、地上でバケツに塗料を補充している幼女。

シトリング・ラファイとららだった。

平塚先生も生徒会室に用があるらしく、道すがら教師側の事情を聞いた。

シトリング・ラファイは朝早くから出勤してきたばかりの校長に掛け合い、プロムのポスター作成を半ば強引に請け負ったそうなの。

知る人も知らぬ芸術家、シトリング・ラフィの要望を無闇に払い除けるわけにもいかず、中庭で現在進行形で行われている暴挙までも許してしまったと。

「百パーセント自然に還る水溶性塗料だから問題ないと説明されたらしいが、……まさか校舎をキャンパスにするとはな」

「オーブンキャンパスならぬ、オーブンキャンバスというわけね」

「上手くないぞ。中庭だからそれほどオーブンでもないしな」

「どうせ中庭が終われば他のところにも描かれるわ。こっちから依頼すれば、壁一枚で何億か何兆か」

「……そんなにするのか？」

「そりゃ、あれだけ大きいものを描くことなんて滅多にないし。しかもそれが一度の雨で流れるというのだから、愉快よね。文字通りタダ働き。タダより高いものがここには無くなる」

「……これ、もうプロムを中止に出来なくなつてないか？」

「そのために私たちが急ピッチで仕事を進めてるの、知ってるでしょうに。思わぬ追い風があつたものね」

「追い風というか、まるで嵐だな」

四枚目を描き終えて、満足そうに飛び回って頷いたり、首を傾げたりしている芸術家

を見て、平塚先生は愉快そうに笑う。

「まったく、今年は最後まで怒涛のままで終わりそうだな」

「私にしてみれば、この程度は日常の内なのだけどね」

「君に日常なんて似合わなすぎるな」

「そーね」

話しているうちに、生徒会室にたどり着いた。既に私以外の面子は揃っているようで、扉を開ける前からもう騒々しい。

「全員、揃っているようだな」

いつも通り、平塚先生はノックをせずに扉を開けた。私もその後が続く。

「ナーちゃん先輩おつそーい！ 一時間も遅刻ですよー！」

「授業がないんだから別にいいじゃない」

「授業がなくても仕事はあるし私も待つてるんですよー！」

「はいはい」

コンビニで買ってきたお菓子と飲み物でいろはを宥め賺して私の席に座ると、平塚先生は自分の分のパイプ椅子を用意して座ってから話し出した。

「プロムに直接関わる話じゃないんだが、しばらくの間、午後五時以降の放課活動を制限

することになった。部活とか委員会とかな」

「それは、私たちもプロムの準備に充てられる時間が減るということでしょうか。もしかして、また母さんが……」

雪乃が小さく挙手しながら、うんざりした様子で問うが、平塚先生は苦笑いしながら首を横に振る。

「いや、事はもつと現実的且つ社会的な問題でな。例の事件の犯人はまだ見つからないんだが、凶器についての指紋の中に、幾つかがとある殺人犯のものと一部だが一致したらしい」

殺人犯、という非日常のワードに全員の顔が引きつる。外の芸術家といい、度重なる異常事態に疲弊しているのが見て取れた。

「まあ、こう言うのと恐ろしく聞こえるが、実際のところは欠損が多くて、警察のデータベースにあるもののうち数十個が一致していて、そのうちの一つについてだけなんだがな」

「つまり、偶然の一致で可能性は低い、と」

雪乃は確かめるように問うと、今度は平塚先生も頷いた。

「可能性があるのだから警戒すべきだというのが学校側の意思だ。……問題ない、とは思いますが事件は起きているからなあ」

「……その事件、これからも続けばプロムにも影響出ますよね」

いろはは不安そうな顔で、呟いた。その目は私と平塚先生を行ったり来たりしている。

いろはの言葉を否定しきれず、私たちは黙るしかなかった。

その沈黙を破ったのは、外野、というか野外からの声だった。

窓の鍵が誰も触れていないのに降り、誰が触れるでもなく窓が開いて部屋に入ってくる。

「えく。僕が描いたんだから、やめたりしたら怒っちゃうよ?」

「どこから入ってきたんですか!?!」

「窓から。ウフフ、見れば分かるでしょ? それより、プロムが中止になんてしちや駄目だよ」

シトリング・ラファイ、と言うか有製黄彩にとつて、プライバシーの概念は存在しない。『僕の目はゴミ箱の底にだって届く』と自称する目には、何もかもが見えている。

私たちの肉体なんて言わずもがな。パソコンのデータから、書類の一字一句、プロムの現状に事件の全貌まで。

「満足行く仕事が出来たのかしら、シトリング・ラファイ?」

「ウフフ、まだとちゅー。創造の子がお腹すいたんだつて。だからなんかちよーだい?」

「いろはにお菓子とコーラを渡しているわ。私が買ったものだから、  
「ありがとう」

「……好きに持っていきなさいな」

ビニール袋をいろはから奪い取り、またすぐに窓から飛び出していった。

「……シトリング、ラファイ。あれが、かの芸術家？」

「ちっちゃいのに力つよつ。全部取られちゃいましたよ」

「てかつ、いま普通に空飛んでなかった!?!」

雪乃もいろはも結衣も、生徒会役員も呆然と、勝手に閉まる窓を見ていた。

「蒼さんの子供だもの。ワイヤーアクションくらい平気でやつてのけなきや困るわ」

「いや、そういう次元じゃないだろう。セキュリティが意味を成していないじゃないか」

「監視カメラのついでに生体認証でも付けることね」

「窓ガラス全てにか？ それこそ方で済めばいいがな……」

窓の外では芸術家が活動を再開したようで、ワイヤーを掛けられている窓枠や木々が軋む音が聞こえてきた。

「そ、それじゃあ、こつちも再開しましょう」

雪乃がそう切り出し、全員作業に取り掛かり始めた。

「平塚先生、邪魔だからお菓子と飲み物を買ってきて頂戴。財布を預けるから」

「君はもう少し、セキリユティやプライバシーについて学んだ方がいいと思うぞ。あと私への敬意も」

「じゃあそれもコンビニで買ってきて。レジで言えば五百円くらいで買えるはずよ」  
「君にとって敬意は、切手と同列なのか」

「お金で代替可能なら、似たようなものでしょう」

「……じゃあまあ、行ってくるが、私への敬意は売っていないと思うぞ」

「はいはい愛してる愛してる」

「私が君に求めているのは愛情よりも敬意なんだがな……」

私もパソコンを起動させながら片手間に返事すると、平塚先生は拗ねたように生徒会室を飛び出していった。

されど私の学園ラブコメは間違っている。『捌』

俺と小町は総武校での会議という名の混沌とした何かの後、子連れ探偵、八橋あられという男に連れられて、ステーキガストに来ていた。

もつと近場にサイズもガストもびっくりドンキーもあった。それなのにわざわざタクシーでここまでできたのは、楽羅来ららという自称超能力者の幼女が選んだからだった。

そいつが勝手に、四人前どころでない量のライスとステーキ、ハンバーグ、ドリンクバーを注文した頃にようやつと。一回りも二回りも年上な俺も小町も、主導権が一人の子供に握られていることを自覚した。

「それじゃあ改めて、自己紹介をしましょうか。私はともかく、先生とお二人は暫くの間共にお仕事するわけですし」

メロンソーダ四人分をお盆に載せて運んできた幼女は、お盆を消滅させながら会話を進め始めた。

「では、言い出しつぺの私から。この身につけられた呼び名は楽羅來ららいらら。万物創造という超能力を持って生まれた、元人間です。体力やカロリーとでも呼ぶべきものを消費し、石油だろうと宝石だろうとタイムマシンだろうと、たとえ神でも持ち上げられない石だろうと、シュレディンガーの猫だろうと、創り出すことが可能です」

ラノベや漫画なんかじゃ普通、自分だけが持っているならバレないように隠しているのが定石だが、この呼びにくい苗字の幼女にそういう考えは無いらしい。手元にメモ帳とボールペンを出現させ、ご丁寧に『楽羅來らら・万物創造』と書いて俺と小町に見せた。

「へえ〜。……で、どんな手品なの？」

「ふふつ。まさか、種も仕掛けもあるわけないじゃ無いですか。正真正銘、手をグーにしたりチョキにしたりするのと同じ身体能力です」

小町が子供を揶揄うように言うのと、楽羅來はボールペンを握り、メモ帳に突き刺した。とはいえボールペンなのだから何枚も貫けるわけではなく、インクが紙に滲むだけ。

「ルールが無ければチョキをパーにできるように、作れるものに制限は無く、たとえば『無』であろうと、指で狐を生み出せるように創れます」

気がつけば、テーブルにメモ帳もボールペンも無くなっていた。インクの微かな臭いすら残さずに、跡形も無く、それは消滅だった。消滅としか言えない現象だった。

「私は楽羅来らら。嘘か真か超能力者で、名探偵に買われ飼われる金の生る木。では次は、その金を腐らせる先生の番です」

「……嗚呼」

頬杖をつき、窓の外を見たままでうんざりしたような返事をした探偵。

「八橋あられ、探偵だ」

興味なさそうに、こつちには目もくれず端的に、自己紹介つつかただ名乗っただけ。

「……まあ、先生は基本人見知りなんですよ。魔術師の家系だからと大人に疎まれ、友達いない歴イコール年齢で、信じられるのは今の家族だけ。私がいるから恋人も作れない」

「黙れ、らら。そもそも欲しいと思ったことも無いし、チームだつて信じているわけじゃない」

「ええ、ええ、知っていますとも。信用も信頼も出来ず、それでもかの文豪、七五三七子であり不可思議可思議である小説家が好きだから。わざわざ千葉まで助けにきてしまったのでしょ？ 最終兵器よりも最終手段な私まで連れてきて」

「曲解するな。あいつの小説が好きなのであって、その作者が失われるのが惜しいだけで、あの薄汚い餓鬼に情はない」

大人がそんなことを言いながらストローを啜えてメロンソーダを飲んでいるのだから

ら、滑稽でしかなかった。……なんつーか、ツンデレ？

「男に萌え属性を超越すな。燃やすぞ、孤独主義」

「こっつ、声に出てましたかね？」

「読心術はチームで生きるための最低限にして唯一の嗜みだ」

マジかよ、すげーな陽キャ。陰キャとじゃ太陽と月並みに差があるじゃねえか。オリピックの選手なんて全員以心伝心してんじゃねーの？ プライバシー無いとか、それなんて陽キャだよ。あ、陽キャか。

「チームの意味を間違<sup>かんちが</sup>うな、孤独主義。俺が救いに来たのは一人の小説家だ。貴様の嫌う愚か者なんざ、百億集めても足りない、偉大すぎる人間だ」

「売らない文豪、不可思議可思議。七子さんは川越ではそう呼ばれていました。『非売品の正義』を掲げ、九の因果の一因であるあの方は、決して傷つけられていい存在ではありません。——そんな七子さんの代替元<sup>オルタナティブ</sup>、比企谷八幡さん。そして比企谷小町さん。どうか力を貸してください」

いや、俺たちただの学生なんすけどね……。

小町が素直に頷いたおかげで、俺もあいつを助けなきゃいけないわけで。

ほろりから、大まかな現状は聞いている。

情報担当の三人から受け取っている情報は、叩きのめして構わない犯罪者及び犯罪者予備軍と、私を叩きのめそうとしている学生。

それらをまとめて叩きのめしているのが、ほろりと蒼さん。

小町と私の代替元も情報収集には一役買っているようで、男子、女子それぞれの私を襲う動機は二人のおかげで分かったに等しい。

男子の方は薄々分かつてはいたけれど、私を男漁りのヤリマンビッチだという、確信に等しい信憑性を持った噂が、しかも女子には一切届かないように流れていた。

女子の方はもっと単純。総武校の、葉山を始めとする数名のイケメンたち。……その全員との交際疑惑。しかもそのどれもが中途半端にマジっぽく、私は多くの優良男子に同時に手を出したヤリマンビッチとなっていた。

どっちもビッチにさせられてるのね。……いやまあ、そのほうが変な矛盾も出ないのかもだけど。

まったく、まったく。確かに私はバイセクシャルだけれど、男のタイプは戸塚やシトリング・ラフィのような可愛げのある美少年であって、葉山なんてむしろ嫌いだというのに。

「クククツ。迷惑な話よねえ」

「……やつぱり、違うんだ」

総武高校、特別棟屋上。

三日間の臨時休校が終わると、襲ってくる女子の数はおよそ三倍に膨れ上がった。蒼さんとほろりが叩きのめした大多数は男子らしいし、女子があれだけ集まったのも納得と言えば納得。

でもまあ、一度に十何人も来られると流石に私一人ではどうしようもない。そんな私を救ったのが、なんと三浦優美子。

その人柄に違わぬ暴力性を発揮し、暴言と暴力で私の前から追い払ってくれた。

まあそれはついで、というか憂さ晴らしみたいなもので、彼女も私に噂の真実を尋ねに来ただけなのだった。

「言わなかったかしら？ 私は葉山が嫌いなものよ」

「知ってるし。……でも、雪ノ下さんとか、隼人の家って、ほら、あれじゃん？」

「まあ、あんな親がいるとありそうな話よねえ。望まぬ婚約とか、許嫁とか。アニメで昔からよくあるやつ」

「そう、それっ。……そういうんじゃないんなら、別にいいんだけどさ」

「なら安心なさい、あり得ないから」

なるほど、確かに雪ノ下母の全力とやらはかなりのもの。

ぶっちゃけ、意味がわからない。何をどうしたらそれだけの信憑性を持たせられるのか。

——どうしてそんな周りくどい手を使ったのか。

美少女、依璃になら、別の手法でこれの百倍強く、百倍効率的に私を捻り潰せた。

私でも、十倍は恐く、十倍は早く私を擦り潰せた。

私が同格と断じた蒼さんなら千倍か、万倍か。

底が知れないのか、底が真つ黒なだけなのか。

……まあ、それももう今更、どっちでも構わないのだけど。総力的にこつちが桁違いに優勢なのだから。戦争はプロムの裏で、静かに終わる。

「聞きたいこと聞けたし、もうあーし行くけど、……あなた、気をつけなよ」

「心配してくれてありがとう。持つべき者はやっぱり友達ね」

「ばっかじゃないの？ 嘘だつて分かつててもキモいんですけど」

「馬鹿にならなきゃ言えないわ、こんなこと。そういう薄っぺらい台詞を言ってくれるとこ、嫌いじゃない」

「……あーしも、あなたのそういう正直過ぎなとこ、そんな嫌いじゃないから」

古風なギャルも突き抜ければ格好いいようで、それはもう盛大に格好いい台詞を言い

残して屋上を去つて行つた。もうすぐ昼休みが終わり、授業が始まるのでしようね。「ククツ。何よ、不可思議可思議も捨てたもんじやないわね」

不可思議可思議と七五三七子。

一つの体に、架された名が二つ。

二つの名に、貸された体が一つ。

私がハイドか、私がジキルか。

……いいえ、どっちもハイド悪意ね。

ジキル善意の名は、私の代替元、比企谷八幡に譲りましょう。

私がハイド悪意で、私もハイド悪意。

一つの体に、科される名を二つ。

二つの名に、禍される体を一つ。

生涯不変で障害普遍。

まったり、ゆったり、はんなりと。

詩的に素敵に不敵に無敵に。

未練がましく名乗ろうじやないの。

捨てた狂気を余さず拾つて。

見失った悪意に顔を向けて。

終わらせるべき物語に終止符を。

「私の名は不可思議可思議で七五三七子。九の因果を読み語り、私の使命を執行する。意見文句感想考察、全てを私は聞き流す」

最終章、されど私の学園ラブコメは間違っている。

……パチモンくさいわね。やっぱり、私は代替人<sup>メタリ・スー</sup>らしい。

自宅。

「あー、あー、あー、あー。やっと完全復活だね、七子ちゃん。きつかけは誰？ 雪乃ちゃん？ いろはちゃん？ それとも先生？ もしかして、……あ・た・し？」

「私のことは不可思議可思議と呼びなさい。あと、あなたの知らない人間よ」

「アツハツハー。それはいいね。……殺さなくて済んだ」

私は午後の授業を放棄して、我が家に帰ってきていた。

全盛期を取り戻した私に授業なんて今更退屈すぎたし、何よりもお腹が空いた。

「ほろり、あなたはもう殺人鬼に戻る気はないのかしら？」

「んー？ あるわけないじゃん。心を鬼にして殺したい相手なんてもういないし」

「それは残念ね。私の相棒は殺人鬼と決めていたのに」

思えばこれまでの人生で一番楽しかったと言えるのは、殺人鬼のほろりと連んでいる時だった。……言っても誰彼構わず言える話じゃ無いわね。

やりたいことをなんでもやって、読みたいものを好きだけ読んで、鬼のように怒ったほろりと肩を組んで酒を食らう。……それも、今じゃ身長差が広がってそれも難しいけど。

「可思議ちゃんさあ」

「……何よ」

「悪趣味」

「……なんでもいいから、ご飯を作って頂戴。お腹が空いたわ」

今日は午前中に体育もあったし、時計の針はもう二時を指している。もういつ胃が悲鳴を上げてもおかしくない。出かけたのか三子も居ないし……。

「はいはい。やつぱり、私は殺人鬼を引退して正解だったよ。右手に包丁なら、左手には包丁よりフライパンがしっくりくる」

「オムライスがいいわ。トロトロじゃないやつ」

「まったく、あたしをなんだと思ってるんだか」

「最高の料理人」

「なら、最高のものを出さなきゃね」

「よろしく」

「まいどあり」

ほろりは愉快そうに笑いながら、青色の三角巾を結び直し、キッチンへと消えていった。

たった一人の妹が居ようと、遠くに一人の母親がいようと、八人のチームが居ようと、数えるのが面倒なほどにクラスメイトが居ようと、奉仕部の二人が居ようと、生徒会が居ようと、——家族でも友人でも恋人でも敵でも障害でもなく、相棒でいられるのは、やっぱり海胆岬ほろりだけらしい。

「可思議ちゃーん？ 玉ねぎ切れてんだけどー！」

「みじん切りにするんだからいいじゃない」

壁一つ隔てた先からの声も、今なら手元の文字のように読み取れる。さすが私の全盛期。頑張れば書き換えられそう。

「そういう意味じゃないの分かってて言ってるでしょー！ 玉ねぎ抜きだからねっ！」

「はいはい」

冗談。私に書物の国のルイスなんて、百年早い。文明的にも、技術的にも。

プレイク・クラッシュ・デストロイ

昼食は二人で、夕食はほろりと沙希と三子、私の四人で存分に堪能した。……なんの嫌がらせか、タンポポオムライスだったけど。

その夜。水風呂でしつかり体を冷やした後。腕試しならぬ筆試しに、新しい小説を書いていると、私の部屋に三子が二人分のコーヒーを持ってきた。

「お姉ちゃん。いま、いい？」

「ええ、絶好調なもの。打ちながらでも話せるわ」

椅子に座ったまま振り向いて答えると、三子は私の手前にカップを二つとも置き、私を持ち上げた。そのまま膝に乗せるようにして座る。

「……三子、また背え伸びたんじゃないの？」

前まで肩に当たっていたはずの巨大な胸が、今や首を挟んで肩に乗っている。

「うん。……このまま行くと、もうすぐで九十だつて」

「そ、そう。……どこまで伸びるのかしらね」

いつの間にか、四十センチ近くも身長差ができてるらしい。どうりで最近、顎で頭を突かれなれなれと思つたら。そもそも届かなかつたのね。体固いし。

「お姉ちゃん分、吸い取っちゃったのかな。……なんてね」

「百七十でもいらないわよ。私は今で十分」

「私は、もつとちっちゃい方がよかったな。お姉ちゃんの膝に乗ってみたかった」  
「今やったら、私は完全に潰れるわね」

三子は結構気にしてるからあまり触れないようにしているけれど、身長差があるということはそれだけ体重差もある。別に太っているわけじゃないけれど、どうしても三子は重量級となってしまう。

「お姉ちゃんさ」

「ん、なに？」

「最近忙しそうだけど、またなんかしてるの？」

「ええ、まあ。ちよつと、戦争をね」

「私にできることはある？」

「無い。強いて言うなら、帰ってきた私を抱きしめて頂戴」

「うん、分かった」

三子はコーヒを飲んでから、脇に腕を通して私を抱きしめた。冷たい腕が胸に当たって肩がびくつき、キーを叩く手が一瞬止まった。

「……今じゃ無いのだけど」

「だめ？ まだ寒いし、お姉ちゃんあったかいからちよつどいいんだけど」

「なら、仕方ないわね」  
「うん、仕方ない」

されど私の学園ラブコメは間違っている。『玖』

ここ、埼玉県川越市において。名を複数持つものは確かに珍しくはあるものの、別に特別と言うわけでも特殊と言うわけでも無い。

かく言う妾わらわとて、『高たか天あま原の七な七な七な』という名の他に、『人類最賢』という二つ名が二つ目の名として十分に機能している。

数年前、妾がまだ小学生だった頃。とあるクイズ番組で共演した子役は、妾の名を知らずとも、『人類最賢の小学生』という二つ名は知っていたように。

古くより日本には、仮名けみょうという、今はすっかり廃れた文化がある。有名な一例として、坂田金時には『金太郎』という仮名が存在した。

さて。ならば考えてみなければあるまい。『坂田金時』と『金太郎』には何か差異はあったのか。どれだけの差異があったのか。

無い。ある訳がなからう。その二つの名称は一人の人間のものであり、一人の人間を指し示すものなのだから。

所謂、ニツクネームというもののかの。

では、改めて考えてみなければならぬことがある。思い出さねばならぬことがある。

七五三七子と、不可思議可思議。

妾の遠い親戚という、世間の狭さを感じざるを得ない存在ではあるのだが、それは今語るべきでは無いか。話を戻そう。

妾たちチームの要因はかの『売らない文豪』を不可思議可思議ではなく七五三七子と呼び、触れ合ってきたが、どちらで呼んでも混乱をきたしそうなものだし、ここは探偵に倣い、文豪と呼ぼうかの。

かの文豪は、己の持つ二つの名をあからさまに差別化しておった。

不可思議可思議は七五三七子を、『自分より四割増しで素敵に過激』と評した。

七五三七子は不可思議可思議を、『自分から生まれた、私が描いた唯一の物語の主人公』と評した。

言っていることが正確かどうかはともかく、確かにその二つの名はそれぞれ、別のものを指し示していた。

不可思議可思議が七五三七子になることはなく、七五三七子が不可思議可思議になる

こともなく。

世間体に気を遣い、区別と言い換えても差し支えは無いが、ここは敢えて差別と言いつつ続けよう。

なぜなら、その二つには明らかな差があるのだから。

七五三七子を妾達チームは『文豪』と認識しているものの、七五三七子に小説を書くことはできなかった。

あやつには物語を作る才能こそあるものの、文才は無い。小説家より、脚本家や映画監督なんかの方がよっぽど天職と言えよう。あの顔と演技力なら、俳優もできるかも知れない。そもそもが、あの偉大な人形師の人形志望だったわけだし。

これは仮説であり、真説とするにはそれこそ、あの忌々しい超能力者にタイムマシンでも作らせねばならない説だが、きっと不可思議可思議は七五三七子が生み出したキャラクターなのであろう。

そりや当然だろと言いたくなるであろうが、そう、当然のことなのだ。

七五三七子は、小説家であり、文才という才能を持ったキャラクターを、己の中に生み出した。脳内彼氏、脳内彼女、所謂イマジナリーフレンドを作るように。

超能力者が万物創造という身体能力で宝石を生み出すように、七五三七子は妄想という基礎能力で人間を生み出した。

そりや、不安定になっても仕方がない。時が経ち自分との境界が曖昧になっても仕方がない。むしろ、年単位で完全に差別し続けていられた、不可思議可思議の別人としての完成度が異常すぎる。

鏡に向かって『お前は誰だ』と言い続けると精神崩壊する、という話があるだろう？ あれを二十四時間、三百六十五日し続けるようなものだから、狂気の沙汰だと言わざるを得ん。

まあその制作手法として、手本として、殺人鬼と料理人というまったく異なるキャラクターが一つの体に共存した存在が近くにいたというのも大きかろう。作り方は分かつても、在り方はよく見知っていたのだ。

だからまあ、文豪にしても海胆岬ほろりにしても、名が二つと言うよりキャラクターが二つだと言った方が正確か。

もつとも、その殺人鬼も今や絶滅し、その身には料理人しか居ない。けれどその料理人も殺人鬼の影響は受けている。子が親の影響を受け、親が子の影響を受けるようにの。

それと似たようなことが、文豪にも起きた。

クリスマス前、不可思議可思議が限りなく弱った時のことだ。七五三七子は弱った我が子を見て、迷いなく、考え無しに助けに入った。おかげでクリスマスイベントは完遂

できた。しかし、助けに入ったのは紛れもなく、不可思議可思議ではなく七五三七子。紛れもなくというか、むしろ紛れ込んだのか。

小説の書き方を知らない親が、小説家の子供の手伝いをできるわけもなく。子が立ち歩むのを支えながらも、しかし同時に足を引っ張ってしまっていた。

故に、しばらくの間は全盛期並みの小説家でいられなかった。

しかし人は成長するもの。

文才の無かった七五三七子が、子から学び、幾らか小説を書けるようになった。生み出してからずっと見守り続け、最近じゃ手を貸したりもしていたのだから、そりゃ上達するに決まっている。

料理人が戦えるようになったのも似た理屈なのだろうな。

あとは、子が親を、現実を受け入れれば、失った分を十分に補填できる。どころか、親の物語を作る才能がそのまま足し算され、全盛期以上の小説家になりうるかも知れん。

確かに子が親から受け継ぐように、親に似た才覚もあつただろう。七五三七子の声帯模写や腹話術、読心術は、『人類最賢』の知識量や『美少女』の魅力に十分匹敵していた。

しかし不可思議可思議のそれらは、文才だけを持って生まれたからか、十分どころか一分にも届かない程度の、言ってしまうえばお粗末なものだった。それらが十分に到れば、あるいは。

……エンパス体質だけは、やはり体質ということなのか、名に囚われず同じだけ文豪を苦しめていたか。

とはいえ、完全体ともなればそんな体質に容易く屈する文豪でもあるまい。

ドラゴンボールのフュージョンのように、人間二人がそのまま足し算されたのだからな。……あるいは半人二人が足し合わさってやっと一人になったとも言えるが。

どっちにしろ、恐ろしい存在となったことに違いあるまい。

きつと、妾達チームのリーダー、白神彩織に匹敵するような化物だ。

何せ、文豪は単独を好むものの、しかし人と組むことで真価を発揮するタイプなのだから。——リーダーと同じく。

それこそ超能力者とコンビを組めば、ブレイク・クラッシュ・デストロイ書物の国のルイスくらい容易くやってのけるだ

ろう。

殺人鬼と組めば、ハートフル・ピースフル黄金の国を実現するかも知れない。

願わくは、あの可愛らしい泣き虫だけは治らないことを祈るばかり。

妾こと、たかまのほらななみ高天原七七七からの、補足のようなのは以上。

読者諸君。残り数話であろうが、かの文豪、不可思議可思議の物語をすっかり見届けてやってほしい。

残念ながら妾達チームの物語は、番外編行きかの。

きつと、私が全盛期レベルまで力を取り戻すのも依璃の計画の内だったのでしょうね。あるいは人類最賢、七七七の予言か。

どっちなのかはともかく。面白い小説を書けるようになった翌日から、事態は急変した。——間違えた道から元のルートに戻ったのだと理解するほど、素早く劇的に。

始まりは、放課後になって帰宅した頃にいろはから届いたメール。

——学校側の判断による、プロムの中止。

正確には、まだ中止を検討しているというのが正確な現状。

シトリング・ラファイが一枚噛んでいることもあって、すぐに判断は出来ないが、放っておけばその方向性が変わることはないという。

「まあ、そりゃ、乗り込まれればそうなるわよね」

「ああ……。一色の時もそうだったが、学校が方向を定めてしまったら、一職員の私では参考意見にしかならんのだよ」

部屋着に着替えた後に来た連絡の為、とりあえずワンピースだけ着て、私は職員室に舞い戻って平塚先生と対面していた。

雪ノ下母はあの後にもう一度、今度は学校へと物申しに来たらしい。その結果が、中止の検討。

検討に留めていられるのは、学校が想定していた以上にプロムの準備が進んでしまっていたことと、シトリング・ラファイのネームバリューによるもの。

シトリング・ラファイも中止にした場合は、絵に関する諸々の費用の半分程度（と言っても億で止まるかどうか）の額を請求すると言っているし、衣装や設備をレンタルする業者にもそれなりの額を払わなければいけなくなる。

が、それも言ってみれば金か説得で解決する問題でしかない。

「陽乃が言っていたように、これはこれで試練なのかもな。雪ノ下の成長、あるいは挫折のための。……そのために、君は何度も切り離されようと攻撃を受けていたんだろう？」

「あら、気付いていたのね」

成長。あるいは、挫折のための試練。——負けイベント。

攻略法は負ける以外無く、唯一の方法はチート。そのチートというのが、例えば私だったのね。なんと弱いメアリー・スーか。

「陽乃からそれとなく聞いてはいたからな。私の中で事件と結びつけるのに、そう時間はかからなかったさ」

「だったら止めて欲しいものだけだね。連日救急車とパトカーが来ているようじゃ、そっちが原因でプロムが出来なくなるんじゃない」

幾ら三年生が自由登校で殆どいないとはいえ、流石に危険を冒してまでやるほどプロムは重要なイベントではないのが現実。

「ああ、そっちはそっちで別の問題が起きててな」

「それは、私も聞かせてもらえるのかしら？」

「……まあ、ある意味では直接の被害者なものな」

「ある意味も何も、普通に被害者よ」

平塚先生が言うに。

なんでも、警察より更の上に上から圧力が掛かり、事件と学校行事なんかとを関連づけれなくなっているのだとか。だからプロムには影響しない。……と言えば良く聞こえるが、しかしそれが保護者会にも通じるわけもない。

保護者からのクレームは、職員室が機能停止するほどに多いらしく。臨時休校こそ、例の圧力のおかげで出来ないものの、欠席に関してはどうな理由だろうと公欠扱いになるのだとか。

他にも色々支障をきたしており、学校側も下手な行動が取れないという。

「……まあ、そっちはとりあえず事件が終息すれば収まるのよね」

「そうなんだが、それこそ噂を根絶する以外に方法は無くないか？」  
「そーね」

私がヤリマンビツチだという噂が完全に消滅すれば、事件は、というか襲撃は起きなくなる。私が自衛をする必要もなくなる。

あくまでも、噂を消すことができればの話で、それはコップの中から水を、水蒸気も含めて無くすようなことで、それはそれは面倒極まりないことだけだ。

「噂を消すのは面倒だけど、なら上書きすればいいんじゃないかしら」

「ほう？　確かに理論的にはそうなるが、しかしあの妙な噂を上書きできるものか？」

まあ、突拍子も無いことを言いふらしたところでそんなのは焼石に水。——だけど、冷え切った水を一気に、大量にかけてやれば、石も冷める。馬鹿の目も覚めるというものの。

「ちようどいい噂があるじゃない。——私のレズ疑惑」

「……まだ突っ込まんぞ。詳しく聞くだけ聞いてやろう」

私がレズビアンだという噂は、文化祭あたりで若干出回った些細なもの。まあ所詮は噂で、私の整形疑惑に押し負けて殆ど消滅してるも同然だけれど、でも根も葉もない噂というわけでも無かった。

「明日、全校集会を開きましょう。三年生もなるべく出席してもらって。……そこで、私

が告白するわ」

「……そういえば、バイセクシャルだと言っていたな。それをわざわざ言っていて、それで収まるものか？」

「違うわ。だから、告白するのよ。私は平塚先生を愛していつ」

「やめんか！」

話し切る前に、拳骨で強引に口を閉ざされた。

「やめろ、私がクビになるじゃないか」

「いいじゃない。その時は私が養うわよ、静」

「やめろ！　そして名前で呼ぶな！　……その、なんだ。こつちまでその気になつてくる」

「これくらいでその気になつてくれるのなら、もう少し押せば落とせそうね」

「生憎と、その言葉のおかげで私の難攻不落は保たれそうだ」

本気で安堵したような顔をしながら、タバコに火を付けた。タバコの中でもきつめの臭いが、私の鼻腔を擽る。

「……なら、告白しても平気よね？」

「つげはっ、げほっ……。な、な、なんだと？」

今度は閉ざされないように、タバコを吸っている間に言うと、平塚先生は咳き込んで

私に煙を浴びせた

「だから、難攻不落だと言うのなら、私が告白しても平気でしょう? ……別に、振ったっていいのよ。怒ったりしない」

「いや、……君はほら、泣くだろ」

「泣かれるのが嫌だから付き合うとか、そっちの方が嫌。そんなだからいつまで経っても結婚できないのよ」

「なにい!？」

「それどころか、私に気を遣ってかまともな婚活も最近は出来ていないみたいじゃない」  
「……………なぜ私の婚活事情を把握しているんだ」

訝しむ目で私を見ているけれど、そんな目を向けられる筋合いは私には無い。……多分。

「毎日のように私の小説に感想をくれているじゃない。毎回結構な量を読んでから書いてるみたいだし、仕事と読書時間を差し引けば、まともに婚活なんてしている暇はないはずよ」

「……匿名で送っているはずなんだがな」

「メールと文面が一緒。あれを男にもやっているのなら、普通に引かれるわよ」

「…………マジ?」

「超マジ。私じゃ無かったら愛想尽かされても仕方ないわね」

平塚先生のメールはなんと言うか、こう、重たいと言うか、メンヘラ臭い。ある意味じゃ、雪ノ下以上の『面倒な女』属性だった。

「……ちよつと、コーヒー買ってくる」

「なら私も生徒会室に向かうわ。明日には全校集会を開いておきたいし、プロムもどうにかしなきゃ」

無視したのか、聞こえていないのか。私が話している途中でもう平塚先生は財布を持たずに職員室を飛び出して行ってしまった。

「……やっぱ、失恋とかクソだわ。人魚姫マジ尊敬する」

問い。

あなたは思い人の幸せのためなら、海の泡になれますか？

ならない場合、あなたは思い人を殺さなくてはならず、殺さなかった場合、思い人は幸せになれません。

模範解答。——はい。愛しい人のために、喜んで犠牲になりましょう。

私の答え。——絶対やだ。私が結婚したい。死にたくないし、殺したくも無い。パッ

ドエンドとか糞食らえ。

されど私の学園ラブコメは間違っている。『拾』

「……お姉ちゃん、お酒臭い」

「飲まなきややつてられない日もあるのよ」

「お酒は二十歳になってから」

「四捨五入すれば私も二十歳よ」

「四捨五入して死ぬ人がいるからダメなの、わかってるでしょ」

「四捨五入した死者は誤入していたというわけね」

「上手くない。そしてやつぱりお酒臭い。……酔ってる?」

「肉は酒に漬けた方が美味しいのに、人だと臭いなんて不思議な話よね」

「いや、お酒に付けたお肉も普通にお酒臭いから。焼いてアルコール飛ばしてるだけだから」

「……まさか、私を焼く気?」

「やつぱり酔ってるでしょ。……酔った時に熱いお風呂は危険だから、今日はあんまり

お湯浴びちやダメ」

「一緒に入る？」

「水風呂でしょ。いいから入ってきて」

「はいはい」

半ば自爆のように振られて、焼け酒に平塚先生を付き合わせた翌日のこと。

「……いやあんた、二日酔いって」

「考えなしに飲むもんじゃないわねえ。具合悪いし、気持ち悪い……」

「まず飲むな、未成年」

寝ても覚めてもアルコールが抜けず、私は朝から再起不能になっていた。

起きてきてもソファから動けなくて、今日は沙希の機嫌が三割増しに悪い。

「……お姉ちゃん。平塚先生に電話したんだけど、先生も二日酔いで休むって」

「あー、そう……。悪いことしたわねえ」

「あんたが潰したのかよ」

「……いや、失恋した側とされた側で飲むのって、存外盛り上がるものだったの、……あ、

三子、トイレ」

「はいはい」

既にすつからかんの胃が咆哮を上げてきて……。あ、ダメそう。

「え、は？ 失恋？」

「お姉ちゃん耐えて！」

「あつ、揺れるとつ——」

結局欠席した翌日。別に気にしないけど公欠扱いらしくて、実質ノーカンらしい。

主役、というか本題である私も平塚先生も欠席したおかげで丸ごとズレ込んだ全校集会は無事開かれた。むしろ、一日置いたおかげで予定より多くの生徒が出席してらしいし、不幸中の幸いというかなんというか。

『——最後に、生徒指導の平塚先生から連絡があります』

急遽私が言い出したことだけど、いろはの手に掛かり二週間後を予定していたものを前倒しして真つ当な集会が開かれた。普段なら一番最後である校長の長話の後、司会の生徒会役員に呼びつけられて平塚先生がステージに上がる。

体調が本調子じゃないのか、それとも単にこういう場に不慣れなのか、表情は強張っている。

『あー、……先週あたりから起きている、二年生女子の私刑事件リンチ。その被害者本人から話があるということなので、聞いてやって欲しい』

あ、違う。普通に、教え子を矢面に立たせるような現状に、まだ納得がしていないらしい。あとそもそももの話、いろはと二人で話を進めたのだから、予定を狂わされた教師陣全般が苛ついているのだけだ。

私もステージ裏から出て行って、平塚先生からマイクを受け取る。隣に立つ平塚先生からは、憂うような、気怠げな感情がひしひしと伝わってくる。

『七五三七子よ。——あなた達は私を、複数の男子に股を開く阿婆擦れだと誤解しているようにけど、それは誤解』

ステージに立ったのが私だと気付くと、あからさまに態度の変わる女子が多数、目に見えた。漂う色は、あからさまな敵意と嫉妬。男子からはそれらに困惑するような視線が集中する。

『これもいつか噂になっていただけけれど、私はレズビアンよ。男には興味無いの。あのうざったい噂は完全な嘘、ガセなのだから、もう変なちよつかいはやめて頂戴。正当防衛が成立しにくいという現実も無視して抵抗するし、警察への通報も辞さないわ。

受験と我が身が大事なら、よく考えなさい』

言い終えてマイクを平塚先生に返すと、疑惑の視線の量がさらに増えた。その元のはとんどは、事情を知る生徒会や平塚先生。

「……告白、するんじゃないかったのか？」

平塚先生は念入りにマイクのスイッチを切って、ぼやくように小声で問う。

聞かれても私は困らないけれど、平塚先生がそうとは限らないし、私も声量を合わせて答える。

「振られても恋愛は終わらないのよ。人魚姫みたく死んだわけじゃないし、美しく締まらなかつたら、生き汚く足掻いて魅せることにしたの」

妥協と諦めが成功への近道。それは全盛だろうと変わりは無い。

ただ、諦められるものは遥かに減った。

例えば、平塚先生のことなんて諦められる余地は極めて少ない。

「告白は卒業するまでお預けよ」

「……死んでもするな」

司会が閉会の言葉を述べ、三年生から各自解散していくのを尻目に、私たちも裏から体育館を出た。

久しく鍵を開けなかった奉仕部部室。最近は雪乃や結衣も生徒会室で昼休みを過ごすため、ここに人が踏み入るのも本当に久しぶりになる。

そして今日は、雪乃に呼び出されて部室に来ていた。

雪乃は何か私と二人で話す気だったようだけど、だけどその想定は、一分ともたずに想定外の彼方へと飛んで行った。

「誕生日はいつ?」

「一月三日ね」

「血液型は?」

「B型」

どこからか湧いてきた芸術家が、以前陽乃がされたように五百円を雪乃から接收し、似顔絵を書き始めた。

「何色が好き?」

「……何か一つの色に好きとか嫌いだと思ったことはないわね。強いて言うなら、……

青系統?」

「じゃあ嫌いな色は?」

「特にないけれど、汚く淀んだ色なんかは普通に嫌いね」

「ふうん……。特技って、なんかある？」

「定義や度合いによるけれど、……。合気道かしら」

「あいきどー。……。可思議、あいきどーって何？」

首を傾げながら出た雪乃の答えに、シトリング・ラファイも釣られるように首を傾げて、昼食のチョココロネを分解しながら食べている私に聞いてきた。

「合わせる、気持ち、武道で、合気道。杖や木刀を使ったりもするわ。体力も体格もいらないし、女でも護身術として身に付けたりするわね」

川越のチームに武道のジエネラリスト、少年漫画の戦闘民族のようなメイド長がいて、小柄な私へと護身術として教えられたことがある。……。すぐ居なくなつたから習つたのは一日程度だけだ。

「ふうん、武道。……。喧嘩、好きなの？」

「好んでしようとは思わないわ。やっぱり護身術よ」

そういえば雪乃は体力が無いし、体力の要らない合気道は向いてるといえば向いてるのよね。運動神経も悪くないし。

「うん、綺麗だもんね。……。ん〜」

質問しながら動いていたタッチペンは動きを止め、首とツイントールを何度も揺らし

て悩み始めた芸術家。一般人がやればただの奇行だが、それすらも可愛く美しいシトリング・ラフィに、雪乃は目を細める。

さらに三十秒くらい経ってから、質問は再開された。

「家族、誰がいる？」

「両親と、姉がいるわ」

「そう。まあ知ってるんだけどね」

雪乃が一段下がったような声音で答えると、その態度とは対照的に、シトリング・ラフィの手の動きは目に見えて軽快になった。

「人間以外になるなら何がいい？ 動物でも、妖怪でも、モノでも」

「猫ね」

「こねこね。じゃあ、どこから、何から産まれたい？」

シトリング・ラフィが楽しそうに笑みを浮かべて次の質問をすると、雪乃は怪訝そうな顔をして尋ねる。

「どう言う意味かしら」

「そのまま。木になるとか、鶏の卵からとか、人からとか猫からとか、試験管とかフラスコとか」

「……猫なら、猫から生まれるんじゃないかしら」

「んー」

芸術家としての価値観や人生観によるものなのか、ゴミ箱の底にも目が届く五感によるものなのか知らないけれど、こんな感じで、シトリング・ラフィの質問はたまに常軌を逸脱することがある。私の場合は、「犬と結婚するならどの犬種がいい？」だった。意図も意味もいまだに不明である。

「じゃあ、段ボールを料理して食べなきゃいけない時、どうやって料理する？ 調味料とか水は気にしなくていいよ」

「状況が極限すぎるけど……、確か糖分が含まれているらしいし、濃い味付けのおかゆにするのが現実的かしら」

「甘いもんねー。……うん、だいたいわかったかな。お姉さんにも色々聞いてたし、これくらいであとは大丈夫そう」

時間にして、わずか五分程度の質疑応答。満足したのか、イラストを描くためのアプリを閉じると、シトリング・ラフィは席を立った。

「色が塗り終わったら送るから、メールアドレス教えてよ」

「まあ、構わないけれど……」

雪乃がメモ帳から一枚ちぎって渡すと、シトリング・ラフィは見ただけで受け取らずに、左手を小さく振りながら部室を飛び出して行った。行き先はきつと、美術準備室。

物置としてしか使われないその部屋を根城にしているらしい。

「……終わつたのなら、とりあえず呼び出した理由を聞かせてもらえるかしら？」

「あ……。その、ごめんさい。こちらから呼び出したのに」

私の小説を読み、その挿絵なんかから興味を抱いていた雪乃は、突然の襲来に困惑した様子ではあれども、しかし嫌という風では無かった。むしろ、子供が動物園で、薄汚れたアルパカを見たような、喜びと失意の入り混じった微笑ましい様子を私は見れたから別に不満はない。

「別に構わないわ。シトリング・ラフィの逆鱗に触れるよりはマシなもの」

「彼に、逆鱗？」

雪乃は弁当箱を開けながら、不思議そうにこちらを見る。

「水を差すこと。泥を塗ること。踏み荒らすこと。怒らせると、何かと面倒なのよ」

特に、活動中に邪魔をしてしまうと面倒極まりない。癩癩を起すだけならまだいい方で、酷い時は一帯の形あるものが形を残せば幸いというレベル。

「そう。申し訳ないけれど、話は食べながらでいいかしら」

「それくらい気にしなくていいわよ。裸踊りしながら、なんて言い出したら流石に今後の付き合い方を考えるけど」

「それは真面目に考えた方がいいでしょうね」

私はチヨココロネのゴミを纏めると、もう一つ、コロツケパンの封を開ける。順番が逆じゃないのかとでも言いたげな雪乃に、早く話せと目で言い返す。

「……今朝の集会で話を聞くまで、私は最近の事件があなたのことだとは知らなかったわ」

言わずもがな、雪乃が言っているのは、私に変な噂が立ち、それが原因で私刑のようなことをされていることに關して。

「どうして、話してくれなかったの。母さんの仕業だとしても、何か助けになれたはずよ」

そんなに私が頼りなかったのか、とでも雪乃は思っているのでしょうか。私でも似た状況になれば同じようなことを考えるかも知れない。

「……頼りないとか、巻き込みたくない、なんてことを私が考えたと思っているのなら、それは誤解よ。平塚先生や、それこそあなたや生徒会にだって話すくらいはするつもりだった」

だつたら何故、と言いたげな目を向けながら、急ぎ目に昼食を口に運ぶ雪乃。

「話すより先に、頼るまでもない状況になったのよ。美少女が私よりも早く察知して、例えば名探偵が、例えば中学生が、例えば蒼さんが、例えば貴女の姉の陽乃が、一人いれば過剰戦力な知り合い達が、いま私の味方をしている。雪乃や、あるいは私までもが、何

かをするともなくとも、この戦争は終わるのよ」

「戦争……？」

「作戦名、ハートフル・ピースフル黄金の国——痛みの先に平和あり——これは私が書いた小説のキャラクター、ハートフル・ピースフル黄金の国の名を持つ、怪物の親友の平和主義者が掲げる行動理念のんだけど、要するに、話し合いで解決しないなら戦争しかないってことよ」

話しっぱなしだと食が進まないため、途中にサクサク感なんて全くない湿ったコロツケに舌鼓を打ち、コーラで流し込んで話を続ける。

「飛車角金にクイーン、ナイト、ビショップまで戦力は選り取り見取り。敵は数だけが取り柄の歩兵にポーン軍勢。王手は打った。チェックメイトは言わずもがな。……だから、心配は不要。プロムも予定通り決行できるわ」

むしろ、プロム実行こそが、この戦争での私たちのチェックメイト宣言。対して、向こうの勝利条件は私の退学。つまりはもう、詰んでいる。

「私刑リンチが今日か明日にでも無くなると思うと、それはそれで寂しい気持ちになるわねえ」  
「あなた、人生楽しそうね」

「冗談よ。普通に鬱陶しかった」

私が微かに笑うと、雪乃は小さく笑った。

「ならせめて、プロムの方は私たちに任せて頂戴。あなたはひとまず、その戦争とやらに

専念してくれて構わないわ」

「そう言ってくれるのならそうするわ。……でもまあ、もうそれほど急ぐ必要はなくなるでしょうけどね」

「相手は姉さんでも怖いと言うような人よ？」

雪乃は揶揄うような笑みを浮かべて言った。

だから私も、わざとらしく口角を上げて返す。

「ククッ。今の私は全盛期よ。詩的に素敵に不敵に無敵に、そして過激に、劇的に、めでたしめでたしと言ってみせるわ」

もう、昼休みも終わる。三時間も無く放課後となる。

——決着は近い。

されど私の学園ラブコメは間違っている。『拾壹』

放課後の屋上。結着の——約束の時間までまだ暫くあるため、何をしようかと考えていたら、超能力者、楽羅来らから呼び出された。

「どうも、七子さん。突然お呼びしてごめんなさい」

「別に、暇していたし構わないわ」

一応許可をとっているシトリング・ラファイと違い、身分証明の一切が出来ないながらもここに居るのは、完全なる不法侵入。けれど、違法とする法も、この人権亡き人外には無い。

「まず話しておくべきは、今回の私の役割ですね」

「名探偵の最終手段以外の役割をあなたが持つことなんてあるの?」

「ふふふ、それがあるんですよ」

この世のありとあらゆる闇を見てきたであろうその瞳は、しかしオニキスのように黒く美しい。鼻も口も、闇を吸ってきたとは思えない美形は相変わらず。

「今回の私はメッセンジャーです。七子さんのことはリーダー、彩織さんに逐一報告し

ています。それが私の役割、役目です」

「は、は？ リーダーに話しているの？」

リーダー、白神彩織と私の関係は、端的に言うなら上司と部下。限りなく横並びに近い仲ではあるけれど、しかし一つ、明確かつ確実な上下関係が存在していた。

そして今の私は、言ってみれば、こちらからすれば逃亡中の身。向こうからすれば家出娘。

今から一年半ほど前になる、高校一年生の時の夏休みの一ヶ月を川越で過ごしてから、私は一度も川越には行っていない——帰っていない。

それ自体には特に問題は無い。名探偵は仕事柄県外に出ることが珍しく無いし、依璃はチーム加入直後に世界を飛び回る旅をしている。

けれど、完全に音信不通なのは私だけ。メールアドレスも電話番号も、チームの全員と繋がりはない。

居場所なんてわかってはいるはずなのに、どれだけ心配であろうと、川越より外には決して助けに行かず、誰かに様子を見に行かせる。それがリーダーのやり方なのだった。

「私の脳に疑問の余地が一切もないことは、七子さんもご存知でしょう？ 会うたびに、『七子は元気ですか？』って聞かれる私の身にもなつてください」

楽羅來ららの脳は、『知りたいことをなんでも知れる脳』に創り替えられている。ネッ

トで検索するよりも先に、その回路不明の脳が答えを導き出す。未知の存在でもなんでもない私のことなんて、その脳には眼に見えるように分かるのでしよう。

「……悪かったわね」

「そう思うなら顔を見せてあげてくださいよ。あの人、彼氏だけじゃ満足できない寂しがり屋なんですから」

「……まさか、他の男にまで手を出したの？　彼氏以外の男なんて名探偵くらいしか思いつかないのだけど」

「いえ、女の子です。恋人公認の、チームとは無関係の女の子とよろしくしてるんです。久しく会っていないうちに何か愉快なことになっているようで何より。」

「まあ、……そのへんはもういいわ。——メッセンジャーと言うのなら、リーダーから私に何かメッセンジがあるのかしら？」

「いえ、まあ、……彩織さんからは一言、『偶には顔を見せにきて欲しいです』とだけ……なんか母親みたいね。そう呼ばれているのはむしろ彼氏の方なのに。」

「……わかったわ。春休みにでも行くから、そう伝えておいて頂戴」

「了解です。あ、チームのライニンググループあるんで、七子さんも入ってくださいよ」  
チームのグループって、並べてみるとなんか不思議な並びね。

「私、ラインやっていないのだけど」

「七子さん。関わりを持ちたくないからってラインをやらないの、紀元前の文化ですよ」  
「そんなことある？ ……いや、そうじゃなくて、普通に携帯が苦手なのよ」

「じゃあ教えてあげますから、彩織さんのためにもラインデビューしましょう。スマホ出してください」

「はいはい。 ……あ、バッテリー切れてる」

「もうっ！ バッテリーも今創りますから ……」

四苦八苦しながら（というかさながら）、ついに私もラインデビューをしてみました。

……ツイッターのダイレクトメッセージと大して変わらないじゃない。そっちじゃダメだったのかしら。

『楽羅来ららが不可思議可思議をグループに招待しました。』

『不可思議可思議がグループに参加しました。』

不可思議可思議

「てすと。」

「ひゃっしゅっ」

イオリン

「お久しぶりです、七子。元気にしていましたか？」  
不可思議可思議

「ええ、まあ。というかりーダー、何よその名前」

イオリン

「姉の仕業です」

シオリン

「いいじゃんイオリン！」

「可愛いじゃん！」

「お姉ちゃんはいいと思うなっ♥」

不可思議可思議

「春休み中のどっかで顔見せに行くから」

カイン

「来るなら前の日に連絡寄越せよ」

「食材とか部屋の掃除とかやる事多いんだぞ」

「急にこられても迷惑だ」

「あと無事で何より」

エリンギ

「ママ！オムレツ食べたい！」

カイン

「ママ言うな。あと帰ってきてから言いやがれ」

あられ

「仕事が終わった。今日中に帰るから夕飯は頼んだ」

カイン

「二人分だな、了解」

喧しくなってきた携帯電話の電源を切り、私は約束の時間に、約束の場所へと到着した。

なんて事のない、そこそこに人のいる普通の喫茶店。

中から依璃が私を見つけたようで、スマホを持つ手を振った。対面には、着物姿の婦人、雪ノ下母がもう来ている。

「待たせたみたいね」

荷物を下ろして、依璃の隣に座る。雪ノ下母はコーヒーを飲みながら、薄く笑った。

「構わないわ。私達が約束の時間より早く来ただけなのだから」  
「そーそ。七子おねーちゃんもなんか注文しなよ」

このあり得ない状況をセッティングしたのは、全て依璃の仕業。美少女の美少女たりうる手法なんて全くもって知らないけれど、依璃がこの場にいる事で、私と雪ノ下母が対面しても違和感らしいものを一切感じられなかった。

「それで話というのは、最近学校で起きている事件のことでもいいのよね？」  
雪ノ下母は、確認するように私に問う。

「ええ、そうね」

答えてから、私はメロンソーダを注文した。依璃からは意外そうに思う視線が、雪ノ下母からは微笑ましく思うような視線が向けられる。

「保護者会の方では、警察官の方も交えての話し合いが何度か開かれているわ。娘のこともあるし、私も参加したのだけれど、進展らしいものは特にないわね」

……うん？

私も依璃も、語られた内容に少しばかり驚かざるを得ない。

私達は何か、根本的な思い違いをしている？

私はためらわずに尋ねた。

「礼儀も弁えず言ってしまうと、私達は貴女が噂を流し、私を退学に追い込むために唆していたと確信して動いていたし、それを終着させるためにこの場を用意させたのだけだ。——貴女が事態の黒幕というのは、もしかして私たちの勘違いなのかしら」

もしそうだとすれば、これまで奇妙に思っていたことの幾つかにも説明がつく——ついでにしよう。

「貴女に言われれば、そう思われても仕方がないと、私も思うわ。でも残念。——貴女を退学させるのに、そんな周りくどい方法を取る必要なんてないもの」

「そりゃ、そうよね」

私が蒼さん並みと評した雪ノ下母が黒幕では、やっていることが周りくど過ぎるとは前々から思っていた。

私の見当違いで、実はしよぼかったのだと思ってあまり気にしていなかったけれど、やはりそうでは無く、見当違いでもなかった。

「七子おねーちゃん、どういうこと?」

依璃はアイスマルクティーを飲んでから私に尋ねる。

「だから、私達が勘違いしていたということよ」

「え、ええ? だってだって、名探偵のあられお兄さんに、ららちゃんだって居たんだよ? 勘違いなんてあり得ない……、あ」

「……ええ、そういうことね」

なんて事のない、簡単な答えだった。

状況と雪ノ下母という名前がずつと立ちはだかっていたおかげでわからなかったけれど、その壁がなくなれば、犯人が誰かなんて考えるまでもなかった。

「人類最賢、高たかまのほらななみ天原七七七」

私と依璃の言葉が完全に被った。と、同時にメロンソーダが私の前に置かれた。

やり口がエグい割に周りくどかったのは、そもそも私の退学が目的ではなかったから。

名探偵も超能力者も見抜けなかったのは、見抜けなかったのでは無く、知っていて、それでも私に話さなかっただけ。

人類最賢の考えることなんて想像することしかできないけれど、推測するに、目的は私の完全復活。

襲ってきた男が限りなく気持ち悪く、そして結婚の可能性が低そうだったのも、人類最賢による選定なら領ける。

「どうやら、私ではあまり力になれないようですし、もう行ってもいいかしら」

「ええ。疑って悪かったわね」

「あ、えっと、ボクも、疑ってごめんなさい」

私と依璃は、頭を下げて謝った。完全なる勘違いで、しかもほとんど内輪揉め同然のことで、完全なる外部である彼女を疑ったのだから、私だって頭くらい下げる。

「いいのよ。疑われるようなことをしたのは私だもの、お互い様。お代は置いていくから、二人はゆっくりね」

そう言つて、雪ノ下母は優雅にここを立ち去つた。置いていったのは、まさかの一万円札。彼女が飲んでいたコーヒーだって、千円もしないものだというのに。

「あはは……。ボク達、してやられたつて感じだね」

「そーね」

思えば、番外の存在であるチームのメンバーや、会うはずの無かつた私の代替オルタナティブ元までもが出てきたのは、とてつもなく遠回しな七七七からのヒントにも思える。

そしてきつと、この事件は牽制にもなつていた。

下手に手を出せば、娘にまで被害が及びかねないと、雪ノ下母に思わせていた。

私達は人類最賢の手のひらの上で、とうか頭脳の中で、踊っているに過ぎなかつた。

渡された一万円をどうしようかと思ひながらメロンソーダを啜ると、電源を切つたはずの私の携帯電話から軽快な音楽が流れ出した。

画面に写っている名は、777。

電話番号からではなく、ラインの通話機能でかけてきているらしい。

答え合わせのためであろう電話に、私は出た。

『クフフ。気付くのが遅かったな、七子』

『このタイミングで電話をかけてきたということは、そういうことなんでしょうね』

『犯人は妾だ、とでも言えばうぬらは満足か？』

『そうね。一応、目的というか、動機を聞いておこうかしら』

『そんなもの、うぬの回復に決まっておろう？ 八人しかいない家族なのだから、心配するのは当たり前であろうが』

『やり方が当たり前じゃないのよ』

『人類最賢らしい妾のすることが当たり前はさすがなかるうよ』

『はいはい』

『それにしても、最後の後押しがまさか三浦優美子とはのう。クフフ』

『どこまで知ってるのよ』

『どこまでも。いや、流石にららと樹生きなりには負けるかの』

『で、どこまで知っているのかしら』

『全盛期の不可思議可思議に蹴りのめされた者に認められることで、不可思議可思議を全盛期まで押し戻した。妾から見れば、随分と随分な伏線回収だと思わざるを得んな』

「メタフィクションは人生から愉悦を取り除く不毛な行為よ」

『妾達の人生において毛作の実ることなんてなからうよ』

「一緒にしないでほしいわね。私は小説家よ」

『クフフツ。まあ、小説家であり続けると言うのなら、それを聞いただけで妾は満足よ』  
「そう」

『ああ、そういえば、うぬの手で返り討ちにあつた哀れな愚か者達のことなのだが、心配はせんで良いぞ。男衆のブツは妾の方で医者を通してお返し、女子達はまあ、過ぎたる恋と醜い嫉妬は身を滅ぼすただけ言っておこうか』

「別に、大して気にしてはいないわ」

『それはそれで、人としてどうなのかのう……。とまあ、妾からの話は以上かの』

「ええ、じゃあ、春休みにでも」

『うむ』

一万円は依璃に渡し、私は奉仕部の部室へと戻って来ていた。

別に待ち合わせはしていないけれど、彼女ならこつちから連絡なんてせずともやつて

来るはず。

日の落ちていく様子を窓から眺めていると、数分と経たずに扉は開いた。

「どうやら、全てわかったみたいですわね」

「ええ。貴女達にはしてやられたわ」

「ららは誰にももらったのか、両手に持った大量の菓子が入ったレジ袋を机に置いて席に座った。

「知らなかったとはいえ、さすがは依璃さんですね。私と先生や、七子さんの代替元を並べておいて、七子さんに最後まで気づかせないとは」

「本人も気がついていないんじゃないじゃ、ただの馬鹿だけだね」

「ただの馬鹿ほど恐ろしいものもありませんよ。私が物証です」

「馬鹿だから脳を作り替えるという発想が、もう馬鹿そのものだものね」

「七子さん、私だって怒るときは怒りますよ」

言葉とは裏腹に、ららは愉快そうに笑った。

「では、最後の報告です。これが済めば私も帰ります」

「ええ」

いつも私が座る位置の対面にららが座ったから、私もいつもの席に座る。

「情報収集を行っていた先生は、仕事が終わったと判断し帰られました。今頃、タクシ―

で踏み切りに捕まっている頃でしょう。そしてご協力いただいた八幡さん、小町さんも既に撤退しており、日常へと戻られています」

「そう」

「人形師、有製蒼さんも仕事があると、昨日にはブラジルへと出立されています。料理人、海胆岬ほろりさんと、芸術家、有製黄彩さんは、プロムで料理を出すと、まだ暫く千葉に残られます」

「二人については聞いてるわ。蒼さんは、残念ね」

出立される前にもう一度会っておきたかったわね。

「例の噂はまだ微量ながら残っていますが、そのあたりは雪ノ下陽乃さんから任せて欲しいと言われています。依璃さんも、噂の消滅を確認してから、今度はエジプトにピラミッドを見に行くそうです」

「その二人については割りかしどうでもいいわ」

「そうですか？ では他に、何か確認しておきたいことはありますか？」

「また面接みたいなことを……。らら、貴女は七七七ななとの共犯なみだったということでもいいのかしら？」

「共犯、……まあそう言っただけでもないですね。勘違いして欲しくないので説明しますが、私が千葉まで来た最大の理由は、最悪の事態へと至る前に事態を止めるブ

レーキ役を務めるためでもありません。——要するにリセットボタンです」

「まあ、そう言うのならそうなのでしょうね。方法は聞かないわ」

「そうですか？　では、他に疑問もないようですよ。私はこれにて失礼します」

「からはそう言うのと、席を立ち、レジ袋に腕を通した。手には、一枚の赤い紙が摘まれている。

その紙がなんなのか、私は知っている。

名を『破ると行きたいところに行ける紙』と言い、その名の通り、破るだけで瞬間移動できる代物。

「ではでは、プロムの成功を私は確信しておりますので、後の人生ご安心を。またお会いしましょう、七子さん」

「ええ、また」

部室には私と、二枚の破れた赤い紙だけが残された。

ゴミをゴミ箱に捨て、私も家へと帰る。

「……これで学園モノを騙ったら、詐欺も同然よね」

学園モノといえ、学生達が手を取り合い、協力して何か強大な壁を乗り越える物語。あるいは愉快な日常と恋物語。

今の私のように、学外の存在達ばかりに助けられているようで、果たして学園ものと言えようか。

確かに私、七五三七子で不可思議可思議は確かに女子高生。

——されど、私に学園モノは似合わない。

「私の代替オルタナティブ元なら、なんて言うのかしらね」

否。あの孤独主義者が頼れる相手なんて、それこそ同級生くらいしかないわね。やはり彼にこそ、学園ものは相応しい。

されど私の学園ラブコメは間違っている。『拾弐』

『可思議ちゃーん？ 私に後始末を任せるなんて、ちよつと生意気なんじゃなあい？』

「私の味方をするとは決めたのは貴女でしょう、陽乃。文句はお金を払ってから言いなさい」

『お金なら母が払っているはずだけどねえ？』

「……はいはい。そっちのマンションでいいのよね」

『お酒は色々用意しとくから、お代は可思議ちゃん持ちね』

「ええ、構わないわ。だから、お代分は働いて頂戴」

『そりゃ、もう、任せてよ』

諦めと妥協が解決への一番だとは何度も言っているけれど、それでも諦めを望まない人間は多いし、解決を望まない人間も多いらしい。

「「かあごめ、かごめ。」

かーこのなあかのとおりーはあ」

たった一日で急速に事態が収束し始めた日の翌日、放課後。生徒会室に向かう途中の廊下で女子に囲まれた私は、いつも通り、かごめかごめを詠っていた。

「二二いいーいいいっ、でーやーるう。」

よおあーけーのおぼんにい」

私を中心に、釣られて喉を震わせる愚か者が六人、脳ではなく口に従い、手をつなぎ合わせて輪を作り、ゆつくりと回る。その表情は嫉妬ではなく恐怖で塗りつぶされていて、一人も余さず顔を青くさせている。これじゃあ、どれだけ回していても美味しいバターには成れなさそうね。

「二二つうるとかあめが、すうべったあ。」

うしろのしようめんだーあれっ」

「……何をしているんだね、君たち」

次はロンドン橋でも詠おうとか考えていたら、平塚先生がマントではなく、白衣をたなびかせながら参上した。彼女達の意識が逸れたため、私の宴会芸、トークマネジメント言論侵略も切れ、一目散に逃げ出していく。

「あら、平塚先生が怖かったのかしら」

「怖いのは君だよ。一体何をしたんだ」

「楽しく仲良く歌って遊んでいただけよ」

「私には、彼女達が取り憑かれているようにしか見えなかったがな」

「……気のせいよ。私は小説家であつて、霊媒師ではないもの」

「見た後では疑わしいものだがな」

「私は小説家よ。それで、何か用かしら？」

問うと、平塚先生は苦笑いを浮かべて私の頭に右手を伸ばした。そして犬でも撫でるようにわしやわしやと雑に撫でる。

「なあに、事態がきちんとならなると収まっているのか気になつてな」

「そう。まあ、見ての通りよ。あとは時間の問題ね」

「人格の問題である気もしてきたがな。……及第点まで更生したと思つていたが、悪化していないか？」

「違うわ、成長したのよ。私の生涯不変ではない、私ではない部分が」

「そうか。……それなら、仕方ないな」

「ええ、仕方ないのよ」

満足したのか、撫でるのをやめると手櫛で乱れた髪を整える。それも済むと、平塚先生はきちんとならなると満足そうに笑つた。

「では、また後でな。用が済んだらそつちに向かう」

「え？ え、ええ。伝えておくわ」

ヒーローが立ち去るかのように手を振って消えていく平塚先生は、なんと言うか……、材木座並みに痛々しかった。

「なななななつ、なななー!!」

「顔が近い。あと私は不可思議可思議よ」

「なーちゃん先輩!!」

「何よ」

「……何言いたかったか忘れちゃったじゃないですか!! ひどいですー!」

「なんて理不尽」

あれ一件だけで、以降は特に問題無く生徒会室に辿り着いた私は、一步踏み込んだだけでいろはとエンカウントしてしまった。しがみつかれてコマンドを選べず、逃げることもバシルーラを唱えることもできない。

「雪乃、この酔っ払いどうかしなさいな」

「紅茶とクッキーしか口にしていないはずよ」

ここでの作業風景は相変わらずなようで、雪乃はキーボードを叩きながら目もくれずに言う。

心配と微妙な怒りをマーキングでもするかのように引つ付いてくるいろはを結衣が引き剥がしてくれたおかげで、ようやくと二歩目へと足を進めることができた。

「昨日の今日で来たということは、もう決着したのかしら？」

「まあ、そうなるわね。私の負け戦ならぬ勝ち戦で、別に壮絶な舌戦があつたりはしなかつたわ。私たちが勝手に納得して、それだけよ」

「そう言うのなら、そうなんでしょうね。腑に落ちないところはあるけれど」

「なら言ってみなさいな。ある程度は説明できるはずだし」

ここまで話してやつと、雪乃は手を止めてこっちに目を向けた。

「川崎さんと、戸塚くん。貴女が被害者だというのに、二人が全く介入していないというのは妙よ。それに、嫌われているとしても、当事者の一角である葉山くんが何もしていないのはおかしいわ」

「沙希と戸塚、ね。その二人に関して言うのなら、私の信頼の為せる業ね。関わるなど一言言えば、ちゃんと守ってくれる良き友人よ」

「よくもまあ、そんな似合わない台詞を堂々とと言えるわね」

「似合わなかというと私の言葉よ」

ジトリと、訝しむ目で私を見るけれど、しかし口元までは気が回らないのか、薄ら笑みが見てとれる。

「葉山に関しては、陽乃に任せたわ。手を出して来ると思うから、やりたいようにしなさいな。それでそうなったのなら、そういうことなんでしょうね」

「そう、姉さんが……」

「というか、細かいところは大体陽乃に一任したわね。誰も彼も全体攻撃ばかりで、陽乃みたいな単体攻撃が得意な駒って希少だったのよ」

「姉さんを駒呼ばわりしたの、多分貴女が初めてよ。母でも制御不能なところがあるんだから」

「制御なんて私にも無理よ。ビシヨップを直進させることはできないし、ナイトに真っ直ぐ歩かせることだって私にはできないもの」

「チェスで例えられると、全体攻撃とやらが可能な人たちって反則に聞こえるわね」  
「そりゃ、チェス盤をひっくり返せる番外の存在だもの。規格も材質も別物よ」

今回の戦争だって、七七七にしてみれば勝とうが負けようがどうでもいいものだった。そんな勝負に私たちは全力を尽くし、どこるかエイトクイーンを完成させたようなものなのだから、ある意味七七七の一人勝ちとも言える。

「ゆきのんとなーちゃん、もしかして難しい話してる?」

「いいえ、可思議からチェスの誘いを受けていただけだよ。結衣さん、貴女もプロムが落ちて着いてから一緒にどうかしら」

雪乃はしたり顔でそう言つて、結衣を困らせる。その目には愉悦の二文字が滲み出ている。どこか陽乃や二人の母親にも似たものを感じた。

「えっと、あたしよくわかんないんだけど……」

「取つてもいない狸の生皮剥いでないで、仕事をしなさいな」

「うええ!？」

「あら、振られてしまったわ」

「なーちゃん先輩の一人勝ちですねー。と言つても、もう仕事もほとんど無いんですけど」

なら無戦無勝無敗。ただの戯言でしかなく、合間の茶番でしかない。

急ぐ必要は無いと後回しにしていた仕事にまで手を出し始めて、少しばかり経つと、生徒会室の扉がノックも無く唐突に開いた。

誰がやってきたかなんて、書面やパソコンの画面から目を逸らさずとも、この場の全

員が察した。

なんせ、この学校にノックをしない人間なんて、一人しかいないのだから。

「……不可思議。その失礼極まりない地の文をなんとかしろ」

「文脈よりも先に空気を読みなさいな、平塚先生」

「君にだけは言われたくなかったよ……」

そういうえば、平塚先生が後から来ることを伝え忘れていた。おかげで誰も彼もが、自然にパイプ椅子を取り出す平塚先生に丸い目を向ける。

「君達に良い知らせと、良くない知らせがある。良い知らせから聞きたまえ」

「そういうとき、選択権は私たちにあるのがテンプレートじゃない。筆を振るわなすぎて錆びたのかしら？」

「君と一緒にするな。話の順序というものがあるのだから仕方あるまい」

私の軽口を冷たくあしらってから、先生は話し始めた。

「まず良い知らせだが、我々教師と保護者会の話し合いの末、準備自粛は取り消し。君たち主導の元プロムを執行することが正式に決まった」

平塚先生の言葉に、主に生徒会役員達が「おおっ！」と声をあげた。今日までの何日間かは、それこそブラック企業ばりに、馬車馬よりも働いていたのだから無理もない。これで中止が決定なんてなった時には、最悪の場合、死者が出かねる。

「何があつたのかと聞きたいだろうが、まあ言つてしまえば大人の都合というやつだ。大人達が想定していた以上に、プロム周りの話が大きくなつていてな。無かつた事にはできないと、両者が判断した。——よく頑張つたな」

短い労いの言葉に、奉仕部一同も肩の荷が降りるのを実感した。無理に作業スピードを上げて、二週間近く予定を繰り上げた苦行とも言える数日間が報われるようだった。「次に良くない話なんだが、最近此処いらを騒がせていた事件の犯人がまだ捕まつていない。警察も懸命に搜索しているが、犯人を決定付ける証拠が限りなく少ない以上、捕まらないと予想されている」

……忘れていたけど、そういえばあつたわね。ほろりと蒼さんが暴れ回つた事件に関しては、忘れていくくらいには何もする気はなかつた。

ほろりは逮捕されたところで、少年院を追い出された諸々の事情から大した事にはならないはずだし、蒼さんはもう日本には居ない。

「……確かに愉快な話ではないけれど、それは私たちに不都合の生じる話なのかしら？」私が問うと、平塚先生は哀れむような笑みを浮かべて答える。

「警備上の理由から、プロムで体育館が使えなくなつた。ある程度学校側から予算は回せるが、場所は君達に決めてもらう事になる」

つまりは、仕事の追加だった。場所を探す以外にも、手続きやら、撮影して以来その

ままの体育館二階の片付けやらも丸ごと任されたわけだ。軽くなつたはずの肩に、ズシリと新たな荷が押し掛かる。

「あ………………。業務連絡は以上だが、何か質問はあるかね？」

奉仕部からは特に無く、いろはが新たに降つてきた仕事の詳細を聞いて、平塚先生が言うところの業務連絡は終わつた。

午後五時過ぎの、帰り道。偶然居合わせたらしい平塚先生に校門で見送られ、私達奉仕部は帰路に就いた。できれば今日中にも会場を決めてしまいたいところだったけれど、午後五時までという時間制限がある以上、候補地をいくつか決めることしかできなかつた。

そういうえば、この三人という組み合わせも大分久しぶりな気がする。最近は私が単独行動をすることが多かつたし、そうで無くてもいろはが居た。

「そうだ、なーちゃん。春休みに奉仕部だけでどつか出かけようつて話を前にゆきのんとしてたんだけどき、なーちゃん平気？」

きつと、どこかしらのタイミングで話そうとしていたのでしようね。結衣はいろはが

いないこの時を逃さんとばかりに言った。

「春休み、ねえ。川越にしばらく行かなきゃならなくなったけれど、予定を空けようと思えば空けられるわ。そこまで離れているわけでもないし」

出来ることなら、一泊二日、むしろ日帰りが望むところなのだけれど、絶対にそうはいかないのが目に見えている。得体の知れない組織との戦争とか、街中のゴミ拾いトーナメントとか、メントスコーラ勝ち抜き戦とか、何が行われてもおかしくない魔境なのだから。

「川越って、確か埼玉の観光地でもあったわよね。蔵造りの町並みとか、菓子屋横丁とか」

比較的近場な観光地だからなのか、そういう趣味でもあるのか、雪乃が得意気に観光名所の名を並べた。

「菓子屋って、お菓子屋さん？ お菓子の横丁？ 横丁ってなんだっけ」

結衣はお菓子の家でも夢見るような顔つきで言っただけけれど、あながち間違いという訳でもない。

「駄菓子屋が死ぬほどある観光スポットよ。駅で長い麩菓子を持ち歩いてる人を見かけたら、十中八九、菓子屋横丁に行った帰りだと思って間違いないわ」

「……確かに時々見かけるけど、何かが間違っている気がするわね」

「でもなんか面白そうっ！ ゆきのん、あたし達も行くようよ！」

「え、ええ、そうね。ご迷惑でなければ……」

結衣が急なことを言い出し、雪乃もどうやら乗り気らしい

別に、表向きは普通に観光地だし、二泊三日くらいならなんとか暇も潰せると思う。最悪、大宮なり東京なりにも行けば高校生なら十分に楽しめるでしょう。

「……歓迎はするけれど、おすすめはしないわよ。私が真つ当な真人間に思えるくらいの奇人変人の宝庫だし」

「そこ、日本なの？」

「銃社会の方がまだ秩序があるわね。人生早まるにはあと一年早いわよ」

「その未来、私たちが留年か落第してるじゃない」

「えく？ でもなんか面白そうだし、何よりなーちゃんの友達に会ってみたい！」

結衣が強請るように言うと、雪乃は躊躇いながらも頷いた。

「……………まあ、陽乃を関わらせた以上、妹である雪乃は無関係でいられるとは限らないものねえ」

「なーちゃんあたしは!?!」

「来たいなら来れば良いじゃない。関わるなら止めはしないわ。責任も取れないけど」

「なんか歓迎されてないっぽい……」

「お勧めしないだけよ。埼玉なんてそんな楽しい場所でもないし。ダサイタマとは、よく言ったものよ」

「嫌なネタバレだー!」

「本当に嫌ね」

嫌なら来るな、とは言わない。話したいことなんて幾らでもあるし、どれだけ時間があっても足りない。

だからか、近くだからと選んだ総武高が、今だけはもう少し距離があればとも思う。

「じゃあ、また明日」

「ええ、また」

「なーちゃんまたねー!」

されど私の学園ラブコメは間違っている。『拾参』

時は飛ぶように過ぎ、もう卒業式当日。プロムの準備は残すところ、料理と搬送。駐車場には家庭科室近くの位置に、シトリング・ラフィの所有物のトラックが二台止まっております。一台には芸術家が手掛けた装飾品が詰め込まれていて、もう一台には完成した料理から順に次々と詰め込まれていく。

鍋がそのまま運ばれてくることもあれば、大量の揚げ物が山盛りに盛られた皿もあり、全て芸術家が芸術的に運んでいる。

そんな様子を、卒業式をバツくれた私は家庭科室の隅で椅子に座って、ボーッと眺めていた。ほろりもシトリング・ラフィも、さながらプロのように手慣れた動きで混ぜたり、振るったりしている。素人以下な私には決して真似できない、逆に機械的にも見える手際だった。

「可思議ちゃんは良かったのー？ 卒業式に出なくて。つてか怒られないの？」  
「知っているでしょう、私は泣き虫なの。無様を晒す趣味は無いわ」

「そんな恋する乙女みたいなことを言われてもねえ」

「私は今でも恋する乙女よ」

ほろりが唐揚げ一つ一つに爪楊枝を刺しながら聞いてくる。

その目には楽しそうな色が見えていて、いつか人肉を下ごしらえしていた時よりよっぽど幸せそう。

「ふうん？ あたしは小学校のしか出たことないし、あんま覚えてないけどさあ。でも、毎年やるからには大事なもんなんじゃないの？」

「そーね。さようならとか、また明日とか、その程度には大事なことよ」

「アツハツハー。そう言う割に、可思議ちゃんはあたしにあんま言ってくれないよねえ。そういう、挨拶ってやつ」

……そうだったかしら。

……そうかもしれない。おはようとか、こんにちとはとか、ほろりに限らず言った記憶が、無くはないけどあんまり無いし、ほろり相手に限れば、さようならとか、また明日とか、絶対言う気にならない。

「別れが惜しい、というのは私に限らず当然の感情でしょう？ ただでさえ、私達は何時だつてたまにしか会えないのだから」

「超たしかに。……ああ、でも、あたしが捕まった時には珍しく言ってくれたっけ？」

「もう会わないと思つていたもの。別れの言葉は言うべきよ」

「卒業式はさぼったくせによく言うね？」

「卒業生の知り合いなんて、元生徒会長くらいよ。……名前覚えてないけど。一人ならわざわざ儀式粧めかす必要もないわ」

「名前覚えてないんなら、その人にも別に言わなくていいんじゃない？」

「そーね」

ほろりが担当する最後の料理、唐揚げに業務用の大きいサイズのラップを掛け、フルーツサンドを花柄のように箱に押し込めて、それら全てを、一足先に料理を終えていたシトリング・ラファイが纏めて運ぶ。肩、二の腕、頭頂と、転んだら大惨事になること間違い無い場所にわざわざ載せている。材料に余剰はないし、転んだらどうしようと私もほろりも思わず手を止めて、見えなくなるまで見守つてしまう。

十秒ばかりの沈黙の後、体育館の方から「文化してるかー!!」という、どこかで聞いた、明らかに卒業式で出すテンションではないものが聞こえてくる。

「なんか楽しそうだねえ。あたしももう終わるし、見に行つてみる？」

「行かないわよ。まだ現地の準備があるし」

流石にそれくらいしておかないと、いろは「私が送辞喋るのになんでいないんですかー!」とかつて怒つて面倒くさい。

……私、まだ送られる立場じゃないはずよねえ。

「それくらい、あたしとシトリン君でやつとくから可思議ちゃんだけでも行ってきたらいいのに」

「だから、別にいいわよ。……ていうかシトリン君って。あれでもあなたより年上よ。私と同じ年」

「ハッハー。可思議ちゃんも彼も、年上には見えないけどねえ」

「三子がでかいのよ」

「可思議ちゃんもちっちゃいけどね」

……別に、身長に対してコンプレックスなんてないけれど、でも実際に越されてみれば向かつ腹も立つわね。

「うっさい。それより喉が乾いたわ、紅茶を淹れて頂戴」

「コーラじゃなくていいのー?」

「あなたが昔作ったコーラもどき、不味かったじゃない」

「アッハー。ああ、覚えてる、覚えてる」

「コーラ風味の、」

「シナモンソーダ」

あら、コンプレックスになっていないのね。ほろりが殺人鬼にもなる前に、ネットで

見かけたレシピをさらに改良して作ったオリジナルコーラ。

シロップとカラメルにスパイスやら、ハーブやらを混ぜ、濃縮された、コーラソースとも呼ぶべきものを炭酸水で割ったもの。

甘さと辛さが同時に来た後、最後には炭酸の余韻とシナモンの風味が口に残る、コーラと言えば、コーラと言えないこともない何か。音痴な私の舌をして、決して美味しくなかった貴重な逸品。

「まだまだ爪が甘いねえ、可思議ちゃんや」

「あなたの紅茶も甘いわ」

「京都生まれの習性かねえ。京都のコーヒーは甘ったるいんだよ」

「あら、爪も甘いままなのね。千葉だってマックスコーヒーは甘いわ」

「え……。あれって、飲むヨーグルトの亜種、飲む練乳のコーヒー味じゃないの?」

私の代替元の好物に対して、本気でそう思っている訳ではなく、冗談で言ってるとにかく良い表情でほろりは言った。

「まあ、あえて否定はしないけど」

外から、二台のトラックのエンジン音が聞こえてくる。

私も砂糖を入れたわけでもないのに妙に甘い紅茶を飲み干し、席を立つ。

「およ、まだ予定より少し早いよ?」

ほろりはティーセットを片付けながら首を傾げる。

「くだらないことを思いついたのよ。きつと楽しいから付き合いなさい、ほろり」  
「それは、また随分と美味しいね」

——三子、私の部屋から持ってきて欲しいものがあるのだけど、頼めるかしら。

——いいえ、もう一つの方。……あなたの部屋にあるの？ 別にどっちでもいいけれど。

——決着をつけ忘れたのよ。

——勝負は相手に合わせてこそ、決着が楽しいのよ。

——藪に潜んだ蛇なんて、突いてあげなきや可哀想じゃない。

「……これ、あたしどころか可思議ちゃんも要らなかつたんじゃない？」

「そんなの当たり前じゃない。蒼さんの血縁よ」

私とほろりがタクシーで到着する頃には、芸術家による芸術的な装飾は、一足先に來ていた芸術家の手によって芸術的に終わっていた。

「ワイヤーアクションって、そういうものだっけ。……いや、まずワイヤーアクションってやっぱりああいうんじゃないでしょ」

蒼さんと散々暴れまわって、見慣れているはずなのに。ほろりは脚立でも梯子でもなく、ワイヤーアクションのように浮遊して、天井や壁に装飾を施したシトリング・ラフィを訝しむ目で見やる。

「あんなの、超能力の領域だよねえ」

「やらなら、ワイヤーなんて使わずに空中浮遊できるわよ。それに超能力ではなく異能と、彼らは呼んでいるわ」

明るいホールの中で滑稽に光るミラーボールを満足気に見たシトリング・ラフィは、入り口で立ち竦んだ私たちの元へ向かって着地する。

「ウフフ。あとは料理を運ぶだけだよね?」

「ええ。生徒会と奉仕部が来てから、纏めて並べて頂戴」

お前が働くんじゃなかったのかよ、とでも言いたげな顔を見せながら、シトリング・ラフィは隅に並べた椅子に座ってタブレットを取り出した。……まあ、私たちやプロムをネタに描き放題、作り放題は諸々の報酬だし構わないけれど、まだ始まっていないのに

何を描くつもりなのかしらね。

私たちが申し訳程度に、テーブルを運び出す程度の仕事だけした頃。駐車場にタクシーが停まった。

「お待たせ、お姉ちゃん。ほろりさん」

「ベストタイムिंगよ、三子」

三子の手には、桜色で桜柄の着物一色。

予定では卒業式が終わる時間の、さらに三十分ばかりが経ってから、レンタル業者と共に生徒会と奉仕部の面々が遅れて（私が早いだけけど）やって来た。

「どうも、おいでやす」

私もほろりも、普段は絶対しないくらいに声音を訛らせて、観光地の店員の真似をして彼女達をこの場に歓迎した。雪乃は呆れ果てたようなため息を吐き、結衣は目を丸くしている。そしていろはは、案の定肩を怒らせて寄ってくる。

「卒業式サボってなに遊んでるんですか、なーちゃん先輩」

「見間違いないじゃないかしらね。私はちゃんといたわよ」

「千葉に金髪なんて何人もいないんですから、間違えるわけないじゃないですか!!」

「そういえば三浦がいなかったし、私を彼女と見間違えたんじゃないかしら」

「いや、金髪でも二人は色も髪型も違いますから。三浦先輩はいましたし。てか滅茶苦茶泣いてましたし」

……なかなか誤魔化されないわね。

「じゃあ葉山よ。あれで意外と非道なところもあるんだから、間違いないわ」

「じゃあつてなんですかっ! もっと誤魔化す努力してくださいよ! 一番あり得ない人選ですよ!!」

「でも、私の金髪仲間って他に、ほろりくらいだし」

……葉山が仲間って、なんか嫌ね。染め直そうかしら。思いきって赤とか青なんてどうかしらね。

「諦めて負けを認めなよ、可思議ちゃん。変な時に限って諦めが悪いんだから」

わざわざ私に合わせてエプロンも三角巾も外したほろりが、ほろりに合わせてポニテールに結った私の頭を撫でながら促すように言った。

「諦めたら試合終了、らしいわよ」

「なら今回は可思議ちゃんの負けだね」

「次は勝つわ。そのための勝負服じゃない」

かつて京都では、着物を日常的に、非日常のような暮らしの中でよく着ていたことを思い出して、思わず私は笑った。ほろりも、普段は笑いで隠す、年相応の笑みを見せて返した。

「聞き忘れてましたけど、なんでそんな格好してるんですか」

いろはは、問い掛けるというより、愚痴るように私に尋ねた。

「だから、勝負服よ。完全に決着をつけるためのね」

結衣も雪乃も、怪訝そうな表情を浮かべるばかりだった。

「お姉ちゃん、外だとよく喋るんだね。熱ある?」

「少ない言葉でも楽しいのはあなた相手だけよ、三子」

着物を着るのはもう何年ぶりで、元より大した力の無い私には力になれず、シトリング・ラファイに並び、私と三子は隅の椅子に——私は三子の膝の上に——座った。

「私は足らず口も少ないとつまらないんだけど」

「無駄口を無駄遣いしないのが小説家よ。……なんてね」

「やっぱり熱あるでしょ。お尻があっつい」

「平熱が高いのは知ってるでしょ」

「知ってて言ってるの。あつつい」

「そう。じゃあ、興奮冷めやらぬ、ってやつなのかしらねえ。きつとほろりに当てられたのよ」

「ほろりさんは、むしろ体温低い方だったと思うけど」

「あなたも、言葉の遊びを学びなさいな」

「知ってる。でも遊ぶのは苦手なの」

「知ってるわ。あなたは私の妹だもの」

「だから教えてね、お姉ちゃん」

「ええ。来月からは妹であり、そして後輩だものね」

「先輩って、呼んだ方がいい？」

「やっぱり遊ぶのが下手ね。面白くない」

卒業式を終え、最後のホームルームを終え、高校生活を終えた彼らは、生徒会で手配したバスに乗り込み、プロムの会場へと運び込まれる。動物であることをやめた牛のよ

うに何も考えず、ドナドナと喚きながら。……ドナ・ドナを歌われるのは仔牛だったから、あくまでも連れられてくるのが大人ではないあたり、忠実よね。いえ、滑稽かしら。

「可思議、趣味が悪いわ」

「まだ何も言つてないわよ」

「目と肩がダナダナを歌つていたわ」

「知つてるから私には通じるけど、一般ではドナ・ドナよ。あるいはドンナ・ドンナ」

プロム開演まで、残すところ数分も無い。三子はもう帰り、シトリング・ラファイは会場を見下ろせる二階へと登つて行つた。

私とほろりが京都流に出迎えるために入り口近くで待機していると、確認のためにあちこち見て回つている雪乃は最後に私たちの元へと来た。

「あーそれ、あたしも知つてる」

「いや、つていうかあなたから教わつたんじやない。いただきますの最上位互換とかなんとかって、適当言つて」

「あー、……そうだっけ？」

日本の童謡は親とか、親戚とかから聞いたけど、そういえば海外のものに興味を持ち始めたのは、ほろりから聞いてからだつたわね。本人はほとんど忘れてるみたいだけど。

「小説家にもなっていない、いたいけ幼気な私をあなたは騙したんじゃない」

「その頃ってあたしも料理人じゃないし、おあいこでしょ」

「何よ、覚えてるんじゃない」

「アツハー。七子ちゃんは私にとってお姉ちゃんみたいなものだよ？ それいたいけが幼気、ねえ？」

「滅茶苦茶覚えてるじゃない」

私とほろりの背が横並びだった頃なんて、それこそ丁度、ドナ・ドナを教えられた頃だったんだから。

「どうやら、大丈夫みたいね」

「雪乃ちゃんこそ、持ち場に戻りなよ。残り、四十秒とプラスアルファ、程度だからさあ。時間稼ぎなんてしてあげないよ？」

雪乃はほろりの言葉を聞き、顔を幾らか引き締めて足早、どこるか駆け足で飛んで行った。

間も無く自動ドアが開き、派手に着飾った卒業生達がやってくる。ほろりは人を食った殺人鬼のように微笑み、私は演技めかして人形のように微笑んだ。

「どうぞ、おいでやす」

懐かしき京都風の出迎えに、かつて修学旅行では京都に行つたであろう卒業生達は面

食らったような表情をして後を詰まらせた。

「たんと踊り、」

「たんと食べてってな」

……私もほろりも、やっぱり京都弁が似合わないわねえ。

されど私の学園ラブコメは間違っている。『拾肆』

「なーちゃん先輩のタイプって、平塚先生じゃあなかったんですか？」

「ええ、全くもって、完全無欠にその通りよ」

「その割には、ほろりちゃん先生と随分仲良く遊んでたじゃないですかー」

プロムが始まってから幾らか経ち。夕飯の食材を買いに行くと言い出したほろりを見送り、階下で練り広げられるプロムの様子を芸術作品に収めているシトリング・ラファイと一言、二言話し、ついに手持ち無沙汰になった私は二階に位置する調整室へと誘い込まれるようにやって来た。インカムで誘い込んだいろはは見下ろしていて、うつすらと笑みを浮かべながら話す。

「ほろりとはそういう関係じゃないわよ」

「じゃあどんな関係なんですかー？ 友達ではないんでしょう？」

「そーね。……強いて言うなら、愛人かしら。遊びだけの関係ってやつ」

「最悪じゃないですか」

いろはは顔を顰めながら、その顔を見せるようにこつちに向き直る。

「同意の上よ。久しぶりに会いに行く時には、平塚先生も連れて行ったもの」

「尚のこと最悪ですよ。ぶつちやけキモいつて言うか、不気味です」

「ククツ。気味のいい関係じゃないのは確かね」

かつては友達だった。

かつては親友だった。

かつては家族だった。

かつては姉妹だった。

かつては仲間だった。

かつては相棒だった。

今となつては、こんなことになっている。殺人鬼が切り刻んで、人形見習いが弄んで、料理人が切り刻んで、小説家が弄んだ結果が、こんなこと。

「でも聞くけれど、いろは。あなたの人間関係に、不気味さのない関係ってあるかしら？

嘘も偽りも、歪さもなければ穢れもない、代えも利かない、そんな家族や友人、恋人がいるっ？」

「……やっぱりなーちゃん先輩の愛って重いですよ」

「聞いて聞かれたんだから、答えなさいな」

いろはは眉間をぐいぐいと揉みながら、「んー……」と悩みながら、椅子に座った。  
「嘘とか、けがれ？　なんてのは知らないですけど、代えの利かない人ならいますよ？  
それをなんて言うのかも、知りませんけど」

「奉仕部と家族抜きで」

「ならいませんねっ！」

私が笑いながら言うのと、いろはは笑いながら、一瞬も悩まずに即答した。

「誰も彼も、それに両親だってお互いに嘘ばかりですもん」

「その嘘に、人は愛と名付けたりするのよ。そしてその対極にして対義語である真にも、人は愛と名付けた」

「正義の敵はまた別の正義って話ですか？」

「愛人の敵は正妻ではないって話よ」

「じゃあ何が敵なんですか？」

「常識と現実と良心。あと理性もかしらね」

「それ全部無くしたらただの猿じゃないですか」

「それらを一回全部殺したのが、だからほろりなのよ」

なんてったって、その時は殺人鬼だものね。

「それはそれで、やっぱり気持ち悪いです」

「それが正常な感覚よ。あなたはきつと、清廉潔白な聖人君子を見ても同じ感想を抱くわ」

「その人がキモいかはともかく、共存はできないでしょうねえ。その人がアダムなら、私はイヴではなくリリースでしょうから」

「お似合いね」

「それ、嬉しくないです」

いろはは Pruitt と顔を背け、不機嫌そうな素振りです窓の方を向いた。暗い窓には、やっぱりどう見ても不機嫌には見えない顔が写っている。

仮に葉山がアダムで、いろはがリリースなら、ほろりはカイン——人類最初の殺人者——かしらね。……殺人鬼かはともかく、カインは別にいるけれど。

「イヴがなーちゃん先輩なら、アダムは平塚先生ですか？」

「ククツ、冗談じゃないわね」

「そうですか？」

「だって彼ら、どれだけ美しかろうとバッドエンドじゃない。人魚姫とどっこいよ」

泡になって死ぬ気も、悪魔を孕む馬鹿になる気も、私には無い。

「私はハッピーエンド志望なの」

「人魚姫もバッドエンド志望ではないと思えますけどねえ……」

プロムは予定通りに進行している。このまま何もなければ、決められた時間にプロムは終了するでしょう。

上から見下ろしてそう確認した私は、心残りも未練もなく、いろは相手にウォーミングアップまでしつかりとこなした上で、数名の保護者の見守る客席へと顔を出した。

場所は陽乃に聞いている。様子も、事情も。化粧の気合の入れ具合から、着物の質、使っているシャンプー、香水まで、敵の何もかもを知っている。そして私は己を知っている。それで百戦全てに勝利を修められると自惚れる気は無いけれど、一度勝利することくらいは、明日を覗いたように確信を持っている。

「やつはろー、可思議ちゃん」

「こんにちは、不可思議可思議さん。いえ、それとも七五し三め七な子なさんと呼びした方がいいかしら?」

陽乃を隣に座らせている雪ノ下母。その前の椅子を回し、対面するように私は座った。示し合わせて着物を着た私に二人とも一瞬目を丸くさせながらも、すぐに何時もの

笑みを、二人同時に取り戻した。

「私は不可思議可思議で、七五三七子。どっちでもいいけれど、あなたの呼びたいように呼んでもらえると助かるわ」

「では、不可思議さんと。それで何か御用かしら」

扇子でも隠しきれなさそうな、好戦的な笑みを浮かべた雪ノ下母に陽乃は「うわあ」とでも言いたげな目を向けるが、すぐに視線で黙らされた。うわあ、情けない。

「付け損なつた決着をちゃんと付けようと思つたのよ。喧嘩を売るだけ売つて、買うだけ買われて、それで結局何もしないんじゃないじゃ不完全燃焼どころか、不燃焼もいいところじゃない」

「つまり、だから決着を付けたい、と」

途端、好戦的な笑みは完全に消え去り、西洋の冷血な騎士を思わせるような無表情に染まる。

「ええ。でも殴る蹴る刺す切るみたいなの、そんな面白い喧嘩をここでしたらプロムが台無しになるし、だから話し合いで解決しましょうと、私は言いに来たのよ」

「話し合うと言われても、既にプロムはこうして開かれてしまっているじゃない」

「決着がつけばなんでもいいじゃない。しりとりでも、山手線ゲームでも、マジカルバナナでも、ハンカチ落としでも、椅子取りゲームでも、読書感想文でも、反省文でも、い

じめ問題の現実的かつ効率的で因果応報たりうる解決方法についてでも」

「可思議ちゃん、なんか後半違くない？」

陽乃は母親がマジカルバナをしている様子を想像したのか、口元を手で隠しながらも的確に突っ込む。確かに、想像したら愉快極まる。でも本当にやるなら、平塚先生と結衣あたりも巻き込みたいわね。審判は生徒会で、勝者には最後のワードの物をプレゼント、……なんてね。

陽乃の突っ込みを無視して、互いに無表情で向き合う。表情筋を固定し、目は気持ち大きく開く。目からビームの出る世界観なら殺し合いになりうるような物騒な睨めっこ。

経過したのは一分か、十分か、一時間か。緊迫した状況を表現するのに、こんな感じの文章がよく用いられるけれど。しかし私たちにとって、一分とは一分でしかなく、十分は十分でしかなかった。時間も管理できずして何が緊迫か。どこが緊張か。一点集中なんて愚の骨頂。時を忘れるなんて愚かの極み。時の流れる次元を生きる上で、時を放置するというのは思考を捨てると同義。

なんて、長々と語つたところで、実際には三十秒と経たず、決着は雪ノ下母の「降参よ、不可思議可思議先生<sup>せんせい</sup>」という言葉で、不戦勝という形でついた。

「何度か顔を合わせ、陽乃からも話を聞いて、あなたの小説を幾らか読ませていただきま

した。その上で私は、あなたとのどんな話し合いでも勝機は無いと確信したわ」

結局、不完全燃焼みたいな戦いになってしまった。相手の想定外の諦めによって、私も戦いを諦めざるを得なくなった。

……いやまあ、話し合いでの喧嘩なんて押し並べて不完全燃焼、むしろ消火活動と言つてもいいし。薪は燃えることなく湿気しげて、白け、戦いに火蓋は切つても燃えないし。……なんて、何を言つても負け犬の遠吠えにしかないわね。

「……そう。面白く無いし、納得もしないけれど、でもそう言われてしまつては仕方ないわね」

戦意喪失している相手をただ殴つたところで、そんなものを喧嘩とは言わない。その結果を決着なんて言わない。そんなのは、ただの私刑リンチでしかない。

「じゃあ、決着ついでに一つ頼まれてくれるかしら。勝者の特権つてことで」

決着のついでというより、いっそ八つ当たりと言ひ換えてもいいかもしれない。

「そう言われてしまつては仕方ないわね」

鏡に向かつて眩くように、そっくりそのまま返されてしまった。

……やっぱ、勝つた気がしないわねえ。

互いに一言、二言。頼んで了承して、別れを告げる程度のやりとりをした後。私は会場である下に降り、紙コップに注がれたコーラを片手に壁に凭れかかった。

会場の熱気か、単に暖房の仕業かは知らないけれど、温ぬるくなつたコーラからは炭酸も抜けていた。その安っぽい味を安っぽいと感じるあたりに、私の脳が思っていた以上に働いていたことを察する。

「なーちゃんお疲れー」

落ち着いたら外で涼もうとか考えながらぼーつとしていたら、結衣がクツキを盛つた小皿片手に私の元へと来た。

「もうすぐ終わりね」

「ねー。なーちゃんも食べる?」

「ん、もらうわ」

シトリング・ラファイの焼いた丸いクツキを結衣の手から口で受け取る。噛む前から舌には塩味が沁み、噛み碎けばバターと砂糖のシンプルな甘味がやってくる。

「美味しいよねー。流石プロって感じ」

結衣は。パクパクと食べながら、子供のように目を輝かせている。

「これを作ったの、ほろりじゃなくて芸術家の方よ。ほろりのクツキはこんなに小洒

落ていないもの」

「えっ、そうなの!? って言うかわかるんだ……」

「ほろりとはお互い、小説家と料理人になる前の付き合いだもの。試作の菓子やら料理やら、いろいろ食べさせられたわ」

「もしかして、幼なじみってやつ?」

大して興味なさそうに、雑談のネタ程度に結衣は問い掛けた。私も、雑談程度のノリで答えた。

「そんなところでしようね。残念だけど、ほろりは初めてでもクッキーを焦がしたりはしなかったわよ」

「聞いてないからっ! ……やっぱり、そういう才能ってあるの?」

「雪乃はともかく、ほろりの場合は家庭環境よ。両親が揃って料亭の家の出で、それこそ私とつるんでいた時から看板娘として店の手伝いとかもしてたし」

「へー。あたしもどっかのファミレスでバイトしてみようかなー」

「損害賠償で赤字になるだけだからやめておきなさい」

「それは酷くない!? なーちゃんはあたしが作ったのも美味しいって言うてくれるじゃんー!」

「あら。善意を踏み潰された気分だわ」

「ぜったい嘘だ！」

「嘘は愛の別称よ」

「……なーちゃんが言うとなんか嘘っぽい」

「いろはにはむしろ重たいと言われたのだけどね。まあ、今の言葉に愛があると言われてたら、嘘だけど」

嘘は愛であり、愛が嘘であるならば、その嘘は愛なのだろうか。……疲れてる時に考えることじゃないわね。

「ねえ、なーちゃん」

「なによ」

「なーちゃんのお願い事って何？」

「……なんの話よ？」

コーラのカフェインと糖分が疲れた脳に染み渡るのを痛感しているところに、結衣の唐突な話で何かを堰き止められた。電池の切れたモーターのように、頭の回転が鈍くなってくる。

「ほら、一番奉仕出来た人のお願いを聞くなっていう勝負、あつたじゃん」

「ああ……。そういえば、あつたわね」

唐突すぎて思い出せなかった。……っというか、それに対して興味も関心も大分失せ

ていた。

「多分、なーちゃんが勝っちゃうからさ。聞いておきたくって」

「……そうかしらね」

私の願い、ねえ。

「私の小説を読んでもらうことが私の、不可思議可思議の願いだったわ。……もう叶っちゃってるけど」

「え、えー……」

答えると、結衣は困ったような表情を露骨に見せた。

「そもそも、私はそういうのを持ってないのよ」

野望だとか、目標だとか。そういうことの発想は、七五三七子の腹の中、というか頭の中に置いてきた。七五三七子が何かを望むというのなら、それこそが私の野望となる。……その野望の末に生まれたのが——小説家——不可思議可思議なのだけど。

でもだからって、何も求めずなあなあにするのも面白く無いわね。それこそ、ついさつき似たようなことをされたばかりなんだから。諦めと妥協は流儀だけれども、何も得ることなく諦めるのは私の好みじゃない。

「参考にするから、あなたの願いとやらを聞かせなさいな」

問うと、結衣はしどろもどろながらも答えた。途中にクツキーを食べ終え、お代わり

の飲み物をさらに飲み干すくらいにたくさんの願いを私に語った。恋愛小説よりも甘ったるい願いから、いっそ塩辛くて喉の乾いてくるような願いまで、由比ヶ浜結衣を濃縮還元したような、蜂蜜のように甘い願い事を、一言一句逃さずに私は聞き届けた。

「……あなたの願いも私と大差ないじゃない」

「え、そう？」

「無欲を美德とする世の中だけど、そこまで美しいといっそ気味が悪いわね」

「普通に酷い！ キモいって言われた方がまだマシな気がする！」

「失礼ね。人を三浦みたいに」

「それは優美子に失礼だよ……」